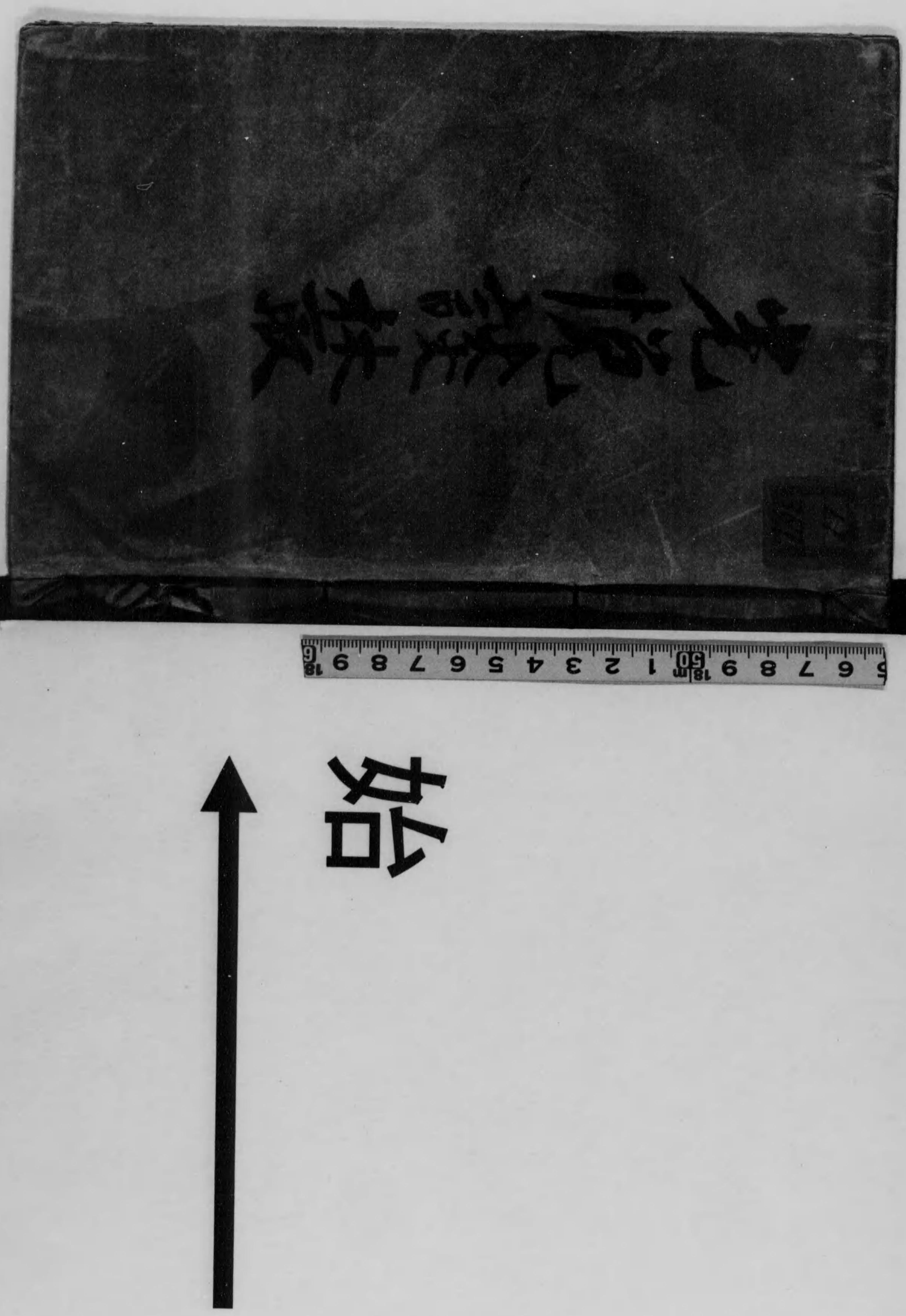

背

先悅談林叢

11
367

11-369

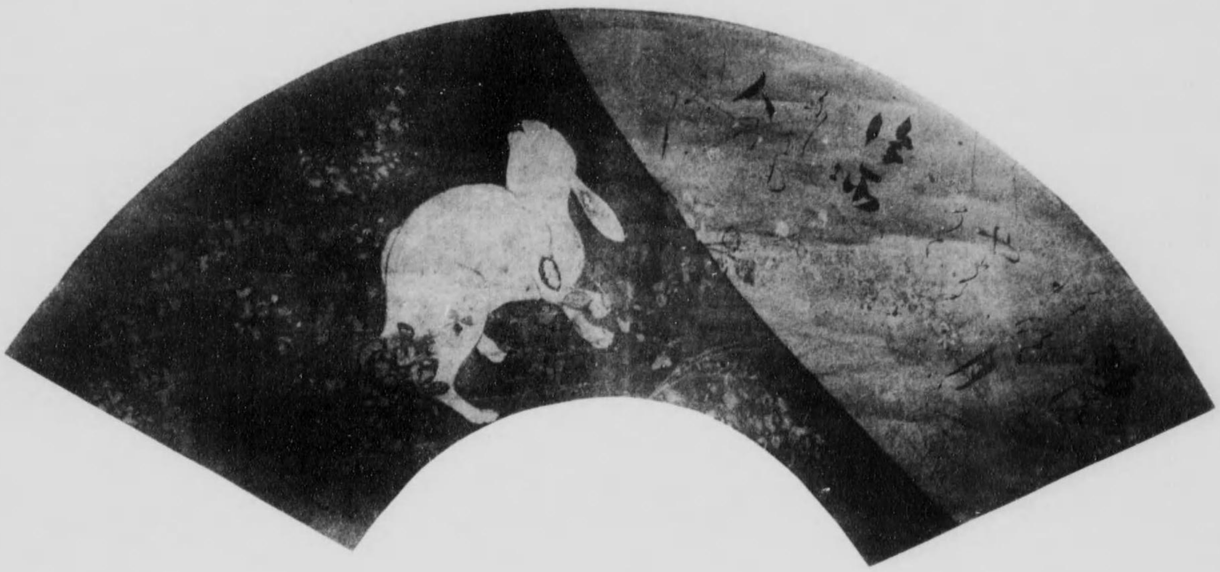
光悦談林

發行所寄贈本

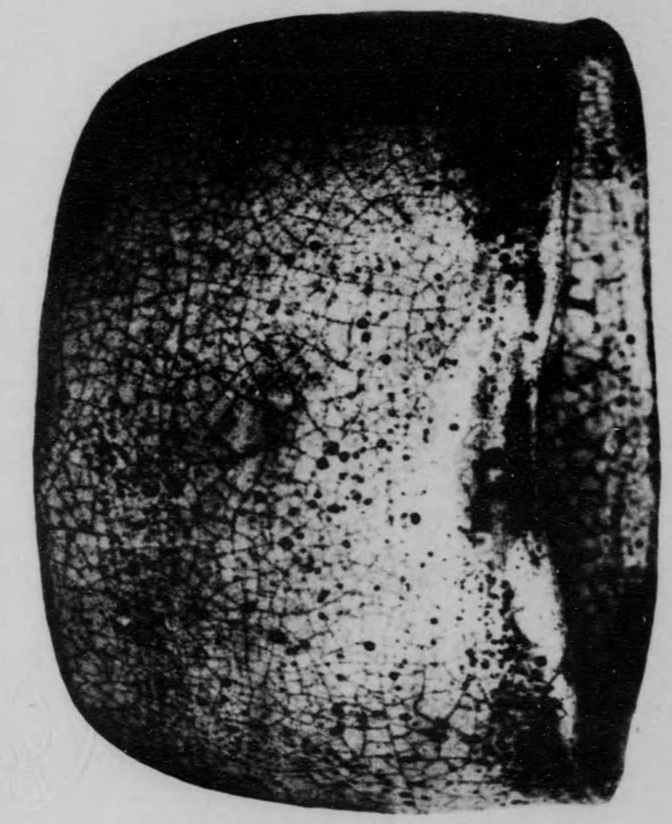
大正
9.8.10
寄贈

露光量違いの為重複撮影

月萩に兎の圖（扇面）　本阿彌光悅筆　九鬼男爵藏

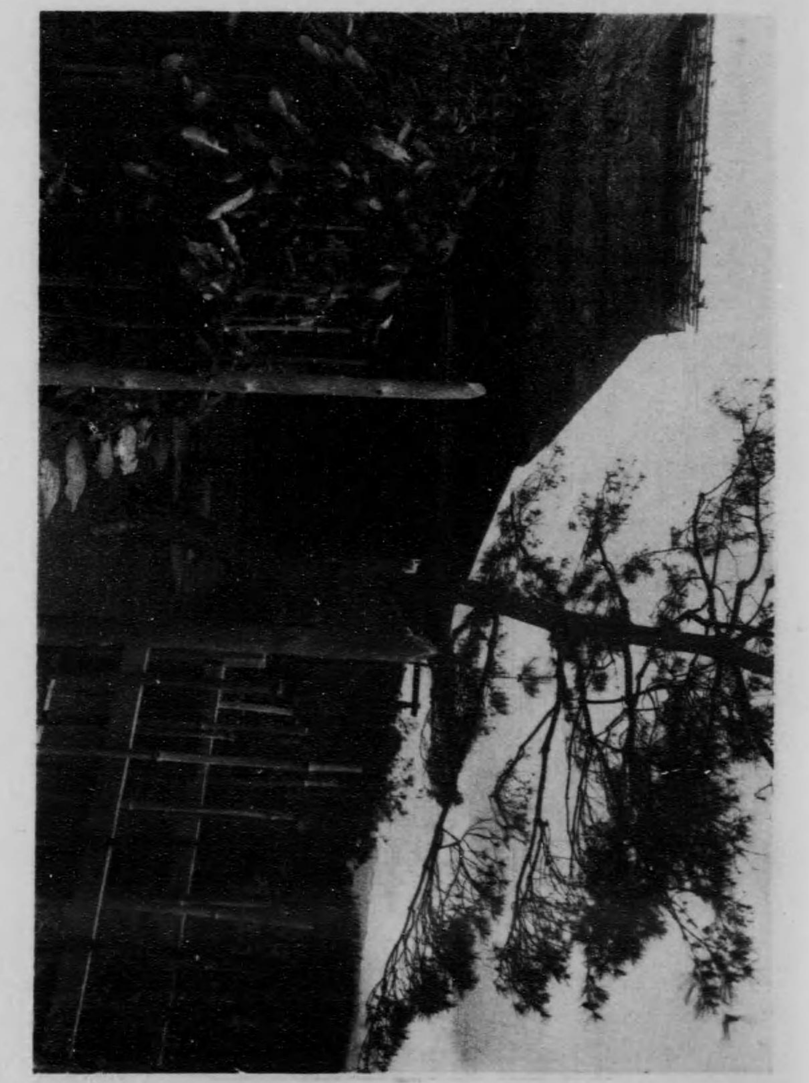


月萩に兎の圖（扇面）　本阿彌光悅筆　九鬼男爵藏



光悦茶碗銘彌生
（三井八郎次郎氏の秘蔵）

光悦書扇面の世に遺存するものは極めて稀なり、著者の知る所に於ては此外に東京小林文七氏所蔵の山水畫一面あるのみ。



八木鎮三郎氏の林泉

騎牛庵（光悦寺内茶室）

光悦談叢序

京師鷹峰の住人森田清之助君其新著光悦談叢を齎らして余に一言を題せん事を乞ふ君は曩に光悦傳を著し次いで光悦別傳を作り今又光悦談叢を編著す其光悦の德業を欽慕して之を天下に表彰せんとするの篤志至れりと云ふべし抑も光悦は偉人として書家として茶人として信佛者として工藝家として各方面に於て讃歎すべきもの極めて多々なれども森田君の連發したる著作は之を縱説横叙して殆んど餘蘊なきが故に余は又蛇足を添へざるべし然れども余は平常大に光悦の卓見に感服するものあり是れ他ならず彼が其根據地を鷹峰に選定したる一事卽ち是れなり凡そ偉人の大事を成すや必ず景勝の地を相して其根據地と爲さゃる者なし傳敎大師の叡山に於ける弘法大師の高野に於ける承陽大師の越前に於ける北條早雲の小田原に於ける豐臣秀吉の大阪に於ける德川家康の江戸に於ける其他事業人物に應じて大小廣狹の差ありと雖も要するに恰好の根據地を占むる者は所謂高きに據て號令する便宜を有し啻に其人一代に止まらず其施設永代に遺留して後人を利澤する事廣大無邊なる者あるべし傳ふる所に據れば元和元年德川家康京都所司代板倉伊賀守より光悦が異風者にて京都に居飽き申候間邊土に住居仕りたき由を申候との上申を聞き近江丹波などより京都への道に用心惡く辻斬追剝をもする處あるべし左樣の處を廣々と取らせ候へ在所をも取立つべきものなりと上意ありしに依り鷹峰

の麓東西二百間餘南北七丁の原を光悅の住居と定めたりと云ふ然れども是れは唯其表面の事實たるに過ぎず光悅と板倉とは常に靈犀一點相通ずる者あり光悅は夙に鷹峰の景勝を知り此地に今日の所謂田園都市を創設せんと思立ち板倉を經て家康の許可を得たりと云ふが其眞相に近き者なるべし而して余は今光悅が鷹峰に於て如何に其田園都市を經營せしや又其遺業の如何に後人を利澤せしやを說くの必要を認めず唯近時光悅の德業を發揚せんとする光悅會が彼の命日なる十一月二十三日前後に於て每年其法會を營み茶會を開き天下の好事家と共に彼を讃美せんとするに當つて鷹峰の景勝風光が大に來會者の感興を動かし一層故人を敬慕するの情を深からしむるを見て光悅の根據地選擇が如何に其所を得たるやを感せざるを得ず抑も地靈は人傑を待つて顯はると雖も人傑も亦地靈に依つて彰はるゝ事ありて而して森田君が畢生の精力を傾倒して大に光悅を顯彰せんと欲する者は史的偉人として平常彼を敬慕するが爲めならんと雖も其身躬から鷹峰に棲み某の山某の水皆な故人と相關聯せざるなきを觀て愈々渴仰の念を深うするが爲めならずとせんや左れば鷹峰は光悅に依つて愈々重く光悅は鷹峰に依つて彌尊しと云ふも亦過言に非ざるべし因て聊か平生の所感を述べて之れが序と爲す

大正庚申一月中瀚

箒庵　高橋義雄識

光悅談叢のはじめに

洛北鷹ヶ峰、太虛庵光悅などゝ、その文字を見、その名を聞くだに、ゆかしくおぼゆるはなにゆゑか。

翁の筆蹟に、蒔漆に、はた陶器に、見るからになつかしまるゝなにゆゑか。

このゆかしさと、このなつかしさとは、げに翁の崇高なる人格に魅せられてのゆゑか。

この人格の、その成績作品に、さながらに、あらはるればこそ、うちむかへるまゝに、ゆかしさも、なつかしさも、わきいづるものなれ。

こたび森田ぬしは、翁の傳記『光悅』別傳『鷹峰餘韻』に續いて『光悅談叢』を公にせらる。

さきにいたせる卷々の、いといたうつばらかなるに、またこのひと卷をさへ加へらる。

翁の人格と、藝術とを、渴仰する輩は、これによりて、いよ〳〵ます〳〵うるところや多からんかし。

この頃、この稿本にそへて、おくられたる、ぬしが消息に

小生が年來、先輩に會して、光悅翁に關する感想をきゝ得たるものに、小生が所感を加へ、尙且それが先輩の人物事業をも彷彿たらしめたき所存にて、かくは試みたるものなり。

といひ、また、

今回拙稿の意味は、光悅傳の終末にも成り、且は鷹峰の史蹟を紹介し、小生が地下の光悅翁の紹介によりて、明治大正の名士に接し得たるよろこびを語りたるものにて、尙後世各諸名士の史傳材料取調の一助とも成らば、小生の面目之れに過ぐることなし。

と添附せられぬ。これまことに、ぬしがこの卷をあらはされたる、僞らぬ告白にして、やがてまたその眼目なりけり。おのれこの告白をきゝ、この眼目を辨へて、この卷にむかへば、今更にかれこれの、一ことをだに容るべき餘裕はあらざりけり。たゞぬしが年頃の心づかひと、いたづきのほどゝをおもひやるべきのみ。

まことや鷹ケ峰の松風の、たえずその世の韻きをつたへ、鷹ケ峰の月かげの、いまもその面影をしのばせ、紙屋川の水の、さら〳〵とそのかみをもの語るが如く、このひと卷や、また翁の面目を、千とせ萬代につたふべしとて。

大正九年二月五日、春たつといふ日のひかげをうけて、軒端の梅の、二花みはな綻びそめたるに、光悅紙にほどこされたる梅花の圖案に、おもひをよせつゝ露の舍の東窓に、しるしをはりぬ。

神谷保朖

森田清之助君、曩に既に本阿彌光悅に關する數種の著述あり、今又光悅談叢を撰して、將に世に問はんとす。光悅談叢は、現代諸家の光悅に關する品藻にして、而かも森田君は、諸家の評言を寫すこと、各々其人の口吻を彷彿せしめ、加ふるに各家の履歷性癖等をも詳叙して、其品藻の背景を鮮明ならしめんと務められたり。是れ此の書は光悅の品藻なると共に、現代諸家の逸事としても、亦後世に傳ふるに足るべし。顧ふに光悅の如き天才の品藻は、凡庸人の企つべきものにあらずして、若し妄りに之を試みて却つて肯綮に中らざる如き事あらば、適さに其の分を知らざるを見すに過ぎざるべし。諸家の品藻中果して能く光悅の人格を描き出すに足る者幾則ありや、余は之を知らず、而かも其品藻を遠慮なく記述して世に傳へんとする森田君の擧は、實に此等諸家に一種の警醒を與ふる者といふべし。若し夫れ森田君が現代諸家の性癖を寫すの妙に至りては、他人の分は余之を讀むに暇あらざりしも、其の余が疎慢を描き出して毫髮遺憾なきを以て十分に之を保證することを得、余が若きは固より光悅を品藻すべき資格ある者にあらず、されば森田君が余が言なりとして擧げられたる所が、果して余が意を傳へて失はざりしや否やをも詮索するの必要を認めず。但だ森田君が光悅の如き天才を傳へんとする熱心の餘り、余等に至るまで無鹽を刻畫するの煩を厭はれざりしに對し、感謝せざるを得ず。森田君が其書の序を請はるゝに

因り、聊か所感を陳ぶといふ。

大正九年三月七日

内藤虎次郎

鷹峰撰話序

鷹峰者、洛北之名勝也。蓋以其光悦翁
之所卜居焉。里人森田某氏
憂之、力圖興復、徧訪名流、叩豪富、索
其佽助。百方經營、遂復舊觀、將有更加者
焉。厚於鄉人、忠於鄉土、為意甚善、固非時人
薄俗之所能存。爲須者編成一書、曰鷹峰撰話、
來謁余序。余受閱之、其訪名流、叩豪富、
索佽助、徧聽所錄、或佛論宏辯、或戲

譚諧語取舍雖森氏擇不加序左之說語
意眞率如面見其人一可以見森氏苦
心所存一可以爲復興光悅寺之緣起是
不可不傳矣乃序以還之

大正九年載陽

八十有五叟鐵齋外史百錄

擬倣書

鷹峰叢談序

鷹峰之著聞於世者、蓋以有光悅寺也。近時寺廢、無人過問焉。里人森田某、憂之力圖興復、徧訪名流、叩豪富、索其欣助、百方經營、遂復舊觀、將有更加者。其厚於前人、忠於鄉土、爲意甚善、固非時人薄俗之所能及焉。頃者編成一書、曰鷹峰叢談、來謁余序。余受閱之、其訪名流、叩豪富、有所談論、隨聽隨錄、或偉論宏辭、或戲謔諧語、取舍雖無所擇、不加浮夸之說、語意眞率、如面見其人。一可以見森田氏苦心所存、一可以爲復興光悅寺之緣起。是不可不傳矣。乃序以還之。

大正九年載陽

八十有五叟鐵齋外史百錄

紹介のことば

『光悦』の編者森田清之助君は、更に其別傳ともいふべき『鷹峰餘穎』を著され、あらゆる方面から斯翁の顕彰に努められたが、今又主として、其資料採集中に接觸された朝野の諸名流に對する感想を『光悦談叢』として發行さるゝことゝなつた。『光悦』にも『鷹峰餘穎』にも親しく校閲の筆を執つた私は、最初君から試みに其中の加藤弘之博士や、乃木大將に關する一二節を話されて、今時分、斯樣なものを公けにして差支はあるまいかと謀られた時、言下に賛成の意を表していふには、苟も君が直覺的に得られた印象を其儘忠實に直寫されたものであるならば、後世それらの人々の史傳を書く人々に取つて無二の好資料を與へることにならう、只望ましきは其間秋毫も愛憎の私情を交へないことであると申して置いたのである。君は同書が今回愈出版の運びになつたといつて、私に其序文を求められたが、私は從來他人の著書に序文を書くことを斷つて居る上に、此書の内容を讀んでも見ないから、果して私の期待の通りになつて居るかどうかも判り兼ねるのである。只君の平生から推せば先づ信頼は出來ることゝ信ずる。君は資性篤實、極めて愛鄉心に厚い人で、其鄉里鷹峰に關係ある僧俗男女の事蹟表彰に其精力を傾倒されつゝある。光悦翁の如きも鷹峰の開祖で

あるからで、其他鷹峰和尚卍山道白禪師や、名妓といはるゝ吉野に迄及んで居る。就中『光悅』や『鷹峰餘籟』の編著は不朽の業であつて、後の翁の事蹟を窮むるものは必ず此關門を通らなければなるまい。思ひ起すと、私が君の名を聞いたのは、明治四十四年の夏頃、東京帝國大學史料編纂官補、藤田安藏氏から、君がもと同掛に寫字生を勤められてゐたが、今は京都に歸つて居らるゝから、若し大學に寫し物でもあらば賴めばよからうと話されたのが初であつた。其後君は我國史研究室に見へて、其多年苦心の結晶たる『光悅』について私の校閲を求められた。聞けば同書の材料は君が史料編纂掛在勤中、同掛の圖書は勿論、大學の圖書館、帝國圖書館、其他東京市内の各所に於て極力蒐集されたものが、其根柢となつて居るとの事である。君の寫字生としての大學入りは、言はゞ牛若丸の鬼一法眼の一卷の抄、奪取の格であつて、其前後數年間にわたる、不斷の熱心と拔群の精力とは、君も確に後世に傳ふべき一人であると思ふ。此意味に於て私は本書を大方に薦めたい。

大正九年三月

三浦周行

自序

編者淺學無識の身を以て偉人光悅の生涯を論じ、其の藝術にむかひて筆を執れるは、もとより分をわきまへざる僭越の擧とは知りながら、生を鷹峰にうけし因緣にて鄕里開拓の祖たる恩人を追慕憧憬のあまり、覩もし、感じもしたる所を、あら〳〵傳へねば心すみ難しとて、言ひもしつゝ、はたしるしもしつゝ、しば〳〵識者の咎めをば受けたり。さるに今又本書を刊行して世に問はんとするは、尙早不完の憾みなきにあらざれども、人生今日ありて、明日また測り知るべからざれば、心せかるゝまゝに餘は續編に讓りて、

本書收むる所の諸名家の光悅談は、不肖が殊更に敎を請ひたるものにあらずして折りに觸れ、時に臨み、おのづから聽き得たるものに過ぎざるのみならず、不肖の誤聞誤記も亦これ無きを保せざれば、中れるもあり、外れるも亦これあらむ。ともかくも不肖が地下に於ける光悅翁の紹介によりて、明治大正の名士に接し得たる歡びを語るために、それら名家の光悅談も亦與を添ふべきものたるを信じて疑はざる所なればなり。故に題して光悅談叢といひ、又一に鷹峰叢談と命名す。而かもまた不肖が茲に光悅談と些の關聯なき先輩の動靜をも併せて記載したる所以のものは、古の光

悅傳が頗る簡單且蕪穢にして、不肖の見て以て過誤少なからざるが故に現代の名家も亦、或は後人に誤傳せらるゝことのあらむも測り難き微衷の存する所あるべければなり。然りといへども現代の所謂有識者すら現代人士の評論をさへ誤られしことあるは、不肖のしば〳〵睹聞する所なるのみならず、人物月旦の如きは十人十樣の見なしとも限らず。されば不肖が諸名家の動靜についての記述は固より一己の感想のみ、私見のみ。たゞ讀者、不肖が不辨分の擧を深く咎むるなくんば、幸甚しとす。

高橋箒庵、神谷保朗、內藤湖南、富岡鐵齋、三浦周行の諸先生は編者の懇請によりて快く本書に對する感想を寄せられ、殊に三浦先生は本書の起稿に先だちて編者に深切なる注意を與へられ、脫稿の後には本書の命名について助言を贈られ、富岡鐵齋、神阪雪佳の兩先生は本書表紙の書畫を惠まれたるは感謝に堪へざる所なり。謹んで謝意を表す。

大正九年三月二十八日

森田清之助謹誌

光悅談叢

口繪

一、光悅筆 書畫扇面
二、光悅作 茶盌銘彌生
三、光悅寺 騎牛庵

序言

一、高橋義雄氏序
二、神谷保眼氏序
三、文學博士 內藤湖南氏序
四、富岡鐵齋氏序
五、文學博士 三浦周行氏序
六、自序

目次（イロハ順）

一、日蓮宗本山本法寺貫首 伊藤日脩師……（一）
（天明の火災に光悅遺品の多くを燒いた）
二、大倉集古館長 今泉雄作氏……（二）
（光悅寺に光悅繪畫の遺作なきは應はしからず）
三、曹洞宗大本山總持寺貫首 石川素童師……（三）
四、隱れたる書家 畠山八洲翁……（四）
（光悅をして現代にあらしめば）
五、染織物問屋 西村總左衞門氏……（五）
（作り出せるわざのたくみさ）
六、刀劍鑑定家 本阿彌琳雅氏……（六）
（名刀當麻は光悅の鑑定に係つた）
七、帝室技藝員 富岡鐵齋翁……（七）
（春よ、見なさい能く書いてある）
八、蒔繪家 戶島光孚氏と迎田秋悅氏……（八）
（蒔繪技上に見れたる光悅のデモクラシー）
（「東路」の文字は何人も眞似が出來ない）
九、史家 富岡謙藏氏……（九）
（光悅も茶道樂が無かつたら……）
一〇、茶屋四郎次郎末裔 茶屋次郎氏……（一〇）
（昔は鷹ケ峰に別墅があつた）
一一、大谷光瑞師……（一一）

一三、光悅流筆道家 男爵 大倉喜八郎氏……（一四）
（今の世に光悅が居られたら、どんな脫俗な事をやるでせうか。）
一三、書家 小野鵞堂氏……（一七）
一四、卍山會設立者 小田垣瑞麟師……（一八）
一五、「言海」の著者 文學博士 大槻文彥氏……（二二）
一六、風流亭主 岡本橘仙氏……（二二）
（光悅はどんな風貌の人だつたらうね）
一七、畸人 奧平清規氏……（二三）
（光悅さんは豪傑でつせ）
一八、元、眞言宗 隨心院門跡 和田智滿師……（二三）
一九、日蓮宗大本山 妙顯寺貫首 河合日辰師……（二四）
（日允上人（光悅の孫）の如き高僧を本阿彌家から出したのは同家の一大名譽である。）
二〇、圖案界の泰斗 神阪雪佳氏……（二五）
（古來我國美術家中光悅の如き偉人傑士は無い）
二一、帝國歌學史と茶道史との著者 神谷保限氏……（二六）
（光悅は桃山期藝術の大團圓を成した人である）
二二、文學博士 法學博士 男爵 加藤弘之氏……（二七）
二三、維新志士 贈正五位 刈谷無隱居士……（二八）
二四、醍醐忠貞翁……（二九）
附 洋畫家 太田喜二郎氏
二五、文學博士 谷本富氏……（四〇）
（光悅會を設立なさい）
二六、水戸學の著者 茶伯 高橋箒庵氏……（四二）
（光悅も地下にて「これは一番出來したり」）
二七、工學博士 田邊朔郎氏……（四三）
二八、「櫻時雨」の著者 高安月郊氏……（四三）
（光悅は眞に人生を味つた）
二九、元、御歌所長 前、一德會長 男爵 高崎正風氏……（四四）
三〇、自在庵主 高見祖厚師……（四五）
附 奇僧 水野梅曉師
三一、骨董商界の奇人 土橋嘉兵衞氏……（四七）
（書畫骨董界に於て光悅といへば神樣のやうです）
三二、文學博士 內藤湖南氏と……（四九）
後醍院廬山氏
（光悅はそんな狹ま苦しい了簡でない）
（光悅はどうして斯んな別誂への鷹ケ峰を見出したものだらう）
三三、儒家 長尾雨山氏……（五二）
（使下光悅有ル意ニ趨進、則坐取ニ富貴一不レ難）
三四、元京都市長 內貴甚三郎氏……（五三）
（光悅式の自然に見惚れて「ヤアー雄大な景色だ」）
三五、劍道界の權成 內藤高治氏と……（五三）
湊部邦治氏
三六、文學士 文學士 中村勝麿氏と……（五四）
中村直勝氏
三七、樂燒家元 樂吉左衞門氏……（五五）
（非光悅を光悅とするは苦々しい）
三八、村雲尼公日榮猊下……（五五）
三九、京都坊目誌著者 糸屋の主人 碓井小三郎氏……（五六）
四〇、敎育家 海野敏行翁……（五七）
四一、學界の奇人 文學博士 內田銀藏氏……（五八）
四二、乃木大將……（五九）
四三、文學博士 黑板勝美氏……（六二）
四四、富豪 久原房之助氏……（六三）
（鷲ケ峰は保安林にするがよい）
四五、綿糸問屋 八木與三郎氏……（六三）
四六、男爵 益田孝氏……（六四）
（光悅崇拜は人後に落ちない）
四七、文學博士 松本文三郎氏……（六五）
四八、東京美術學校長 正木直彥氏……（六五）
（我が校の光悅謠本は……）
四九、鷹ケ峰角屋主人 松野知次郎氏……（六六）
五〇、「名妓吉野」の著者 江馬務氏……（六七）
五一、京都帝國大學總長 醫學博士 荒木寅三郎氏……（六七）
五二、京都商報會社長 京都府農工銀行頭取 雨森菊太郎氏……（六八）
（光悅といへば立て物がよいから）
五三、法學博士 文學博士 有賀長雄氏……（七〇）
五四、帝室技藝員 岸光景翁……（七〇）
（光悅の意匠には驚神駭魂の外はない）
五五、前京都府知事 木內重四郎氏……（七一）

五六、老練教育家 木下竹次郎氏……（七三）
附 龍定一氏
五七、義民木内宗吾末孫 木内島吉氏と……（七四）
地理學の泰斗伊能忠敬末孫 伊能三郎右衞門氏
五八、湯淺半月氏……（七五）
（「光悅」がよろしい）
五九、光悅にそつくりの三浦梧樓將軍……（七五）
六〇、文學博士 三上參次氏……（七六）
六一、文學博士 三浦周行氏……（七七）
（光悅は世界的の藝術家である）
六二、男爵 三井八郎次郎氏……（七八）
（光悅茶盌銘彌生の來鷹）
六三、元、東宮侍講文學博士 三島中洲氏……（七九）
六四、儒家三宅亡羊末裔 三宅淸次郎氏……（八二）
六五、文學博士 島文次郎氏……（八四）
（光悅のためならば誰でも力を注ぐだらう）
六六、光悅寺住職 樋ケ潮圓氏……（八四）
（光悅は觀音の化身である）
六七、淨土宗大本山光明寺管長 關本諦承師……（八五）
附 佛陀寺住職 高木德準師
六八、觀世謠曲大家 關目顯之翁……（八七）
六九、角倉了以遠孫 角倉玄遠氏……（八八）
（光悅遺物又も火災にかゝりしか）
七〇、三笑軒主と無名氏……（八九）
（光悅は心中幾多の神秘を藏してゐた）
（光悅神社を建てるべしだ）

光悅談叢目次 終

光悅談叢

一名鷹峰叢談

森田淸之助著

一、日蓮宗本山本法寺貫主 伊藤日脩師

（天明の火災に光悅遺品の多くを燒いた）

日蓮宗本山叡昌山本法寺（京都小川頭）の開祖は日親上人といふ偉い僧侶であつた。日親は宗祖日蓮の再誕とまで謠はれた不世出の傑僧で、日蓮が立正安國論を著作した、ひそみにならひ、立正治國論を著はして時の將軍足利義敎に献じ、妙宗一流の邪法を排して正法を立つるの信念を陳べた。將軍義敎は禪宗の信者とて、其意に適ふべくもあらず、日親に對し種々說諭を試みたが、日親は毫も意志を翻へすことがなかつたから、終に日親は將軍の忌諱に觸れさん〳〵の迫害に遭うて、體刑加へられざるなく、火に燒かれた鍋を頭上に冠せられたことさへあつたけれども、所志を枉げなかつたので、終に獄舍に投せられた。鍋冠日親の遭難は宗門法難史上最も悲壯を極めた事蹟である。

ちやうど其頃足利尊氏の刀劍奉行を勤めた本阿彌妙本（本阿彌家始祖）から第六代目に當る本阿彌淸信といふ人があつた。刀劍の目利や手入れを業とした。ある日將軍義敎が赤松滿祐の館へ赴かれる朝いつになく佩帶せる脇差が鞘走るので淸信に命じて詰めさゝれたのに、又鞘走つた。淸信は驚いて更に愼んで之を詰め二人して引けどもくつろがぬ事を確めて將軍に差し出した。然るに何故か又々鞘走つたので、終に義敎の勘氣に觸れこゝに淸信も亦投獄の難に遭うた。

本阿彌淸信は、獄中に於て圖らずも、前陳の本法寺の日親上人と同舍して、上人の說法敎化を受け終に上人に渴仰歸依した。二人出獄後、水魚の交益々深くなつた。本阿彌家は從來本國寺（矢張り日蓮宗）の檀家であつたのに、爾來本法寺の檀徒と轉じたばかりでなく淸信は剃髮して日親上人の撰によつて名を本光と改めた。本阿彌家の男子が「光」の字を名の上に用ふることゝなつたのは是に始まつたのである。卽ち本阿彌家始祖より本光迄は妙本、本妙、妙大、妙秀（光悅の母の妙秀とは別人である）妙壽で妙壽の子が本光（卽ち淸信）であつたが本光より後は、本光、光心、光刹、光德、光室、光溫、光達、光常、光忠、光勇、光純、光久、光

一、光鑑といふ風に皆「光」の字を冠した光悅の家は分家で本光から二代目の光心の養子光二がはじめて分家したのに起つて光二、光悅、光瑳、光甫光傳、光通、光春、光敬、光隆といった樣にこれも「光」の字を用ひた。これによつて考へると淸信が日親上人に歸依したのが本阿彌家の信仰上に於て一新紀元をなした譯である。

本阿彌の宗家が世々本法寺の爲に盡したことは多大であるが分家の光悅家も亦甚盡したものである。本法寺が堀川一條邊から今の地に移轉した時には光二(光悅の父)が工事の監督をして功勞最も大であつたと傳へられてゐる、さもあるべき筈で光二の妻妙秀(本阿彌の嫡女にして光悅の母)は比儔を知らぬ法心堅固な婦人であつた。それであるから光悅が同寺のために力を盡したことは一通りでなく、金穀の寄附は申すに及ばず數多の什寶の寄進をもしてゐる。巴の庭も光悅の築庭で、本堂の額「本法寺」も光悅の揮毫にかゝるものである。本堂の前の巨大な松樹を「光悅の松」といへる謂は知らないが、本阿彌家と密接の關係があつた寺のことゝて光悅の手澤の存する者が甚だ多い。

光悅が鷹峰に太虛庵を建てゝ佛堂を築き、本法寺から日達法師を招じて太虛庵の開祖としたのであつた。これに就いて想起することは此の日達上人は光悅の意に適つた人だからよき御寺樣であつたに違ひない。

さてこの太虛庵は光悅歿後光悅寺と名づけられいつしか本法寺の末寺と成つた。

今の本法寺貫首は伊藤日脩師といひ、同宗内で重きを成して居られると見へ、官廳などが公式に宗教家の招待會を開催する場合などには日蓮宗派の代表となつて多く師が出席せられるやうである何か當番の職責上の關係からでもあるか。

同寺は管理がよく行屆いて什寶物の保管など嚴重を極めたものであるから三浦文學博士も感服をして居られたこともある。毎年一回必ず虫干をせられる什物は光悅に關する遺品の外夥敷あつてそれが皆悉く秩序整然と虫干が出來る恰かも展覽會見た樣な感がする。

伊藤貫首は一見尼僧のやうな、きれいな顏面頭顱の御寺樣で着衣、蒲團、其外身邊の什器貨具すべて淸潔である。隨つて來客に接する事も嚴格で一本山の貫首たるの貫目もおのづから備つて見える。

師の讀經の音色の美なることは聞へ物で木魚の音と相調和して快感極まるものがある、女人など聽き惚れて我れを忘れぼろりと涙を流すことさへある。

〔伊藤日脩師光悅談〕

○當山には昔光悅が寄進せられたものが澤山あつて、二つの寶庫に收めてあつたが、天明の火災に方丈の寶庫が燒失して蒔繪の經函、其他多くの光悅遺品を亡くした。現存してゐる物は山の倉庫にあつた分だけである。

○當山の觀心本尊得意抄一卷、法華題目抄一卷如說修行抄一卷皆共に光悅の自筆であります。小野道風の書かれた法華經八卷の寄進者が光悅であるといふことも、此の光悅自筆の寄進狀で分明します。

○この破損してゐる經筥(黑色の木筥全面に靑貝もて唐草を箝入し、上部に法華經の三字を同じく靑貝で箝入す、文字は光悅流也)は先年掃除の際押入の隅から掘り出したものですが、光悅はこの箱に道風の法華經卷を入れて寄進せられたものでしよう

○平安神宮の時代祭が創まつた當時、德川時代の旗文字を光悅の書で表はさうといつて、碓井さん(小三郎氏)が當寺へ其文字を搜索に來られて出來たものであります。

○この庭は巴の庭と言つて光悅の作庭ですが三つの巴が山なれば此の庭は海でしよう。あの石など、紀州石だとか、何石だとか言つて容易に集めることの出來ないものであるのに、其石の配置が又頗る妙だと言つて植木屋共が感心して居ります。

○先年この巴の庭を撮影して其寫眞をアメリカの圖藝大會に出しました。それも碓井さんのお取はからひでした。

○本堂の額「本法寺」は光悅の書かれたものですが、法の字が二水扁であるのは、當山の門前に小川の流があるからだといふことです。

○光悅寺は光悅會員の御盡力でだん〳〵良く成りました、當本法寺も光悅とは因緣淺からぬ寺ですから、當寺に於ても光悅祭の御催しを願いたいと思つてゐます。

○當山秘藏の光悅の月の簪は光悅寺の茶會に限つて特に出陳してもよろしい。

○當山にも本阿彌の墓があります、時々鷹峯の片岡(昔光悅の父光二の實家の末裔)が來詣しますが、無論當山に於ても保護をしてゐます。(八、八、八)

二、大倉集古館長 今泉雄作氏

(光悅寺に光悅繪畫の遺作なきは應はしからず。)

也軒老人今泉雄作氏は日本美術の鑑識家として名ある人で、嘗ては京都美術工藝學校長として明治二十七年から三年間餘其職に在つて令名あり、其後多年東京帝室博物館に美術部長として奉職せられたが、今は辭して大倉集古館長をして居られる。性磊落豪快邊幅を飾らないから極めて取り付きが良い。佛敎に歸依深く眞言宗に於て半僧半俗

の人であるから、頗る恬淡漂逸である。辯口もまはり筆も立ち、字も旨い。文章文字共に遒に脱俗の趣がある。大正三年四月光悦史傳材料蒐集のために東上したる余は氏をも下谷根岸の邸に訪ふた氏は大きな干瓢で作つた火鉢を提げて座敷にすべり出て長髯を撫しつゝ光悦の藝術を論じた。其論中に

〔今泉氏光悦談〕

光悦翁がある時紫澗玉のやうな厚き端溪の古硯を得た、翁は之を見て箱に入れて愛玩しやうと思つた、此着想がすでに剛壯で非凡である。常人ならば硯の厚さを見たまゝ箱を製する思念が起らない。道がに翁は硯を箱の中央に置き蓋の中ほどを高くして硯の厚さに應ずべき考案を凝らしたのである。常人ならば箱の深さを硯の厚さに似合はせ下に脚を付けるか臺でも拵へて恰好の意匠を得たりといふであらう。しかしそれは平凡の意匠で美術上三文の價値がない。成程便用に便ならむも紫澗玉の如き名硯を遇するの道でない。光悦翁が如上の考案によつて賞鑑す可き點を沒却せなかつた所、卽ち豪放の中に周深の用意の存する所である。而して唯蓋の中央を高くして漫りに土饅頭を作つたやうではたとへ着想はよくとも粗笨のそしりを免れない卽緣な有意無意の間にあらはして硯箱の形狀を失はないやうにしたのである。是亦周密にして苦心の存する所である。凡工に命じて意のまゝに作らしめたならば精々にして角丸にするか、尙ほ三味線胴にするであらう。直にして直でなく三味線胴にして三味線胴でなく角丸にして角丸でなく其間に出入して分毛も增減をゆるさない城に遙した所是が卽ち名工の意匠である。光悦翁の意匠の如きは非難の出來ない所謂神作である云々。

氏は當今天下の成金者流の徒らに美術骨董を購うて貨財倍蓰の具となさむとする者を蛇蝎の如く嫌うて「古人の心血を吸ふの餓鬼に侔し」と攻罵してゐる。氏は京都美術工藝學校長として在洛中光悦寺に來て、「光悦寺に光悦繪畫の片影だもこれなきは應はしからず」とて明治二十八年十二月光悦作色紙（桔梗を銀泥にて薄を金泥にて描き其上に和歌一首を書せるもの）の軸製したものを同寺に寄附せられた。爾來其色紙は光悦寺寶物の重もなるものとして、來遊者の齊しく光悦の意匠を偲ぶの料となつてゐる。今よりして二十四年前光悦寺の荒廢を極めたどん底時代に於てこの芳ばしき氏の篤志は地下の光悦をしていかに悦ばしめた事であらうか。（八、四、一〇）

三、曹洞宗大本山總持寺貫首　石川素童師

石川素童師は曹洞宗の耆宿である、功勞者である。師が同宗のため、又總持寺のために盡された功績は偉大なもので、其貫首にまで漕ぎ付けられたのは、全く刻苦勵精の功にありと聞く。又、師は行政的才幹に富んで居られ、總持寺を裏日本なる能登の僻陬から表日本なる相模の鶴見まで引づり出して、三百萬圓の工事をやつてのけ、世界第一の地の利を得せしめたのも、曹洞宗の宗規を制定して宗内の秩序を正されたのも多くは師の力によるのである。非凡の精力家たるの師は地方巡錫に出かけると善男善女に渴仰せられアハ、〳〵と笑ひ興じて馬鹿のやうに成つてゐるが、山（總持寺）にあつては寸分も規矩を抂げないさうである。だから一山肅として破綻の起りつこもない。能く勤める人であるとの評は、宗内の萬口一致の所である。卍山會の創設に當り鷹峰源光庵住職は現代卍山派の棟梁越前永平寺貫首日置默仙師に發起人として參加の事を申請せられたが應じられないので、總持寺貫首石川素童師を動かさうと談議が決したから、小田垣師より依頼せられたところ、師の快諾を得た。

卍派の日置師が拒絶せられ卍派ならざる石川師が快諾せられたのは稍意外であつた。そこで源光庵住職名義で正式の願書を出して、大正七年九月擧行すべき復興第一回卍山忌並に同會發會式に導師として參列せらるべく交渉をしたところ是亦承諾せられた。

大正七年九月二十七日源光庵に於て會忌を勤修すべく定まつたから、同師を迎ふべき順序を會から總持寺に打合せをしたら石川師の回答には「出迎へは以ての外である、喜んで參列する、尤も會忌の費用も負擔する」といつた風の回答があつたけれども寺と會よりは禮を以て迎へた。

式は二十七日午前十時に始まり、師は控への席より行列を以て式場に練り込み、導師の正役を勤められたのであるが、百に垂んとする僧衆儼然として跪座し滿堂水を打つたゝ中に痩軀鶴の如く心致湛然靜寂肅々として何物にも捉はれざる枯高の容姿、さすがに當代の高德を偲ばせたと同時に、歡喜に滿てる卍山禪師の神容が髣髴として、靈香薫ずる白蓮の華頭に止まるが如き構想を禁ずる能はざらしめた。

疏（但馬永源寺住職岸澤惟安師撰文）

京都府愛宕郡鷹峯村鷹峰山寶樹林源光庵燒香比丘素童等

今月今日恭遇

開山卍山道白大和尙禪師道慕報恩卍山會發會之辰、虔備香華燈

燭湯菓茶微膳一以伸二供養一恭集二現前清衆一遶二誦參同契寶鏡三昧一所レ集殊勳上酬二慈恩一者

伏以

潤山正宗　叔世鬱奏二新豐古曲一
太祖復肉　午後重奔二黑漆崑崙一
覩二斐於五雲綿叟一　蒼松朶々映二帶天一
闡二法於大乘舟翁一　珊瑚枝枝撐二着月一
同レ誠飲レ水共二休戚一　其孝維純
報レ恩設レ拜開二鉢華一　其悟維實
提二鉗斧一襲レ後　移二關若手城南疊翠之麓一
横二櫛栗一沒レ蹤　甘二米湯乎洛北紅塵之境一
飲二慕靈山端殿一　林曰二寶樹一
飲二姜楷祖枯淡一　塢號二芙蓉一
龍池上　飽聽二耳畔鳴泉一
鷹峰頭　貪看二天邊舞月一
零露積二經行迹一　孤猿嘯レ烟清吟高低
隙葉飄二苦砌瘦一　清鐘送レ雨遠神緬邈
固辭二大中法柄一　三却二萬松聘禮一
校二定正法眼藏一　發二揮往聖未發要機一
梓二行楢樹清規一　闡二揚列祖正傳眞訣一
担二担竹筒鼻孔一　面授之篇
豁二開木欞眼睛一　佛道之卷
提二起鐵案一　活二捉龍吟一
標二榜宗門大事一　七佛威儀萬古聯綿
安二厝禪戒開名一　如來禪林六返震動
要レ教群生游二毘盧海一

一任二要人誇二正法輪一
每慎二嗣承將レ錯就レ錯兮因レ院易レ師
奮欲二申理以レ藤纏レ藤兮扶レ衰救レ弊
公慶嚴眼二哲匠　廼欣廼歡俱泛二孤舟一
梅峰田籍兩禪師　相推相援同訴二幕府一
一片慈心　如二霽湯無二冷處一
打徹悉頭　似二鐵壁絶二縫罅一
天涯地角煒々昱々　遠囑日輝
深山幽谷玲々瓏瓏　鈞令月照
城邑不レ居　齊門豈把二梓桐琴一
大功不レ宰　殿樓閑彈二瑠璃琴一
妙在二轉處一　獨解二鵝身一
會侯請二益正偏一　蕩直竪二一指一
上皇歸二檀德殿一　慈懇謝二沈痾一
如二藥囑接二李翺一　似二溈州遣二帝敕一
墮レ愚墮レ昏　千佛伎倆不レ留二些兒一
礙レ强礙レ凡　老僧命脈無二復一線一
不二會師翁老婆心　作レ則時節忘二却曩昔快活一
落節伊人老境界　盛レ雪銀盤變作二田家瓦盆一
異童子夢二靈禪一　北方古聖應化
虛空神告二上足一　瑩山義祖再來
庭事秋風忽捲レ地　全身入レ塔石中蓮
雖二然石無二古今一　世歷二二百餘載一
蓮有二開落一　人發二菩提道心一
青山羅列如二兒孫一　何謂レ待レ伴
綠水潺湲似二爭笛一　何二以報一歡

仰願勿レ吝二來儀一
速享二齋供一　謹疏

維時大正七年九月二十七日
鷹峰山寶樹林源光庵燒香比丘素童　謹疏

隨伴の某師、師に代つて右の疏を捧讀し、師は卍山禪師の靈位に對し跼つて頭を垂れ恭順凝慕を込めつゝありし間、師風邪の氣味おはせし故か鼻汁が鼻の尖端にしたゝりしを手巾取り出し頻りに拭はれしほどに、禪師といへども寄る年波の爭はれぬものあるを感せしめたが、

衆德莊嚴萃二其身一　宗門復古命維新
後進開發卍山會　永答二偉功一幾萬人

恭以

此一片香爇二向大鑪鞴一　供二養當山開祖卍山道白大和尙一以驚二動大寂定中閑夢一　要眞慈應現一如二生前一雖二然恁麼一　遠孫刻レ船聲聽二眼處一哉聽耳處鑑在二樓前一喝
鷹嶺秋清吹二寶樹一　源光月照轉二霜輪一

の禪師自誦の香語中、「喝」の大音聲のさえにさえて、威力あり活氣ありしには、七十八歳の老年とも思はれず、參詣者をして一方ならず敬虔の情を興起せしめた。やがて忌式終り參列の善男善女に一場の講話を試みられたが、恰かも慈母の赤子に對するが如く

人の一生はな　ちやうど波間に舟を漕いでな。

目的の彼岸に達する樣なものであつてな……

心は卽ち楫であるからな……

といつた風に「なな」を語尾に添へて誡說せられし所、低聲の裡聽者の心中に徹底するものがあつたしばし講せられて後、說敎席を隨行の布敎師に讓り控への席に歸られたから、余は諸師の勸めにより源光庵住職鷹峰透關師と宗仙寺住職の某師との紹介で拜謁したら、禪師は余に對し極めてしとやかな音聲で卍山忌の復興と、卍山會の發會式について歡喜の色を見せられた。

聞けば其日禪師は北國より歸途江州米原から京都へ立寄られ態々鷹峰に來られたのであつたが、卍山會忌の了ずるや午後三時又隨行の諸師を隨へ歸去せられ直ちに信州長野に向つて發程の豫定にあらせられると聞いた。

さて當日石川禪師をはじめ來會の僧侶に對して余の編した「卍山禪師小傳」を一部づゝ頒つた。

（八、六、三）

〔卍山禪師小傳〕

一、出生と其時代

卍山禪師諱は道白隨時子と號し又復古道人といひ四方崇稱して鷹峰和尙とよぶ今より二百八十二年前の寛永十三年に備後の

國に出生せられた。

其時代には林羅山、中江藤樹などいふ偉い學者が居り又山崎闇齋、山鹿素行、伊藤仁齋などいふ年少氣鋭の篤學が輩出しやうとした時であるから漢學は大に盛んに成らうとした。が佛教は之に反して振はなかつた、ことに曹洞宗に於ては宗統嗣續の紊亂が甚しくて整風滔々制止すべからざるものがあつた。禪師は此時代に生れて來て而して曹洞宗統革整の大事を遂げられたそれだから禪師は曹洞宗の中興とも稱し得るのである。

二、庭訓

禪師は七歳にしておとうさんを喪ひ十三歳にしておかあさんを喪はれた格別の不幸兒であつたがおかあさんが俤物で禪師が幼にして備後の龍興寺に童行たりし頃おとうさんの弔のために故郷に歸られたことがあつた。其時おかあさんの庭訓が頗る善い「吾が子よ汝大寺を得て名位を高うすることを望むな、たゞよく道業を修めて德をつめば母の願は足りるぞ」と問もなくおかあさんは亡くなられた、この母訓はたしかに禪師の大德を成就せしめた一因子たるに相違ないのである。

三、師承及入山

卍山禪師は龍興寺の一線和尚に隨身して加賀大乘寺の月舟和尚より嗣法せられた禪師が師家に對する情誼も至れり盡せりで其關係は親子も啻ならざる濃密な水魚の情があつた。加賀大乘寺、山城の禪定寺、攝津の興禪寺に入山せられたが何れも本師月舟和尚の推挽によつたのである、源光庵に來られたのは元祿七年十九歳で最後の廟棲であつた。

四、曹洞宗統の紊亂

禪師が終生の所願の一として盡力せられ遂に復古の大業を遂げ成せられた曹洞宗繁革正の事は洞上宗統復古志に詳しく見ゐて居つて當時曹洞宗の全部を擧げて紛爭の渦中に投じた大事件であるが其經畧を述ぶれば元來曹洞宗では師嗣面授を以て法系を繼いで居つたが中ごろ戰國時代からそれが亂れて所謂伽藍相續が行はれたのであるそのために一師相傳の法を繼いで幾度寺が移りかはつても最初傳來の法系を改めずに居たりしものが終には寺の移轉ごとに元の師の法系をかへて次の師の法を傳へるやうになつたのであるこれは畢竟經濟問題から出たことで利益のある所おのづからその人を引き付けたのであらう。そこで收入の多い寺或は權勢のある人の住んでゐる寺には競ふてこれに入りたがるついには前に行つて居た師をすてゝその寺の師の法をつぎ十分修行せずして其寺のあとにすわる樣に成る卽ち惡も悟道の如何に關せずただ寺を得んことを欲したのであつた。これは元來永平道元の家訓にもとり嗣法の規式を亂したものである

五、宗統復古

卍山禪師は夙くから之を慨歎して居られたが同志がなかつた遂に元祿十三年六十五歳の時老をつゝめて鷹峰を發して江戸に行き攝津住吉の臨南寺の梅峰和尚、江戸芝瑞璃光寺の田翁和尚等と力を協せて江戸に留まること三年その間身の危難を忘れて幕府に直訴哀願せられたこと數度か知れない專ら護法のために奔走周旋せられたので遂に元祿十六年八月七日を以て幕府は曹洞宗統復古の條令を下したのである此事件に關しては時の老中阿部豐後守正武、寺社奉行阿部飛驒守正喬父子は與つて力あるやうである。

六、學德

鷹峰源光庵は加賀の中田靜家居士が創建して禪師に住まはせたのである。禪師は宗統復古の願望を遂げ江戸を引きはらつて源光庵に歸られた。四方遠近德を慕ふて至る者いよ〳〵多くなつた。嗣法門人は前後四十四人に達したが俗人にして嗣法した篤信者には奥州會津侯、筑前立花實山、加州本多安房守及び鷹司瑞藤尼などあつた正德四年禪師の七十九歳の時には靈元法皇が其高德を聞かせられ召して宮に入れ法要を諮詢せむと欲したまふた。禪師は天恩を畏みて感激に堪へなかつたが老衰のため拜辭して出られなかつたから勅して紫綿の御下賜があつた。

七、入寂

翌正德五年六月老病募つて食餌吭を通らなかつた、それでも精神は健爽で行道少しも懈怠がない、病を訪ふて來る者には一々應酬訓誡せられたので奮發興起せざる者はなかつた。同月十八日夕刻遺偈を認められた。

超師超佛　滿八十年　秋風捲地　孤月遊天
無幻々兮無病々　全身入塔石中蓮

十九日早朝起きて跏趺し衆に對して最後の別れを告げ恬然として示寂せられた壽八十遺骸は方丈の側に藏め復古塔といふた後其塔上に更に堂宇を築いたが今いふ復古堂が卽ちそれである。

八、卍山廣錄

源光庵に卍山廣錄版藏がある廣錄は禪師の語錄及遺編を蒐集したものであつて、禪師の高弟白龍師の編纂にかゝるものである。全篇四十九卷はみな卍山禪師の學德を窺ふに足るべき好資料である。（完）

四、隱れたる書家　畠山八洲翁

（光悅先生をして現代にあらしめば）

畠山太郎氏、運成といひ、又八洲と號す、京都に於ける隱れたる學者、隱れたる書家であつたが或る機會に於て內藤湖南博士に其筆技の俊秀なるを知られ、爾來多くの世人に知らるゝ人となつた谷本梨庵博士の如きは氏の筆蹟を賞揚すること尋常でない。著者は同博士より博士自藏の氏の筆蹟「夫人之相與俯仰一世或取諸懷抱悟言一室之內或因寄所託放浪形骸之外」の蘭亭記中の一節を見せられて、氏の脫俗老成した筆格を知つたと同時に谷本博士のすゝめによつて、元政上人太虛庵記の揮毫を氏に請はんとする決意をなしたのであつた終に氏は光悅會のために其雄勁な筆技を揮つたところが其太虛庵記は元政の作と餘程違つて居つたから、その何故なるかを問ひかけたら、

〔畠山氏〕

元政の文章は甚だまづい故に余（八洲）は訂正をして揮毫したのである、假令ば「太虛庵乃光悅翁佳城之地也」と冒頭にあるがいけない。「本阿彌光悅翁遲栖之地也」とせればならぬ。元政のは

文章になつて居らぬから全體を訂正したのであるが、これは元政上人に對して決して失禮ではない、やがて余(八洲)は地下に於て元政より謝辭を受ける筈である。

と言つて自ら信ずること厚きものゝやうだつた。

氏は又光悅の書道について左の如く談じた。

〔畠山氏光悅談〕

光悅先生の時分には支那の船は時々長崎に來たばかりであつたから支那から我國に渡來する大家の筆蹟は光悅先生にどれだけの參考になつたか、書道の盛んな時代ではあつたが眼識を廣むるに不充分な時代であつた然るに光悅先生の如く斯道に妙を得られたのは最も其着眼の凡でなかつた事が偲ばれる。光悅先生を今の世にあらしめてそして書道の研讀をほしゝまゝにさせたら實にたいした研究が出來たと思ふ、今は書道研究の良手本殘らず渡來してゐるからである。云々

氏は孔孟の學の外老莊の學に於ても造詣あるものゝ如く京都本能寺内の漢學研究會に於て老子を講ぜられた事もあるさうだ。無學なる著者は氏の學者としての眞價を知らないが兎に角自信の強い老翁である。(八七三)

五、染織物問屋 西村總左衛門氏

(作り出せるわざのたくみさ)

京都の千總といへば、染織界、否呉服界に知らぬ人は無い。西村總左衛門の名も亦其儘に通つてゐる。染織物問屋であつて本店は京都三條烏丸西入南側で、同所北側が同貿易店である。府下の多額納税者であるけれども極めて質素な家で、氏は溫厚篤實の資である。御人柄ではあるが、氏の兄弟中では第一のやり手で且成功者なのである。京都府立第一中學校教諭として永く同校の國文教授を擔任して居られた三國一慤氏は氏の實兄で、元岐阜縣に郡長をして居つた今の京都博覽協會書記長たる三國貞五郎氏は氏の實弟である。一慤先生の御舍弟だけあつて和歌に堪能で、光悅を詠める文字も畫もうるし器もするものも

作りいだせるわざのたくみさ
鷹ケ峰鷲ケ峰をも見る軒の
松にゆたけく鶴も巣をくふ

二首共に堂に入つたものである。氏が光悅會のために盡さるゝのは素より氏の篤志的行爲に外ならぬが、それ以外光悅派の圖案が染織界を裨益しつゝあることが少なからぬ故でもあらう。(八、二、一〇)

六、刀劍鑑定家 本阿彌琳雅氏

(名刀當麻は光悅の鑑定に入つた)

本阿彌家は刀劍鑑定に於て古來我國第一の名家である。封建時代殊に足利氏の中世から、德川氏の初までに於て武士が其生命とし、精神とした刀劍の鑑定及磨礪淨拭には一大權威を持つて居つたが中にも、本阿彌の鑑定といへば誤りなきものとして、世人の信用を得たのであつた。此の本阿彌家は光悅の父光二が分家したのを嚆矢としてすべて十一の分家が出來、「本阿彌十二家」の名があつたけれども、封建の世去り、刀劍(日本刀)業者凋落と共に十二家も漸次衰頽し其半はすべてに斷絶し、半は繼續してゐるけれども他の職業に從事し家道大に振はざるものが多い、就中琳雅氏は今尙斯業を本職として、東京市神田區五軒町に住居し諸名家秘藏の古刀手入れの需に應じて豐かな生活をして居られる。琳雅氏はもと成善と言つたが、大正元年十一月改名したのである。光悅の木像が同家にあることを東京大學の辻博士に聞いて、余は明治四十三年十二月十四日はじめて氏を訪ねて光悅の木像を拜し、光悅の色紙を見、本阿彌家の系圖について十二家の現狀をも氏から聽取したのであつた。其時小さなる光悅の木像は袋に入れて他の多くの調度と共に函の中に納められてあつた。

〔琳雅氏の光悅、光甫談〕

光悅翁が鑑定ぜられた刀劍の殘れるものは甚だ稀であるらしい余(琳雅)の見た所によると近藤廉平氏秘藏の名刀當麻のみである。當麻は光悅翁が鑑定して金象眼の銘を入れられてゐる。余は唯此一品を知るばかりである。光悅翁自書の刀劍押形あり琳雅が秘藏してゐます。

光甫翁の極め置かれた刀劍も亦頗る稀であるらしい。公爵山縣有朋氏所藏の淺井一文字は光甫翁の鑑定ぜられたものであるが余はいまだ其外に見ない山縣公爵の淺井一文字にも金象眼で光甫の銘が入つてゐる。

大正二年光悅寺が光悅會の援助の下に光悅木像模刻の計畫をして當代彫刻界の第一人者高村光雲氏に執刀を求めたが、其依頼の交渉は琳雅氏を煩はしたのである。氏は大正二年九月十六日光悅會發

起會に成工した木像を持つて態々光悅寺に參會せられたが、其時參會者の對照に供するため原像をも持參せられたのであつた、今光悅寺に祭禮せる木像は模刻であつて、原像と少しも變らない。これ空中齋光甫の彫刻を偲ぶと同時に、大正の美術をも見るべきものであらう。琳雅家は近世は技藝相續實行のため、代々養子であるとは是亦同氏の談であつた。（八、三、四）

七、帝室技藝員 富岡鐵齋翁

（春よ、見なさい能く書いてある）

富岡翁字は百鍊、鐵齋と號し、又鐵山人ともいふ今年八十五歳白髮美顏の老翁で、小幹の體軀であるけれども皓髯下に垂るゝこと一尺、身に十德を纏ひ冠を戴用して居られると、恰も繪のやうで藐姑射の神人もかくやと思ふばかりである。

翁の名が書家として又書家として餘りに强く知られてゐるので、世人は往々學者としての翁を知らないやうであるが、翁は藝術家としてよりも高士として推重したく思ふ。百たび千たび鍊られ鍛はれ遂に名だゝる鐵の人格を作られしは、主として讀書學問の力であつて、其書に畫に脫俗高邁の風格を表はし、世人の賞翫を擅いまゝにするも學問修養の光華に外ならない。

翁の藝術を見ると、不羈磊落、獨立獨步毫も世に迎合の色なく、自由無拘束思ひのまゝに其天眞無垢の硬骨雅懷を描寫してゐる、若し假りに翁に對して宜しく時代の色彩を帶ぶべきことを說く者ありとせば、翁は唯莞爾として答ふるなく、「容れられざる何ぞ傷まむ我れは唯だ獨自天然の雅懷を遣るのみ」と恣いまゝに揮灑して樂むであらうこれは此頃の翁の心情及藝術を忖度するばかりでない、翁は若年の時から這箇の仙骨氣慨を藏してゐる。

年不惑を超えたる息謙藏氏に向つて「世の繫累を少くして片時も讀書修養せよ」と常に言はれて居たと聞いてゐる。此一語普通人と撰を異にせる風格氣品の偲ばるゝ所である。

翁がしかく好學の士なればこそ、謙藏氏が殆んど自身獨學で大學講師まで漕ぎ付けたのでもあらう。

翁は遉がに學問好きとて萬集された和漢の書物も所謂汗牛充棟で、珍本も少くない、本阿彌光悅の傳記資料に缺くべからざる本阿彌行狀記や賑ひ草の如きも、極めて特殊な珍書だから容易に見ることが出來ないのに兩つながら其寫本が翁の書庫に在つた。

著者が內藤博士の紹介で謙藏氏に會ひ、翁の座敷で氏と談じてゐると、翁は何くれとなく世話をやいて、光悅の遺作や光悅關係の書物を襖の蔭まで持ち運んで居られた。

謙藏氏は

父は光悅會の成立を聞いて非常に喜び、出來るだけの援助をせねばなるまいと私しに迄申して居ります。

と言つて依賴の事項も快諾せられ、會のため種々參考に成る事を言つて呉れた。

大正四年十一月二十三日第一回光悅祭に翁は老夫人と相携へて光悅寺に參詣せられたから、蝶夢雪佳の兩氏並に住職等と共に歡待した、翁は其時本堂に參詣して光悅の木像を拜し自製の菓子器（梅形の器、六兵衞に燒かせたもの）に蒸菓子を盛つて供へ、さながら光悅の在すが如く眞心を込められた、其時本堂に展覽してあつた、本法寺出品の軸物の「此里に旅ねしつべし櫻花云々」一首の光悅が揮毫した歌文字を指して夫人を顧み

（鐵齋翁）

はる！、（夫人の名春子）これを見よ、よく書いてあるな……

（夫人）

ほんとうに善く出來て居りますな……

と老夫婦の琴瑟相和し仲よげなること、他より聽くだに快かつたが、翁がすべて光悅の遺作に傾倒心醉の狀が頗る天眞無邪氣な告白であつた。〻翁が己れを空しうして心から先人の遺風に憧憬してゐる情のうるはしさに敬意を表せずには居られなかつた。翁はさも樂しげに展觀物を見て住職の依賴によつて書畫帖に

「掃蕩俗塵」

の四字や「超秀」の二字を揮毫して愉快げに歸り去つた。

抑も翁が光悅を知り光悅の人格に得たことは餘程以前からの事で、翁が所藏してゐる本阿彌行狀記の奧書に翁自ら左の文字を書いてゐる。

右（本阿彌行狀記）の秘本執筆半圓容易得之讀之樂而頗知有所得也

明治二年二月十五日　　富岡鐵齋印

惟ふに明治二年は、今日より五十一年以前の事であれば翁の三十四歳の時である。この一事翁が高士として又藝術家としての眞價を窺ひ得るよすがにも成らう。

翁は光悅の如き偉人を慕ふのみでなく、昔の女性の偉物をも慕うてゐる、鷹峰常照寺、名妓吉野の墓に詣でゝ吉野の靈を弔し、金若干を出して墓碑を修覆したのも、今から三十餘年の昔明治十八年四月十日であつた。此の事翁自ら所持せる賑ひ草表紙の見かへしに翁の自筆で記してある。吉野會が常照寺の吉野門を再建して土橋氏が同寺内に遺芳庵を建てた時にも、吉野會は謙藏氏に依頼して扁額「遺芳」の二字を翁に書いてもらつたのである。

翁は誠に篤志な人であるが、其篤志も眞に高人的で往々奇行に類するものがあるので、或人は翁を以て一大奇人としてゐる。げに翁は奇人ともいひ得る人で、若年の時から人の需めに應じて揮毫しても、謝禮金の多寡によつて揮毫に熱心、不熱心、努力、不努力はないのみならず謝禮の如きは不關焉であつた。勿論今でもさうであるから其作品に價値があるのである。これにつけても思ひ出すは翁が光悅の畫像に讃語をうたれた時など、いかに會心の事であつたらう、光悅祭の當日光悅寺からの歸途態々雪佳氏を訪ふて（鐵齋翁の宅は室町一條、雪佳氏は新町椹木町）讃語選擇の情を語られた事によつて思ひ半に過るのである。又、客月京都書肆芸艸堂主人が、亡息女の一周年忌を行つた時、薦事記念のため、翁に觀世音像の揮毫を請うた所、翁は其時はじめて芸艸堂の不幸を聞知し眞心こめて、それを揮毫し衷心から追悼の詞を陳ぶるのみならず、芸艸堂よりの封金を辭して受けなかつた事など、其心のすが〳〵しさ、やさしい、うぶな同情の強い點が明かに一片の書簡の上に躍如としてゐる。

昨日御入來始而承り候昨年御息女御不幸のよし驚入候とんと不存不都合之至今更申譯無之無致方殘念に存候就ては追而於黑谷一周之御薦事有之候よし貴而此觀音大士御供養之爲に被成下候はゞ幸甚也尙委細御面會の節可申候當用迄如斯早々

一月十六日　　富岡鐵齋

芸艸堂様

尙々御叮嚀の一封御遣し是は堅く御斷り可申返上致候

翁の如きは實に當代得易からざる善人、高士、奇人、雅人であるのに、この善人が先年ひとり息子の謙藏氏に先き立たれたのは何たる事だらう。余はこれによりて殆んど天道の攝理を疑はうとしてゐる、子煩惱の翁は、いかに悲しからう、けれども翁は道がに修養の深きものあるだけで此頃さらりと諦めて「謙藏は天命を全ふした」といつて相變らず風流韻事に耽つてゐるとはいぢらしい。

大正八年十一月十二日降りみ降らずみの時雨の日に翁又光悅寺茶會に參會、茶席に入り又境内の諸景を寫生して歸られた。どこ迄も風流な人である。令息謙藏氏が存命中は謙藏氏孝心のあまり翁を快く外出させなかつたが、謙藏氏歿後は老體を提げて時々逸遊を恣いまゝにせられる。翁は現今眞に悠々自適の境涯である。いよ〳〵壽なれかし〳〵（九、二、六）

大正九年二月十八日、著者はふりしきる雨を衝いて、豫て懇請して置いた、本書序文の催促依頼のために翁の宅を訪うた。下女に取次ぎを請ひ、しばらく玄關に佇んで玄關外正面に掲げられてゐる、古色蒼然たる「福内鬼外」の正方形の木額や、玄關内の壁間に掲げられてゐる、翁自書の司馬溫公解禪六偈の彫られてゐる長方形の木額に見惚れてゐると、謙藏氏の未亡人が出て來られ「ちよつと老人が御目に懸りたいと申して居りますから、どうか御通り下さいませ」と言はる、すなはち案内せられて表座敷の客間に罷り通ると、紫檀の大机のそばには朱塗浮彫りの見るからに風雅な火鉢に池田炭の火が燃えてゐて、むつくりとした絹座蒲團が敷かれ、翁は早やそこに在つた。

（翁）私は富岡鐵齋です、途中で御目にかゝつても眼が惡いし、耳が遠くて……

光悅のためにいろ〳〵深切に調べられた事は結構な事である。こんどの著述を拜見したが、ところ〴〵氣付いた點を忠告したいと思つて貼紙をして置いた。

と、光悅談叢の拙稿を取り擴げ、原稿を手にして、一それ、この長尾雨山ぢやが「詩人」としてあるがそれよりも儒家とする方がよい。儒者であつて詩をも作るのであるから、詩人とも言へるが、儒家の方が敬稱ぢや。

一茶屋四郎次郎ぢやが子孫が零落してゐるとは、穩かでない。これにも、わしの意見を書いて置いた。

原稿には予が「流石の豪家も、三百春秋に幾變遷

を重ねて、今は殆んど零落し」と書いてゐる所へ翁は「(今は昔しの面影もなし)ナドニテ其子孫零落ハ削ルガ可、人ノ耻ヲ出スハ不吉也」と貼紙せられてゐた。

(翁)

一それから雨森菊太郎ぢや、菊太郎は岩垣龍溪の曾孫で、月洲の子ぢやが雨森家へ往つたのぢやわしは菊太郎の三代も前から知つてゐる。こゝも一寸違つてゐるから書き直すとよい。菊太郎は時々わしの宅へ話を、しに來る。あれは悧巧な男で、切れ者ぢや。

一内藤虎次郎ぢやが、あれは學問も出來るし世間の事でも中々よくわきまへてゐる。虎次郎は當世得難い人物じや。

謙藏氏の未亡人は聽音器を持つて來られ

(未亡人)

どうか大きい聲で御話し下さいませ。

(著者)

先生は謙藏氏を亡くして惜しい事をしましたね

(翁)

一あゝ、内の事を何でも、かでもやつて呉れて焚出しの大將ぢやつたが、肝腎の者が死んで、年寄りが取り殘された。けさも婆と話して居たのぢやが、これは人間の力で算段の出來るこつちや無い。謙藏は、いつも、わしを、そばに置いて子供を世話するやうに、かうせよ、あゝ書けと世話をしてくれたのに、今は樹から落ちた猿ぢや。

一今はもう京都で風雅な所は鷹峰だけぢや。石川丈山の詩仙堂といひ、八幡の松花堂といひ、南山城の薪の寺もいろ〳〵變つた。光悅といふ人は氣立てのよい人であつたから、わしはすきぢや。

一光悅寺もこゝ十年ほどの間に住職が三度も變つてゐるな。今の和尚はこれ(原稿)で見ると御經好きぢやとか、よい事である。世事にうとい人がよい。

一鷹峰に片岡といふ家があつたが……あゝさうか。わしは年の若い時、西賀茂の蓮月のそばに居つたが、其時分に片岡の事を度々聞いた。片岡は樂燒を燒いて居つたといふ事ぢやなア。わしは西賀茂の智滿和尚と懇意であつたが、和尚は德の高い人であつた。いつも和尚から手紙をもらつたし、わしからも心易くして居た。神光院には蓮月の墓があつて、わしが文を書いた。

一去年光悅寺の茶會に行つた歸りがけに、源光庵に立ち寄つた、そしたら源光庵の和尚が「あなたは當寺開山の卍山和尚の讃を御書きなさつたな」と言ふぢやないか、わしは「どこで見なされたか」と尋ねたら、「永平寺で見た」といふて居られた。わしは書いた。卍山和尚のやうな偉い和尚は、これから後の世には出ない。源光庵も大切な寺ぢや。

一わしは昔鷹峰へ行つた時千束の讃州寺へも往つた。其時分賴山陽の弟子の南陽といふ人が、そこに居つて色々話をして歸つた。

(著者)

先生一度泊りがけで鷹峰に來ませんか。

(翁)

なか〳〵もう老ぼれてな……鷹峰に松野新九郎といふ人物が居つた、木屋町あたりで大分金を使つたやうであつたが偉ら物であつた……あゝさうか〳〵。

(著者)(拙稿を手にして)

つまらぬ事を書きましたが先生の所感は……

(翁)

後の世の人が面白がつて見るわ……人のよい事は書いてもな、耻に成ることは成るべく書かぬがよいな。物知りに成るとな、言はでもよい事を言ふたり、書かでもよい事を書いたりして俗惡な始末に成るが、この本は田舍風に、まつすぐに出來てゐる。さうやさかい、わしでも思ふた事を遠慮なう忠告するのぢや。取捨はあなたの勝手ぢや。

序文は何か考へて書いて置かう。(九、二、一八追記)

八、戸島光孚氏と迎田秋悅氏

(蒔繪技上に見れたる光悅の デモクラシー)

蒔繪家

迎田秋悅、戸島光孚兩氏は京都の青年美工家で京都第一流の蒔繪師であるばかりでなく、現時我國に於ても鏘々たる漆工藝術家である。光孚蒔繪秋悅蒔繪の名すでに斯界に喧傳してゐる。又兩氏共文學の道に趣味あり、和歌俳句共によく出來る兩氏ともに光悅の蒔繪に心醉傾倒して光悅を神の如く尊敬せられつゝある。秋悅氏は光悅蒔繪を論じて常に左の如く言つてゐる。

〔迎田秋悅氏光悅談〕

一光悅の蒔繪を評するには、其優しき點、こまやかにしてあはれ深き點に注意したい。

光悅の蒔繪を以て豪宕雄大とのみ評し去るは、光悅蒔繪の全豹を見ない言である。

一桃山時代の豪宕は先づ其時代の空氣と見るが至當である。此中へ藝術として都合よく現れて來た光悅は事勿れ主義の徳川時代をチラとながめて世を去つたのであらう。

一光悅其人は自己を幸福と思つて居たか、不幸と思つて居たか知らぬが、技藝で世を送る自分等から見ると萬事幸福な一生であつた樣に思はれる殊に痛快なる桃山時代より少し後れた趣味の時代に時雨降る鷹ヶ峰に藝術の村を作つて暮した。

一鉛でも光悅は之を切るのに細かな細工をせぬ只素人臭く大手に切放して、鉛なるものゝ柔にして而も粗鬆な品質の自然を覆はぬ樣にしてゐる、そして之を纖細な金に配したとは思ひ掛けないことを遣つたものである。

一光悅は秋草硯箱にでも桔梗の花は鉛を用ゐてゐる。其鉛たる桔梗の花形の五瓣を直寫せず、僅かに五角に切つて或點によつて自ら桔梗の感じを與へ又薄の葉もそれを使つてゐるが、これまた實物に捉はれてゐない、そして桔梗にしても薄にしても重れ合せはせぬ、唯之を置き並べただけで無理はない。其置並べ方が又非常に巧妙で、置並べたとの感じを與へぬ。而して一旦蒔繪で他の花や葉を配ふとなると縱横自在に其上に描く、而かも細密に描いて全面を活躍せしめてゐる。其手腕は、實に光悅が天才に出て、他人の模すべからざる味がある。要するに波にもせよ、芒にもせよ、其他葱だとか、檜だとか、蒔繪の長所に充分の同情あるこまやかな行り方は、光琳なども光悅を皮想して居はせないかと思はれる位である。

一光悅は無論數人蒔繪師を集めて、彼等に其意匠を授けて製作せしめたであらう。現存してゐるものに、光悅でないと出來ぬと思はるゝものがあつて我々を少なからぬ驚異せしめる。

一光悅はすべての材料を生かして使ふ。材料に非常な同情を以てゐる、漆にしても金屬にしても、陶器にしても悉く生かしてゐる。漆には漆の同情を持ち、土には土の同情を持ち、鉛も金も銀も鐵も差別がない。一度光悅の意匠に入る時は金銀も鉛も土も各自天分の美を發揮して寔に燦然たるものである。高遠無限の趣味と完全な理智を以て、日本代表美術家の一人として偉大なる人である。

と言つてゐる、其批評は實に精細を極めたものである。

次に光孚氏の光悅に對する憧憬も秋悅氏に讓らぬものがある、氏は光悅の錫鉛具應用の創造を永く我蒔繪界の良藥として「かの船橋硯箱(光悅作)の東路の文字の如き何人が如何に苦心するも到底不可及所」と言つてゐる。

嘗て秋悅氏の光悅船橋硯箱の模作を見たことがあるが、技巧頗る見上げたもので、大まかな部分も善いが彼の纖細な部分が特に秀でゝ居るべく見えた。御大典中陛下御乘用の汽車の菊花御紋章をはじめ其蒔繪はもと新橋驛構内に於て光孚氏の謹作に成つたものである。戸島氏は名上光悅の「光」を冠用し、迎田氏は名下光悅の「悅」を沓用す。共に光悅崇拜の意を表象しつゝあるは言ふ迄もない村上文芽氏曰く漆工界に於て「光孚は常陸山の如く、秋悅は梅ヶ谷の如し」と短評意味深しといふべきである。(八、三、四)

九、元京都帝國大學講師史家 富岡謙藏氏

(光悅も茶道樂が無かつたら……)

富岡謙藏氏は桃華と號す、鐵齋翁の嗣子で京都人に似合はぬ潑溂な高調子の人であつた。其言語談說は往々にして常軌を脫し、其人物論に至つては、史上の人はいはずもがな、現世の人物についての評論でも思ふまゝを吐露せられた。それだから意に叶はぬ人を罵倒することの傍若無人さは狂氣の沙汰かと怪しまるゝばかりであつたが、趣味好尙を同じうする人等に對しては腹心をも傾けんばかりの俠情を以て援助も致し追隨もせられた。一面に於ては非常に嫌惡されるが他の一面からは大に尊敬される。卽ち氏が人を毀譽する旗幟も頗る闡明であつたが人から褒貶された聲呼も亦明瞭であつた。しかし氏の言動は肯綮に當ることが多かつたから、棺を蓋うて後引つくるめての聲價は生前のそれよりも遙かに善い。この氏が死後の好評を意外としてそれを氏が生前よき親と善き友とを持つてゐた結果であるといふ者は唯氏の人となりの方面を見て云爲する人であつて學殖の方面を知らない人であらう。

世人が鐵齋翁に書畫の揮毫を依賴する念は熾烈なものであるが、謙藏氏はそれら依賴者に對する態度が冷酷であつたので自然怨みも買つたであらう。氏の宅の玄關には左の如き意味の文字が揭示されてあつた。

一老父は一切面會不致候
一小生も勉學中に付概して面會不致候
一何々
一何々

富岡謙藏白

一々記憶して居らぬが、右の如き調子であつたから、大概の人は玄關拂ひを食つたのである。京都の有力家並に名望家たる雨森菊太郎氏、碓井小三郎氏の如きさへ、玄關拂ひにあつたらしく余は右

兩氏より直接耳にしたことであるから、其他は思ひ知るべしだ余がはじめて謙藏氏と交際をしたのは、光悅會で拵へた本阿彌光悅畫像の讃語を鐵齋翁に依頼するため、湖南博士の紹介で、氏の邸に行つた時だから大正四年の夏頃であつたとおもふ無論それ迄は一二回玄關拂ひを食つたものであるが博士のこまゞ〳〵の紹介に依つて見事關門が打破された。博士の紹介狀を持つて行つて玄關に出したら直ぐ表座敷に通され歡待厚遇快く希望を聽き入れられ、其外何くれとなく、光悅會のために忠言を受けた。同年十月光悅の畫像も出來たので持參したら、氏も殊の外喜んで「老父は年を取つて眼もあしく成り、手も震ひますから私が罫線を引いて讃語を入れさせませう」と言はれた。讃語は十一月の中頃出來上つたが、出來上るまでに二三回催促依頼に行つたが、行くと謙藏氏自ら玄關に出て延引をわびられることもあつたり、下女の取次であると、「御會ひをせねばならぬ筈でありますけれども神經痛で伏せつて居りますから失禮を致します」といつた風の傳言であつたので、素より寄附的に書いて下さるのであるのに少しも面倒がらずに始終厚意を以て應接せられた。

吉野會のために遺芳庵扁額「遺芳」の二字の揮毫を依頼した時も同樣で終に氏の好意に服せざるを得なかつた。

そこで世の骨董商輩が營利的に依頼するに對する氏の態度の冷酷であつた事は、一個の氣慨を藏する謙藏氏としてはさもあるべきことゝ思はざるを得ぬ。世の藝術家中には往々にして骨董商人と妥協する人もあり、又たとへ妥協せない迄も骨董商人の反感を得ないようにつとめる現代に於て氏の如き態度は敬服すべきである。されど氏が世間の一部から蛇蝎の如く惡まれたのは止むを得ぬことで、德人たる鐵齋翁がいよ〳〵偉く見えたのは氏の孝心の厚いために外ならない。謙藏氏のかゝる態度が鐵齋翁の德を傷つけはせないかと、窃かに翁に忠告したものがあつたが、鐵齋翁は「イヤ內の事は悉皆倅に任せてある、倅の爲ることには何も言つて下さるな」と言はれたさうである。氏は翁の老體を懷ひ、又翁の濫毫を調節するためにやられたのでもあらう。

大正五年冬十二月余は湖南博士に光悅寺の翹秀軒記を依頼し、長尾雨山氏に「重建太虛庵茶室記」を依頼して快諾を得、內藤博士の發言で光悅寺の現景を見に來らるゝことゝ成つたから謙藏氏と村上文芽氏とを誘うて光悅寺に迎へた。四氏高談清語實に面白きものがあつた。

さて其日光悅寺住職の肝煎で太虛庵茶室で四氏に茶をすゝめたが

「光悅は茶の道樂人で無かつたら余も一層光悅に推服するのであるが」

と言つて茶の湯を無益の冗事となし世の茶人を罵倒したのは謙藏氏であつた。

謙藏氏少にして平安義黌に學び國語漢文に造詣が深い明治四十二年擢んでられて京都文科大學講師となり東洋史(宋朝史)及金石學の講義を擔當せられ學殖深く隆々たる名聲があつたのに天は氏に壽を假さず四十六歲を一期として、大正七年十二月二十三日永眠せられ、二十七日午後一時京都市寺町四條下ル大雲院に於て本葬式執行せられた。同月二十六日文芽氏は日出新聞紙上に「桃華君の爲人」と題し、氏が兩親に對して孝心の厚かつた事を述べられたが、其一節に左の如きものがあつた。

巨金を投じて求めた古美術品でも、君は總て之を研究の材料とせんがために購求するのだが、研究のために生ずる汚損破滅は一切頓着せぬ、先年求めた漢鏡數面の如き、新聞紙に包んで座右に轉ばしてあつた。古美術品だからとて態々立派な箱を作つたり、錦に包んだりして、藏つて置くのは、古美術を死なせるのだとは、君がいつも語る所であつた。

逝去の前日先生(鐵齋翁)は筆管を携へて、君の室を見舞はれた、ところが君が憔悴を見るや悲哀禁ぜず、泣いて直ちに室を去られた。君亦これを見て泣き、體溫俄かに昇つて病いよ〳〵重くなつたのは、何たる悲劇であらう。

八年五月十一日午前九時より京都帝國大學文學敎官先生の主催で、京都家政女學校講堂に於て、氏の遺墨遺愛の展觀が行はれて、午後一時から追悼法要營まれ、引つゞき舊友諸氏の追懷談があつた。左の品々は展觀物中人目を引いた重もなものである。

澄完白の五律　　錢壯の山水
泰山四神鏡　　王莽時代四神鏡
唐寫本王勃集　　北宋板本史記集解
南齊の建武五年の銘ある神獸鏡
吳の黃武六年の神獸鏡
敦煌石室金剛經
シミツトがニコラス一世に獻じた東蒙古史
一六六七年キルヘルの支那記行
一六六九年東印度會社の支那記行
乾隆時代英國使節の日記錄

其他遺稿類など氏の學殖を偲ぶべき珍物が甚だ多くあつた樣である。氏が支那研究の材料を西歐

に求め私財を投じて惜まなかつたのは其篤學を證して餘りある。

此程桑原、內藤兩博士等の盡力で氏の遺著「古鋭の研究」が刊行されたばかりでなく、遺兒彌生子（二十年）は坂口、內藤兩博士の媒酌で、京都西陣機業家伊澤信三郎氏令息三辰氏（二十八年）に嫁がれることゝなつた明日華燭の典を擧げらるゝやに聞く、めでたし〳〵。一面より見て情の人たりし謙藏氏は地下に於て學友の友情の厚きに泣いてゐるだらう。（九、一、三一）

一〇、茶屋四郎次郎末裔　茶屋次郎氏

德川家康の寵遇厚く、家康の入洛每に其家（京都小川上長者町邊）を宿陣としたばかりでなく、家康に隨從して各地に出遊したこと五十三回に及び外國渡航をも許可せられて、海外貿易に浮身をやつした茶屋四郎次郎道淸は、其本姓は中島であつたが、前記のやうに家康の常宿たりしがため、「茶屋」といふ姓を賜つたといふ。いづれ劣らぬ角倉氏と共に當時の富豪であつて鷹峯に別墅を築いて光悅と共に悠遊したこともあつた。

飛鳥川の淵瀨常ならぬ世のためしにもれず、流石の富豪も、三百春秋に幾變遷を重ねて、今は昔の面影もなし。其子孫の茶屋次郎氏は京都中立賣油小路東入北側にさゝやかな菓子商を營んで居られる。海外貿易研究史家文學士川島元次郎氏は氏の家を訪ねて、茶屋氏祖先の事蹟を調査せられた先年內藤博士光悅寺來遊の際余は川島氏をも誘引した所が、川島氏が茶屋氏を同伴して來寺せられたので、其時はじめて名家の末孫と語り合ふことが出來たのであつた（八、二、一一）

一一、大谷光瑞師

大谷光瑞師不世出の資を以て邦家のため、衆生のため、學術界のため、佛敎界のため、實業界のために、支那に印度に西藏に中央亞細亞に、又近くは南洋に於て破天荒の活動を試み探究調査扶植經營以て自ら我人心の啓導や、我國力の發展のために盡瘁しつゝあるは頗る快とすべきである。

師が如上諸種の計畫をして着々成功を收めつゝあるは、もとより師の該博なる智識金剛不退轉の意志卽ち非凡の實力によることは申す迄もないが又他方には師の指導命令に從つて勇往邁進する幾多英才勇士の助成も亦多とすべきものがある。まことに師の配下には僧俗共に、英俊雲を成しつゝあつて、天空海濶日本男兒の意氣、海國男子の氣象、大國民の意圖を示して餘りある。「豪僧光瑞」の名は今や寒村僻地、津々浦々に迄轟き渡つた。師には幾分俗に所謂「やま的」氣分のあるやに解せらるゝにも拘らず、西本願寺派眞宗の信者はいふに及ばず、其他の僧俗相擧つて師の偉大なる人格と卓越せる才能に醉服隨喜しつゝあるのは英雄崇拜が人間の本能であるからでもあらうが、一般に師の心事の大體が了解されてゐるからでもあらうしかく師はまことに二十世紀初期の大日本國民を代表すべき人で京都產人としては眞に珍らしい大抱負の人である。

大正八年十月久方振りで海外から歸國した師は外面すつかり僧服を脫いだ紳士であつて到る所坊主臭い氣分を見せず、新進氣銳の學者であり、實業家であつて、人の意表に出で期待を避けて燕雀何んぞ鴻鵠の志を知らんやと空嘯かんず高風の偲ばるゝものがあつた。

大阪に於ける講演にも毫も宗敎家らしい言辭を吐かなかつたのは何人も意外とした所で。東京市に於て多方面から望まれた講演を悉皆拒絕して殊更に大阪に於て其望に應じられたのは大阪が實業界及財界の中心で海外の實業經營發展を勸說するには、大阪市が恰好と信じられたからである。

日本一の大講演は十月卅一日天長の佳節に中の島公會堂に於て開かれたのであつた。余は未明に鷹峯を出て態々傍聽に行つたが、雨天にも拘らず澤山の人で命がけで辛ふじて入場し得た。大阪每日新聞社長本山氏の開會の辭中に「師は夙に日本帝國の安危に關して仲々たる憂心を抱かれてゐる師の如きは理想家、豫言者にあらずして正に國民の指導者である」と頗る要を得、次に高石社員の紹介辭中に「光瑞師は大正三年に日本を出で遙かに米國の偉大を橫に見て南に向ひ同六年に南洋セレベスに所謂翼を下して圖南の策を講ずべく徐ろに計畫せられる所があつた」と言つた所、いかにも大きくて所謂水擊三千里の大鵬が扶搖を搏つて九萬里に上り而して後南を圖らんとす」といふ莊周の戲語を思ひ浮べざるを得なかつた。

寔に師は本願寺の本堂が洛中に高く聳えて巍々乎たる如く六千萬同胞中に於て雞群中の鶴とも稱すべき格である。師の講演は同日午前十時前から約二時間に渉つたが、言々句々愛國の至情より出で智識經驗の博大なるに八千の聽衆は醉へるが如く傾聽した。

六尺に近いと思はれるほどの巨大な體軀を縞のモーニングに包んだ師の風貌は廣い額、高い鼻、大きな眼、太い眉毛そのいづれにも豪宕の氣宇が表現されて居たが貴族的華麗な俤もなく宗教的枯淡な影も認めない。生々の氣が薄紅に潮した皮膚の色に迸つてゐた。師は卓上に手を突いて謙讓な態度で透徹した語調で

此度大阪毎日新聞の御希望によりまして私は大阪市民諸君の御前に自分の講演を致しますることを名譽と存じまして誠に感謝致します。私はもとより學問もない識見もない實に詰らぬ者でございまして其上日本の國には久しく居りません。それで申上げる事が現在の日本とは甚しく離れてゐるだらうといふ懸念を有つて居ります、併しながらこれに反しまして日本の西側南側は私の運動區域になつて居ります。其方は常に歩いて居りますから多少は承知致して居ります點もございます、それで今日申上げるのは日本の西側と南側とに於て如何に我々が發展すべきかといふ點について暫く諸君に御迷惑ながら御聽きを願ひたいと存じます。

と冒頭に述べて、古來日支兩國の地歴關係から現今の實業的狀態に及び、原料を支那から得ることゝ更に其製品を支那へ輸出することゝの二つを結び付けた點に誤が出來るから支那で加工して支那で賣捌くべきであるといひ、支那各省天產の分布及利用の方法より、日本人發展の程度等を一々實査した智識に基いて手に取るやうに說明し、日支兩國民の長短我國民が支那の大舞臺に雄飛するに參考となるべき事、滿洲にのみ行かずして南支につとむべき事より、日本殖民の南洋に有利なることをほのめかし、南洋諸島に於ける經濟及交通渡航について論じ、大阪の海の續きには支那も南洋もある、大阪の町は南洋まで續いてゐるとの大きい考を持たねばならぬと誡告し。講演中時々警句を吐いて

信賴を置くべきものは唯自分の實力より外にない……

滿蒙は支那に於て最も劣等な地である……

日本人の缺點は近いことには明るいが遠い事になると非常に暗い……

山西省の石炭埋藏量は三百年位の發掘に堪へ得る、我々は子孫の計もせなければならぬが先づ三百年位で大丈夫である……

と言つた樣にすべて我國民の感興奮起を促したもので、二時間に亘る演說中息をもつかず喉をも濕さず滔々數萬言、其間語調態度毫も亂れず、理路整然たるものであつた。

著者ははじめて師の風貌に接し、雄偉な講演を聽いて師の抱懷の一端を知つたと同時に、嘗て師に隨身した田川義隆氏の談話を回憶せずには居られない。田川氏は光瑞師が嘗て西本願寺の葛藤に責を引いて法主の職を辭されて以來京都木屋町七條上ル處に木炭販賣業を營まれ、余が一條の木炭店も取引をしたが、世にも珍らしい律義淸廉の商人であつた。去五月下旬實兄龍江某氏（現日本興業株式會社重役で嘗ては本願寺內局に勤務し光瑞師の股肱たりし人）の切なるすゝめによつて東京に移住せられた。大正八年五月二十七日、氏は明日立つといひながら急ぎも騷ぎもせず荷造りした諸荷物を店頭に置きそれを打ち見やりつゝ名殘惜みに回顧談を試みた、就中光瑞談に左の如きものがあつた。

〔田川義隆氏光瑞談〕

私（田川）は法主さん（光瑞師）に數年事へていつも御傍を離れなかつたから、法主さんの氣も心もよく了解してゐます。活潑な、氣拔な、磊落な御方であります。暫く位御傍に居つてもどういふ氣心で居られるか容易に解らぬので解らぬ內は難儀をする人があります。それは法主さんが種々の雜題を持ち出して命令通りにせよと言つて、するかせぬか心を試されるのですが私等も初めは隨分無理な事を言つて弱らされた事がありました。寒中に池の中に飛び込んで「あの草を採つて來よ」とか雪の降る夜中にたゝき起して「これから遠方まで使に行け」とか途方もない事を言はれるのですが、はいと言つて直ぐ池に飛び込み、直ぐ出て行つて使命を果すと御氣に入りです。私は二樂莊の建つた時建築係で會計係をもやつて居つたのですが、一旦信用して任せたら少しも干渉せないたちでした。

二樂莊の建築も法主さん御自分が主として設計せられたのでありますが、建築學でも精しいもので、外國から原書を取り寄せてどん〳〵それを讀み、種々研究せられたのです。某工學博士に相談をせられたのでしたが、法主さんは何事もよく了解して居られたのには博士迚も感服して居られたやうでした。政治外交や、貿易や、佛教の事、支那の事、印度の事、何でも御座れで支那や印度の地理に精通して居られることは、非常なもので誰でも舌を捲いて驚きます。南洋方面に出かけても商賣をやる農業をやるといつた風で藥種の研究なんかでも隨分御手に入つたもので、農學者や藥學者などを連れて行つたり、呼びよせて栽植や研究をせられるのですが、如何なる方面でも智識は豐富なものです。あちら（海外）へ御出でに成る時にも私にも行きたければ連れて行つてやらうとおつしやつたですけれども御暇をもらつて實業に就いたのでありますが、如何なる人間でも役に立つ者と見たら、どん〳〵採用すると言つた風ですから、部下には人物が澤山居ります。

法主さん（光瑞師）は何事でも腹藏なく率直に話すと御氣に入りで、私は或る時花柳界の事をありのまゝ私の經驗の通りを御話

した事がありましたが、其樣な事でも面白い！〳〵と言つて傾聽せられました。他の人がよくも法主さんの前で臆面もなく其樣な事を話したと大膽に驚いて居つたですが、私は法主さんが下層の事情は御知りでないと思つて微細な事まで申し上げましたら、「凡夫の快事を聽くことも面白い」もつと話せと言つて聞き取られた事があります。

法主さんは他の者を「凡夫〳〵」と言つて「凡夫はさる事を望むから」といつて何事につけてもよく御氣の付く事もありました私が田川家を繼いだ後には「奥さんが御待ちだから御歸りなさい」と言つて下さる、でも差控へて居ると强ひて歸れとおつしやる、よく人情を御察しに成ることもありましたが、それかと思ふと私の同僚の妻を娶つたばかりの者に對して少しも外泊を許されない、そこで其人は家に歸りたがつて御暇を頂戴と願ひに出ると、「成りません」と言つて御許しにならぬ、一ケ月も二ケ月もお許しにならぬ。だから其人は「君には毎日外泊を御許しに成つて妻を迎へたばかりの僕には御許しがない、法主は不公平だ」と言つてぐう〳〵腹を立てた事もあつたですが、つまりさう言つた調子に人を叩き付け伸ばし付けて心中の俗氣を拔いてやらうといふ御考かと思ひます。

私が六甲の山の下に居つて、法主さんは山の上に居られる時のことでしたが、法主さん自ら電話で「田川は居るか」と言はれる「居ります」といふと「直ぐ上つて來い」と言はれる「いや今晩は用事がありますから上りませぬ」といふと「用事を捨てゝ來い是非話しに來い」と言はれる、私は如何にしても行かぬ。「光瑞の命令ぢや直ぐ出て來い」と何と言はれても行かなかつた事がありましたが、後に私の兄に向つて「田川は君の弟だけあつて一風ある奴だ面白い奴だ」と言つてお褒めに成つたさうですが、私は法主さんの性格なり、氣心なり、手に取る如く存じてゐましたから、少しも窮屈な感じた事も恐ろしく感じた事もありませんでした。

法主さんには隨喜してゐる人達も澤山ありまして、金でも出させやうなら、隨分出資する富豪もありますけれども法主さんは人の力による事を餘りに好まれぬ樣であります。云々

光瑞師は實に當代の豪傑であり國士である。一切經の國譯も師の計畫事業中の一であつたがいよ〳〵光壽會の事業として着手の運びに成つたさうである。痛快なことではないか。（八、一二、三）

〔吳楚山水〕五、天門山　大谷光瑞師の文章（大正九年三月一日作）

天門山は蕪湖の下流にあり、兩山各高さ二百五十尺、江を挾んで立つ、名けて東梁、西梁と云ふ、兩山の間大江溶々として流る、是を遠望するに門の如し、故に名づく、唐李白の詩に、天門中斷楚江開、碧水東流直北廻、兩岸青山相對出、孤帆一片日邊來、此地の勝景は此の二十八字に盡く、此以上なし云ふは蛇足のみ、宋の梅聖俞、この兩山の形を指て曰く、東梁如仰蠶西梁如浮魚と、其狀眞に然り、昔人云ひ得て之を盡せり、今人何の要ありて又墨筆を費さんや。

三、光悅流筆道家　男爵　大倉喜八郎氏

（今の世に光悅が居たら、どんな脫俗な事をやるでせうか。）

鶴翁男爵大倉喜八郎氏は越後國新發田城下の名主、大倉千之助（此人學才あり、時の文士學者等と交際したから山陽の如きは此人の父のために墓碑銘を書いたさうである、山陽遺稿の中に大倉翁墓銘とあるは卽ちそれである）といふ人の次男で富有な家の子であつたが、十七歲で父を喪ひ十八歲の時母を喪ふた。引續いた不幸の悲みが立志の動機となり、一大商人たらんと志し、親族の諫止するにも拘らず、令姉から惠まれた二十兩の金を携へて江戸に出で麻布飯倉町の鰹節店に丁稚奉公をした　我儘氣儘に育つた靑年がにはかに主人の用事で使ひ歩きや、掃除などをせなればならぬといふのであつたが、氏は奮ひ勇んで主家のため忠實に働いたから、終に主人も氏を見込んで「養子として貰ひ受けたい」と相談をしたことがあつたけれども、獨立心の旺盛な氏は之を拒絕した。その家に居ること三年にして、漸く都會に於ける商業の大體を了解し得たので、主家を辭して下谷上野町に小やかな鰹節と乾魚の店を開業することにした。それは安政四年の事であつた。

氏がはじめて乾物屋を營むについては資本を他より借り入れずして奉公時代に稼ぎ貯へた金をのみ恃んだ。商號大倉屋は其名に似ず至極貧弱な干魚屋であつたから立派な品を店頭に列べる事も出來ず、多くは伊豆三宅島から來る干魚を置いたので近所の家は干魚の臭氣で困つたこともあつた。隨つて同商賣の者からは嘲謗嗤笑を受けがちであつたけれども、氏はさることに少しも頓着せず、人の嘲笑を却つて鞭韃の忠言と解釋して「見よ今に大商估たらん！」との大志鬱勃、一心不亂に家業にいそしんで毎日夜の明けぬ內から、日本橋四日市河岸へ品物の仕入に行く。もとより貧生活の身として下男に炊事をさせて朝食し、草鞋を履いて出掛けるといふ有樣であつた。仕入れた品物も其場で捌けるものは直ちに賣り拂ひ、更に買ひ込んで家に運ぶと言つた風に資本を運轉させることが敏活であつたから、自然利益も少なからず、店頭には漸次良き品を列べ得るに至つた。

氏の店の未だ極めて貧弱な時、國元から親戚の者が來てその振はざる體たらくに涙を流し、歸國を勸めた事もあつたが、氏は形ばかりの床の間に掲げた香川景樹の歌の掛物を指して、此歌は吾が志なりと歸國を拒絶した。

わびて世をふるやの軒の縄暖簾
　朽ち果つるまでかゝるべしやは

といふのである。親戚も氏の牢乎たる決心を見て空しく歸國せざるを得なかつた。その後の氏は此和歌を信條として愈々益々奮闘したのである。

一年五穀稔らず諸國飢饉、餓莩途に横はるの惨事あつて人心穩でなく、江戸市中も米價暴騰して窮民日に多くなつたので幕府は救米の倉開きをする。都下の富豪も金穀を出して窮民を賑はせたから、我も〳〵と其惠に與らうと出かけた時、氏は窮米を受くることをいさぎよしとせず、行かうとせなかつたから、並ぶ長屋の者は共同歩調を取ることが出來ないので「郷に入つては郷に從へ」といつて切に氏を勸誘し、又家主が火の付くやうに急ぎ立てゝも氏は「死すとも救米は受けない」との意氣込を表はしたから窮民多數の反感を買ひ、終に制裁をも加へられやうとしたけれども、氏は自若として動かず依然として獨立獨歩の意氣を表はした。此時家主の忠言に救米を受けぬなら、逆に施しを致せといふ、氏は言下に之に應じ店頭にあつた干魚大俵十二俵の内六俵を家主に、殘り六俵を長屋連中に施與することにしてやうやく迫害を免れた。氏はかゝる輩と交るをいさぎよしとせず、こゝに業を轉せむ事を思ひ立つた。時將に天下騒然動もすれば兵亂起らんとの巷説頻々として耳に入るのであつた。機を見るに敏なる氏は、外神田和泉橋通りに砲具店を開く事に成つた。曩に氏が上野町で干魚屋を爲て居た時、長屋地所の持主川越呉服店の主人はひとり氏の平素の行動及轉業を見て密かに未來を祝福して居つたといふことである。

斯くて氏は鐵砲商を始めたものゝ資本に限りのあることゝて、始めの間は極めて貧弱な鐵砲店たるはいふ迄もないが、やがて氏は江戸横濱間を往來して外國商館と特約し其仲繼人となつて賣約をした。依つて需要者から注文があると時を嫌はずすぐ横濱に走つて商品を仕入れたものであつたが當時はまだ一般に野蠻の氣風があつて外人との取引業者は多くの人から嫌惡され憂國狂の愚武士から不覺の迫害を受けるやうなことも有り勝ちなばかりでなく、横濱通ひの鈴ヶ森などは極めて物騒な所で強盗追剝の類毎夜の如く出沒したから、其危險いふばかりなかつたけれども、虎穴に入らずんば虎兒を得ずと氏は命をかけて業を勵んだ。然るに或時氏は彰義隊の兵士のために上野の陣容に捕へられ官軍に鐵砲を調達する廉によつて、果ては身首所を異にしやうとした。

大膽不敵の氏は「商賣を致すに官軍賊軍の差別は付けませぬ、金子を拂ふ方に對しては、何人にも賣渡します、彰義隊の人士中には品物を取つて金拂ひを爲ぬ人がありますから御斷りを致します代金をすぐ御支拂なさるならば直樣御注文に應じませう」。と忌憚なく言ひ切つたから彰義隊の武士も却つて其强情を愛でゝ直ちに鐵砲五百挺を注文して三日以内に上納せよと言つた。其後又續々諸軍勢の用達を承つたが、いつとても横濱にかけ付けて、調て來て約束の期限に後れず用達したので、大に世間の信用を得て家業は益々發展した。

時やうやく王政維新の戰局は東北より北海に瀰蔓し榎本武揚等五稜廓に立て籠つて、物情囂々戰機日に熟した。時に津輕藩の如きは勤王論を主張し、一藩の輿論は沸騰したが、銃器を仕入れる資金に乏しくて窮して居つた。

氏は疾くに此消息を耳にし同藩に貯米の少なからざるを聞知して、米と銃器の交換も亦妙ならむと、資力の許す限り、銃器を買ひ受け、巨船に滿載して青森灣に行き危險の中しば〳〵奇計をめぐらし無事交易を終へて歸るを得た。

其後臺灣征伐に、西南戰爭に孰れも政府から銃器の用達を受け砲煙彈雨の中に奔走し、膽勇と機智とを以て隨時に成功を收め、終に富豪の基礎を築くに至つた。

以上は氏の波瀾重疊の前半生であるが、後半生も亦機智と膽才の事蹟に外ならない。或は銃砲の製造販賣に、或は土木事業に、或は製鐵事業に財力と精力とを傾注して、社界國家のために盡しつゝあるが、尙氏の篤志とすべきは、教育のために又た美術工藝のために力を添へつゝあることである。教育事業としては、東京大阪に商業學校を、朝鮮に善隣商業學校を設けて人材の養成につとめ美工的事業としては美術館を設けて内外の物品を蒐集した。

美術工藝史上の人物に於ては、流石に氏は大規模の人だけあつて特に光悅に心醉傾倒して居られる。大正二年光悅會の創設せらるゝや、氏は之を聞いて大に喜び會の事業を援助せむものと、飯田新七氏に對して光悅會發起人の東上をもとめられたので余が態々行く事となつて、七月二十九日夜から上京した。

東京高島屋飯田藤次郎氏（新七氏の令弟）は中間に立つて余が大倉氏に會ふべき場所及時間等打合せの勞を取られ、三十一日午前八時三十分赤坂葵町の本邸で會見のことに決定した所、やがて又大倉氏が時間と場所を變更せられ、同日午前十一時に銀座の事務所で會はうといふのであつた。依つて余は十一時迄にそれへ行つた。

二階の應接室に通されて待つてゐると「頭取はまだ見えないか……頭取はまだか」と引つ切りなしに詰め寄せて來る大小の紳士は所謂大倉組の人達であらう。やがて喜八郎氏は自動車で驅け着いた。「お待たせを致しました、どうかこちらへ……」と取次の者は第一番に余を誘ふた、導かれて行つたのは頭取室であつたが、室内の時計はすでに十一時を二分過ぎてゐた。見ると向ふの壁には廣さ半坪にも餘る大鏡が輝いてゐる。其下方に大きい椅子、卓子があり、卓子の上には巨大な前置箱が載せられてある。そこが卽ち頭取の椅子で御大將の喜八郎氏が毎日事務を總覽處理せられる場所なのである。

大倉氏は子供に着せるやうな荒い派手な竪横縞の浴衣に角帶を締めて、それを後ろに結んでゐる肩背及臀部の筋肉の豐滿さは、着衣の上から明白に窺ひ得べく、便々たる腹は締められた二重の帶でかゝへられて居る。白足袋を穿てる足には厚さ一寸許りもある雪踏草履をはき、大きな扇子を手にして、余を迎へて同室内應接の卓子に導く、余は坐を與へらるゝまゝに大きな安樂椅子に腰を下せば、忽ち身陷りて半身埋れんばかりであつた。是に於て余は初對面の挨拶を了り令夫人の病氣如何を問ふた。（令夫人病氣の事は新聞紙で承知して居たからである）

氏、莞爾として對談態々遠來の勞を謝し、豫て送附して置いた光悅會の主意書を手にして、其事業につき一々余に問ふ所あり、且貴會から依賴の光悅觀文章も脫稿したからとて余に托された。余は卽ち光悅會事業の經過を語り、計畫遂行に關しては、先立つ物は金なれば、此點につき氏の援助を請ふた所、「緩りお話したいから今夕向島の別莊に來て下さい」と言はれた。此時氏と對談中頭取室の扉度々開き、給仕が來客を報ずること頻りであつた。或一人の紳士の如きは、ことわりもなく闖入し來つて頭取と談じ合つて去るなど、いやはや多忙な事である。

扨て余、當日氏と會ふ迄は談論風發、才氣橫生の老紳士と思つて居たところ、會つて見ると態度言語悉く豫想の外で、肥滿の體軀とて身こなし輕からず大きな口腔の前面に小さい黃金の義齒數個整列し、紫色の唇の動く間に見えつ隱れつし、漏れ出づる音吐は寧ろ低聲で沈着素朴而も慇懃慈愛げな好々爺であつて、一見毫も才幹機智を藏するが如き風貌でない。對談三四十分で退出した。

同日午後六時約を踏んで隅田川の東堤、向島の氏の別莊に往つたら、花を欺く妍艶なる美人の方、出でゝ迎へられ、「主人は先刻からお待ち申して居ります」と。導かれて一茶亭に入る、茶亭の構造全く支那風であつて床と土間とを築き、机、腰掛其他多く紫檀の材を用ひ、裝飾亦全くの支那風である。運ばれた茶をすゝつて亭外の其處此處を眺めてゐると、やがて御大將出で來られ、湯上りの體で矢張り浴衣に角帶をまとひ、黑絽紋附の羽織を着し「待たせたり」とて更に奥へ導かる、余は邸内の宏壯なのに驚いて居ると「この杉戸はもと清洲城に在つたものです」「これは何々……」と指示說明しつゝ本館階下の客室に請せられ、低い大きな方形の紫檀の机を中にして安樂椅子に倚つて相對して閑談した、氏は悠揚迫らざる態度にて余を歡遇せられた其談中に

〔大倉男光悅談〕

光悅は偉い人物だつた、其精神が潔白で規模豪壯であつたから、それがその書畫の筆格に形はれてゐる、其意匠は最も非凡で何う見ても不世出の器であります。當時の武士が皆德川氏を謳歌した時に勤王論を唱へて將軍に對してさへ尊王をすゝめてゐる所などは實に見上げたものであります。私はその事を先刻御渡した册子に述べて置いたから、あの文章を光悅傳中に載せられたい、私も相當の援助を致すからには傳記の編纂には充分の力を注いで欲しい、茶室を造るだのいふことは、どうでもよいと思つて居ます。本阿彌行狀記を讀むと光悅も家康の盛德を褒め立てゝゐるやうである。それは戰國時代の兵亂を平定して宸襟を安んじ奉り、蒼生を安堵させた功績を見て取つてゐるのであります。

余は光悅會のために特に氏の盡力を請ひたるに

光悅の如き偉人を顯彰することは成るべく多くの人に依つて

遂行せられるがよいと思ふから、どうか汎く有志を募られたい益田、馬越兩氏の如きは光悅崇拜の人達ですから、相當に盡すでせう。馬越氏には私から話して置きませう。

といつて寄附金額を豫て本阿彌琳雅氏から送つてあつた寄附帖に揮毫せられた。光悅流の筆蹟で得意氣に筆を揮はれた樣子は、今尙眼前に髣髴としてゐる。やがてあたりに据えられた高卓子に食膳が出で氷に冷えた生ビール、シトロンがどし〳〵と運ばれたので遠慮もなく饗應を受けた。精撰な刺身、ひややつこ其他心盡しの食物は芳味言ふべからざるものがあつた。加ふるに氏自らの接待に前陳の美人の方はあたりにあつて團扇もて絶えず凉を送られし厚意には余は頗る恐縮の體であつた日暮る。

氏卓上のチヂを廻せば卓上葡萄樹の置物の其鈴成れる果實の部分は悉く電燈と化し、明からず、暗からず室內幽明の裡又光悅談に花が咲く。余は氏の事業界に成功したるを賞揚すれば

〔大倉氏曰く〕

私は微力ながら是から先に於ても國家の爲に盡します近來滿洲の本溪湖に於て製鐵事業に從事してゐますが、まだ〳〵初步であります、今の世に光悅が居られたら、どんな脫俗な事をやるでせうか、いや光悅は政治家でもなく、實業家でもなく矢張大藝術家でせうね。

食事了つて氏は余を階上に案內せられた、晝を欺く明晃々の燈下、階段を上りつゝ余は氏の偉大なる體格を賞して

余　先生は今年御幾歲ですか

大倉氏　七十八歲で……

余　御體量は……　……

大倉氏　十七貫六百匁あります

八十歲に近き老翁、齒こそ拔けて黃金の義齒口腔に燦たるも、脊柱些の彎曲なく、顏面聊かの皺波なく頭髮は漆黑にして一線の白髮もない。階上に達す。

氏硝障を開く、墨水は目の下、窓の下城壁の如き石垣に沿ふて夜陰に白く星を浮べて漫々と流れてゐる、對岸は淺草の橋場町、嘗て余の寓屋とした家は、點々たる燈火の裡、指呼の間にそれかと見ゐる。南遙かに吾妻橋を眺むべく、北河流蜿蜒として千住の町もおぼろげに、水光天に接してゐる。橋場の渡し、言問ひの渡しを、この岸に船渡りした時や、牛の御前神社の境內を倘徉した時、魏々乎として城かと見しは此處なりしかとしばし回想をほしいまゝにした。

階上一體の敷石は伊太利產の大理石、それが諸種の色で模樣が出來てゐるから、丁度緞通を敷きつめた樣である。正面には西向に床が設けられてゐて其床の上に尾形光琳の描いた富士山の扁額が揭げられてある、それは見るからに雄大崇高の感を起さしめる底のものであつた。向つて左方違ひ棚の上の引違ひも光琳の描いた菊花で右方には破笠の作青貝を箔入した蒔繪の衝立が備へ付けられてあつた。幾十脚の大きな安樂椅子は孰れも唐錦張である。一々氏の說明を聞いて道がに豪壯な事を感じた。

階下に於て更に茶菓を饗せられ、且光悅作書畫卷物を拜見に及び、尙明日午前十時を期し葵町の氏の本邸內にある美術館參觀のため推參することを約して九時頃暇を告げて立ち歸つた。氏は玄關先まで見送られ既に心盡しの人力車迄用意してあつたから、厚意に任せ、臨時左右に開かれたる大門を打乘りて本鄕の旅館に歸つた。忘れもせぬが其人力車は最新式タイヤの俥で其頃まだ京都市中に於ては見る事が出來なかつたので、車上假睡しつゝも京都市が東京市に比して何事も後れ勝である事に想到しつゝ今日圖らずも氏の優遇歡待を受けたのは光悅翁の靈の紹介によることゝ思つて聊か欣懷を禁じ得なかつた。翌八月一日午前十時赤坂葵町の氏の本邸を訪ふた。同邸の入口はちやうど城郭の入口のやうに壯大なもので巨大な石が左右に門を成してゐる門を入り公園の如き廣庭を道に沿ふて行くと、玄關前の車寄せに着いた。氏はすでに向島より歸つて邸內にあり、同家執事田邊浩氏と共に應接間に今を迎へられたが其應接室は總て白大理石の建築[illegible]

それから田邊氏の案內に依つて美術館を縱覽したが巨資を投じて蒐集經營されたもので是亦氏の生涯中の大事業の一たるを失はない。陳列物の中には少々眞贋の明かならざるものもあるやの噂を耳にするが、兎に角數に於て、價格に於て容易ならざるものである。支那古瓦（明治四十四年一月天津の方若といふ人から讓り受けられたもので、方若氏祖父より三代に亘つて集めたものだといふ事である、革命亂に際し兵火を虞れて氏に讓渡した

ものである)、及佛像(約一千體、支那內地、西藏日本、暹羅、印度等から蒐集されたもので多くは北淸事變後の購入にかゝるといふ。)など特筆すべきものであらう。本邸と共に其建築の巍々乎として壯大なことは驚くばかりで、境域といひ設備といひ、豪華を極めたものである。余は覺えず規模の大造に舌を卷くと

田邊氏

何しろ主人は光悅に眼か着けてゐるのですから……

大倉氏は多年我が實業界に盡し國家的事業を經營せられた功少からぬ廉に因つて大正四年十二月一日男爵を授けられた。氏は天恩の渥きに感激せられてか、彼の美術館を敷地共に寄附行爲を以て提供せられ今は財團法人大倉集古館と稱して無料にて公開縱覽せしめてゐる。

男は大正四年秋御卽位式に參列のため、入洛して滯在中、石黑男爵等と共に光悅寺に來遊以來は滿洲本溪湖等に行かれる度毎に、京都に一泊して飄然光悅寺に立ち寄られ、光悅の墓を展せられるのが例となつてゐる。

男本年八十有三歲身體極めて强健で、東京滿洲の往復もいつも獨旅であるのには、其平民的なのと元氣の旺盛なのに感じ入る次第である。尙又男は其身頗る多忙なるにも拘らず、明治三十四年(六十五歲)以來光悅の筆蹟につき習字の研鑽を積まれ其結果は近來めつきり上達せられた。光悅寺太虛庵茶室の扁額及光悅寺庫裡に揭げられたるはし鷹の峯に住ひて此大人は

逸物數多世に殘しけり

といふ自作狂歌の扁額と共に男爵自ら揮毫製額して寄進せられたものである。男は狂歌の趣味も深く毎日の如く詠まれて、今や夥しい數に上つてゐるといふことである。年老ひて而かも繁忙の身でありながら小閑を利して習字をする、歌を作るといつた風に綽々たる餘裕を有せられるのみならず努力向上を念とせられ、終始實行せられる點は靑年輩に取つて好龜鑑たるを失はない。(八、四、二五)

一三、書家　小野鵞堂氏

鵞堂小野鋼之助氏は東京市神田區猿樂町に住し學習院敎授として、同女學部書道科を擔任して居られる。尙自宅に於て淑女に對し筆道の敎授をもせられつゝあるが、それのみならず、門弟子中村春堂、佐藤梅園等の能書家と共に斯華會を設立して、書道の通信敎授をもせられつゝあつて會員は日本各地は申すに及ばず、海外諸方の日本人の居留地にも散在して我國有數の書道敎授の機關となつてゐる。余も先年東京に滯在中斯華會の實習部及先生の邸に於て平假名文字書方の指導を受けたが、小供の時分から先生の令名を聞いて居つた事とて先生は白髮の老翁なりと思つて居たら餘りに若々しくて初對面に於て驚きの目を見張つた。軟體文字は先生獨特の妙技、色紙短冊などに揮灑された和歌は確かに一派の美術である。

門下の高足春堂氏の人格は、先生に肖て溫良玉の如く、梅園氏は才子肌で交際に長じ、當時韓國統監府在勤の法學士工藤文哉氏は潑溂たる才氣を藏し、丹羽歸雲氏は驚くべき事務の才を有し、すべて役者が揃つて居たにも拘らず、先生も頗る交際が廣いので斯華會の大會などは、いつも盛んに行はるゝやうであつた。明治四十四年四月三日上野公園常磐花壇で開催された大會には、余も出席して親しく其盛況を見たが、池邊義象氏など來賓として來會し席上揮毫を臨時に先生から依賴されて先生等と共に盛んに和歌の揮毫などして錦上花を添へた。

先生の令室は小がらな氣のさつくりとした賢婦人であつた。無論大會にも出かけて、甲斐〳〵しく手傳つたり、世話を燒いたりせられた。何しろ多くの弟子が貴婦人や淑女であるから、御夫人內助の尋常ならざるものあるを認めずには居られなかつた。(八、五、三)

一四、卍山會創設者　小田垣瑞麟師

曹洞宗に其人ありと知られたる小田垣瑞麟師は但馬瑞峰寺住職の勸をおのが弟子に讓り腦病治療を名として數年前來鷹峰讃州寺に閑棲悠居、讀書三昧に入つてゐる。師は稀代の潔癖家の事としてさしも荒廢に歸してゐた讃州寺境內は師の來寺以來殘る隈なく掃除の行き屆くばかりでなく、雨漏り軒傾ける堂宇もいつしか修覆されて面目を一新した。

抑もこの讃州寺は臨濟宗紫野大德寺玉林院の支配に屬し地域はもと普明庵と號して玉林院の第四

世仙溪和尚の創めた寺で古來幽邃の地であるから林羅山、陳元贅(明人)は共に普明庵十景詩を作り深草元政の如きも、しば〳〵來遊して其境致を喜び普明庵記を草することさへあつた。もと京都市讃州寺町にあつて昔讃州侯細川頼春の歸依深かつた地藏尊を境内に迎へ、いつしか舊名を廢して讃州寺と呼ぶことゝなつたが、陳元贅自筆の木額は今尚ほ同寺に保存せられて、考古家の齊しく見捨つるに忍びないものとなつて居る。

〔林羅山普明庵十景詩並序〕○羅山の自筆大德寺玉林院にありと。

龍寶山、沙門宗春、字仙溪、擇二勝于洛北千足村畔一、乃誅二茅茨一、號曰二普明一、四山迸二其菴一、誠是幽處花木深也、登二山腹一而望レ之則、鳳城巍在レ南、鷹峰峙二于西一、鴨河流二於東一、而台嶠隔二一片雲一、誠是人境不レ審也、獨不レ見二其北一、古人謂、背爲レ北豈無レ意哉。易稱艮二其背一、艮止也、又曰艮爲二山東北之卦一也、今不レ見レ北、是不レ見二其背一也、其不レ見、猶レ見レ之也、夫山靜而不レ動者也、止二于山一而不レ見レ山、其所レ止有レ背、凡人之有レ欲皆在二面前一、故止二于背一、是止二于無欲一也、止而能定、所二以存一其心一也、故曰動亦定、靜亦定、其理一也、先儒謂、一部華嚴不レ過レ消二艮一卦一、以爲二何如一、若夫於二教外一、何待二我言一哉、所レ謂不レ識二廬山眞面目一者非レ謂レ不レ識也、仙溪、頃日出レ山來二于江戸一、价レ人謂二余題一其十境一、不レ克二峻拒一、遂賦レ之如レ左、

獅子岩　在二山半腹一、形如二獅猊一、昔在二床中一、花自平、今來二窟外一、蘚猶生

佗山醜虎裂二頭腦一、　踞地金毛吼一聲
夕陽樓　在翠微
夢裏蓬萊十二樓、　松花老去夕陽收、
覺來信美宜二登覽一、　獨倚二行藏一不レ倚レ愁、
再來松　圓屋前在也
聞二得銀濤金石音一、　霜枝露葉久森々、
何須老非栽摩レ頂、　青二了黃梅山下陰一
寂音堂　皇禪處
文字禪堂憶二惠洪一、　雉青羊脾耳根通、
透二過不二法門一去、　淵默雷聲一哄中、
石　門　兩岩互峙其高數丈
我心不レ轉物推移、　卓立堅牢開闔時、
一宿若今逢二子路一、　石門何問主人誰
蒼龍池　在石門上
瀲灩雖レ晴雲氣多、　料知神物此來過
黃昏分映歲星影、　水底驪珠同一波、
守愚亭　僧察
世智辯聰皆掠虛、　昔誰卜得冉溪居、
雲梯巧不若二蒼帶一、　到レ此一夫能勝レ予、
楞嚴臺　讀誦處
健相三昧既高深、　長水流通獅々林、
笑殺昭王費二新築一、　金剛藏寶因レ於レ金、
殘月橋　在寺門
雨後紅霓橫臥レ濤、　牧童樵子往還遭、
溪邊三笑是何意、　猛虎一聲山月高、
巳丑季秋日　夕顏巷叟

〔明人陳元贅普明庵十景詩並叙〕

間嘗披二霧乘一知二震旦國中一有二三大道場一、峨嵋偏空、五臺曼殊、普陀洛迦則妙莊大士靈修之法窟也、海嶠孤絕蓮宇未レ搆、名勝罕レ聞、當二朱梁一、貞明二年一、日本禪僧惠鍔、渡海首剏二觀音院一於梅峯之陰一而禮レ之、後世遂以嗣二奉顧蹟一、無窮矣、然普陀之表、歐越之天台峰二其左一、武林之天目列二其右一、南則羅浮、峭巖門二於前一、北則北固、金焦屏二於後一、四週襟帶者遠也、普陀之裏有二盤陀石、紫竹林、水月岩、圓通殿、龍章閣、濱法堂、大士橋、十丈塔、潮音洞、蓮華洋十景一、盤爵者吳也、茲者日域龍寶山老禪伯、諱宗春、別號仙溪、於二其國洛北千足村一、剏二一菴一、於二群聖中一、尤聳二一觀音像一而事レ之、扁曰二普明一、嗚呼春公豈無意而漫云哉、說者謂、取レ釋迦佛、者閑窟授二記五百阿羅漢一、號曰二普朋一之意一也、余曰不レ然、蓋以二普陀山名與二梁貞明年號一、各取二上下一字一、合而爲二菴名一者爾、何也普明菴之表差有二天台一、右有二鷲峰一、鷹峰、蒲澗一、北有二峻嶂一、驪列翠嶂森羅、南則神京擁護、佳氣蔥蔥、一普陀之四週也、普明菴之裏、則有二獅子巖一、夕陽樓、再來松、浮梅溪、寂音堂、石門、蒼龍池、守愚亭、楞嚴臺、殘月橋一、一普陀之十景也、春公於二花朝月夕諜誦之餘一、杖レ錫行唫、徜徉自適、攬二風致之幽奇一、破二拈毫之岑寂一、則景中人也、脩然物表不レ染二一塵一、睨二丘壑一以舒レ懷、坐二莓苔一而留憩、則人中仙也、此不二具論一、獨自二梁貞明一迄レ今歷二數百年一、而春公與二惠鍔一、歸二依大士一、同レ好者一、授二記蒭一、則普明菴之名豈偶然而謾云哉、乃其情景之相肖、自不レ容二默々已一也、緣屬レ余詠而記レ之、余心二契春公之高致一、不レ揣二謭陋一、謹讚二十景一、以表二章普明庵之髣髴一、錄二之於左一、便後之好事者謂、震旦國外有二一大道場一、在二日東洛北千足村中一、而傳二惠鍔之燈一、以奉二妙莊大士一者、乃有二春公其人一、以補二僧史輿圖之不一及一、爲二一段佳話一焉爾、

獅子岩　四言八

以レ岩貌レ獅、獅卽是岩、　以レ獅貌レ岩、獅卽是獅、
非レ二非レ一、孰得而知、　試問二文殊一、是岩是獅、

夕陽樓　五言律

煙花檻外低、百尺步二天梯一、眺レ遠縈山小、
憑レ高萬木齊、呼レ雲封二谷口一、送レ影匿二林腋一、
每切廻光照、超然思不レ迷、

再來松　六言律

始短降虬漸レ地、漸高攫鶴參レ禪、栽時一壺摩レ頂、歸時丈六齊レ肩、清二廻風鬢雜唄一、白二看雲蓋兜綿一、森掛似レ非二佛貌一、傳背類レ迂二師旋一、

浮梅溪　七言律

廣長舌溜碧玻瓈、不レ受二紅塵一半滴黏、
眼界影浮空相現、息觀香指濁流迷、
疎篁點レ雪凡心淨、老幹凌レ霜古佛齊、
照レ水一枝橫二彼岸一、似*將二仙派一接二曹溪一、

寂音堂　四五言雜

毘耶杜レ口、閒然堂室、門不レ通レ風、六聰虛寂、
身心兩忘、世界齊攜、萬慮都捐、諸緣頓息、
試問二老比丘一、閉レ關而說法、是對二凡夫一言、
是對二羅漢一默、咄霜冷夜二栖鳥一、春機啼二百舌一、

石　門　七言六句

玉宵高築化人居、臂二石岩一開建二楔闕一、月殿星房通二帝闕一、琳宮絳闕逼二天際一、西有二金仙一來下界一、寶扉雙啓度二蓮輿一、

蒼龍池　七言五句絕

降二伏蹤跡一憶二祖師一、　幻將二窮鉢一化二天池一、
慈雲遍覆三千界、　驅法能分法雨施、
滯淵不レ似二濁泥鳴一、
守愚亭　警語
照レ鑑之鏡以レ奩而韜レ光、使レ無二以韜一之則必有二蒙蔽之累一矣、吹
毛之劍以レ匣而斂レ鋒、使レ無二以斂一之則必有二挫折之患一矣、宋
寶二燕石一、不レ如二荊璞一、自謂二牟尼一、人言二魚目一、細參二世諦一、勿
同衒二玉
楞嚴臺　四言十句
何謂二楞嚴一、　究竟堅固、　何謂二堅固一、　金經二百鍊一、
完好如レ故、　楞嚴何臺、　高明無碍、　何謂二無碍一、
月落二萬川一、　圓通各在、
殘月橋　七言二絶
桂輪漸沒影生レ涼、　不二是天河落二曉霜一、
玉兎西巢過レ橋去、　眉間放出白毫光、
又
菴外溪梁非二蟠蜷一、　如何月色隔二西東一、
山林亦是波旬障、　障去覺消喧卽空、
承應關逢敢詳識玄猷湛瀟月居維困敎日
大明、武林既白山人陳元贇沐手拜撰並書

因みに右兩家の文中に明記せらるゝ、普明庵開山仙溪和尙の略傳として、目下小田垣師の手元にあるものは左の通りである。

〔普明庵開祖仙溪和尙略傳〕

○安政二年乙卯十一月出版大德寺系譜ニヨレバ

（百八十九世）仙溪諱宗春龍獄劉（百六十四）ニ嗣グ濃州ノ人承應三年甲午二月五日奉敕入寺玉林四世兼住祥雲武州麻布天眞寺下野那須郡東江寺美濃可兒郡吉祥寺京北普明庵（今ノ讃州寺）ヲ創ス寛文二壬寅九月東海輪番貞享元年甲子十一月廿五日武州如是庵ニ於テ示寂世壽八十普明庵ニ塔ス貞享二年乙丑十一月十一日（靈元帝）敕諡靈輝惠明禪師貞享二乙丑十一月廿五日祖堂ニ入牌

大仙門下
大光派

○明治十九年正當於國師五百五十年遠ク據舊本增補ノ正灯世譜ニ依レバ

大德（百八十九世）仙溪宗春承應三年甲午二月五日奉敕入寺玉林四世兼住祥雲創天眞寺于武州淺布東江寺于下野那須吉祥寺于美濃可兒郡普明庵于京北今之讃州寺是也貞享元年甲子十一月廿五日示寂世壽八十敕諡靈輝惠明禪師

○推定百五十年前ノ大德略記ト中ス寫本ニ依レバ

玉林院二世
祥雲寺三世　仙溪春和尙

師名宗春號二仙溪一濃州大垣之產也父齋藤氏母野村氏幼隨父寓二居洛陽一投二于紫野玉林院月岑印和尙席下一爲侍童而剃度也
岑師唱滅之後下二武江一陪二侍龍岳劉和尙席於興雲院後固玉林看院
吉首座歸寂再入玉林單丁住院慶安戊子年受請遷江武祥雲寺承應甲午仲春初五日出世開堂于大德寛文元年辛丑夏拜二受天眞封地一寛文二壬寅春命二法姪知祥雲之輪職自退居天眞寛文二壬寅稱祝篆于東海寛文三年癸卯秋下野州烏山某守創妙高山東江寺請師入寺三日而退二歸天眞于時濃州可兒郡某邑主創圓通山吉祥寺請師爲開祖延寶八年庚申季春辭天眞退居金澤聚石庵同年季冬歸休于如是庵居十年而示寂于時貞享元年甲子十一月廿五日新立徽號賜靈輝惠明禪師

興雲院後改祥雲寺如是庵在天眞寺中

○天眞寺住職豐吉東山師談（大正七年六月）

「烏山某ノ守」トアルハ今ノ堀子侍ノ祖先ナリ、「金澤聚石庵」トアルハ武州ノ金澤ニシテ聚石庵ハ明治初年天眞寺（東京麻布區本村町）ニ合併ス、如是庵ハ仙溪和尙ヨリ百五十年以後ハ廢セラタルモノヽ如シ、仙溪和尙ハ如是庵ニ示寂シ火葬シテ普明庵ニ送リテ同寺ニ葬リタルモノナルベシ普明庵ニ同和尙ノ墓アリ天眞寺ノモト如是庵ニハ代々住職ノ墓アルモ獨リ開山（仙溪和尙）ノ墓ノミコレ無シ　（以上小田垣師所有文書）

鷹峰讃州寺由來記によると、もと京都市にあつた讃州寺の地藏尊を鷹峰の千束に移されたのは「慶安の頃」とある。林羅山が普明庵十景詩を作つたのが慶安二年己丑の歲で、陳元贇の普明庵十景詩の成つたのは承應年中である。羅山が板倉侯と共に鷹峰大虛庵に光悅を訪うて後、鷹峰記を作り稿成つたのが寛永七年羅山の四十八歲の時であるが同じく羅山が普明庵十景詩を作つたのは、それから十九年の後六十七歲の時であつた。寛永十四年光悅が太虛庵で亡くなつた時には、仙溪宗春はまだ三十三歲の若年であつたから、普明庵の創立はそれ以後として寛永十八年に仙溪三十七歲、正保元年に四十歲、慶安二年（羅山の普明庵詩成稿の時）に四十五歲である。是に依て考へると仙溪が普明庵を創めたのは、其大德寺玉林院に入たつ（承應三年、五十歲）よりもずつと前の寛永の末か正保年間で仙溪宗春の四十歲前後の時と見るが適當である。卽ち普明庵は仙溪宗春の四十歲前後の創立にかゝり四十五六歲の時（茲にしばらく讃州寺由來記の慶安の頃引移りたるに信を措く）讃州寺の地藏尊を京都より迎へたのであつて、それより承應年間を經て、明曆年間に至つて草山元政が普明庵記を草してゐるから、讃州寺地藏尊が境內に移されたよりもずつと後に於て讃州寺と改呼することゝなつたのである。因みに讃州寺には細川頼春の古風な位牌があつて

表に

光勝院殿前讃州大守寶洲祐繁大禪定門

裏に

觀應三年壬辰閏二月二十日卒行年五十四歲細川讃岐守侍所源頼春朝臣

の文字が刻まれてゐる。此位牌は地藏尊が京都から鷹峰に移された時、同時に普明庵に持つて來たものであらう。又同寺の由來記には其地藏尊を弘法大師の作としてゐるし、一二の學者は鎌倉時代の作と言つてゐる。

〔鷹峰讃州寺由來記〕○同寺に版木あり　文字は御家流の書體

都の北たかゞみれ鷲足山讃州禪寺藏珠院本尊延命ちそう大ほさつ、不動明王、多聞天の三ぞんはむかし大内裏乃比おゝじやうしゆごのために詔を奉じて弘法大師の造り玉ひて都の四方に一たいつゝあんちし給ひし尊像也抑ちそう尊の誓願はかりなき中にもことにあんさんを守りたまふゆへに其頃は女御更衣の御妊身にはかならず御はらおびを奉りしとそされは今も貴きいやしきをゐらはす乞人々にはあたふるに母子ともにあんたいなること世にしる所なり仍てはらおびのちさうそんと申奉りけり誓の皆領そ川さゐき乃守頼春朝臣いくさに立玉ふときこの地藏そんに立願し玉ひしに速にうちかちたまいしかは信心日比にまして堂舍をおこそかに立そへたまひて寺領をよせて開運ちさうそんとありめさせたまふより讃岐守成之あそんもふかく信心し玉ひ堂をさいこんして西洞院一條にうづしたまひにけれは其地を今にさんしう寺てうさいへりその後竹屋かしへうつせし故竹や地藏そんともめりかく代々諸人願をこめしに其しるしありしことあけてかぞへがたしよりて豐太閤及東照神君に以後先々のことく御朱印をたまわり境内山林除地にて諸役ゆるさせたまひしもまつたく地藏尊乃れいけんあらたなる故なりかゝれ口いぢうを市町にあんちせんこと恐ありとて慶安の比所司代板倉にもふしていまの千束村（もと葛野郡千束村なりしが今は鷹峰字千束町）にうつし奉りしなり穴畏穴恐

こゝに獨り留守居の小田垣師は、言ふまでもなく侍者とては無いから、師が病氣して臥褥すると境内には忽ち樹の葉が散り布く。連日雨も降らざるに落葉の境内に狼藉たるの時は必ず寺の竈には煙が揚らない。一日爲さゞれば一日食はずとは師の常に言ふ所であるが、又「獨居ほど氣樂なものはない」と自適してゐるのも現在鷹峰に於ては道がに唯だ師のみである。

師は卍派の鏘々たる人として袖手安閑唯書冊の蠹公を驅逐するをのみ能事としてゐるの徒ではない鷹峰源光庵開祖卍山道白を追慕のあまり多年廢絶したる卍山忌の復興を期するため卍山會を組織した。是はまだ一昨年以來の計畫で余も之に參畫し師と共に源光庵住職を動かして會を發起したが、會の創設事務萬端大小となく我が事のやうにして世話燒き廻つた第一の篤志家は師なのである。師の盡力宜しきを得た結果卍山會は天下の名士名僧の贊加を得左の主意書を發表したのである。

卍山會主意書

洛北鷹峰曹洞宗源光庵は元祿年間曹洞宗統の紊亂を憂ひ挺身復古の大業を達成し靈元法皇の勅命をさへ蒙りて道譽一世に高かりし復古道人卍山道白禪師の創建し遷化せられたる靈蹟にして寺内には復古堂あり墳墓あり曹洞宗護法之碑あり卍山廣錄版藏あり宗統復古に關する貴重なる古文書及禪師の墨蹟遺物も今尙ほ多く儼存せり今茲に禪師の高風を思慕するもの胥謀つて卍山會を組織し卍山禪師遺編の保存調査編纂等の事業を遂行し兼ねて源光庵を江湖に紹介せんとす同志の士贊助あらむことを乞ふ

大正七年六月　　卍山會

發起人

石川素童　五十川春芳　原田祖岳　泰惠昭
西野宏峰　西尾關仲　西村喜一郎　丘宗潭
冲津元機　大内青巒　大森禪戒　大森知言
丘球學　小田垣瑞麟　若生國榮　梶川乾堂
上林眞學　上村觀光　神阪雪佳　神尾賢宗
吉田寬隨　高田道見　高島莫能　多々良覺道
玉田文學博士仁齋　土橋嘉兵衛　霖玉仙　文學博士内藤湖南
村上專精　上田大法　上田祥山　碓井小三郎
來馬文學博士琢道　山田孝道　山田大啓　增田露嚴
松本文三郎　松野知次郎　孤峰智璨　秋野孝道
新井石禪　足立宗法　佐藤鐵額　佐々木珍龍
佐藤文學博士三浦周行　大忍　阪野貞祐　岸澤惟安　岩本宗國
新村文學博士出　森口惠徹　森田清之助　鈴木雄峰
源光庵住職　鷹峰透關　同庵法類總代　原山道仙
同末寺總代　峰仙巖
同庵檀徒及世話方　石東仁三郎　岸本龜之助　中田安次郎
迫田德太郎　若松彌三郎　小林友次郎
森田茂祐　尾川泰藏　瀧野房吉
石東市右衛門

卍山會事業

一、卍山文書の調査及編纂（調査編纂の上は一本を源光庵に保存し一本を京都帝國大學文科大學に保存を請ふこと）
二、卍山禪師事蹟の編纂（編纂の上は刊行して汎く有志者に頒つ）
三、卍山禪師遺蹟の表彰
四、卍山禪師遺物及源光庵寶物の展觀
五、復古堂の修理
六、毎年九月十九日卍山忌の復興
以上

大正七年九月二十七日復興第一回卍山忌、及卍山會發會式を源光庵に於て兼ね行つた。九月十九日が忌日であるけれども、石川素童師の都合で當年のみ二十七日に繰り下げたのであつた。會同する者卍山派の耆宿及有志者で式の順序は左の通りであつた。

一、開會の辭（小田垣師）
二、發會の祝詞（光悅寺住職鵜ヶ潮圓師　鼎通寺住職若生國榮師）
三、出斑燒香
四、疏（石川素童師（代讀））
五、香語（石川素童師）
六、祭詞（文學博士三浦周行氏の條參看）
七、說教（石川素童師）

當日門前の松野邸を借り受けて卍山禪師遺物及源

光庵寶物の展觀をしたが、參詣者に酒飯の供養をなし卍山小傳を頒つて午後七時萬事終了したが、師は連日の事務に鞅掌し且前日徹夜で當日捧誦の「疏」を淨寫したることゝて餘程疲勞の體であつた。

一昨日師を訪ふたら非常に喜んで左の新話を余に語つた。

〔小田垣瑞鱗師新話〕

僕の義兄井上仁鳳が少なからざる財産を遺して死んだ。遺産を公共事業に投じたいといふ遺言で、余に前後策を託したから曹洞宗の僧堂を起さうと思つて、此間も東京に行き日置禪師、丘禪師等に會つて來たが、いよ〳〵現曹洞宗大學長丘宗潭師を羅致して京都か奈良に一佛寺を建てることに決定した。しかし現今は法律上で新寺の建立を許可しないから、永平寺塔頭の一寺を移轉する事に決した。今明兩年之れが建築と準備にかゝり、明後年から曹洞宗大學卒業生中の俊才を收容し給費して丘師と余とで訓練しやうと思つてゐる。丘師は大本山貫首の候補者に擬せられてゐるばかりでなく、現に大學を背負つて立つてゐるから師を根引するのが容易の業ではないが、余とすでに確約が出來たから、これから丘師の進退に關しては余が責任を帶びて表面の衝に當ることゝなつて多端の身と成つたが、今十年生きてゐないと曹洞宗が潰れる。丘禪師が今六十歳で余が四十八歳であるが、丘禪師は知つて余の健康を氣遣つて居られるが、なに行けるだらう。

思ふに普明庵（讃州寺）開祖仙溪宗春は八十歳まで永らへて貞享元年に武藏の天眞寺で歿してゐる。墓は讃州寺にある蓋し鷹峰の境致を愛し遺言した結果であらう。先きに光悅も太虛庵に於て八十歳で逝き、後に卍山も亦八十歳で歿してゐる。鷹峰に關係深き賢哲のいづれもが、八十の長壽を保ち得たるは目出たいことである。是に於て余は陰に小田垣師の未來をも祝福せんとするものである。予又曩きに三浦文學博士の日蓮宗京都十六本山史料調査に同行し、其內部の荒廢せるに、聊か驚きの目を見張つたが、其後又卍山會に於て曹洞宗の人々と相交はつて、同宗の陵夷亦日蓮宗のそれと相距ること遠からざる所以の當然を知りて、他の諸宗亦いづれも同じ秋の夕暮ならむと、我國佛敎の近き將來を賴み少なく思はんとして居つた時に於て、小田垣師の這般の計畫は大に時務を知るの擧と言はねばならぬ。予は刮目して師の施設經營を見やうと思ふ。（八、八、三〇）

一五、文學博士 大槻文彥氏

「言海」の著者

光悅に親炙した灰屋紹益の著書「賬草」には光悅の事蹟及太虛庵の風致などが記載されてゐるべく佐村八郎氏の編纂した國書解題に出て居つたから余は先年東京に滯在中「賬草」の搜索につとめたが誰に問ふても分らない。

「言海」を編述せられた大槻文彥博士を、下谷區根岸御行の松西住居に訪うたのは、明治四十四年の春であつたが、同邸の頗る立派なる建築及邸內黃金の光、輝かんばかりに見えたのは、大著「言海」によつて書肆より輸送する印稅の如何に多額なるかに想倒せざるを得なかつた。

まことに「言海」ほど多く世に行はれる辭書は無からう。讀書家は言ふに及ばず、學校、學生其他俗人の家にさへ大抵一部は備へ付けられてゐる。千載不朽の著述である。

博士年六十餘、白頭長身、神經過敏ならざる好老士で、古代の人はかくやと思ふばかり也。應接振りは極めて素朴摯實であつた。「賬草」は博士も初聞の如く灰屋紹益（佐野重孝）をさへ知られなかつた。其後同博士の紹介で黑川眞道氏を下谷區小島町に訪うたけれども黑川氏も亦知る所なきやうであつた。やがて鷹峰に歸りし後も引つゞき「賬草」の搜索をして居つた所が富岡鐵齋翁は同書の寫本を、岡本橘仙氏は同書の版本を所持せらるゝことを聞いたから、寫本版本共に兩氏から借用して終に目的を達し得た（八、九、二五）

一六、風流亭主 岡本橘仙氏

（光悅はどんな風貌の人だつたらうかね）

岡本氏名は檜吉、橘仙と號す、京都三條小橋西入旅館萬屋の主人であるが、それに似合はぬ高潔の士で諸事に涉りて風流の嗜深く、學才あり、詩藻あり、茶趣あり美術の鑑賞眼もある。光悅をもよく了解して居られる。大正三年十二月十二日光悅會から依賴して置いた光悅觀文章を屆け旁、西行庵主宮田小文氏と共に光悅寺に來て、庫裡で茶を立てゝ光悅が風流の昔を偲ばれたが、其時氏は「光悅はどんな風貌の人だつたらうね」と追慕の情に堪えず、共に世にあらざりしを憾ま

んばかりの面持であつたので、平生氏の腦裡に描かれつゝある光悅の人格、風采を窺ふことが出來た。卽ち氏は光悅の藝術を見て其圓滿無礙豪壯磊落怜悧明敏の人格に憧憬措く能はないのである。ある年の夏避暑旅行を止めて光悅遺墨前後赤壁賦の卷物を買得するの費に充てられたことさへある。

名妓吉野の遺筆なども所藏せられる、吉野會のためには發起人として献策少くなかつたのは吉野の了解者であるからでもある。吉野會には無かるべからざる士たるは一般の定說であつた如く、氏は頗る的の粹人で光悅寺茶會のある每に、影の形に副ふが如くに同伴する人は西行庵主と一人の女姓とである。氏はいづこへも三人同行でさうである。余ははじめ同行の女人を氏の夫人かと思つてゐたら、さうでなくて文學藝者の名ある磯田多佳姉であつた。西行庵主宮田小文氏は痘顏白髯奇峭磊落の人で放談高笑尙且滑稽を交へて傍らに並み居る者をして壯快に堪えざらしめらる。多佳姉は橘仙氏の風采の美なるに若かないけれども、さすがに氏と趣好を同じふする女性だけあつて何となく奧床しくて上品である。

春光熙々として櫻花漸く蕾を破り若くは秋水漲り到りて船去ること遲からむとする郊外水邊に、貴公子然たる氏右に圓頂白髯十德すがたの西行庵主を、左に粉香芳しげなる多佳女を帶同して逍遙散策する所眞に一幅の畫圖たらざるを得ない。

余は光悅吉野兩會の用事で數回氏を訪ふたが、氏は離れのさゝやかなる一間に閑居讀書と言つた風で室內に揭げらるゝ青貝文字箱入の黑檀やうの木額は、氏の支那的趣味を語り、座右に置かるゝ古雅な陶製火鉢は日本的趣味を語つてゐる。應接の態度は穩和圓滑にして而も淡泊對人をして好感情を起さしめる。けれども氏は宿泊の顧客に對しては已むを得ざる場合の外、絕て面會せないさうである。しかし萬屋旅館は年始賀狀の多數發送者として京都市屈指の家である。これ氏が旅館の亭主として成功の一端を知るべき一事であらう。

（八、一、八）

〔岡本氏書簡〕

拜呈昨日は突如推參幸に拜芝を得望外之至奉存候種々拜見殊に御指導により光悅町の地理を明にする事を得年來の願を啓き候段御厚情萬々御禮奉申上候（中略）尙々拙稿中光悅と松花堂とを比較したる處「松花堂の筆なる禪的隱遯的趣味の畫は決して光悅のそれと比較すべきものでない」と有之候關點之文字を「光悅のそれと同日に談じ得らるべきものでない」と御改め置き被下度奉願候

一七、畸人　奧平清規氏

（光悅さんは豪傑でつせ）

弦月奧平清規氏は多年京都府第一中學校や同女子師範學校の漢文科敎員をして居られた人であるが、所謂敵れたる縕袍を着て狐貉を着たるものと立つて耻ぢざる人である。垢衣蓬頭稠人環睹の中にあつて毫も憶せないばかりでなく、人の嗤笑を受けはしないかと氣遣ふ念など露ほども起さない。頗る無頓着な質であるが、寡慾恬淡、それで居て人の喜びを喜びとし、人の憂ひを憂ひとする極めて同情の厚い人である。それだから、多年病身の妻女をいたはつて、薪水の勞は先生自ら之を取り、兩男兒を愛撫して敎育を怠られなかつた。先年學校の勤務を辭し、引つゞき妻女を喪ひ、悲痛遣る瀨なかりしも、長子の工科大學を卒業せらるゝに及んで家道安泰に復した。氏、性甚だ酒を嗜む、昨冬遂に逝去せられた、年六十を出づる事五六、生前余は時々光悅寺に同行して、氏の醇々たる談話を聞いたことがある。誠心誠意親切比類ない。

〔弦月氏光悅談〕

どうも光悅さんは、鷹峰に蟠つて居て、いざといふ時には、一門の者を引つれ、勤王の旗を押し樹てゝ、鷹峰からどつと出やうといふ精神であつたに違ひないでつせ。そーら光悅さんは豪傑でつせ。それに又こゝ（胸を搏して）がきれいであつた。光悅寺にある雪佳はんの畫かれた光悅さんの畫像の面相は溫柔に過ぎまつせ。

氏を招いて酒をすゝめると、喜ばるゝこと限りない。餅を贈ると詩を賦して謝せられる。同道の時手荷物を援ける。氏又感謝して詩を賦す。行住坐臥立ちどころに詩は成つた。氏の嗜む所のものは夫唯詩と酒ならむ。（九、一、二三）

一八、元眞言宗隨心院門跡　和田智滿師

京都では東寺と仁和寺と神光院とに祭れる弘法大師を三弘法と稱へてゐる。其中の神光院は洛北西賀茂にあつて、有名な和田智滿師の常住せられた寺である。

智滿師は嘗て永く眞言宗隨心院の門跡をも勤められたことある學德兼備、戒律嚴守、慈相圓滿の

高僧である、其慈悲は蚊蚤に及び、蚊が師の肌を螫すことある時は、息を吹いて遁れしめ、蚤を捕へられる時は窓外に放たれるのが例であつた。書道に達成せられて、殊に梵字が上手であつたといふ。

其圓轉滑脱なる筆蹟は、余はそれを見る毎に、見惚れざるを得ないので、人の座敷に昇つて床間や欄干に、掲げられた、師の軸物及扁額を見る毎に其圓滿無礙の人格に想到せざるを得ないのである。

余の恩師大崎頼榮先生は、明治二十七八年頃から神光院に往つて智滿師に親炙して其德容に接し又師について書道を研鑽せられた。余も亦幼より筆道にいさゝか趣味を有つてゐたので小學の業を卒へた後、智滿師に手本が書いて貰ひたく成り、大崎先生に就いてそれを懇望した。大崎氏も平生多くの人から揮毫の周旋を頼まれるので、頗る困却の體であつたが、特に余の懇望を容れて師に頼んで呉れられ、終に王右軍の蘭亭記は、奉書の折手本に揮灑された。依つて日を期して先生に連れられて、神光院へ御禮に行つた。

智滿師の室に近づくと先生は隣の間から、平身低頭、恭敬を極められたので、余も其態度を眞似て禮を言つた。智滿師は前に炬燵をかゝへながら親しげに話された。今想ひ出しても其時の師の音吐が、正しく德者の音色であつたが、師は齒ぬけのためか言ひにくげに聞えた。前日母が京都で買つて來た百合根を禮物として持參したが、それを先生から執事さんに渡されたら、白木の三寶に盛つて師の前に運ばれた。余は默然として師と先生の對話を聽いてゐたが、やがて歸る時、又遊びに來よと言はれた。それは明治三十年三月二十六日であつた。余が師に見えたのは唯それ一回であつたが、爾來余はその蘭亭記を愛翫して今尚珍藏してゐる。時々出して習ふ毎に、文章の善い上に、師の麗筆に接して、言ひ知れぬ快感を覺えると同時に、不覺に師に會つた時を回顧してその高風を偲ぶのである。

師は大德寺自在庵の高見祖孝師と友とし善かつた、高人はおのづから相知り相容すものと見える。智滿師明治四十三年十二月二十一日七十六歳で示寂せられた。西賀茂の西田作次郎、吉田菊次郎の兩氏は神光院の近傍の人で、智滿師に親炙する機會甚だ多かつた事とて少なからず師の敎化を受けられたが、吉田氏が余の問に應じて語られた智滿師の臨終談は左の通りである。

和上さんのお亡くなりになつたのは明治四十三年十二月二十一日でありました。和上さんは平生わしは二十一日に亡くなるといつて居られました。和上さんの御父さんも十一日におなくなりなさつたさうで、ちようど弘法さんの日に當るのですが、どうも不思議なことで矢張おつしやつた通り二十一日でした。御病氣は腎臟炎でありましたが何しろ、あゝいふ善い御方の事でしたから、平生と少しも變らず立派な御往生でしたが二十一日になつて、もう今日は死ぬとおつしやつたから、皆御側に付いてゐました。西田さんも私も御側を離れなかつたのでしたが二十一日の夕方に成るのに、まだ別條ないので、どうか知らんと思つてゐましたら、和上さんは「皆さんお待ち兼れだが今暫く遊ばせて下さい」と言つて、あたりの者を笑はせてすや〳〵と眠られる。時間はだん〳〵經つ、八時は過ぎた、九時も過ぎた、どうかと思つてゐたら、矢張おつしやつた通り其日の午後十時過ぎにお亡くなりになりました。云々。(八、八、一九)

一九、日蓮宗大本山 妙顯寺貫主 河合日辰氏

(日允上人(光悅の孫)の如き高僧を本阿彌家から出したのは同家の一大名譽である)

日蓮宗大本山京都妙顯寺貫首河合日辰師は二六時中讀經三昧の生活に十數年一日の如く毎朝未明に寢所を離れ本堂に渡りて唯一人屹爾として法華經八卷を(二回)唱誦することを日課として倦むことが無い。冬期晝間の短かい時は夜九時頃迄も時を要することがある。其熱心にして絶て易らざる不退轉の行業は衆人の感嘆する所であつて、たまに來客のために遮ぎられて讀經を果すことが出來ないことがあると、さも不愉快げな態度が現れるのである。或人は師の讀經三昧を以て一種の祈禱となし、信念の置き所を疑うて「貫首は祈禱的讀經によつて兎も角安心を得て居られるが一たび大事に遭遇することがあつたらどうであらう。從容として其中に遊戯三昧を得るであらうか」など言つてゐる人もある。批評眼を以て側面から見れば聖賢といへども批難は免れないであらう、兎に角師が粗衣麁食で如上の通りに讀經三昧に終始せらるゝは凡物の企て及ぶ所でないといふことも亦一の定評となつてゐる。

師が本山の事務について殆んど不關焉であるのも師自ら執事の方にまかせて居られるのでもなく末寺の僧侶たちが師に關與させないといふ風評のあるにも拘らず、大本山の貫首として永く其地位に安住して居られるばかりでなく今回日蓮宗の總

管長に推擧せられた所を見ると、どこかに偉い點があるに相違ない。師は又近來村雲日淨尼公御敎育の任をも拜せられた。

師は大の藏書家で、かの龍華文庫に藏せらてある書物は師の蒐集所藏に屬する物で一切經さへ三四部もある。師は氣分のよくない時には文庫に入つて書を閲すると心氣忽ち爽快になると言つてゐられる。年七十に垂んとして頗る無邪氣な愛くるしい師は、人が面謁せんとして刺を通じるといつも暫く待たされる。それは本堂に於ける讀經がよい句切りの所に來ないからで、やがて師は居間にもどり袈裟をかけ珠數を手にしたまゝ大きな座蒲團に安座して墻壁城府を撤し莞爾として客を引見せられる。

〔河合師〕

讀經を妨害するものは罪に落ちるから、其罪を少なからしめるために、良い句切迄待たせるのである。

といつた風の辯解をせられたこともある。談話中意外の所で血相變へて怒られる時もあつて、怒る時も喜ばれる時も直ぐに色にあらはれる。師は喜びを隱すこともなく、怒りを忍ぶこともない、隱さうと思つても匿せないのであり、忍ばうと思つても忍ぶことが出來ないのである。たまに喜色を包まうとせられると、層一層師の無邪氣さが偲ばれる。

日蓮上人自筆の經卷なりとか夏の熱きにも冬の寒きにも四六時中首に懸けて離されないのは素より氏に於ける虎の子であるからでもあるが、それこそ信仰的行爲である。

〔河合日辰光悅談〕

慶安年中に妙覺寺の貫頂となり、明暦年間に本法寺の住持となり、寛文年中に中山法華經寺の貫頂に成られた本通院日允上人は光悅の孫であるが學德兼備の知識であつた。其弟子に勝光院日耀上人といふ方があつたが、此の上人も智德の勝れた高僧であつて、當(妙顯寺)の第十八世である。日耀上人の弟子には了義院日逵上人が出て居られる、日逵上人は本國寺の中興で、同寺の二十六世であつた。山陰雜錄鷹峰群譚は日逵上人の著書中最も有名のものである。日蓮宗では以上の允師、耀師、逵師の三師を略稱して「允耀逵」と言つてゐる。「允耀逵」の法系は日蓮宗内に重きを成しゝぬて、法緣講に三師の本尊を揭げて讀經法談するのが例である。現本法寺の貫首伊藤日脩師も又愚僧も共に「允耀逵」の法系の者であるから三師を崇拜すること深い。かくの如く弟子法孫に耀師、逵師の如き高僧を出して、其法系が今に盛んであるのは、日允上人の偉かつた結果である。かく允師の如き高僧を本阿彌家から出したのは同家の一大名譽である。

(八、九、二一)

二〇、圖案界の泰斗　神阪雪佳氏

(古來我國の美術家中光悅の如き偉人傑士は無い)

神阪吉隆氏雪佳と號す、光悅光琳派の畫家であつて我が圖案界の泰斗である。島華水氏の紹介で氏を京都新町椹木町の邸に訪ふたのは、大正二年七月下旬であつたが、無論初交で、それまで著者は氏の名を聞いた事さへなかつたのである。

古來我國美術家中、光悅の如き偉人傑士は無い。余(雪佳)は光悅崇拜の一人であつて、豫てから光悅のためには表彰の道を講じ光悅寺の保存に力を寄せたい念慮を持してゐる。光悅の木像を模刻して光悅寺に安置するといふことは至極結構な事であります。僅か百圓内外で出來ることならば是非實行なさい。それ位の資金は私等の仲間からでも寄附が出來ませう。

と語られたので木像模刻費の調達について彷徨してゐた余は大に安心して、谷本博士や島華水氏が提言してくれられた事などを話して御卽位式に來京する人士の名所舊跡探訪の望に應ずべく、光悅寺に簡易な設備をすることなど相談をした所、快く同意して雨森菊太郎氏に話され雨森氏の賛成を得て遂に光悅會成立の運びとなつた。

爾來雪佳氏は光悅會事業の遂行については大小關知せざるはなく村の方からも、寺の方からも何事も氏に相談をする。余が雪佳氏を訪うた事、又氏が光悅寺に來られたことは幾回なるを知らぬ。

氏を訪ふと直ちに出で來て應接せられる、圖案や繪畫の應需のために、忙しい時でも、宅に在る限り朝夕晝夜の別なく面接せられる。嘸忙がしからう、早く歸らうと思ふと、氏は又何くれとなく話題を出して、ゆつくりと話される、應接中、繪畫や圖案の希望者から揮毫の催促に來ることあるは毎度のことであつても氏は「早く歸つてくれがせ」の言語や素振りを見せられたことがない。ある時又左の光悅談をせられた。

私は光悅の傳記をしらべたことはないが、其作品を見て常人でないと思つてゐる、文字でも繪畫でも燒物でも、光悅の書かれたもの、作られたものを取り出して、どこが上手であるかと問はれると、一寸説明が出來ぬが、何となく淡泊で大きく、氣高くて俗臭のない所は何とも言葉で言ひ表はせぬ。言ふに言はれぬといふ妙味があつて味へば味ふほど味が出る良く書かうとも旨く拵へやうとも何とも思はずに出來たものだから、とぼけた間の抜けた樣な所があるが、仔細に見ると思ひ付きが凡でなく光悅一流の氣分があらはれて、批難が出來ない。

氏は青年時、岸光景氏について圖案や意匠を學

んだが、今は東京の島田佳矣氏と共に圖案家意匠家として盛名の嘖々たるものがあり、農商務省の圖案展覽會などには毎度審査員を仰付られるのである。

又京都の圖案家、漆工家、金工家、陶工家等の氏の指導を受けつゝある人が少くない。雪佳の「佳」と京都の「都」と美術の「美」と各一字宛を取つて佳都美(かつみ)會なるものを組織し、總べて二十餘人皆同じく氏の指導を仰いで各自その技能を研き、藝術界に名を成しつゝある。佳都美會は毎年京都大阪で作品展覽會を催し近年は東京に於ても開かれ、會名も佳都美村と改稱して會員を村人といひ氏を年寄といひなすことゝなつた。村人中陶工家の宮永東山、清水六兵衛兩氏の如きは見るからに高き人格の所有者らしい。

雪佳氏は又先年來久邇中將宮邦彦王殿下の台命に依つて、歴史上由緒ある粟田青蓮院叢華殿(叢華殿は故久邇宮朝彦親王が青蓮院宮たりし時、維新の志士月照、南洲、雲濱、小林民部、浮田一惠等を御招きに成つて、國事を御畫策に成つたといふ處であつて、中頃御苑内賀陽宮邸に移されたが、明治四十四年賀陽宮が大佛へ御引越しの際、叢華殿をもとの青蓮院に下賜せられ、復歸建築工事成り大正八年五月十二日、竣工式を擧行せられたのである)の襖畫全部八十餘枚を揮毫して寄附せられた。

又　皇后陛下京都行啓御滯在の節本年五月十九日美術奬勵のために京都市繪畫專門學校及同美術工藝學校に御成りになつた際、氏は美工の奏任教諭たる廉を以て、竹内栖鳳、山元春擧、都路華香菊池契月、木島櫻谷の諸氏と共に六人御前揮毫を承るの名譽を得られた。

氏今年たしか五十五歳である。青年時から專ら藝術の研鑽を事として、あまり讀書はせられないらしい、けれども人格高くして頗る常識に富んで居られる。

氏の畫室には故子爵品川彌次郎氏が氏のために書いた「染織筆耕」の四字の扁額が掲げられてゐる。雪佳氏が青年の頃岸翁に師事するに至つたのは、品川子爵の紹介に依つたと、これは先年氏が雨森蝶夢氏の依頼に依つて屏風に竹を揮毫せられる時、予の家の竹藪へ竹と筍の寫生に來られた際に拙宅の奥座敷に於ける氏の談話中の一であつた。(八、八、一八)

二、帝國歌學史及び茶道史の著者　神谷保朖氏

(光悦は桃山期藝術の大團圓をなした人である。)

茶道の家元、千家今日庵の月刊雜誌「今日庵月報」に、連載せられた、氏の茶道史中に、「光悦は桃山期藝術の、大團圓をなした人である、といふ記事をはじめて、他に翁の藝術について、發表せられた話說も、數回見た。夫等によると、よく光悦を了解した人である。

最近「露の下草」第七卷八月號(大正八年八月發刊)に掲載された「光悦翁の蒔繪にほどこされたる蓮華の繪について」といへる話說に、京都勸修寺所藏の、大日經々筥(源平時代のもの)の蓮華蒔繪同所大雲院所藏、黑地蓮瓣の散華蒔繪經筥(同時代のもの)についての研究は、光悦翁のそれに對する新說であつた。

余は、氏の鄕國を、千家に問ふて、美濃國本巢郡席田村の人たることを知つて、光悦會から、光悦觀文章の寄贈をもとめた。又大正三年の春、東京からの歸途、氏を席田に訪ふて、光悦の「歌入水指」や「秋の夜」の銘ある、一重竹花生(故小杉榲邨博士が、鑑定書を認められたるもの)を一覽して以來懇意になつた。

氏の茶道は、堂に上り、室に入つたもので、千家師範役の上座であるのも當然である。光悦會の茶會毎に、美濃國から態々來遊せられるのを見ても、斯道に執せられる程度も、察し得られる。然し氏の茶道は、餘事の風流で本領は皇學にある。詠歌に堪能で、清盟せる「露の舍同人」の、指導誘掖の任に當つて居られる。露の舍とは、氏の家號である。現に京都、岐阜、大垣、名古屋、其他數ケ所に、支部が置かれて、頗る盛況である。「露の下草」は、その機關雜誌で、毎月同人の詠草や、氏の歌論や、藝術論が掲載されて發行せられるのである。氏今年不惑を過ぐること幾ばくならず、少壯氣鋭、實に當代稀に見る風流士であり、學者であり、人格者である。文學博士佐々木信綱氏の日本歌學史にさきだつて、帝國歌學史の發刊(明治四十二年十一月)せられたのも、その努力の致すところであつた。氏をして帝都にあらしめば、必ずや汎く名を知られ、世を益すること多からんに邊土にあるのは、惜むべきである。けれども氏自

身としては、現世の榮譽利達は、其希求するところではないらしい。

左記詠草は、露の舍、大正八年十一月の兼題で氏の門下の詠まれたものである。（八、一二、二七）

○露の舍十一月兼題（次第不同）

本阿彌光悅

白浪もこゝすなりけん鷹か峰　三河　水谷　成知
よはもつるきのひかりさやけき
なもたかき君か手わさのいろ〳〵を　美濃　道家　慶延
しらぬ人こそ世になかりけれ
のこしおくこか年のまき繪筆のあと　同　林　慈圓
そのすゑものもたからなりけり
たかゞみれいほの松風今もなほ　同　高森　蟬枝
そのよかたりのこゑやたつらん
鷹か峰そのよしのひておとなへは　同　德永　麗
それかとかたるまつ風のおと
たかゞみれたかきその名のひゝきては　同　川井　甚平
九重までもはてはきこゝて
洛北にその名もたかきたかゝみれ　同　鈴木　古香
きみは技術の鬼才なりけり
かきすてし反古なかめても筆のあと　同　中島　白露
君かすさひや神の通へる
本阿彌の遺物たふとしひとたひは　同　村田　民臣
參りてもみん光悅の寺
たくみわざすくれし君か手すさひの
その品々はよのたからなる
よせてかへしし　白なみも　美濃　水谷　慶子
君か心に　おくれけむ
あとなくなりて　たかゝみれ　同　金森　峰子
たかき名ばかり　のこりけり
たかゝみれたかきその名は世の人の　同　牧野　靜子
今も言葉にきゝぬその人
其わさは國のたからとめてらるゝ　周防　吉田八十瀨
鶴のいさをたくひあらしな
今の世にいよゝかゝやく黃金にて　美濃　木野村靜子
まきし蒔繪のひかりたふとき
きみをしもしたひあつまる鷹かみれ　同　矢代　岸子
高き心はいまもかゝやく
つるきたちさやにそみたるこの君の　同　森　勳
力になりしそのたくみわさ
白浪の昔たちたるたかゝ峰　同　神谷　萩枝
しつまりし世に君か名ひかる
世にのこる蒔繪うつしゑなみならぬ　同　橋本たか子
心は筆のあとになかれて
たすさひになりしまき繪のしな〳〵の　同　鈴木　茂之
國の寶と寺にのこれる
たかゝみれみやひのあとを松風の　同　加納　新子
おとにもきゝて人おとつるゝ
まき繪にも文字にもいたくすくれたる　撰要支部幹事　道家　芳枝
その名そ高きたかゝみれかな
かくはしきほまれ名高きたかゝ峰
かたなのめきゝ君一人そと　美濃　磯邊　偲
美術史の頁彩る光悅の
蒔繪のたくみ水くきのあと　山城　佐田　隆英
近きよの三筆の名に君はいきて
名にたかゝみれ高くも住みき　志摩　潮見　高良
よる〳〵のおそれもいつかしらなみの
越ねすなりぬる名にたかゝみれ　露の舍主人
みつからの心にいきし手すさひを
時代のものに君はよせたる　同

松ふく風に今日もにほへる
たか、みれたかゝる君かたすさひの
人のしなりとあふかるゝかな　美濃　大口　旭洞
鷹か峰たかきほまれを殘しつる
ふてのちからをみるそうれしき　同　松原たれ子
大宮の北のまもりとたかゝみれ
たかきみやひの名さへそへつゝ　同　河村　爲子
たか、みれたかくきこゆる物皆の
君のたくみは千代にくちせし　同　林　宗圓
たへみわさ名もたかゝみれ世をてらす
月影をしも人あふくなり　同　村中　瑞芳
すゑものにまきゑのたくみふてのあと
その名もやかて鷹か峰かな　同　井深　醇
たすさひになりし蒔繪のしな〳〵の
國の寶と寺にのこれる　同　今村　深雪
いかにしてまきやしにけんたか蒔繪
たかき心のいろにいつるも　同　長屋　無名
蒔繪すれは蒔繪はひかり筆とれは
筆に力あり光悅のきみ　同　今村　庄六
母に仕へ孝の名をたて寺をたて、
まこと心にあそひにし君　同　風雲　子
まつしまのそれより懇ひし鷹か峰
みしや都のあさ夕の空　同　盧鵬　峰
つるきたちときしほまれのさや〳〵に　京都　白川　清子
名はきこゝけりたかゝみれより
光悅の名に本阿彌の家をしりぬ　同　篠原　路子

三、文學博士 法學博士　加藤弘之氏

余が最初の東京出遊は學校休職期間を有効に經過せんと期したるに基く、當時東京に身上について援助を受くべき知人なきにも拘らず家に對して金錢の送附を受けずと高言したる身は學校の勤務以外に於ける相當なる職を求めざるべからざることゝて入京當時は日々就職の奔走に浮身をやつし新聞紙の人事紹介欄はいつも第一着に閲讀したるものなりき。ある日の紙上「書生を求む」と題し加藤弘之博士の名を掲載しありければ、これぞ誠に恰好の寄寓と、明治四十二年十一月十六日夜博士を麹町區上二番町の邸に訪へり、折節博士病氣な

りとて面會を得ざれば途中一書を認め余が出京の目的と希望を概記して郵函に投じ京橋の寄宿に歸りたりしが、翌日博士より左の如き書面到着したり。

御申越の事は十分には了解致しかね候得共、老生は從來夜分は面謁は總て辭し居候間右御承知被下度候

十一月十七日午前七時前　　加藤弘之

とあり、是に於て十七日午後一時より市内散歩旁博士を訪へり先づ日本橋通りの津村順天堂、丸善株式會社等の建築及、白木屋呉服店樓上、三越呉服店階上階下の商品陳列及商況を見、三井銀行、三井鑛山部、同物産會社、横濱正金銀行東京支店日本銀行、東京火災、海上運送株式會社等を見、呉服橋を渡り、中央停車場建設豫定敷地、電話本局、特許局、會計檢査院、陸軍各兵營、英國大使館、金子子爵邸、東郷大將邸等を見、三時半加藤博士邸に到着す、前夜同邸を訪ひし時は夜中の事とて邸内外の樣子少しも分明せざりしが、當日行きて先づ門柱に「男爵加藤弘之」の六字が麗々しく陶製の白札に記されたるにいさゝか不快の感をなしたりしが、門を入りて西洋風木造の家屋一面に赭色ペンキの塗抹せられて日尚淺く、而も比較的古建築なるを強ひて新しく見せ付けたるやに感せられ、重ねて不快の感を湧起したりき。門衛あり一人の老爺疊敷室内の爐邊にあり、刺を出せば内に入りて余の來るを通じぬ。屋内に案内を受くる迄は余は其爐邊にありしが、爐中の火極めて貧弱にして、さながら螢光を集めたるが如し。あまり不快に感じたれば、先生平生の樣子を尋ねたりしに、門衛の言辭甚だ穩かならず、不平のあらん限りを陳べ盡せり。余は夙に加藤弘之先生の學者としての名聲を聞き、少年時より寫眞によりて其枯高の風采を見、學德を想望して「博士」なる語の耳に入る毎に加藤弘之先生を聯想したりし程なるに其日目のあたり家人の忿怒を聞き頗る意外の感ありき。良久して書生來り余を誘ひければ兎も角も導かれて應接室に入る。書生は赤裸の足寒げにストーブに點火しぬ。博士未だ來らず。忽ち見る博士の油繪肖像の壁間に掲げあるを、余の不快いよ〳〵增すばかりなるに博士夫人の油繪肖像も亦其室内にあるを見るに至つて驚きの目を見はりしに、更に又余の眼に映じ來るは博士が學士院會長を辭されたる時の、學士院よりの感謝狀が表裝して同じく壁間に飾り付けられたるものなりき。何たる事ぞや。

博士は實利主義者なり、唯物論者たることは、余夙に之を知れりといへども、そもかくの如からむとは思ひ半ばだにも過ぎざりき。余は早や一日も博士の家に住居することを欲せざるなり。博士來られけるも談話はおのづから主題を外れたり。

博士は極めて平凡の老人なり、血氣衰へたる風姿なり、「もう年とつてだめだ」と言はれたるは眞率なる發表なるものゝ如かりき。博士頷杖して語る、縞の着物縞の羽織甚だ質素にして余の凡眼は終に博士の偉なる點を見出す能はざりしなり。

余後におもふ、余は多くの人を訪へり而して初對面に於て少しも偉を感せず平々凡々田舍老爺と異なるなきは唯博士と乃木大將となり。是に於て又更に偉人にして偉人たることを感せしめざる、これ卽ち偉人の偉人たる所なるかとも思ひ廻らすことあり。勳功を挾まず學識を挾まず、地位名望を挾まず、空々如として人に接す、これ至人ならずんば能はざる所なればなり。されど乃木大將に對する印象は質素以て愉快を感じ、弘之博士に對する印象は修飾以て不快を感じたるを以て異なれりとす。

思ふに余の以て不快を感じたるはこれ博士の抱懷せらるゝ主義より出でたるものならんのみ。聞く博士平生赤穗四十七士を以て亂臣賊子となし衆人の前に公論して憚る所なかりしと。果して眞ならば孟子の所謂「自ら反して直からば千萬人といへども吾往かむ矣」の意氣ありし人といはざるべからず。げに博士は終生少しも主義を枉げず、主義に忠實にして、よく主義を實行し得たり。博士も亦偉なるかな。（七、一二、一二）

二三、維新志士贈正五位　刈谷無隱居士

京都相國寺維摩會（禪學修養會）と刈谷無隱居士とは關係甚だ密接なるものがあつた。余少年の頃相國寺の專門道場に於て維摩會のことを尋ねたら玉龍庵に鈴木さんが居られるから、鈴木さんに御尋ねなさいと言はれたので同寺（相國寺塔頭）へ行つた。無隱居士其時分は鈴木の姓を立てゝ居られたのである。居士自ら玄關に出で、余を火鉢の側に迎へ、來客があつたにも拘らず、親切に談話せられた。長身長顏にして豐頰、白髯垂下すること一尺、性質磊落高邁極めて取り付きのよい人で、

慈相以て曰く「何故に禪を修したいのか」と。余の答も極めて幼稚であつたから相當指導的に話された。「楠公が湊川に出陣する時に兩頭共に切斷し一劍天によつて寒しの語を楚俊禪師に得て悟道徹底したが、それが解るには楠公の境涯まで漕ぎ付けねばならぬぞ」といはれたことを記憶してゐる居士は「維摩の提唱が聽きたければ、隨意に來るがよい」と言はれたけれども、余は一度も聞きに行かず、居士の宅へ度々遊びに行つて談話を聞いた。行く毎に長座をしたけれども、居士は少しも面倒がらず、親切に話されたのみならず、居士の家族の方も快く居士にあはせてくれた。居士が風氣で就褥して居られても、其側に通されて談話を聽いた。居士は「おれの宅に來る時には何か問題を持つて來い、基礎なくして話のしやうがない」と言はれたけれども、いつも問題を携へずに出かけると、居士は時事問題やら偉人傑士の逸話などを談じて余を鍛練してくれた。それだから、居士の宅の近所に行くと必ず立ち寄る、「ハハハ、、、又來たか」とて笑はれたが、一度も留守を使つたり、玄關拂ひをせられることが無かつた。小さくいへば人を敎育する念大きくいへば衆生濟度の念熾烈なるため、人を愛せられたのだらうと思つてゐた。居士が京都市寺町今出川上ル西側の家に居られた時の事である、居士を訪ねると、表の客間には吉田松陰先生の畫像が掲げてあつた。居士は「これは僕の理想的の偉人である」と言はれてちやうど其時日露戰爭當時七十七士の旅順閉塞の壯擧が行はれた後であつたので、「これは決して單に閉塞の目的のみではないぞ、我國民の思想上に對して、一大覺醒を促す意味を持つて居るのである」といつて閉塞の快擧を非常に喜んで居られた。其時は寒い日であつたが居士は閑暇の日であつたと見へ、居士が少年の頃東京に遊學した時の事を話された。

〔無隱居士の談〕

居士が十七八才の頃であつた、憂國の精神おさへ難く功名の志制し難く、江戸に出やうと決心したが、母が病氣で重體であつたから、躊躇逡巡して居つたら、母がそれを看破して居士を枕頭に呼びよせ、母は「捨て、置け、志を遂げたいならば一日も早く江戸に出よ、愚圖〳〵して居るな」と言つて居士を激勵した其時は卽志と人情との衝突で忠ならむと欲すれば孝ならず孝ならむと欲すれば忠ならずで、進退谷まつたのだが、遂に居士は意を決し、涙を揮ひ、母を見捨てゝ、家を出で國事に奔走したが其後良心に何の咎めも受けなかつたけれども、先頃來それを思ひ出して良心の苛責にあひ、煩悶懊惱して身體を損じたが漸く此頃悟りが出來て安心するに至つた、それは餘命を社會國家のために盡さむとする決心によつて、散悶したのである。誰しも年少氣鋭の時は大志と人情の衝突があり勝ちであるから、輕重をよく考へて、身を處置すべきである。

といはれた。まさか居士が六十に餘る年齡で、まして世間を斜視して居る身で、若年のことを思ひ出して俄かに煩悶した譯でも無からうが、いつもかういつた風の談話を聞かせられて、參考になつた事が多い。そして居士は余を薄志弱行の徒と見られたか、「君は謹直に過ぎる、もつとはげしい人物にならねばならぬ、大鹽中齋の洗心洞劄記を讀め」といつて紙片に書名を書いてくれられたので、購つて讀んだ、そして又其日居士は「これから相國寺に行くから同道しやう」といつて坐を立たれたので一所に門を出て戍辰の役戰死者の墓前を過ぎ相國寺に往つた。別れる時、居士は傍若無人の體で放尿せられた。放尿しつゝ洒々談笑、是亦余を訓育せんためだと思はざるを得なかつた。

余は明治四十二三年の頃東京に放浪して四十四年春歸鷹し居士を訪うたら、持病の肺患終に居士を立たざるに至らしめて無き數の人であつた。居士は今、相國寺歷代管長の塋域内に永へに眠つて居られるが、本年秋、聖上陛下行幸の砌、居士は足利町の出身維新の志士であつた廉によつて正五位追贈の聖恩に浴した。居士に「松窓餘籟」といふ遺文がある、左に掲ぐる者は卽ち其斷篇である。

（七、一二、一三）

松窓餘籟

刈谷無隱居士述

此編は平生居士に親近せる學生等が、居士の談話を筆記したるものにして、固より系統もなく順序もなし、唯居士が睡餘に茶を啜り浴後に涼を納るゝ閑暇無聊の時、機に觸れ境に臨みて、六十餘年の經歷と、目睹耳聞したる事の談話の筆記のみ居士維新の前國步艱難の間に處し、當時の政府に追捕せられ、萬死の途に出入し、維新の後に至ては、或は高閣輕裘、車を官府に驅り、或は羽織、前掛、身を市廛に寄す、僧と爲ては南無伽羅の經し、神官と爲ては、掛卷も畏こしと唱ふ、蓬鬢短褐、一貧洗ふ如く、寒竈烟を揚げざる時もあれば、長袖綾帶銀燭珠簾の下に豪遊連夜、酣醉淋漓たる事もあり、時に時事を痛論して、悲憤慷慨燕趙志士の慨あれば、時に禪林に默坐して、枯木寒灰、天竺古佛の趣もあり六十餘年の閱歷は、波瀾橫生一起一伏一順一逆、忽ちにして孤峰頂上に卓立し、忽ちにして十字街頭に彷徨す、故にこの談話筆記も亦自ら錯雜萬狀にして、或は泥醉者の嘔吐物の如く、或は金殿玉樓の佳肴盛饌に似たる所あり、讀者宜しく冗を去り要を摘み、以て敎育に資するあらば、豈特り筆記者の幸のみならんや、題し

て松窓餘鎖といふは、居士の寓に一株の老松あり、蒼髯勁節勢ひ天に參ぜんとす、居士の近什に、庭園誰道小於盆、百尺老松栽在門、不識何時化龍去、呼來雲雨灑乾坤の詩あるを以てなり、讀者幸に諒せよ、筆記者識

東文西詩と東劍西鎗

といふ詞が、居士の書生時代にあつた、全國の青年が同く文武の修行をするのに、先づ江戸を中央として、西南の者は詩作と鎗術とに熱し易く、東北の者は文章と劍術とを能し易き傾向があつたが、是れはなかしい現象で、西南の者は文藝では短き詩作の方、武道では長き鎗術の方、東北の者は文藝では長き文章の方、武道では短き劍術の方を能くし易く、東西で文武の術は長短反比例の趣があつた、どういふ譯であらうか、劍術は氣を以て短刀直入で勝を制し、文章は氣が全篇の骨子である爲めか詩作と鎗術とは氣ばかりでは出來ない、詩は短かい裡に緻密の構思を要し、鎗は長い丈に機敏の技を要する爲めか、何にせよ全國の青年に東西で、大體如上の差はあつた樣に思はれる、して見ると東西一般の人の氣象も此通りかと思はれる、然し各部で細別したならば、西南でも九州の薩肥と二豐と、四國でも土佐は別の樣だ、東北では關東と奥羽とは差がある、交通機關稍や完備に近き今日、物質的現象は頗る近接しても、精神的現象は容易に近接はしない、依然雰囲として前日の趣が、幾分か存して居る樣だ

幕末の學生

の種類を大別すれば、漢學と武藝との塾生が多數を占め、之れに次では蘭學の塾生で、英學はまだ極の小數であつた、先づ蘭學生の噺からして見樣、蘭學は醫者の專門であつたから、其先生は皆醫業をして居たが、其塾生には醫者になる者と、又西洋の事情に通じ、何か天下に、一仕事を仕樣とする者との、二た通りあつた、蘭學を修行するとて、其塾に教場があるのではなく受持教師があるのでもなく、教授時間があるのでなし、其模樣は

勝海舟の通學

でも分る、勝が麟太郎といふて、坪井誠軒の塾に通學して居つたが、如何にも根氣が良い、雨でも雪でも休む日はない、先づ塾に來ると塾中を見廻し、誰れ彼れの別はない、勉强せずに烟草でも吸つて居る人があると、直に其前に參り、どうか教へて下さいと坐り込み、自分の思込んだ丈覺ゑぬ中は去らぬ、教へる者は疲れてたまらない、あくびをしたり、いやな顏をしたりしても、頓と知らぬ樣子で去る景色もない、教へる者は愈よ疲れ、今日はこれで御免といふと、溢々と其座を去り、又外の人の樣子を眺め少し暇らしき人の席に至り、前の樣に坐り込んで去らず、日々此通りだから、塾生もいやがり、遂にはモー麟太郎の來る時刻だ、鬼の來ぬ間の洗濯と、逝げて入浴に出る者もあり、散歩に出る者もあり、居士の亡父も時々勝の相手をして、隨分困た事もあるさうだが、一體勉强はあの通りにしなければならぬと、居士を青年時代に戒めた事を今でも思ひ出す

蘭書の文典

は二冊であつたが、先生は醫者で忙しいから教へる際はない入塾しても矢張り勝が修業するのと同樣で、先輩の人から文典の手ほどきをして貰ひ、夫れから先は字書と首引きで押通すのだ、愚圖々々して居れば、文典二冊で三年も四年も掛る、極勉强すれば二年か二年半で濟む、文典二冊でも非常に骨の折れた時代だから、此の二冊丈が讀めると、蘭學書生として幅のきいたのだ、居士が八九歲の時、江戸で蘭學の三書生といはれたのは、大鳥圭介八木元悅、中野橘郎の三人であつた、八木は薩州の人で、順聖公が、漢學では重野孝之亟(安繹)蘭學では八木を特撰して江戸に出したもので、航海金針といふ著書があつたが、惜い事には早く死んで仕舞た其頃の

字書は譯鍵

といふ標題で極厚い二冊の物がある丈で、間もなく長崎の桂川某が字書を出版したが、活字はない無論木版で本箱いつぱいになる程の大部だから、容易に買へない、そこで勉强家は寫して居る、寫すとて西洋紙はない、厚皮紙や美濃紙へドーサをして寫すペンがないから鷄の羽の根や眞書きの筆で寫す、江戸の大都會に西洋小間物を賣る見世が、日本橋の四日市の入口に只一軒、それも大見世ではない、平ら家の間口一間半位の小見世だ、此見世からペンと鉛筆を一本づゝ買ひ、机の上に並べて置くならば、我れこそは蘭學書生であるぞと、言はぬばかりの態度に見へた世の中である、其上に

遐邇貫珠

と題する上海で發行する漢字の雜誌、夫れも新らしといふたとて、一年に一度しか來ない、支那の商船から手に入れるのだから、皆一年以前の者ばかり、其外に漢譯萬國公法と英國史とでも机の上に置いたならば、立派な西洋主義の經綸家、又政治家たる資格の人になれる樣に見へた時代である

字書と首引

の勉强だから、發音などには攜はない、只原語の數を多く覺へたらよいので、其方法の一種として、半日乃至一日、永きは二日か三日、塾中申合せ、日本語を禁じ、蘭語のみを使ひ、若し日本語を使ひ、又は蘭語を誤用したる者あらば、其者に罰として、茶菓或は料理等を出させる樣の事もあつた、何れも醫者の塾だから、ソエクル(砂糖)を持て來いといふのに、ソエゲル(水蛭)を持て來て、其罰に茶菓を出させられた人もあつた、其頃の話に先輩の

高野長英

ほど原語の達者な人はなかつた、長英が長崎に修行中にも、右の樣な申合せで、蘭語を練習したるに、長英は只の一度も罰を出した事はなく、同窓の人の物ばかり、喰たり飲んだりするから、一同癪にも障り腹もたち、同窓の者が竊に申合せ長崎一番の料理屋に同行し、サ今日の勘定は、藝者と仲居との外、此宴席で日本語を使つた者が、此勘定を引受るとして飲まうが良いかと、約束をして座に着き、一同は今日が平生の復讐と、酒肴の出を待攜へ二人三人打揃て絶間なく談話を仕掛たるに、長英一も遲疑の色なく蘭語で答ふ、是れではいかぬと不意に藝者仲居の女より、日本語で問掛させたならば、彼もはからず日本語で答もせんと、試みたるに、長英はどこまでも、蘭語の外は言はない、そこで一同は愈よ最後の手段を用ゐんと決し如何に長英でも階子段より轉落したならば、痛いといはん其一聲でも罰金は出させらるゝからと、長英が便所に行くを待ち、不意に三四人力を合せて突落たるに、長英はごろ〳〵と階子段より轉げ落ると同時に、上の方を眺め一同に向ひ、ヘイン(痛い)の一聲を發したるのみ、一同是れで驚き舌を捲き、とても長英に及ばぬ者とあきらめたりといふ、此の事も居士が亡父から青年時代に戒められた一事であるが、論語を讀むに遣次顚沛にもこゝに於てすとは、是れだ〳〵と、幾度となく訓誨せられた、少し噺は横道に入るが、長英には斯ういふ事が

ある。

賣藥のウルユス

といふ看板は今でも見掛るが、是れは長英の考ださうだ、當時長英は學費に差支て居ると、或藥店の主人が、貴公樣は蘭學が良く出來ると聞ました、左すれば和蘭大醫が發明の妙藥は御承知の筈です、夫れを御傳授下さらば、御禮は澤山致すといふ輕みで、長英は此ウルユスといふ藥劑を敎へた、これがこの藥の發行の初めで、遂には全國に廣まり、今日でも賣れるそうだが其實ウルユスとは蘭語ではなく、長英の考で、原語らしき名を作つたものでウルユスとは空の一字をウルユと片假名の三字にして、西洋語の如く實名詞の語尾にスの一字を加へたものだ、毒にも藥にもならぬゆゑ、空の一字を片假名の三字にしたのであらう、島渡した一時の戯れに過ぎないが、此一事でも非常の秀才たる事が分る、凡才の者が窮して金策の考をすると、己れに利あるも他を害する事が多い、此ウルユスの如きは、自他を利して別に社會の害ともならず、原語など、嘘をついても其實を打明けたならば、一場の笑柄とする丈で、惡感情を起す者もあるまい、長英は圓轉自在の才が溢る、樣にあつたかと思はる、、彼の眞敏孫漂流記は、當時の標題では漂流記事で、小說とは知らずに皆讀んで居た、其他理化學を日用の家事に應用した玉手箱といふ書物もあつたが、其原譯は皆長英である、又長英が竊に薩州の順聖公の內命で、翻譯した物は多いが、何れも世に出ずに仕舞たそうだ

蘭醫の書は漢文

のものが極最初にはあつた、宇田川榛齋の醫範提綱、青池林宗の氣海觀瀾、堀內某の幼々精義の類は皆純然たる漢文ある外の學問と違ひ醫書丈は、誰にも讀み易く分り易き者が便利なるに、何故に骨を折て漢文で書いたかと、居士が青年時代に亡父に聞くと、夫れはさうだ其事はおれも疑があつたから、書生時代に宇田川榛齋に尋れたら、さうも世の中の人の規模が小さいものか、吾輩等が著述の志望は、折角西洋の文明を輸入しても、日本丈では場所が狹い、尤も片假名か平假名交りにすれば著者は至て骨も折れないが、夫でも日本丈でつまらない、ドウか淸國朝鮮までに、西洋の文明を紹介しやうとて、態々漢文にしたので、友人の靑池も其通りの事だと答られたといはれた、此榛齋は蘭醫として著述の開祖位であらう、此塾より坪井誠軒といふ大醫を出した

蘭醫が珠數で治療

をしたとは、なかしい樣だが、宇田川榛齋の塾で修行の濟んだ坪井誠軒は資力がないから開業は出來ない、江戸深川の片隅裏長屋に、按摩位の暮しをして居ると、其近所の材木問屋で、殊に豪富の家の隱居が、或日釣りに出掛て、鉤の曲りを口にくわへて齒で直さうとすると、如何なる間違か、鉤を口へ入れる拍子に、鉤も咽喉の中程で呑込で仕舞い、外づして吐出すことも、呑込ことも出來ない、平生出入の醫者其他名醫を賴んでも、誰も手の着け樣もない、誠軒は之を聞き、其家の下男に向ひ、鉤の先に釣糸が殘つて居るか、若し殘つてあらば、直に治療して目の前で直して上げ樣といふ、下男は急ぎ家に歸り其事を語りたるに、あの按摩醫者が何が出來るものか、然し誰も手の着け樣がない以上は仕方がないと、不安心ながら誠軒の來診を賴み、誠軒は其家に到り一應患者を見て、此治療はなんでもない直に癒ります、只此治療をするには珠數が入用だから持つて來いといふと、家內の者は不思議がり、夫れでは按摩醫者が御祈禱か御呪禁をするのだと思ひ、珠數を誠軒の前に差出すと誠軒は小刀で珠數の糸を切りはなし、其珠數の珠を一粒づゝ隱居の口より出て居る釣糸の先より通し、凡そ長さ五六寸になつた頃、隱居に上を向て口を大きく開かせ、釣絲に通した珠數の珠の一番仕舞の珠を、しつかりと摘みグーと下へ押せば、釣絲の珠數の珠は忽ち咽喉形りの枠となつたから、そこで誠軒は鉤を直に外づした、隱居は勿論一家の者其妙技に感じ、信用日に厚く、遂に此一家から深川冬木町に、誠軒の邸宅を普請し、江戸第一の先生と呼ばれ學生も塾に溢れる程になつた頓智頓才は素より天性ではあるが、專心一意刻苦工夫を積み練熟したる上は、意想外の事を考へ出し、學習の結果に非ずして天才といふより外はなき現象を見る事がある、是れは實地に刻苦した人でないと嘶は出來ない、此時代に伊東玄朴も大流行であつたが人格は比較が出來ない程の差があつた、

誠軒の人格

は立派なものだ、誠軒は豐後生れの人で、容貌風采は揚らざる方だが、志操の堅固は他の標準ともなる、一二の例證を擧て見樣其頃の先生は皆塾生の名を呼捨てにしたが、誠軒一人はさうでない、居士の亡父誠軒に就て蘭學を仕樣として、誠軒に面會して其事を賴むと誠軒のいふに拙者には宇田川といふ先生があります、苟も先生の在世中は、自分の弟子は取らない、勉强がしたいならば宇田川へ參れといふ、夫れで宇田川へ參ると榛齋は束修を受取り其方の師匠とはならうが、モー老年で十分の世話は出來ない、門人の誠軒に代て敎授をさせる、此手紙を持て誠軒へ參れと差圖したから、再び誠軒の所へ行くと、榛齋先生より御依賴の御手紙がある以上は、同塾先輩の心得を以て御世話申さんと、初て入塾を許した、斯ういふ譯で先生の在世中は、門人の名を呼捨てにせなかつた、

俸祿の多きを辭す

とは、尋常人の出來にくい事だ、誠軒の名は都鄙に轟き、諸藩より頻りに招く、加州藩は五百石、長州藩は三百石で招いたのに誠軒は加州を辭して長州藩に抱へられた、其頃居士の亡父は誠軒の塾に居て、其次第を尋れたら、加州には生來なんの關係もない、長州は貧乏書生で浪遊の時に、萩の城下をはじめ、諸方で世話になつた、其恩のある爲めと、全國諸藩は盡く醫者を取扱ふに、世外者とし茶坊主か山伏かの樣にして居る獨長州丈は一般の士族と同樣の取扱だから、長州に抱へられた士族同樣の取扱では萬事に面倒で苦しい、世外者として取扱はるれば、總て氣樂だけれども、其氣樂が誠軒は嫌ひだと、答へられたと聞く、

蒲團の上では寢ない

疊みの上にばかり寢た、誠軒が多年の苦學は、遂に一種の習慣となり、靑池林宗の娘と結婚したるに、誠軒はどうしても蒲團の上では軟らかで寢つかれない、さうかといつて奧さんがばかりが蒲團の上に寢られるものでない、それで奧さんが色々と賴み毛氈の上に寢かした所が、之れは稍や硬いから寢られるといふださうだ、誠軒の苦學は餘程ひどかつたと見ゑ、十六文の蕎麥粉を三日の食料とし、遂に腹を減らして、下宿屋の二階から轉げ落て絕息した事を榛齋が聞き夫れから內弟子として勉强させたのださうだ是れから先の苦學生も皆誠軒の如くに成功して貰ひたいは勿論である豪富の子弟も是れからは苦學生以上五倍乃至十倍の成功をして貰ひたい若しさうでなく成功は苦學生の獨占物となつて仕舞つては苦學生其人は感服に堪へないが國家全體の上より見る時は面白くない現象である、一寸見ると成功は豪富の子弟が爲しやす

くて苦學生はむつかしき樣だが豪富の子弟の方が却てむつかしい所もある、夫れが分らないでは成功はしない、

井伊直弼

話頭は横道に這入たが、水戸烈公の相手は井伊掃部頭直弼でらう、凡そ廣い世間に似た人も澤山あるが、星亨程掃部頭に似た人はあるまい、其體軀容貌風采、實に生寫しであつた、只差のある所は體軀の大小で、亨は小さい掃部頭、掃部頭は大きい亨である便々たる腹で牛歩する態度、じろりと左右を睥睨する風采、別人とは想はれない程に似て居た、居士は十五六歳の時古賀茶渓先生が登城の供をして、幾度となく城内で、掃部頭の徒歩するを見て其後明治十四五年の頃初て亨に面會した時、斯うも似た人が世にあるものかと驚き、貴公掃部頭の生れ變りではないか、似るにも程があるといふたら、亨は苦笑して、殺される事まで似るのは御免だといふたが、今より想出すと氣の毒で堪らない、相國に獨岡先師は、大阪で、亨に接して歸り、彼れの毒はモー取り樣はあるまいといひ、天龍の峨山先師は、東京で亨に接して歸り、乃公等は彼れの如き者を濟度して見たいといふたが、兩禪師をして掃部頭に面接させたならば、矢張り亨に於ると同じ感想が起つたであらう、何にせよ一代の傑物には相違はないが、眞に何處が傑物である點であらうか、世間一般に排外思想の甚だしい時代に、國家の門戸を開放して、通商貿易を主張したのは、千古の卓見だといふも、夫れは間違ではないか通商貿易といふ事は

政權の統一

といふ事に伴はないと、國家の存立までも失ふ事柄で、國家の門戸を開放して各國と通商を謀らんとならば、先づ政權の統一を先にしなければならぬ、掃部頭が幕府の大老と爲つた時代は、幕府の綱紀が漸く弛んで、朝廷の權力は稍や張らうとし、大藩の候伯は幕府の羈絆を脫し樣とし、朝野の志士は勤王の大義を唱へ、一般の民心は既に幕府にのみ歸向はしない、政權の紊亂は實に甚しい時代ではないか、心理學者の所謂二重人格は一人の精神作用に二個の統一點が出來たので狐憑病と今日まで名付たのであると聞くが、我國も丁度德川の末路には幕府と朝廷に政權の統一點が二個出來樣として、國家が狐憑病に罹つた樣な時代である、若し掃部頭が此時代に其意見のみを實行したならば、如何に通商貿易は良い事でも、政權の統一を欠く時は、我國家は狐憑病的の行動となつて支離滅裂明治の聖代を見る事は出來ないのみではなく、恐くは國家の存立までも、どうであつたらうかと懸念するのである、餘り極端の論だと想ふ人もあらうから、事實に就て夫れを證據立てゝ見樣

明治中興の大業

は德川幕府太政を返上して、一國の主權に全く朝廷に歸し、政權は眞に統一された樣でも、財政に至ては依然として各藩の手裡に存し、殊に封建の餘勢と、群雄割據の惰力とは、一時に衰滅しない、三百有餘の諸藩は、古今未曾有の時運に際し、兵制其他各般の改革に、夥大の費用を要し、時運の要求は遂に各藩を驅て、騎虎の勢に至らしめ、士族の俸祿を減殺しても足らない、租稅を重くしても足らない、封内の豪農豪商より政費を徵收しても足らない、其他色々として見ても足らない、其極は苦し紛れに、竊に横濱神戸長崎等、居留の外國商人の手より金を借り入るゝ事となつた、今日の外債を借入るゝ有樣とは全く遙ひ、外國の事情も知らない、先の當もなくして外國の山師商人即ち馬の眼玉まで拔くといふ狡猾の者から借入るゝのだから、丁度先年まで横濱又は東京で、華族倒しといふた、高歩貸の鬼の樣な者から、華族の若殿樣が金を借入たと同じく是等商人の舌頭に翻弄され、一たび斯る外國商人から金を借入た諸藩は、忽ち負債は積で山を爲し、其甚しきものは北海道の一部を、獨乙の商人に抵當にしたといふ藩がある、此藩と此金を紹介した人の名とは暫く御預りとして置く其他種々の苦情が起り、遂には負債の爲めに倒るゝより外に仕方のない藩も出來た、そこで中央政府も驚いた、此事は啻に藩の滅亡のみでは濟ない、我國家存立上の一大事と、俄に藩債取調掛を會計官（今の大藏省）に置き、桃井仙藏等主任となつて、調査して見た所が三百諸候の中に十の七八は首の廻はらない程の負債を持つて居ることを發見した、其中には已を得ず刑法で處分をしなければならない藩が三十餘藩あつた、是等は司法省の臨時裁判所で河野敏謙と小畑美稻とが裁判長で處決した、外債寮の杉山秀太郎に聞いたら、負債の高は實に巨額で明治四十一年にならなければ完償の目的は達せられぬといふた、偖て此始末を一時中央政府で附て見た所が、財政に統一のない以上は、又々諸藩がやるに相違はない、將來永く此禍根を絶つには、右負債は之を一切中央政府が引受るとして、藩を廢し縣を置き、一國の財政を主權の下に統一するより外はないと一決し、こゝで兼て勤王論者の畫策した廢藩置縣の議は勢力を得て、擧國一致して國家萬世の大計を定むるといふ金箔附の名義の下に、政府は負債の處置に困て居る弱味に附込み諸藩を勸誘して見た所が、祖先が鎗先で取た領土を離すのは素よりいやではあるが、左りとて此負債の始末は附樣もない、背に腹は替へられない場合から、寧ろ領土を離るゝも華族となつて無窮に國家の優遇を受る事こそ得策なれと、遂に政府の勸誘に從ふ事となつた、然し諸藩の中には斯くまでに負債に困却しない藩もある、且財政の内情を知らない者が天下に多いから、廢藩置縣となつたならば、如何なる事變が起るかも知れない、そこで一世の威望を一身に擔ふた西郷隆盛を中央政府に入れ參議に任じて廢藩置縣といふ一大變革を實行させたのである、此西郷を參議にしたのも、他の一方から見ると西郷を政府部内に舁き上げて事變となるべき骨を拔て仕舞つたのである、今から考へて見ると岩倉具視と大久保利通との手腕は凄い程怖ろしい、其凄い程の手腕も矢張り大勢の回轉に止むを得ないからで、假令幕府が太政を返上して、政權は中央政府に統一されても、財政に統一を欠く以上は、政權統一の實がないから、若しも廢藩置縣が實行されぬとならば明治の中興は有名無實であつたゝして見ると明治の大業は、幕府が太政の返上と廢藩置縣とが、無上の雜闘で、此二重の雜闘を通り拔けて、政權を眞に統一し、初て國家の門戸が開放せられ、各國と訂盟通商の道が開けたのである、然るに掃部頭は毫も政權の統一に意を用ゐず、却て朝廷と幕府との間を隔離し殆ど仇敵の如き想あらしめ、剩へ幕府の親藩水戸尾張越前を分離し、政綱を一層紊亂せしめて、單に通商貿易のみを主張したのは、天下の太政に通ぜざる固陋の偏見である、當時若しも掃部頭の目的が實行されたならば或は我國は支離滅裂其存立も覺束なくなつたであらう、此際開國論者で殊に政權の統一を企畫されたのは、

薩州の順聖公

で公は其初階段として公武合體の議を主張し、掃部頭をして幕府の要路に在らしめば國家の大計を誤る者と認め、公の臣下の志士は、遂に非常手段を以て、掃部頭を除去せんとするまでに一決した、此際もし水戸藩士が此擧をしたならば、全く私怨を報ひた樣に當るから、今度の事は薩藩に一任せよと、水戸藩士を制止は

したが、スハ事を擧んとする折柄、不幸にも順聖公は忽然薨去せられ、同藩志士の一團は急に歸國したから、已むを得ず水戸藩士が櫻田の一擧を企たのである、然し前の關係があるから一應は薩藩に交渉すると、不幸にも主君薨去の變に出逢ひ、差向き何とも仕樣がない、然し一旦當藩に引受けると約束しながら、今日全く水戸藩士にのみ任せ置く事は出來ない、是非一人丈にても出て全穀を代表し樣といふので、櫻田一擧に薩藩有村治右衞門が加入した次第である、斯ういふ譯だから、櫻田の一擧は水戸と彦根と丈の關係ではない、吉田松陰が幕府の法廷で訊問を受けた時、天下の大勢に通ぜざる無學文盲の馬鹿者と、掃部頭を罵倒したのは、一時的奇激の言語ではない、如何に各國と通商するのが我國將來の大計たるにもせよ、之に伴ふ政權統一の要件を欠く時は丁度一本足で徒步仕樣とする人と同じ事だ、國家の門戸を開放仕樣とならば、是非とも政權の統一といふ足を一本添て、左右兩足で步むより外はない、然し掃部頭は幕府の勢力で押切り、政權を幕府の手に於て統一すること、北條足利時代の如くに仕樣といふ抱負でもあらうが、天皇御謀判の事と書く太平記時代なればいざ知らず幕府の末世には、到底出來る事ではない、順聖公は誰も知つての通り開國主義の主唱者である、其主唱者が政權の統一の初階段として公武合體說を主張したのは、實に千古の卓見といふより外はない、其順聖公は同じく開國主義者である掃部頭の行動を國家の存立上に大害あるものと認め、其臣下の志士は非常手段にまで訴んとし、君臣ともに水戸と提携一致したのは、水戸の特色である勤王卽政權の統一に合同したのである、鎖國の主張者と目せらるゝ烈公と、開國の主唱者たる順聖公と、合同一致した事實から見れば、烈公の鎖國說は、今日世間一般に想像する樣な鎖國說ではなく、順聖公の開國說は、掃部頭の樣な一本足でない開國說だといふ事は判然とするのであらう、殊に櫻田の一擧が水戸藩士の手に出來たから、開國と鎖國と兩主義の、衝突と見らるゝが、若し薩藩士が最初に企畫した通り、決行する事が出來たならば、同主義者の衝突だから、今日世間一般でいふ樣な觀察は出來まい。

井伊掃部頭直弼禪の活機

を手に入れた甲斐があつて掃部頭は至難の時局を處斷するに快刀亂麻で斷つの觀があるとか、掃部頭は深く禪の玄理に通じ大に禪の機用に熟したとか贊稱する人が世間に多いが、居士の觀察する所では掃部頭は井伊家の庶子で菩提所の淸凉寺で禪坊主となつて居た事はあるか修行は甚だ覺束ない、假りに幾分の得力はあつたとするも極初身の境界で、禪でいふ一種の擔板漢に過ぎない、其譯は殺人刀を用ふる事を知ても活人劍を使ふ事を知らない、把住する事ばかりで放行する事を知らないからだ、諸葛孔明は敵を七擒七縱する妙手があつたといふが、掃部頭は敵を捕擒するの一點張りで敵を放縱る事を知らない、苟も禪機を得た者は「一切事物の上に活殺擒縱與奪が自由自在に出來なければならぬ、是れは特に禪に限つた事ではない、自然界でも人事界でも」一切事物の生々活動するのは盡く此理法に漏れない、管仲の傳を見ても與ふるの取るだるを知るは政の寶なりと書いてある、然るに掃部頭は己れに取込む事ばかりで少しも他に與ふる事が出來ない、長れ多くも

英照皇太后

の御大禮に當り、昔よりの例として、宮中より金千兩の御用途を、幕府に需めたるに掃部頭は政費多端の際であると、一も二もなく之れを拒絕し奉つた、凡そ何人に限らず自己の志望を貫行せんとするには、先づ第一に自己の本務を行はればならぬ、國家の事も亦これと同一で、幕府の志望を貫徹せんとせば、先づ皇室に對する本務を行はればならぬ、御大禮とは外の事ではない皇后にならせ賜ふ時の御用途である、如何に政費が多端としても之を拒絕し奉るとは、其不臣不節は實に言語同斷ではないか、如此一方に於て大不敬を犯して暴威を振ひながら、一方に於ては開國の議を代奏し、通商貿易の勅許を得んとしたのは、眞に吉田松陰のいふ如く、無學文盲の馬鹿者ではないか、どうして禪機などを得て居やうか、

松平樂翁公

などは能くも這裡の消息は手に入つて居る、公は御所の炎上卽ち彼の高山彦九郎が、木曾山中を急行した炎上の後に、御所御造營の普請奉行になられ、其造營を入札にしたが、公は意外にも低札の者を差置て、第一番高札の者に落札させて、御普請に取掛つた、其事が直に江戸に聞へ、右は不都合千萬である、早速取消して低札の者に申付くべしと、閣老一同より異議を申來ると、公は普通の場所なれは素より低札の者に申付るが當然なるも、至尊の在し奉る御所とあつては、臣下の分際として恐入る次第なり、故に最高札の者に申付たのである、拙者の考で高札の金額にても猶ほ寡少なるを懸念すと回答せられ、當時の閣老もこれには一言もなかつたと、風閑日誌といふ寫本の物に書いてあるさうだが、如斯公は臣下の禮を盡したればこそ、東西君臣の情は疏通して、幕府の望む所は直に勅許せられ、流石の勤王說を主張し皇室の回復を志した、高山彦九郎をして手も足も出し樣がなく、憤死せしむるまでに、朝廷と幕府の間は調和したのである、掃部頭も公の如き活殺擒縱自由自在の手腕があつたならば、開國通商の勅許は容易に得られたのであらう

此君にして此臣あり

其君を知らんと欲せば、先づ其臣を視よ、幕府の施政上に有害と認め掃部頭が幽閉した、水戸尾張越前三藩臣と掃部頭が用ひた家來とを視れば、實に君子と小人と、邪佞と正義との差は非常で比較にならない、彦根藩に水戸の藤田誠之進越前の橋本左內、尾張の田宮如雲の如き人物があるが、掃部頭が殷勤腹心と賴みたる者は、宇都木某と永野主膳との二人ではないか、其他には紀州の水野土佐守と、上州の吉井左兵衞督と、官家の士にては九條家の諸太夫島田左近の輩に過ぎない、宇都木は家老の要職に居たが賄賂を貪るので掃部頭も困つたといふ事が、開國始末に書いてある樣だ、永野は非常のやりてゞ、掃部頭が庶子より出でゝ藩主となつたのも永野の力だといふ、水戸烈公が內勅を得た秘密と賴三樹梅田雲濱等の企畫を發いたのも永野の力だといふ、實にやりてに相違はないが、所謂傑黠の一怪物に過ぎない、永野は掃部頭の死後に言ふ可からざる逆謀があるので、同藩士澁谷龍太郎（谷鐵臣）岡本半助（黃石）等之を以て井伊家百世の祀を絕つ者なりと認め遂に彦根城の一隅で斬殺して仕舞つた、然る當時天下の耳目は掃部頭の行動を以て、彦根全藩の意思と想ふて居たから、同藩士が永野を殺す筈はない、若し實に殺したならば、必ず同藩には勤王正義の士もあるに相違ないと、

伊藤博文

が其事實を探偵せんと、一個の遊歷書生となつて、彦根に微行して城外の祠官某の家に泊つて居ると、岡本の徒は早くも長州の偵者たるを、認め殊更に伊藤を城內に案內し、永野を斬殺した場所を見せ、夫れより岡本邸に酒宴を張り、興の酣なる時に、谷は庭に飛下り一刀の下に松の枝を切落し、寧ろ松平に背くも皇室に

背かざるの意を示した、そこで伊藤は肺腑を抉いて彦根藩の意思を聞て見ると、他の想像と違ひ彦根藩の一般は掃部頭の行動には少しも心服しないのみではなく却て其專恣横暴に憤慨して、苟も正義の志ある者は盡く失意絶望の地に陷り、何事を爲る事もいふ事出來なかつたから其憤懣は積んで掃部頭の死後となつたら、一藩は忽ち面目を革め、掃部頭が失體の死を遂げた汚辱を一洗せんと、先づ永野を血祭とし宇都木を蟄居せしめて、一藩意向を定めたのである、其事が初めて明白となつて、長州聯合提携の端が啓かれたのである、此始末であるから掃部頭は臣下を知るの明なく又一藩を統治する力のないのが明瞭ではないが、猶ほ切實なる證據は、

遠城謙道

といふ一人の忠臣が彦根藩に居る、其人の行爲と性格は世間の人の親しく見聞して居る通りで、掃部頭の死後は妻子に別れ、酒肉を絶し墓前に廬し、數十年一日の如く香華を供し靈魂を慰む、其操行の高き、古今に多く其比を見ない、武士より坊主になつたのでは、遠藤盛遠もある、蕉谷直實もある、近くは町田九成もある、天田五郎もあるけれども、謙道和尚の如き者はない、此謙道和尚は掃部頭の在世中どんな境遇であつたかといふに、微々たる足輕位の身分に過ぎない、然るに和尚は一藩の統治に見る所があつて、一封の建議書を差出すや直に譴責せられ、閉門蟄居の身と爲つたけれども、掃部頭の死後に至て、同藩は幕府より責罰を蒙り封土の内で五萬石を削らるゝ事となつたのを深く憤り、當時の閣老脇坂邸に至り死を以て掃部頭の寃抂を說き幕府の處置の不當を諫爭したのである、士は己れを知る者の爲めに死する事すら尋常人の爲し得ざる事であるのに、己を知らざる掃部頭に死を以て盡すとは、眞に誠忠正義の人でなければ出來ない、之れが爲めに謙道和尚の德の高い事は益々明になつたが、隨て掃部頭が人を知る眼識のない事も判然とするであらう、然るに今日に至るも天下の耳目は、何物に糊塗されて居るが、其眞相を看破する事が出來ない近世科學の始祖と聞く倍根の謂はゆる、

四種の偶像

崇拜して居る爲めではないか、倍根の說に一切事物の眞相を知らんとならば、先づ四種の偶像を破壞しなければならぬ第一に劇場的偶像、第二に市場的偶像、第三に洞穴的偶像、第四に人種的偶像、第一は古今の傳說に拘泥する意味、第二は東話西說毀譽褒貶はに動搖せらるゝ意味、第三は蟹は甲に似せて穴を作る如く、智者は智的に愚者は愚的に、哲學者は哲學的に、宗教家は宗教的に、人間一として穴を作らざるなく、禪に所謂窩窟裡の生活で、自己が製作した穴に坐して、萬有を通觀せんとするの意味、第四には白人種の黃人種を蔑しみて平民の貴族を仰ぎ、官吏の長官を畏るゝ等の意味なりと聞いたが、實に是等の偶像を破壞し去つた上でなければ、事物の眞相の知れさうな筈はない、然らば之を破壞せんには

如何なる鐵槌

を用ゐ如何なる方法に依るべきか倍根は何んともいふてゐない又三四の哲學者に聞いても知らない、漢學者も明瞭な返答はして吳れないが、此四種の偶像の有害なるは誰れでも知り易い、是非破壞して仕舞ふと思つて居る人もあらうが、破壞の用に供する鐵槌と其方法はどうしたら良いか、眞實に之れを望む人があるならは、居士は其相手をして見たい

西郷南洲

を徽賤の中から見出し初て世に出したのは、水戸の烈公である烈公と薩州の順聖公との親しい間柄は、誰れも承知の如く、餘程親密な交誼であつたものと見て、或時に順聖公が烈公に向ひ、我藩の封土は貴藩より廣く、隨て臣下も多いが、貴藩の樣に藤田戸田武田等の如き人物はない、貴藩に濟々たる多士あるは、實に羨しいと歎息の聲を洩すや、烈公は頭を振り這は意外の御詞である當藩こそ貴藩に人物のあるのを、常に羨しく存ずと答ふ、順聖公は驚き我藩に人物とては前に申す如く更にない、貴藩は實に羨しいと、歎息の聲を繰返すと、烈公は夫程我が臣下共に其人あるを羨しく思召さるゝならば、藤田以下三人は勿論、他幾人たりとも御望に任せ進上せん、其代りとして貴藩の臣下の内唯一人だけ下ださるゝ樣にしたいといふ、依て順聖公は其一人とは誰れなるかと問ふに、烈公は本年十九歲にして、藤田誠之進の塾に遊び居る西郷吉之助と申す書生である、此者一人臣下に在る時は、他の家來どもは總て無用なりと答へられた、そこで順聖公は我臣下に西郷吉之助といふ人物あることを初て知り、之れに面會仕樣としたが、身分階級の八釜しい時代は、容易に謁見を許せない、階級を破り謁見を許したならば、一藩の物議は沸騰せん、そこで南洲の身分を漸々に進め、遂に七年の久しきを經て、而謁を許されたといふ事である、烈公は前回にいふ如く、能く卒先して海外の文物を採り、又能く人を知るの明もあつたが、藤田東湖在世中の烈公と、東湖死後の烈公とは、殆んど別人の如き所もある、烈公の性質を能く見拔た人は大橋訥菴である、訥菴の父は上野國出身で、

清水春藏

號は赤城といふ人の二男である、春藏は終身諸侯に仕へず浪人で兵書を講じ、當時近藤重藏と平山行藏と春藏とで、天下の三藏と呼ばれ、其意思の堅固なるは實に驚くの外はない、春藏常に人に語るに、如何に泰平無事の世なればとて、苟も武を練り兵を講ずるからは、決して蒲團の上では死ないといふて居た、年七十を過ぐるも寒暑の別なく毎朝必ず馬の稽古をする、老年の事だから孫の清太郎いつも之に附添ひ居たが、或朝春藏こゝろよく馬に跨り、一二回馬場を走ると、卒然馬を控へて進まず佇立する稍久し、其樣子の異なるを見て清太郎走り寄れば、何ぞ圖んや春藏は手綱をキツと引締め、鞍上に跨りたるまゝ既に息は絶ゆて居た、斯くの如き人の子だから

大橋訥菴

の人と爲りも思ひやらる、訥菴が父春藏の喪中、麻の羽織に深い菅笠を冠り墓參の途中、烈公の登城に出逢つた、今の青年諸子には分るまいが、幕府の三家（紀州尾州水戸）の登城には、行列の眞先の者が、道路往來の人に向ひ「傍によれ……傍によれ……」と喝道の聲高く、往來の人は皆道路の片端に避け、冠り物を脫ぐのが禮であつた、然るに訥菴は菅笠を冠りたるまゝ路傍に直立して居る、先供の者如何に其無禮を責ても訥菴は禮を守ればこそ笠は脫がぬといふ、先供の者は脫げ訥菴は脫がぬと、頻りに相爭ひ喧嘩の聲は烈公の耳に入ると、公は家來の者を制し、彼れが笠を脫がぬのは、何かの理由あらん、其理由を問はずして只脫げといふは無理である、丁寧に其理由を問へとの申し付に、家來は訥菴の傍に進み、其理由を問ひたるに、訥菴は目下父の喪に在り、本日は墓參の途中なりと答ふ、烈公之れを聞て訥菴の住所姓名を問はしめ、歸邸の後數日を經て、訥菴は烈公の聘に應じ公に謁見した、是れが訥菴の公に知遇を得て、國家の大計に參畫した初で

攘夷の內勅

を得んと、密旨を訥菴に洩し、訥菴を京都に遣はさんとしたるに、訥菴は事必ず中途に敗露せん、しかし公の性質は尋常の手段で諫止する事は出來ない、左りとて辭退したならば、如此密旨を洩された以上、生かしては置かれまい、先づ機先を制して中止せしめんと、訥菴は忽ち烈公の前に座を進め、密旨の趣は謹みて承はる、國家の一大事を處士の訥菴に、御依托在らせらるゝは身に餘る仕合、必ず死を以て內勅を得ましよう、就ては拙者が國根の關を越ねたと御注進申上候はゞ、直に攘夷の旗擧げなさるべし、千載の一遇とは實に此時に候、時機は逸すべからずと、勇み進んで答へたるに、烈公は天下の一大事其樣に輕卒には出來ぬ、先づ內勅を得て同志の雄藩を糾合した上に、兵を擧げんといふや、訥菴は猶一層勇み出でゝ、這は御平生の御果斷にも不似合の仰せなり、凡そ天下の事は理ありと思召さば、何んぞ勅許の有無を待つべき、成敗に拘はらず如此御誠心あればこそ勅許も得らる可し、速に擧兵の御用意あつて然るべしと、頻に勸めたれば、烈公は稍や遲疑し訥菴こそは他に比類なき深謀遠慮に長ずる者、大事を托するは此者なりと、平生思込たるに相違して、案外輕躁なる人物である、去りながら斯く身を寫て、決心を表はすからは、他に秘密を洩す懸念もあるまい、生かし置ても害はなしと認め、訥菴に向ひ內勅の事は先づ見合せ篤と再考せんと申され、訥菴は無事に其場は退いた、其後公は密旨を水戸の京都屋敷の留守居、鵜飼吉右衞門等に傳へ、同人より梅田雲濱賴三樹等と謀らせ、遂に內勅を水戸に賜はる事にはなつたが、當時井伊掃部頭は既に此事を偵知して、其腹心ともいふべき、永野主膳に內命を下だし、九條家の諸太夫島田左近等と結托して、鵜飼梅田賴其他多數の志士を、一度に捕縛せしめた、是れを今日戊午の大獄といふものである、此時吉田松陰先生も同時に捕縛されたけれども、先生一人は內勅の事に關係はない、關係があつても最初に之を中止せんとした者は、京都で岩倉具視公、江戸では大橋訥菴の二人であつた、然るに訥菴は最初に見込んだ通り此事は中途で敗露して、志士の縛に就き殺されたのを、氣の毒千萬に思ふと同時に、其先見の明なきを悲しみ、乃公が一と足でも間違たならば、是等の人と同樣だ、是等の人は乃公の身代りに立て呉れたのだと、遂に種々の手段を廻し懇意の醫師某の名義で、漸く賴三樹一人丈の死餞を、刑場より貰受て埋葬した、或時訥菴の門人某が、三樹はつまらない奴だ、處刑の身となつて、父山陽の面目を汚したといふと、訥菴は大に怒り、山陽の子なればこそ、身を國家の犧牲にしたのであると叱り付けた、如此世間へは頻に三樹の徒を稱揚して、前條內勅下賜の事を最初に諫止せんとしたのは、訥菴の秘中の秘である、三樹の死餞は訥菴が埋葬し、獄門に梟したる首は、幕府旗下の士松岡萬といふ者が、深夜大刀を引拔き番衞の者を脅かして奪去つて、窟に其髑髏を書齋に祭り、三樹平生酒が好きだというて、每朝髑髏に酒をそゝぎ、明治の初年に賴家に送附した、訥菴の塾には高杉晉作が居た中井弘も居た、種々の人物を出したが、遂に幕府の手に毒殺された、其始末は別に話をする時機もあらう、又烈公の性質を見拔いた人では

小野藤五郎

といふ久留米藩の足輕があつた、居士は十八歲の時に面會したが、相撲の初代小野川の孫とか曾孫とかで、體軀魁偉で氣魄は人を呑み、每夜十二時より起き、端坐して器械の發明に心を凝し、十有餘年の間少も怠らないといふ人であつた、西洋の學問もない師匠もない、只一人の推理力でやる事であるが、最初に發明したのは望遠鏡で、此望遠鏡は內部に數條の線を張り、遠方を見ると同時に其距離も知れる構造であつたさうだ、藤五郎の話に最初に二個製造し、一個は順聖公に獻上し一個は手許に置くと、間もなく烈公から懇々御使が來て、其望遠鏡を御覽なされたいとの事だから、直に其使に向ひ御覽なさる丈はよいが、箱の內にある內部の線は御掛け下さるまじく、此線は拙者が御目通りの上に掛ます夫れまでは御手を御掛け下さるまじくと、言上して下ださいと、固く御斷り申して持參いたさせたのに、何ぞ圖らん御返却の後、其望遠鏡を檢したる所が、內部に線を掛たる痕がある、苟も一藩の君主たる者が、匹夫との約束を破るとは、御平生御心得の程も推測され、殊に線を掛けたならば掛けたとの御詞を添へて御返却あるべきに、其儀なきは是れも御平生何か御心に暗き所のある御性質なるべしと思ひ、其後幾回となく御臣下になれとの御內意があつたけれども、此御性質は如何にも氣に喰はない、藤五郎身は足輕の微賤だけれども、俸祿の爲めには志を屈する事は出來ない只命を差出しても、君として仕へたかつたのは順聖公であつた、然るに數年前薨去となつたからは、もはや天下に藤五郎を知る者はないと、暫く頭を低れて默して居たが、然し烈公程機敏の智ある人も、三百諸侯には勿論世間一般にも少ない、彼の望遠鏡內部の絲の掛方は、とても素人に出來る事でない、夫れを公は爲るのだから、公の才と智とは實に恐しい程あるに違はない、公も亦一代の傑物であると話した事がある、此藤五郎は幕府が初て佛國人の發見で今の橫須賀軍港を造船所とする時、拔擢されて旗本の士と爲つて、其經營に從事したが、一日誤て劇藥を呑で死んだ、又烈公に見拔かれて失敗したのは

佐藤一齋

であるそうだ、齋の性質は洗心洞劄記にも載せてある、大塩中齋へ遣つた手紙の中にも、少しいやな所が見ゆる、學者としての大家には相違ないが、人物としてはどうだか、烈公は或時一齋を御召になると、一齋は公が平生儉勤を主張せらるゝからは必ず粗服であらうと、殊更に粗野の服裝を着して謁見した、然るに公は世間で思ふ所と相違し、如何にも美麗なる衣服であつたから、貴人の儉素は此位のものかと輕侮の念を起し、其後謁見の時に、聖堂附儒者の常服、絹八丈縞の衣類を着て、絹の眉衣に仙臺平の袴で參つた、すると公はすつかり前日の服裝を改め、木綿黑紋付の着物羽織小倉木綿の袴を着して坐に在つたので、一齋は匆々其場を退くと、公は東湖にモー一齋に用はない、再び召すに及ばずといはれたさうだが、烈公も烈公一齋も一齋だ、どちらが良いとも、居士には勝負の團扇が上げられない

久田督

といふ理學士は一寸見た所で頗る傲岸不遜の風が、青年時代にあつたさうだ、初めて大學に入ると同校多くの學生等の癪に障つたので或る時の運動會の場で、久田をしたゝか毆打仕樣との相談が極つた、然るに一の友人は之れを竊に久田に書面を送つて、明日の運動會は劍呑である、決して出るなと勸告した、久田はさる者これしきの事に驚き縮んでは居ない友人の注意の通り明日は引籠つて居て免れるにしても、又此次の運動會がある、其又次ぎもあるのに、其都度皆引籠つてばかりは居られない、一度彼等が申合せた通り、思ふ存分に毆打させたならば、二度とはすまいと覺悟して、翌朝運動場の入口に到ると、土佐出身の同學の先輩生一

人、しかも見上る程の大男が大手を展べ兩股を開て、乃公の睾丸を拜み、尻の穴の下を匍匐して通れといふ、久田は其通りにすればよいかと、兩手兩膝を地に付け葡萄の態度を示すや否や、兩手を以て彼れが兩脚を前に引張つた、彼れは忽ち後へバツタリと倒れた、然るに倒れた彼れは不思議にも啞然と大笑し、其膽力があるからは是れより乃公等の味方になれ、外に今日此場で毆打すべき奴があると今まで打るゝと極つた居た久田が直に打つ者の仲間に入つた、こゝが後手が先手になつたり、實位が主位に換つたり守勢が攻勢に轉じたりする機微の間の活機である、此活機を平生萬壑の上に使ひこなすと面白い、病氣で苦しい時又は死に掛けた時或は苦闘に堪ねられない場合に善く應用すると趣味がある、

漢方醫の福井

といへば東京の淺田宗伯と同じく東西で名高い、御所の侍醫であつたが、或時某貴族の方御篤疾に罹らせられ、京都で有名な大家の洋醫は皆御邸へ詰切り、百方技術を盡しても其効はない、依て最後の御診斷を福井に命ぜられた醫師仲間の作法として、後より招かれたる時は、必ず先きに診察した醫師に就て、病狀其外とも聞合すべきに、福井は無作法にも直に御病床に進んだ、詰合ふ大家の醫師皆其無禮を怒つたけれども、御危篤の御場あながち責むべき事でもない、御診斷相濟んだならば、必ず詰合の座敷に來る事と待つて居たのに、豈圖らん何等の挨拶もなく直に歸つたので一同は大に怒り此後出會ふ時は容捨なく面責せん、然し御診察上彼れの見込はどうであるかと家令等に尋れた、所が福井は他の醫師は何んと申上候かは存ぜず、拙者には御回復の見込なしとは申上げ難し、調劑し奉らんといつて歸つたと聞き、詰合ふ大醫は皆あきれ果て、如何に漢方醫が物を知らないにもせよ程があると嘲笑して居ると其中の大醫の一人が我々は一週間も詰切り多くの患者は棄てゝある、幸にも福井が御回復の見込ある如く御診察申上たは、此上もなき好都合ではないか、以後の御治療は福井に御任せ然るべくと申上げ、何れも私宅へ引退いた、家令は直に福井へ參り調劑を促すと、福井は前刻の詞は忘れたかの如く、御病狀は最早御回復の見込はない隧て御調劑の致すべき樣もないと答へた、家令は大に怒り前言の齟齬を責むると、福井は儼然容を改め詞を正し、貴族一般の家令家扶等の專横にも程がある、如何に御名門なればとて御回復の見込なき時はどこまでもない、況や西洋大醫のいふ事に問違ふべき道理はない、殊に是等の大醫は何れも多くの患者を持て居る、然るに久しき間詰め切らせて少しの暇も許されない、それでは多數の患者は如何にあるべき貴族は常に民間の苦痛を御察しあつて然るべし、拙者が若しも前刻の如くに申上ぬ時は、大醫は皆御邸に詰切て家に歸り多數の患者を治療する事はなるまじ、拙者の詞が前後齟齬したる段は如何なる御叱りも蒙らんと言ひ切つた、其事を其後大醫等が傳聞して福井を面責する事が出來ない計りではない、却つて先日取計ひは貴族の家令家扶を押へ、又多數患者の幸となり、如何にも御親切にと頭を下げて禮をいふ事になつた、福井が舊式の技術でありながら、永く京都醫界の首位を占めて居たのは權威に屈せず先手に廻る手腕があつたのである、

西郷南洲

が明治元年參謀長として東征の時に江戸城を受取り、突然西上して德川を七十萬石に封じた、此事を他の參謀等は聞込み右は怪しからぬ處置である西郷は勝にだまされたと、伏見の大勝より勝に誇つた參謀等は大に怒り、西郷が歸營したならば、一大議論の上に時機に依ては斬らんさまでにいふて居る所へ、西郷は歸着して平生の如くのろりと各參謀の首座に座り、一言の挨拶もなく兩手を膝に付け、今度は勝にだまされましたと呵々大笑したので各參謀は忽ち張合が抜けて、誰一人として異議をいふ者もなくなつて仕舞つたさうだ、易に「曰く機を見る神か」と、西郷の如き者をいふのであらう、

勝海舟

は西郷等の參謀と談判中ながらも、西郷とは舊知の事だから或日二人散歩に出掛た途中で、勝は西郷に向ひ君は久振りで江戸へ來たな、愛宕山へでも登つて見樣かと、同所へ參り茶店に二人腰を掛て居る、西郷は頻りに市街を眺め、流石は日本第一の都府だといはんばかりの態で眺めて居る、勝は之れを見て江戸幾百萬の人民は、既に砲彈の中より救ひ出して仕舞つたといふた、東西兩大關の取組だ勝負を見る丈でも拳に力が入り背に汗が出る樣だ、如何にも機敏な事ではないか、情の疏通は言語を待たない、惚れた惚れぬは目元で知る今朝の目元はよい目元といふ如く、人の一擧一動は皆其人の精神現象であるからは、其微動細擧も他に大影響ある事を知らればならぬ、

薩州の順聖公

は竊に琉球で外國と貿易をして居る、幕府は其不都合を詰責せんが爲め、其事實なるか否を視察せんと、勝に命じて軍艦を派し鹿兒島灣を經て琉球に向はしむ、順聖公は軍艦の鹿兒島灣に到着するを迎へ、勝を招き盛宴を張り種々談話の間天下に大事業を爲さんには、是非とも明いた眼で一二ヶ所丈けは見ぬ所を拵へて置ればならぬと語られた、其一言で勝は琉球へ回航する事は出來なくなり、幕府へは何かの事故に托して、東京灣へ歸航した事があるさうだが、流石は至人の一言である、之れを何れの場合に應用してもよい、夫婦親子の間にも社會交際の上にも、到る處として差支はない、然るに世間の多くは見てならぬ所までも見樣とし、又は見ない所をも見た樣な顏をして居るのは、馬鹿の頂上ではないか一體自己の才智を眞實に識得する者は稀だ、多くは自惚れ鏡で自己の影を照らすの類である、或る人が陸奥宗光を評して曰く能く才を知るの才あり、土田衛平好漢(筑波一擧に死せり)を評して曰く才を隱すの才あり、河井繼之助を評して曰く才を忘るゝ才ありと順聖公の一言は宗光以上の才を隱すの才を忘るゝの才ある者でなければ出來まい、此不世出の才があつてこそ何事にも後手に廻らぬ事が出來る

柳生但馬守

は虎に向つてどんな先手をやつたか、德川三代將軍の時に朝鮮より虎を獻上すると、澤庵和尙は但馬守に其虎の居る檻の中に入つて見よといふ、但馬守は麻上下を着たまゝ直に檻に入り、持合せた鐵扇を以て虎の鼻頭をバツタリと打つて正坐した、虎は畏縮した態で動かないと、今度は己れが入るぞといつて澤庵和尙は但馬守に代つて入り、先づ唾をシタヽカ手の平に出し、虎の口先に差向け和尙はスヤ〳〵と居眠りを初める、虎は唾を嘗めて和尙の樣に轉りと寢て仕舞つたといふ寄席の軍談的の話しがあるが、虎に對した事では薩長公小品にも出て居る事がある、夫れは後日にして社會の生存競爭が激甚になつた末は、人間到る處は皆虎口同樣ではないか、其時に吾人は但馬守とならんか又は澤庵和尙とならんか

伊達正宗

は十二三歳の時、戰爭に大敗し、片倉小十郎と御匐して芋畑を

逃げる途中に、片倉の思ふ樣この幼弱の主君を輔佐したとて贈力がなければ其詮もない、然る時は正宗を廢してなりとも伊達家の興隆を謀られねばならぬ、今日は其試驗を爲す好き場合なりと、匍匐しながら後より正宗の股に手を入れた然るに正宗の畧丸はヌルリと伸び下つて居たので、片倉は大に悅び是れでこそ天晴れ他日奥羽二州に雄視すべき人だと信じ輔翼の大忠を盡したといふ話がある、畧丸の事では古今種々のはなしがあるから事實の如何は暫く措き若しも此時に正宗の畧丸が、縮み上つて居たならば、片倉はどんな考を出したか、慥かに正宗の身に取つては大不利益に相違はない、幸にダラリと下つて居たので、自身の迫害を免れたばかりではない、片倉をして伊達家無二の忠臣にまでならせたのである、一つの畧丸の下り樣で、自己の迫害を逃れ又他を忠義の人にさせたとは、宇宙の大靈其物が如此機微の間にも活躍して居る明證ではないか、宇宙萬有の屈伸消長は卽ち其活動である、畧丸も萬有の一であるからは、伸びもすれば縮みもする、正宗が大敗北の時に伸び下つて居る畧丸を持つて居たこそ、他日雲蒸龍變して東北の覇權を握つたが、若し志を遂げ功を成した時に、伸び下つて居るばかりの畧丸を持つて居たならば、片倉は歎惜流涕するであらう、此時には縮み上つて居る畧丸でなければならぬ、然るに世間の多くの畧丸は逆境に縮み順境には伸びる、畧丸としては凡庸の常識を有する畧丸で、男兒の章徽としての價値はない

維新前後に於ける交友

間の狀態は、幾んど今日からは想像が出來ない、文久三年の冬十月のころ、居士等は鄕里足利に歸り、陰に遠近呼應し東西提携して、筑波山一擧の企畫中、同町の穀屋といふ旅店に泊つて居るといふ二人の武者修行者が尋れて來た、其容貌風采を觀るに尋常でない何かの仔細もあらうと、直に料理屋丸吉に案内した、酒醴に談熱するに隨つて、何ぞ圖らん此二人の士は佐幕黨で、居士等の敵黨たるを知つたから、良い加減にして別れ家に歸つては見たが苟も敵黨である、以上は此儘に捨置ことは出來ぬ、今一度面會して其眞相を看破し其上に、何とか處置せねばならぬ、都合に依つては殺しもせねばなるまいと、翌早朝に旅店に訪問すると、彼等は既に夜半に匆々出發して仕舞た後であつた、夫れでは愈々彼等は敵黨に相違はない。惜いことには遁したなと後悔した事がある、翌元治元年四月居士等は兵を筑波山に擧げ、六月二日は結城下館の二城を圍み、同五日は栃木町に開戰して全市街を燒拂ひ、同二十一日は眞壁の臺に戰ひ、七月十四日は下妻町に激戰した、最初敵軍は振はなつたが、幕府は田沼玄蕃頭を追討總督とし、大兵を動かし、且近傍十餘藩にも出兵させた、然るに我黨の大部分は水戸人である、水戸人は從來の關係上中頃より筑波擧兵の主旨よりは、正好二黨の爭に力を盡して、居士等の如き四方より集つた者とは遂に議論相合はず、且水戸人の中にも降伏論を主張する者もあつて、多數幕兵に降伏し、兵氣沮喪して、當初の勢なきに至つた、居士等も身を商人に變じ、江戸に遁げては來たが、幕府の追捕に羅り搜索は非常に嚴重で、殆ど身の置き所も隱れ樣もない、或日本所の瀧蕎麥といふ料理屋で、酒を飲み風呂に入り座敷へ歸らうとして廊下を通ると、前の武者修行の二人が、一室に對座して酒を飲んで居た、

南無三見られては大變

と、何知らぬ風で顏を他に向け、自分の座敷に歸つた、暫くすると料理屋の仲居が來て、居士の姓名を呼び、牧野の殿樣が仰せらるに、貴公樣に御目に掛りたい、當方より出ましやうか、又は御出下さるかといふ、居士はどこまでも知らない體で、私は只今仰せられた姓名の者ではない、何かの人違ひではない、かと答へたが、仲間は此通り傳へた者と見ゐ、今度は再び來て言を更め、御人違の御姓名を申上たのは誠に濟みませぬ、此段は幾重にも御詫を申上ます、御姓名はどうしても、只今風呂から出て此座敷の側を御通りになつた御方に御目に掛りたいといふ、斯うなつては最早はづし樣もなく遁げ隱れもならない、只面會して其都合に依ては、

二人を刺殺せんと

覺悟して、其座敷に到るや、二人は喜色滿面で居士を迎へ、ヤア暫くであつた、非常な御壯んな事でしたなといふが、居士はどこまでも知らぬ體で、夫れは筑波山の事ですか、拙者は何の關係もない、昨年御別れ申した以後は、直に聖堂の書生寮に入り、讀書のみに勉強して居ると答ふや、二人の士はジロリと居士の顏を見つめ、御關係が無ければないでよいと仲居の女を座敷より去らしめ、此事は御隱しなさるも御尤もではあるが、實は牧野君が四五日前閣老板倉周防守に面謁した所が、

筑波一擧の名簿

の中に、貴公の姓名が歷然と書いてあつたから、モー戰死されたならば仕樣もないが、萬一にも生きて居らるゝならば、ドウか此際は生き長らへて、御志望を遂しさせたいと、兩人とも竊に相談致し居る所へ、不思議にもこゝで御姿を見掛けたから、御面會を乞ふたのである、實は昨冬兩人とも姓名を變へて御目に掛つたが二人の眞の姓名は一人が牧野隼之助と申し(家祿千五百石)德川直參の旗本の士である、一人は大野健次郎と申す、越後國新發田藩の鄕士である、貴公と境遇位地の差で、國家に盡す方針こそ異なるも、互に境遇と位地とを換ふれば、同じく國家に盡すので、此誠心に至つては彼我の別はない、ドウか是れだけは、

敵味方の區劃

を取り除けて仕舞ひたい、夫れに就ての御相談は、貴公の身の上は既に我が幕府の追捕に羅つて目下危險千萬である、貴公は貴公等の同志々々を尋ね廻り、潛匿さるゝに相違はないが、捕吏は此同士の家に注目して居るから、貴公の生命は何時に捕吏手中の物となるかも計り難し、夫れよりは、失禮ながら、貴公の風采を旗本の士の家來の如く裝ひ、我が家來と稱し我が屋敷と、大野の私塾を潛匿の根據地とし、(牧野の屋敷は本所緣町、大野の私塾は淺草三筋町に在り)而して各所に行動せば、神出鬼沒といはんか、捕吏も之れを如何ともすることが出來まい、然して方針の差があるから、秘密は互に秘密として、彼我の間も一默に附し去るべしだ、若し互に方針を語りなば時機に依つては忽ち、

刀を按して爭ふ

事も出來やう、故に國家に對する行動は互に秘密とし、只私交上だけ彼我ともに圓滿にしたならば、面白いではないかと肺腑を披ていふを聞き、居士もこれは面白い、昨年の冬は斬殺さうと思ふた敵黨が、今日は却て我れを保護する事になつた、是でこそ男兒の交際だらうと深く、其意を謝し、以後は牧野の家來下村某の苗字を用ゐ、下村猟介と名乘り、宿泊の根據は牧野の屋敷か、大野の家と定め、明治元年の初に至るまで、前後五年に及び、其間主もに京攝の地に奔走したが、江戸に於て幾回となく死地を侵しても、生命を保ち得たのは此根據地のあつた爲めである、然るに時勢は追々に切迫し、最早彼我私交の圓滿も絕ねざるを得ない事になつて、是れが一生の死別離と、心竊に思ふ所あつて慶應四年

正月の末か二月の初め頃だつたと思ふが殆んど半年目位で牧野に面會した其時牧野も矢張り居士と同じ考で、如此國家の大勢が切迫した以上は、互に彼我の位地に於て、遣つて遣り抜かればなるまい、私交もこゝらで斷絶して置かう、

彼我銃砲の間で相見

る時もあらう、一體貴公は昨年の冬より今まで、何をして居た只居る筈はないと問ふから、いや何にもしないと答へると牧野は冷笑一番して何もしないで居らるゝ貴公ではない、先づ乃公からいふのが順序だと言を改め、偖慶喜將軍が太政を返上し大阪城に入たと聞き、一時茫然自失の姿であつたが、既に返上したからは誠心誠意で朝廷に盡すべきである、然るに將軍は才があつて膽を缺く、一時返上はしたものゝ、譜代の諸侯は種々の言を進むべく又會津庄内桑名の三藩は回復を謀るべく、殊に陸海軍の將卒も此儘に靜止する筈はない、朝廷と幕府の事端は是れより啓かれやう一日も早く大阪に上り將軍に拜謁し、先づ陸海軍の京攝に在るものは盡く撤回して江戸に歸らしめ、會津庄内桑名の三藩は勿論譜代諸侯の兵も殘らず國に歸らしめ、大阪城は全く武裝を解き只閣老其他の文官のみを殘し置かば、何人も事端を啓く事は出來まじ

皇室の中興と幕府の結末

は是れで見事に出來ると考へ、親族の三宅大學と謀り、一封の建言を懷にして大阪に着し明日登城せんとしたが、伏見に於ては今朝既に開戰したりとの飛報に接した、人の心ほど妙なものはない、今の今まで、眞心朝廷に歸順仕樣として懇々江戸より大阪まで來た乃公が開戰の一報に接し遽に砲聲の轟然たるを聞いたら、滿腔只勝ちたいといふ一念のみになつて長れ多い事ではあるが我が心頭には錦旗もなければ國家もなく、直に戰場に驅着けたが、大勢は既に敗走と定つて、將軍と共に江戸に歸つた、サアこれからは貴公の事を聞かうといふので、居士もつゝみなく、實は京都の事情が切迫したから、是非江戸に於ても一大動搖を起し、幕府の力を東西二方に分斷しやうと、同志の者を芝三田の薩州邸に糾合し、歲末を待つて江戸全市街を燒き拂ひ、機に乘じて江戸城を屠らうと伊牟田昌平益滿新九郎相良總三等と謀り將に事を擧んとするの際、幕府は庄内上山二藩及其他の兵力を以て三田邸を圍んで砲擊する、居士の黨は盡く潰敗して薩州の軍艦に逃る者あり、或は居士の如く軍艦に乘りおくれて市内に潛伏する者あるといふ始末だといふと、牧野はこれが互に一生の別れだらうと、兩人相携へて柳橋の青柳樓に到つた、

大石良雄

或人のいふに時代思想は妙な物で、其時代の總ての事物が、此思想の外に立つことは出來ぬ程の力がある者と見へる、古今復仇は幾らもあるが、大石良雄が復仇の有樣は、どこまでも元祿式である、四十七人が揃ひの着物を着る、いろはの番號を附ける、太鼓と鐘とで進退の掛引をする、如此はでやかな敵討は、外には其例を見ない、夫れはどうでも良いが、良雄の復仇ほど世に感動を與ふる復仇もあるまい、長れ多くも勅語を賜りたる復仇はあるまい、

汝良雄等復仇死法百世之下使人感奮興起朕嘉賞之今茲幸于東京使權辨事山中獻吊汝靈且賜金帛

明治元年十二月十五日

如此上下を感動するには必ず何かの仔細があらうと、久しく考へて居た所へ舊廣島藩士の湯川某が來て、良雄の復仇には實に恐入た、我々凡夫の及ぶ所ではない、實に神か佛でなければ出來ぬ、先日舊知事に面謁したら、其方は良雄が復仇の時泉岳寺で讀み上げた、祭文を見た事があるかと、尋ねられたから、まだ見ませぬと答へた、夫れでは見せてやらうが、土藏から出すので時間が掛かる。暫く他の座敷へ引退き待て居るがよいと申付けられ、靜かな一室に獨座して、こゝが平生自己修養の度を考へる好時機である自己が良雄の境遇となり復仇したとして、其場合にどんな祭文を書くか、良雄となつて此座敷で祭文を起稿して、夫れを實物と比較して見れば、人物の差は判然と分かる、試に一番やつて見るべしと、冥思默考祭文の腹稿に取掛り丁度出來た所へ、知事に呼ばれ直に知事の前に進み、良雄の祭文を讀み掛けて見た所が、自己が腹按の祭文とは天地雲泥の差で、到底比較にはならない、第一にあれ程に苦心慘憺であつたのに、其形跡は毫もいはない、第二に大野九郎兵衛の如き輩があつたのに、一藩の上下男女老弱皆一心同力とある、第三に鮮血淋漓たる首を携へながら、昨夜上野介殿御宅へ推參仕り、則御供申候と丈で、仇を討つたとは書いてない、第一第二は普通の忠とか義とかでは無論考へられないが、第三に至つては何とも考が附かぬといふ話を聞き、居士もどういふ譯かと、常に疑を抱いて居た、其後京都に來て字治の碑林某に懇意になつた所が、同家の祖先が良雄より貰ひ受けたといふ手製の逢磨の木像を見せられた、丈五寸位で良雄刻と銘が切つてある、手澤も十分に艶も光つて居る、居士はそこで初めて、良雄はどういふ譯か判からないが、逢磨なぶりをしたわいと思ふて居た、其の後伊勢の津に居た、時に大徹禪師に毒を嘗めさせられ、終身不起の片輪者になつた永谷智吉に出逢つたら、先達て鈴鹿郡坂下驛の舊家高家某が、良雄が播州龍門寺の盤珪禪師から貰つた硯を寶物に出した、餘り珍らしい品だから、金五拾圓に價を附けたが、夫では實れぬといつて、東京の淺野家へ持參したが多分同家で買上げたらう、其方が知て永世大丈夫でよい、さうして其硯の裏面に、良雄が左の文を彫刻して居る。

予曾參盤珪和尙、師曰本來不生、予不會焉、今春聊有識其趣、直到和尙舉焉、師曰是々、于時見師之傍一之硯、師曰是則西行法師自作之石也、予曰不然、西行未生以前良雄所作也、師微笑曰、出于爾者須返爾焉、以贈予焉、予不辭拜受歸矣

于時元祿六春二月日　　大石某受用○□

居士は此硯の銘を見て、初めて良雄が盤珪禪師の嗅鏑に入つた事を知り、前述の第三の疑團は氷解して仕舞つた、珍しい事だから知人の森大狂に知らせて、禪學といふ雜誌に載せたり、多くの人にもはなしたりしたので、遂には色々な書物にも出る樣になつたが、どういふ者か何れも皆良雄が禪機を得たから、復仇が巧妙に出來たといふ丈で、どう得たから、どう働いたといふ、壺に這入つてゐない、其だ不得要領ではないか、尤もどう壺を示して見ても、肉眼烱々たる者には判り樣はないが、一寸眼の球の潰れた片輪者には、一目判然する樣にして置かなければならない、これが著述者の社會に對する本務ではないか、

盤珪禪師

が禪門に入つた初は、大學の明德の事である、禪師は青年の時に此明德が氣になり、遂に凝り固つた一塊の大疑團となつて、諸方の儒者に質問して見たが、其疑團は增すのみで更に益はない、其儒者の中の一人が、其方の疑團は今日の儒者に問ふたとて、其方の安心する樣に明答を得られない、夫れよりは禪宗で具眼の大師匠に就くがよいといはれ、そこで禪門に歸依し、其後如何なる禪師の毒手に觸れたか、如何なる修業をしたかは知らないが、遂

には一代の大德になられた人で、此盤珪禪師の頃は鎌倉の一本鎗と唱へ、一則の公按を以てどこまでも押通すので、盤珪禪師は誰が來ても彼れが來ても、俗が來ても、僧が來ても、本來不生の一本鎗で突き通し、字を書いても不生不滅の四字のみを書いた人であつたさうだ、然るに後世白隱和尙は、本來不生とか不生不滅とかいふ事は大の嫌ひで、常に禪師を罵つたさうだが、最初に本來不生の公按を振り廻した盤珪禪師も、後世に之を罵倒して白隱和尙も、前聖後聖其揆は一である、白隱和尙の口車に乘つて、盤珪禪師を謗つたならば、夫れこそ又白隱に三十棒を喰はせられるだらう、普通の學問からいふとおかしいが、禪ではかういふ處を早く見て取つて仕舞はないとならぬ、盤珪禪師の最初の入口が、大學の明德であつて、

本來不生

の公案の一本鎗で押通したのは、何かの消息があるのか、又はないのか、朱子は明德に虛靈不昧と註をしたが、本來不生と同か別か、さうして良雄が其毒牙に觸れての働きは、血の流れてゐる首を携へながら、御供申候と、死者を取扱ふに生者を以てしたるはどこから此境界を得て來たのであるか、禪宗では滴々相傳一器の水を一器に移すといふ事があるが、是等が考へ所である、居士が前年伊勢の禾山禪師を旅寓に訪ふた時、禪師は長途の疲れで横臥のまゝ逢はれたが、此良雄の參禪の話を始めると、瞿然容を改めて〳〵と自ら蚊帳を外し、寢具を片付け、法衣を服し威儀を正し、サア聞かうと居直つたが、どこに如此鄭重に端座靜聽せればならぬ所があるか、夫れから居士は此話をして仕舞ふと、禪師は喜色滿面深く感謝の意を表せられ、忽ち又容を正し、昔の話は昔の事他人の境界は他人の境界、開いて此儀に置く事は出來まいと更に勵聲一番して曰く、盤珪はまだ手ぬるい、乃公ならば良雄が西行未生以前良雄が作る所なりといふ、聲の絕へざる間に、然らずと一拶を下して見ん、前箭は輕く後箭は重しだ、汝は良雄に代つて一句を吐け、擬議せば雲山萬里、良雄の境界は得られない、サアどうだ〳〵と賞め付けられ、是れが一場の葛藤となつて、其後或る禪師の許に晝夜となく、吶喊肉薄して見たり、各方面の砲門を開て打出しても見たが、何れも標準が狂つて的中しない、類りに發射して稍や的に近寄つて來た時、汝ではマアそんな者か、乃公なれば、斯うやると、助け舟を出されて漸くの事で渡つて見たが、自己の力でないから得力はない、あつたら公按を無慘にも殺して仕舞つた、此禪師の一句は見事な一句ではあるが、居士が自己の胸襟より出たのでないから、居士には何の詮もない、今日は僧俗一般にこんな據梅に、助け舟で公按に漕ぎ附け、夫れで透過したとか、見性したとか修行が濟んだとかいふ者ばかりであるから、禪をやつたとて何の役にも立たぬ者が多い、直に良雄の境界を得んとならば、峻嶮なる明師の毒牙に觸れ、良雄となつて一句を吐いて御覽なさい、逆境の良雄はまづ是れとして、

順境の良雄

はどうであるか、順逆の二境に高足闊歩が出來ぬとならば、禪を修した詮もない、良雄は如何に闊歩したか、知人の多田東藩翁から聞た事だが、昔より名高い播州の赤穗據は、其初良雄の計畫が當を得たので、今日まで繼續して、聲價があるのだといふ事だ極の最初は赤穗の地は製據に適當だと、同地の豪商等申合せ、同藩の許可を出願したが、新規の事業だといふので、採用せられない、然し適當有益の事業だから、是非許可を得たいから役人の代る度に幾回となく願つても採用されない、其中に躁れて賢明の聞ゐある良雄が出たので、今度こそはと出願したのに、願書は預かつて採用の沙汰はない、幾歲月を經てもない、そこで出願者も失望して賢明とは名のみで矢張普通の御役人樣だと、あきらめて居る所へ、突然良雄は出願者を呼出し、實に有益な出願である、今日は採用して許可すとの沙汰あつたので、一同驚き眞に賢明な人に相違はない、然も有益な事業であるか又はないかは、最初から分りきつた事だ、夫を今まで何の沙汰なく延して置て、突然に許可したには必ず仔細があるべしと、出願者の中の數人良雄の私宅に參り、其意を申述べると、良雄は其問に應じていふ樣には、製據の業は最も此地に適當した、有益の業には相違ないので、直に許可仕樣と思つたが、其計畫の規模が此赤穗藩の領地には少し大き過ぎて、製據に要する薪木が不足となる、不足となれば無據他藩の領地から買上る事となる、そうなると其運搬の費で、薪木の價が高くなる、これが高くなると製據の價を高くする、製據の價が高くなると、他の製據に壓せられて販路が塞がる、販路が塞がつては、其方一同は失敗して損する外はない、そこで誰にもいはないが、願書を預つてからといふ者は、藩内適當の場所へは、總て薪木の用となるべき苗木を植付けた、夫れから歲月を經たから今では此通りだと窓を開けて、こゝかしこの原野山溪を指し、あの通り繁殖したからはモウ其方共の計畫の通りやつても、薪木の盡きる時はない、必ず永く繼續するといはれて出願者一同は初めて其賢明に感服したといふ事だ、何人に限らず逆境の事は、世間の耳目に映觸し易く、順境の事は埋沒し易い、逆境ばかりで褒めるのは、良雄にとつては、此上もなき不幸ではないか、

さすがの無隱居士も、大石良雄の一擧に對して復仇の語を用つて居られる。けれども、これは井上哲次郎博士の說の如く復仇と解せずして、亡君の意志を繼ぎ、亡君の行爲を延長したものと見るが穩當であり、恐らく亡君の所願に適ふことであり四十七士の本意でもあらう。亡君が殿中に於て上野介に斬付けた時、後から抱き止められて思ひを遂げなかつた其無念其長恨を酌んで其亡君の行爲を延長したものであると解すべきである。則亡君に代つて上野介を殺したのであり、亡君の靈をして最後の目的を達せしめた譯であらう。

二四、醍醐忠貞翁

附　洋畫家　太田喜二郎氏

醍醐忠貞翁は、維新前米艦渡來後朝廷の公卿中に於て唯一人開港論を高唱して常に國事に侃諤の意見を立て通されし、故權大納言侯爵醍醐忠順氏の男にして、賀陽宮大妃好子殿下の御兄君に當る青年の頃一條家に入家せられしが、中頃より同家を去つて洛北西賀茂の醍醐家の舊邸に閑居せらる。

山近く建てる邸の後ろには數百年伐木せざるやに思はるゝほどの森林が幅東西に約半町長南北に二町ばかり續き、大樹鬱蒼として繁茂し奇樹亦少からず、老樹朽ちるにまかせ長幹倒るゝに委す、邸は藁葺にして材は三百年前の建築にかゝり質素なるも頗る風雅の趣あり、翁は庭園調度總べて煩鑽の人工を加ふるを好まず、庭樹も枝の張るに任せ、調度は室内に自然に備へらる些の飾體なく、無爲安泰にして、すべてが徒然草著者の趣味に合するが如き風情なり、女性としては淺倉米子刀自ありて翁の身邊に侍り、外に下女一人ありて薪水の勞を承る、職務なく世と交渉無ければ、訪づるゝ人とては甚だ少し、翁は殆んど世捨人なり、隱者なり、されど翁は世を厭はず人を愛し、神色洋々和氣藹々、逍遙として人生を樂み、修短化に隨つて盡くるに任せんとするものに似たり。

而かも翁は多趣味にして、謠曲、大かは、小づゝみのしらべ、養雞、養蜂、養禽、河鹿の飼育、銃獵、川漁等いづれも其道に堪能なるも、一として執着の深きものなし。謠曲の音聲は强からずして曲雅、聲量亦天授にまかせて匠氣なく、四邊の鳥聲と相和し、大かは、小づゝみの音も頗る冴えて寛の水の音と相親しむ。數羽の雞は食用の卵を得るがために飼はれ、數十の巢よりの蜂蜜も翁が年中の濕喉の湯に溶くるものなり。小鳥河鹿の餌拵へは翁手づから之を試む、川漁の扮裝は頗る無爲にして田夫野人と見まがふばかり、銃獵のいでたちは翁の風采の堂々たるに似付きて三軍の帥の如し、或は室内に横臥して新聞紙と相親しみ、或は邸外に散策して一枝の花を手折る。春光に浴して悠々乎たり、秋風に嘯きて自ら適す、盛夏樹陰を訪ねて凉を取り、嚴冬屏障を建てゝ爐を擁す、來り遊ぶの客は忽ち桃源の人となり、武陵の民と化し世事を遺れ、終に亦歸るを忘る。

余翁の許に遊ぶこと茲に六春秋素謠を翁に學び時に亦小鼓を米子刀自に學ぶ、興に乘ずれば日を重ねて通ふことあり、家事愈忙の時は月を越えて訪はざることあり、翁も刀自も始終快く余を敎へて倦むことなし、行くこと頻りなるも厭はず、疎遠に過ぐるも些の慍色なし。到れば時に賀陽宮家よりの御使者と會することあり、又佐紀子女王の御來遊あるを拜することあり。又或時は大妃殿下の御しのびありしを聞くことあり。伏見、梨本、賀陽、各宮殿下の茸狩に御來遊ありしことを耳にすることあり。

近者青年洋畫家太田喜二郎氏白耳義より歸朝して西賀茂にあり、翁の人格、翁邸附近自然の風色に憬れて日夕邸の内外に遊ぶ、内にありては翁に謠曲を學び、外にありては自然の風物を寫生す。是に於てか翁亦太田氏につきて洋畫を學び翁自作の畫額數面その居室に掲げらる、翁の肖像は太田氏が數日通ひて畫きたりし丹誠の作にぞある、

さてこの太田氏といつば京都上京中筋通大宮西入太田喜三郎氏の實弟であるが、氏の實父が存生中、喜二郎氏に家督を相續させたき希望を有してゐたので、孝心ある兄の喜三郎氏は、父の死後弟に家產を讓る計畫であつたけれども喜二郎氏は趣味的生活に入る事を欲して家の相續を避け、兄に願つて東京美術學校に入學して、西洋畫の研究を志したのである。實兄は弟の切なる希望を容れて兎も角も入學を許可した。依つて其學資金は惜げもなく送付したが喜二郎氏は無益の事に金錢を消費せず、專心一意藝術の修養を勵んだから、上達進步著しく、敎官よりは天才を以て將來を囑望せられた。同校敎授黑田清輝氏の如きは最も熱心に喜二郎氏の洋行修養を勸めたので、喜二郎氏も素より希望の事とて之を決行せん事を欲したけれども、令兄は氏を家の相續者と定めて居るから許すべくもない。そこで黑田氏は喜三郎氏を東京に呼びよせて勸說し、喜二郎氏も亦懇願をしたので、兄も遂に意を枉げて又々其希望を容るゝことゝした。兄喜三郎氏は東京に行つて永く會はざりし實弟の弊服破靴の勉學姿を見て深く感動したといふ卽ち喜二郎氏は兄より贈られし學資金は眞に學資として善用し、且兄に家督を讓り度き誠意から自己は趣味的生活に志して學資を出來得る限り有効に利用して衣食の費に濫費せなかつたといふは何たる美談であらうか。兄弟相懷ひ相助くる情誼、義を踏んで人慾に染まなかつたところ、之を聞くだに愉快である。余は如上の事を京都日出新聞記者村上文芽氏(川村曼舟畫伯の實兄)から聽いて其心事の潔きに泣いた。

喜二郎氏渡歐して、白耳義國、ガン市のエミール、クロス翁につき研鑽數年、翁は弟子の入門を拒絕して居たにも拘らず太田氏の熱心と其藝能を愛して全力を傾けて指導せられたといふことである。

太田氏歸朝後自己の作品を文展に出品すると忽ち選に入り、入選數年打續きて其實力は終に世に知らるゝに至り今回は帝展の審査委員に推擧せられた。余は醍醐邸に於て氏の作品のかず〳〵を見たが、用筆極めて粗放、接近して見ると寫生物の形體が分明せないが距離を隔てゝ視ると眞にせまるのである。氏は一昨年來醍醐邸近傍、堀川氏の留守宅に來住し昨年は其居南方の畑地を買得して洋風の書室を建てた。これ片田舍の一奇觀であるがさすが美術家の意匠に成つた建築とて、其書室は農村の自然とよく調和してゐる。

尙ほこれは太田氏の言として村上文芽氏から傳聞した事であるが、歐洲大戰亂に獨逸軍が白耳義國を突破蹂躙して佛國に入るに當り、藝術家の多くは各其作品を或は携帶し、或は地中に埋藏して避難したるに、太田氏の恩師は多年の作品を其儘書室に收めたまゝ、遺棄して避難した。然るに獨逸軍は其地占領後、番兵を置いて其藝術を保護してゐたさうだ。この一事は獨逸もさすがに文明國として賞讃特記すべきである。

抑もこの藝術界の奇人が醍醐翁に親炙することの深きは、翁の漂逸無私恬淡無爲の風格を慕へるものならむか。

翁は極めて平民的の資なるも人品おのづから高ければ田夫野人も翁の德に懷きて殿樣々々と呼びて尊敬至らざるなし。

翁、後陽成院天皇御自筆の源氏物語全部一箱を珍藏せらる稀代の珍寶なりといふべし。

（八、一〇、一一）

二五、文學博士　谷本富氏

（光悅會を設立なさい）

谷本富博士梨庵と號す、もと京都帝國大學文科大學教授で教育學講座を擔任して居られたが、其該博な頭腦は單に教育學的眞理を討究するに止まらず、文學に史學に哲學に宗教に造詣深く、いづれも豐富な智識と剴切なる見解を有して居られるので、學界に於て羽振りの尋常ならざるものがあつた。

余は時々博士の演說を傍聽に出かけたが、其辯舌の爽快流暢なことは該に所謂立て板に水で長廣舌も些の淀みなく滔々として辯じ來り辯じ去るところ、眞に懸河の辯で、尙且傍聽中に於て博士の意氣の旺盛なこと、記憶力の非凡なることに驚嘆せざるを得なかつた。

一夜博士が京都市會議事堂に於ける演說の眞最中、晝を欺くばかりの電燈がプツと消えて場中忽ち暗黑世界と化したのに博士の辯舌に何等の變調を來さず、話序整然一糸亂れず。博士は暗中に一心不亂に演說を續けて居られたが、暫くして復た明るく成つた時にも、矢張少しの變調もなく神色自若として辯じ立てられて居たのには、聽者一同無言の裡に舌を捲いて感嘆した事があつた。

しかし博士に對する世評は、さほど善くは無かつた、それは尤も學識の方でなくて人格を是非云爲した人があつたのである。かの乃木論を大阪每日新聞紙上に發表せられてから、甚しく世人の惡感を沾はれたのは遺憾に堪へない。大正元年澤柳政太郎氏が東北帝國大學總長の職から、京都帝國大學總長の職に轉じて來て、間もなく學內の廓淸を名とし、七博士に辭職をせまつた時、谷本博士も其中の一人として、已むを得ず辭任せられたのであつた。

當時博士は京都新町中立賣下ル西側の少し入り込んだ廣濶な家に居られたが、ちやうど其時、（大正二年夏）鷹峯光悅寺に於て、光悅木像の模刻を計畫してゐた時で模刻費が百圓もかゝるから、當惑の體であつたので、嘗て余は博士が光悅寺に來られ「光悅のためには筆を揮はねばならぬ」と言つて居られたことを、光悅寺住職から聞いて居たから、兎に角博士に相談に行つて見やうと、博士の門を叩いた。博士は快く面會せられて左の如く敎へてくれられた。

それは至極善い計畫である是非貫徹なさい、光悅の像を模刻するばかりでなく、林羅山の鷹峯記なも內藤さん（湖南博士）にでも揮毫を請ひ、元政上人の太虛庵記も八洲氏（島山運成氏）にでも揮毫してもらつて同じく光悅寺の什物としたならばよからう。いづれにしても金のかゝる事であるから、光悅寺と鷹峯青年會と、鷹峯村內の有志者とで光悅會を組織して汎く天下に有志を募るべきである。さしづめ京都市內の美術家、實業家等な說くが善い。光悅のためにならば力を盡す人は少くなからう。

余（博士）も今迄の身ならば一臂の力を惜まないが、余は今回大學の職を辭して他へ移住する積りだから殘念ながらお構ひするることが出來ぬ。しかし先年余は島文次郎、湯淺半月、高安月郊等の諸氏と光悅寺に詣で、寺內が荒れて居つたのを見て、同行の士と共に慨したのであつたから、ともかく、島、湯淺の兩氏を訪問せられたい。

とて島氏の居宅を敎へて下さつた。其時博士宅の客間に西郷南洲翁の筆蹟の大幅が掲げられてあつて、墨痕淋漓たる雄壯な文字は宋の岳武穆其まゝの書風であつた。

依つて島氏に往つて語つたところ、島氏も亦同感で、島氏の紹介で神阪氏に會つて終に光悅會の成立を見るの運びに至つたのである。

かくて光悅會の成立がいよ／＼確實と成つたので余は光悅寺住職と光悅寺檀家總代松野氏と三人同行して、博士の宅へ挨拶に往つて「御示しの通り實行致しましたら光悅會が成立しました」と告げたら、博士も殊の外喜ばれて、光悅會の發起人として名義を出すことに快諾せられたのであつた。

其時博士又更に曰く

> 讃ふ努力せられよ、今後此一事を導火線として鷹峯の地乃至他方面に對して、公共的事業が、どの位發展するか、伸びるだけ伸ばし、廣がるだけ廣がらせられたい。

といはれたが余は其時博士の先見と積極的進歩的敎示に敬服せざるを得なかつたと共に道がに敎育學者たるの名に背かないことを感じた。

やがて博士は、攝津武庫郡精道村字蘆屋に引越されたから爾來書中によつて、會の經過を報ずることゝしたが、いつも大欣びで、光悅會から博士に光悅觀文章を依頼した時にも「光悅の眞價」と題して一文を寄贈せられた。

大正六年春、又有志者の贊助を得て名妓吉野の寄附した吉野門（數年前倒壞したもの）を鷹峯常照寺に再建する計畫を立て吉野會を組織した時、余は又博士に報知し、且吉野會の材料を尋ね合せた博士の返事は

> 拜復春寒今尙料峭之處愈御淸康奉賀候特に光悅會道々好結果之上今又吉野會御組織之氣運に向ひ候趣滿足無此上存候乍序大賛成可仕候但し史傳材料や遺物の事は乍耻毫許も心當無之これは高安月郊君の墳墓と存候尙且同君を介し東西名優の贊助を御求めなされ度美姫の靈も地下に感泣可致存候如何小生も其中春陽之頃一度曳杖御模樣相見致候上更に光悅と吉野太夫の一文執筆新聞紙上に披露致度存候近頃多忙兎角御無沙汰御免被下度亂筆多謝々々時下御自愛專一奉存候匆々以上
>
> 大正六年二月念六　　谷本生
>
> 光悅寺和尙始村長其外へも御序之節宜敷御致聲被下度候

博士其後筆舌多忙にしていまだ來鷹の機會を得ないのは遺憾である。博士の性格は極めて磊塊豪壯であるのに其筆蹟は博士の風采に似て瀟洒縹緲たるは不思議である。（八、四、二五）

二六、「水戸學」の著者　茶伯　高橋箒庵氏

（光悅も地下にて「これは一番出來したり」）

高橋義雄氏箒庵と號す、常州水戸の人、嘗ては大阪三井銀行支店長や、東京三越呉服店の店長たることがあつたさうである。文學美術に趣味高く茶道に造詣が深い。常に絹布を纏ひ、黑縮緬紋付羽織に仙臺平の袴、襦袢の衿さへ模樣付のものなるに於て、其艶なる容姿は一見女流のやうであるが、性豪邁濶達、機鋒鋭峻、自負自信の念甚だ厚うして、天下英雄在眼中といつた風で、人をして天晴の利刀たるを偲ばしめる。光悅會成立以來光悅寺に茶會ある毎に東京から態々參會し、兩日にわたる茶莚にも缺かさず來鷹せられる。而して必ず祇園杉の井の女將を連れ具して、何かに女將を使役し、女將は旦那樣々々と影の形に副ふが如く侍してゐるから、知らぬ人は氏の妻女かと思ふのである。氏はいつも上客であるが、それは其筈氏は光悅宗の大家であり、

且光悅寺茶會の肝煎土橋仲選氏と懇意でもあるから好意的に來遊もせられる譯で本阿彌庵の如きは其繩張りをはじめ、建築設備みな氏の意匠によつて出來上り、大正五年十月二十五、二十六兩日の同庵席開きには、箒庵氏受持ちで、自ら秘藏の珍器佳什を齎して客人を接待せられた事さへある。

其二十六日しばし余は氏を同じく鷹峯の景勝、千束の讃州寺に案内したが、雪佳、仲選、杉の井の三氏も同伴せられ、五人連れで往つた。光悅寺と同寺との間、行くさ歸るさの氏の態度は、いと倨傲であつて、誰が話しかけても「はアー、はアー」とばかり空嘯き、時をり「さうか／＼」と合槌打たる。讃州寺前山の眺望は少なからず悅に入つたらしく、庫裡の椽端に乘り出で、あぐらを組んで、「これやーい／＼／＼」とばかり獨讃自賞の體であつた。庫裡の床の間には、白隱禪師の描いた箒の繪の幅が懸けられてあり、其讃に、これも白隱自作の

> がらざとりはき散らせとや竹箒

と書かれてゐたが、住持の小田垣師が、態とならで聲高に其讃を讀み流したところが

箒庵氏

「いや今日推參した者は皆此の箒の先にかゝる

連中でござる」

と平氣に遺つて退けられた所は如何にも立派であつた。

氏は又昨年吉野會のために、これも土橋老寄附の常照寺内遺芳庵（吉野茶屋）の設計をせられた。これはまことに善く出來た。其三坪足らずのいと狹き庵は、あら〳〵しき木材もて屋骨を組み、屋根を杉皮葺とし東面に圓形の窓を穿ち、窓の下半坪に床を作つて一枚の青疊を敷き、他は土間にして南西の壁に添ふて腰掛を廻らし、以て北方の風致をながめる趣向である。其甚狹隘にして且粗笨なる、これ廢れた同寺の境内に應しく、荒れたる本堂及庫裡さては開祖日乾上人のさゝやかな墓堂と布置權衡頗る妙を得て居る。余は遺芳庵の設計を見て氏が意匠家としての價値はともかく、本阿彌庵といひ、遺芳庵といひ大體に通じた設備なるに於て、善く氏が物の大局に着眼し得る人たることを看取せずには居られぬのである。

氏に「水戸學」といふ著述がある。近年又「大正名器鑑」を編著せられつゝある。「東都茶會記」も引つゞいて筆を執つて居られる。大正年間に於ける茶博士を以て自ら任じ世も許せる氏の如きには好著述であると同時に、日本一の茶道樂たるからには、光悅寺の如き大茶莚には來ずに居られない譯でもあり、氏の出ねばならぬ舞臺でもある。

東都茶會記條三輯上卷に「光悅の作品」と題し又同下卷に「鷹峯光悅會」と題して所見を述べられてゐるが、全文光悅の偉なることを賞揚して餘蘊ない。其結論の末尾に左の記事が載せられてゐる。

〔東都茶會記第三輯上〕○光悅の作品

王政維新後已に五十年近の星霜を經たり昭代の文化は當に大に其光彩を發揮すべき時なり此時に當つて美術工藝家をして前途の窮狀に立ち長く墮落の底より浮み上ること能はざらしむるは果して何人の罪責ぞや、斯くの如くして現代に光悅其人の如き大家を出さむとするは、豈理不卷の望ならずや、余は此等の救濟法につき年來懷抱する宿論あれども姑く之を他日に讓り茲に光悅の人と爲りを記して其作品の由來する所あるを示し以て聊か現代の美術工藝家を覺醒せむと欲するものなり

〔同　第三輯下〕○鷹峯光悅會

今や工藝美術家の墮落極點に達し、其生命たる精神の修養につき何等顧慮する者無きに當り、光悅の崇高なる人格を慕ひ、其精妙なる作品を愛してこゝに光悅會を設立し、彼れの遺物を尊重し又其遺跡を保存せむとするは、彼の墮落せる工藝美術家をして其本に返つて修むる所を知らしむるものにして誠によく勉むる所を知れりといふべし、

と以て氏の光悅の人格を慕ひ、其作品を貴んで居らるゝことの尋常でない事が解せらる。

又同茶會記第六輯「鷹峯遺芳庵」の條に、山縣老公の鷹峯に關する述懷がある。

（上略）唯甚遺憾なりしは滯京中の山縣老公が未だ鷹峯を遊覽せられずと聞き余は當日（大正七年四月二十一日）公の臨場を乞ひ置きしに、微恙の爲め來會したまはず鷹峯の風景に對する公の高評を拜聽する機會を失ひし事卽ち是れなり、然るに當日夕刻歸宿して見れば、公より一書に接し居り、其中に昨曉より俄然宿痾相發し、遺芳庵茶會に參列不致は如何にも遺憾此事に候峰腰一首左に

心のみ行きては歸る鷹ヶ峰
　のこるかほりを偲ふまとぬに

尙同六輯「光悅茶會」三井松籟男釜かけの條に

「自ら竹花生を切つて之を使用したる大見識、松籟男なら　な到底及ぶべくもあらず、光悅も地下にて是れは一番出來したりと微笑を含めることなるべし」

此一語は、光悅の茶人としての風貌が恍として見えるやうである。

「東都茶會記」は現代の茶道や一部人心の趣好や上流社會に於ける人情風俗、さては現代思想の一端を窺ふに足るべき好資料であるが、しかし又、氏の平素抱懷せる精神を茶趣に托して吐露描寫し世の廓清向上に貢献せむとする氣分も亦ほの見える。（八、八、一三）

二七、工業博士　田邊朔郎氏

工學博士田邊朔郎氏は京都帝國大學工學部教授で嘗ては工科大學長をも勤められたことがある。故男爵北垣國道氏が京都府知事時代に琵琶湖疏水開鑿工事を計畫せられた時、其設計に功があり、終始其事に携つたのは同博士であつたから、同男と博士とは切つても切れぬ間柄となり、遂に男爵の令孃を納れて室とせられた。靜子夫人は卽ちそれである。京都岡崎疏水河岸に北垣男爵の銅像が立つてゐるが尙博士の同像をも建設するとよいのである、博士の令息は揃ひも揃つて秀才で、長は秀雄、次は主計又其次は多聞いづれも我國古英雄の名に因んで命名せられたらしい、余は京都市錦林校に訓導たりし時三男の多聞氏と二年あまり附き合つた。實は教へたのであるが、余の無學無藝は徒らに人の子を害なつた譯であつた。それであるから博士及同夫人は時々學校に來られたことがあつて談じ合つたのであるが、好紳士好夫人で人

格の高げな人であつた。多聞氏が卒業した時に、靜子夫人は態々鷹峰に來車せられて鄭重な禮言に恐縮した事も記憶してゐる。遊びに來よといつて下さつたけれども余禮節に疎くして一度も訪ふたことがない。大正七年四月二十一日吉野會大會の節、博士夫妻同伴鷹峰に來遊せられた。余ははじめ博士と氣付かずして、能く見た人だ寫眞で見た人かね、郵船社長の近藤男爵でも無い、誰だつたかねと思ひ出せずに苦しんで居たらふと令夫人が目に付き御駱駝と分明して、夫人が多聞氏に似てゐる所から思ひ出した。よびかけて光悅會の會則を一部呈上に及ぶと、御兩人は其儘太虛庵に急がれた。

關門海峽もいよ〳〵海底鐵道によつて長門の彦島から、豐前の大里に出ることゝなつた。此隧道開鑿工事も同博士の設計で出來るのか此程時々新聞紙によつて報道される。（八、七、一〇）

「櫻時雨」の著者 二八、高安月郊氏

（光悅は眞に人生を味つた）

高安月郊氏本名は三郎、文士として文學界に知られてゐるばかりでなく、美術の鑑賞家、批評家として藝術界にも知る人が多い。殊に氏は文藝上に於て、種々脚本の創作に成功し、藝術上に於ては光悅の美術に特異の尊敬を表して居られる。光悅會創設發起當時、余は島華水氏の紹介で、氏の賛助を求めたら、左の返事を寄せられた。

光悅會御計畫の趣結構申す迄も無く候へ共故翁の志にたがはざる樣御注意なされ度候小生も分相應物質より精神的一助として蕉詞一章手寫して寄附致すべく候取りあへず貴答まで草々

九月九日（大正二年）　高安　三郎

大正三年春終に一文「太虛庵主人」を草して光悅會に寄贈せられたが、四年夏、余同會の用務を帶びて東上の際、氏を本郷區西片町十番地の邸に訪うて、光悅に關する感想を叩いたら、氏は腹藏なく光悅論を陳べられた。

〔月郊氏光悅談〕

一光悅は書の技術に於ては、自ら松花堂に一歩を讓つてゐたやうだが、一派の祖となつて、我國の美術界に貢獻した功績は遙かに松花堂に勝つてゐる。

一俵屋宗達の畫は、精粗共光悅のそれに、酷似してゐる。宗達が光悅に親炙して居たことの證からさることが、偲ばれると同時に、光悅の後世に及ぼした影響の大なることがわかる。宗達は光悅に比べると人物が小さいから、其作品は何處となく見劣りがする。

一終に親炙せなかつたけれども、兎に角光琳は光悅の先導によつて、其天才を遺憾なく發揮し、光悅は光琳の出た爲に、獨特の畫風を大成した。光琳は純藝術家だけ、藝術に於て光悅よりも進化してゐるけれども、人格の人としては、光悅に追隨が出來ない。其優劣は人によつて評を異にするが、月郊の如きは、光悅に對しては最上の敬意を表するものである。

一酒井抱一は其技巧に於て、光悅光琳の跡を追ふことが出來ても風格氣品に至つては及ばざること遠い。

一光悅の藝術に艶乏しい觀あるのは、異性との關係が恬淡であつたが故では無からうか、光悅に大なる感化を與へたのは母の妙秀であつたが、それは多く人格の上で藝術の上ではない。其外の女姓は何の効果も無かつたが、併し艶乏しい代りに高潔である。光琳も派手ではあるが、幽艶でない。抱一は艶たつぷりであるけれども亦熱烈でない。

一光悅は伊太利のレオナルド、ダヴヰンチに似てゐる、多技多能而かも藝術より人格の偉大な點に於て西歐してゐる。けれどもレオナルドは終に不遇であつたが、光悅は好運であつた。其差違も亦作品に現はれてゐる。

一光悅の藝術を見ると、又其時代の元氣の充實してゐるやうに見ゐる、舟橋硯箱の蒔の盛り上つた所など常人は唯技巧と稱する所だが、そこに積極的な元氣の横溢を認めることが出來る、多く消極的に傾く日本人の作品の中に於て、外國にほこるべき千古の逸品といべきである。而かも光悅の如何なる作品を見るも全力を盡して拵へたものとは思へない。その悠揚として執着を離れた眞に高尚な人格の餘韻と思はれる。だから其味は千古に盡きずして悠久である。近代の藝術家は全力を盡して作つても一時的のものたるを免れないのが多い。技術の新舊に汲々として、先づ人格を修養せないからである。

一光悅は純日本的一派の藝術を創始して我國の美術に貢獻し世界に對しても異彩を放つたばかりでなく、今日諸種染織物の圖案に應用せられて我國富の增進を見つゝある功績は其當時の政事家武將の比ではない。

一同時代に於て都の四隅に四高士の高嘯して居つたことは兎に角奇觀である、丈山は東北の一乘寺に、光悅は西北の鷹峰に、松花堂は西南の八幡に、佐川田昌俊は東南の薪村に、何れも社會の羈束を脫し、世間を睥睨して思ひのまゝに世を過した。就中光悅は昌俊の如く默々たらず、丈山の如く偏狹ならず、松花堂の如く抹香臭くなくて世に卽かず、離れなかつたのは中々に能く出來たもので、唯其天分の高いばかりではない。

一東京帝室博物館に在る光悅作茶碗銘鷹峰は禪味を帶びてゐる、かの茶碗で寂を喫した光悅は、技を喫して非業に斃れた利休よりも眞に人生を味つたものであらう。

大正五年十二月吉野會を發起した時にも氏を發起

人に推薦するため依頼狀を出した所が、又快諾せられた。

御申越の旨承知致候俗務煩累なくば、就中吉野の墓元の地へ御戻しなされ度候

大正五年十二月二十日　　西片町　高安　月郊

また氏は名優片岡仁左衞門、中村歌右衞門、兩氏等を吉野會に入會を請ふべく紹介せられた。

〔高安氏書簡大正六年二月廿日付編者に寄せられたるもの〕

よしの會主意書落手致候心當の向へ傳へ申すべく候中にも片岡仁左衞門、中村歌右衞門は丁度御地南座に出演中に候へば直接御勸誘然るべく紹介の名刺入れ置き候其外座元大谷も同座芝雀は大阪南區難波新地五番町我童は南區相合橋詰ついでに御出向なされ候方有効なるべし取りあへず右まで

矢ろ

〔同　同年三月二日付
同上〕

御手紙拜見仁左衞門、歌右衞門最早歸京之由さては此方より主意書まはしてもよろしく候へ共それのみにては覺束なく候はん直接御勸誘が何よりに候されどわざ〳〵御上京され候ても其甲斐あるか如何かは彼等社界の事に候へば御受合致し兼れ候

遺跡は御地小川頭に其茶室といふものこれあり若眞ならば詫注中より歸塋後のものか烏丸丸太町邊に其住宅の奥座敷といふものあり天非殊に凝りたるものに候　また西陣某氏に其三味せんあり蟹の盃は二條の藥屋にあり（圖は曲亭一夕話叢草雨談に出で居候）いづれも其名を忘れ候岡本氏加藤辨氏承知かも知れず西行庵に其障子御座候尙思出し候へばまた御しらせ申すべく候以上

矢ろ

片岡仁左衞門、同千代之助兩氏は終に氏の紹介によつて入會した。氏の著した脚本集中の「櫻時雨」には光悅と吉野の關係が面白く記してあつて、光悅のさばけた所、吉野の賢貞な所が、寫されて床しい。

余は氏を其自邸に訪ふたこと二三回なるも氏年齡四十歳前後か五十歳前後か判りかねた。氏に問ふても笑つて答へなかつた。しかし舌も筆も共に達者な人たることを認識した。氏の家に音樂に堪能な方がある。令妹か、令孃か。（八、二、二二）

元、御歌所長
前、一德會長

二九、男爵 高崎正風氏

元京都市正親小學校々長泉本氏が同校々訓の基礎たる「正親勇」の三字の揮毫を、學習院長乃木大將に依頼方を余に委囑せられたれば余は親しく將軍に見へて懇請したりしも、辭意動かすべからざりしを以て更に同氏の依頼によりて、御歌所々長一德會長男爵高崎正風氏に懇望することゝはなりぬ。當時余は本郷より神田の下宿に移らんとしたる時なりしが、明治四十四年三月五日東京市外豐多摩郡の某村に高崎男爵邸を訪へり、男不在、家扶曰く主人は葉山別莊より轉じて今、岐阜にあり今暫日岐阜に滯在の筈なりと。同月二十六日又訪ふ、男歸邸して在り。親しく余を應接室に引見して來意を問ふ。是に於て余は依頼の事項を談じたりしが、男爵耳遠し。邸外に洩れ聞へんず音聲張り上げて語りしも、尙ほ通ずる由もなかりければ男は女中を呼び聽音器を取り寄せ、「請ふこれを用ひよ」と是に於て男は

圖の如き護謨管の尖端を兩耳孔にさし入れ、余は電話口の如き一端を口邊に採りて談ず。茲にはじめて來意通ずるを得たり。男曰く頃來余は病氣のため醫師よりの差止めにて一切揮毫を拒絶し御歌所に於ける　陛下の御命以外は筆を執らざるなり殊に大字は病身の堪ふる所にあらざるも、事教育に關する殊勝の計畫に屬せばとて特に懇請に應ずべく肯諾せられたり。

四月一日絖地五尺を購ひ大硯と大墨とを用意し男爵邸に到り更めて揮毫を請ふ、家令の言はるゝまゝに余は墨磨りを了り一室に待つ、茶菓運ばる又繪葉書帖をうづ高く積み重ねて揮毫待つ間の余が無聊の消閒に供せらる。帖に挿入せられたる內外各國の繪葉書は頗る多種に亙り、人物、風景、博物、地歷備はらざるなく美麗亦云はん方なし。時に余は男爵の揮毫を參觀せんことを請ひしも、平素揮毫の際一切人を遠ざけ居ればとて、許されざりしが。程經て家令の方出で來られ見事に揮灑を了せられたりと。更に布面の乾くを待つこと少時、終に之を請け拜謝して歸る「正親勇」（大字）「從二位正風之書」（中字）の大扁額は其後正親校の講堂に掲げられ、日夕同校兒童訓育の資となれり。

高崎男は明治大帝の崩御に先だつて薨去し乃木大將は大帝永劫の御幸を慕ふて薨ず。兩忠臣の前驅と殿衞、とこしへに大帝の登遐を飾るものならむ。（七、一二、一四）

三〇、自在庵主 高見祖厚師

附　奇僧　水野梅曉師

高見祖孝師、本名は愿、林泉と號し、又廣川といふ、書及詩などの落欵には林泉を用ひ、和歌には廣川を用ひらる。熊本の國學者故中島廣足翁の高足にして和歌は自由自在數首立ちどころに成る漢學にも造詣淺からず、もと、熊本藩家老に次ぐべき門閥なりしが、故子爵井上毅氏と親交ある廉を以て、職を宮內省に奉じ、後辭して紫野大德寺中高桐院境內に自在庵を結び、圓頂して佛に歸し、風月を友とす、禪學の素養亦淺からざるにや大德寺管長及同寺塔頭の高僧と親しく、建仁寺竹田默雷師、本願寺故赤松連城師等とも道交あり、大德寺僧堂の師家昭隱老師は篤學の聞えある人なれば毎日曜日自在庵に於ける師の經書の講義を傍聽せられき。元京都帝國大學總長木下廣次氏、故佐々友房、今時めける博士狩野直喜、同松浦有志太郎、安達謙藏、杉山茂丸氏等の諸氏は曾て鄉里にて師の教育を受けられしことあるものゝ如し。

余が自在庵の日曜講義をはじめて聽きたりしはすでに十五年前の昔論語の子罕篇にして師は論語全篇及中庸大學を繰り返し講義せられて、興味いや深く、日常禪益する所多かりき。師からだこそ鶴の如く痩せたれ心神健爽なること凡人の企及すべき所にあらず、光風霽月八面玲瓏之に接すれば涼風の面を吹くが如く、侍する者快味いふばかりなし。心神鬱結すれば自在庵に行く、忽ちにして心涼しく身輕し、これ豈に獨り余のみならむ、門弟子の齊しく感得したる所なりき。

師に親炙する者唯儒生のみならず、書弟子も亦多く敷島道の弟子も少なからず、しば〳〵歌會の催されしことあるを聞きぬ。思ふに自在庵ばかり訪客の引きも切らざりし所は稀なるべく、來る者皆「先生」と敬呼して恭色あり、師は施贈の厚薄によりて待遇を別たず、人物の優劣によりて稍應答の差違あるも、毫も公平を缺くの嫌なし。

師書畫骨董に目利あり。小道具屋の出入する者亦少しとせず、書畫の類も少なからず所持せられたりければ、或はこれによりて庵道を立てられしやも亦測り知るべからず。師ある時「余のはじめて此庵に來りし時は一椀の身邊に用をなすものさへこれなく、極めて不自由なる生活なりしが、今はおのづから餘裕あり、これ余が道心誠意の賜なり」と語られしことあり。

水野梅曉、富永成圓の二師前後師に隨身し情父子の如し。

水野梅曉師は備後の人氣宇濶達、非凡の怪僧で辯舌縱橫其心底、及抱懷は容易に解し難く或人は師を以て魔物とさへ稱してゐる。久方振りで師に會ふと、師は莞爾として「どうして居つた？」又は「いつ來た？」など言つて少しも頭を下げず極めて簡單であるがそれで立派に通る。炎天に汗を流して勞働せる鄙夫に對し、師は一面識なきに「御苦勞だ〳〵能く働くね」と揶揄すると鄙夫は喜ぶ興湧けば談論風發、興醒めば虛心靜寂、或時は僧衣を脫して洋服をまとひ、又或時は羽織を着し、袴をうがつ、羽織袴の如きは素より臨時借用のもの、恬然として稠人密座の中に談笑する。

「天下は我が家なり、我れ何處に行くも窮することなし、水野の懷中今こゝに金八圓のみ、おれはこれにて天下を橫行するのだ」との豪語は明治四十二年の夏師が支那湖南省の長沙から東京に上る途上、鷹峰に過つて菩提瀑布に余と共に半日の暑熱を忘れた時、瀑下に於て余に語つた氣焰中の一であつた。

師がはじめて長沙に行つたのは今から十五六年前師の三十歲未滿の時で曹洞宗の一僧として布敎のために有志者の後援を得て堂々と乘り出したのである。

併し師の渡支準備の基礎は師が上海の同文書院に於て支那の國情及支那語を研究した時に出來たのは申す迄もない。

湖南に行つてからは潑溂たる活動を試み、湖南に於ける日本人を代表して居た觀があつて練習艦隊が楊子江を溯つて湖南に行くと長沙に招いて歡迎會を開く、福島安正將軍が湖南に行くと矢張盛んに歡迎宴を催す、余は撮影の寫眞を見たが、いつも梅曉師が中央に坐し、其兩側及後方に被歡迎者及淸國大官が居並んでゐる。

餘りにやり過ぎた故か、又布敎の方法について曹洞の耆宿と意見の衝突が起つた爲めか、他の掣肘を受けるのが蒼蠅い故か、曹洞の部內を見くびつたか師はいつしか曹洞僧籍を脫して西本願寺の法主大谷光瑞師と肝膽相照らす仲となつた。さも

あるべき事で光瑞師の如き豪僧でなければ梅曉師の如き横着僧を引廻すことは不可能であらう。さるにても宗門を換へることは變節であると一部の人士は批難をするが、師はさることに頓着する人物でない、何か深く信ずる所があるに相違あるまい。西本願寺の布教師となつてからも矢張湖南に於て活動をした。變幻出沒神出鬼沒の行動をする師は支那革命黨員を援助した嫌疑によつて歸國中明治四十二年の秋東京に於て警視廳に召喚されて官憲の取調べを受けたことがあつて、東京萬朝報は「奇僧梅曉」と題して師の支那に於ける活動振りを書き立てたことさへある。

師は近時多く東京々橋金六町西澤旅館に止宿してゐる。當年國民黨代議士中の所謂支那通は、師から支那智識を提供されてゐたといふことは西田君（北京公使館通譯官）から聞いたことであるが、在支中の大谷光瑞師の西本願寺に對する書狀（還俗狀とか）を日本に齎し歸つたのは實に師であつたやうで其後度々本願寺對光瑞師との關係上重要な任務を帶びて師はしば〳〵日支を往復した事もある。又今回大谷光瑞師後援の光壽會と相提携すべく東京に於て日東國士會なるものが發起設立されやうとしてゐるには、師が發起者の急先鋒であるらしい。

次に富永成圓氏は自在庵の顏回とまで唱はれしほどの篤學者であつたのに、不幸短命にして逝かれたのは惜みても尙ほ餘りある事である。

祖厚師は成圓師死後も自在庵に獨居して悠々自適徐かに天命を樂しむ所ありしが、大正三年夏病氣重體と稱して臥褥を高桐院にうつし門弟子相集まりて看護及來客の應接につとめ、師は豫め死の免れ難きを知り、故舊門弟子を一室に集めて告別せられしほどなるに、日ならずして小康を得られたれば、師は令息安治氏の懇願を容れ、肥前國島原に高臥せらるゝことゝなりて終に久しく住み馴れたる自在庵を後にして西海の方へと立たれたり師歸國後病氣全く囘復して溫泉嶽に登攀せられしことさへあるを耳にしたりしに、大正六年九月三十日何等凝滯する所なく立派なる往生を遂げられたり、享年七十五歳。同年十一月四日狩野松浦兩博士、西田作次郎、高橋長秋、野田義成の諸氏發起にて門弟子打集ひ高桐院に追弔法要を營み、昨年九月十九日一周忌を南禪寺塔頭天授庵に勤修し本年本月本日又高桐院に於て第三囘忌法要を營み遺墨を陳列せらる。陳列は書畫相半ばしたりしが就中和歌の一二を摘錄せば

島原に歸る別れにのぞみて
もろともにかたりかはせし友垣に
へだて行身ぞくるしかりける
七十二翁　廣川

海邊眺望
世をやすくわたりも行くかあま小舟
その日〳〵の風にまかせて
七十三翁　廣川

生前島原より余に贈られし手紙の末に
さま〴〵にうき世をわたる人心
わかれて後ぞしるべかりける

今日三囘忌辰の歌題は「閑庭虫」なりければ愚歌一首をよめる
おとなへばむかしながらの庵のへに
なきあとこふる虫のこゑ〳〵
（八、九、二七）

三、骨董商界の奇人　土橋嘉兵衛氏

（書畫骨董界に於て光悅といへば神樣のやうです。）

「燈臺下暗し」の諺に漏れず、余生れて三十幾春秋鷹峯に住するにも拘らず半頃の竹林を隔てたばかりの隣村出身で京都の骨董商界に於て覇を振へるのみか、日本のそれ業者間にさへ重きを成しつゝある仲選居主人土橋嘉兵衛氏を知らなかつた。大正三年七月八日京都倶樂部に於ける光悅會發起人會の席上、雨森蝶夢氏から「大宮村玄琢町の出身で斯々の人がある、一かどの俠商である」と聞いてはじめて氏の名を知り、それから數日の後、京都四條堺町東入南側、昔しは圓山應擧の邸址、新築されて幾年月も經ぬ土橋氏邸を訪うたのが氏との初對面であつた。

〔土橋氏〕
光悅會が茶室を所望せらるゝならば建てもしませう、茶席を會で築かれるならば、分相應金品の寄附をしませう、光悅の爲めにならば盡力を惜みません。茶道具商乃至書畫骨董商界に於て光悅といへば神樣のやうです。光悅會のためならば道具屋は申

すに及ばず、素人の大倉さんも金を出しませう、馬越さんも寄附をするでせう、益田さんも力を入れるでせう、フリーヤさんにも言つて遣ればこれも賛成でせう。私はフリーヤさんが京都に來られた時光悅寺に同道參詣したことがあります。壹萬や貳萬の金を集めるのは何の苦もありまへんやらう。

と極めて口輕、手輕に談じ去つた時、余は一體氏が本氣で言ふのか駄法螺を吹くのか解しかねたのである。

けれども氏の言は大體に於て眞であつて、光悅會は終に一致の態度で氏の茶席一建立寄附の篤志を容れた。依て氏は光悅寺内に一席を建て光悅會をして太虛庵茶室復興の一目的を遂げさせた。土橋氏は茶室が落成すると光悅會に寄附手續をする前に當つて四年十月二十八日先づ氏個人の名に於て席開きを成し京阪地方の紳士淑女を招待したら來會者は異口同音に氏の機略を賞した。

光悅會は引つゞき一致の決議で第一回光悅祭に光悅遺作展覽會の主任を氏に托したが、これも可なりの成功を收めた。

大正四年十一月廿三、廿四兩日光悅寺幷に松野邸に於ける光悅遺作展覽物目錄

一光悅翁寄進狀　小野道風筆法華經八卷　並に青貝筥共　本法寺藏

一光悅作月の釜　同

一光悅翁書簡　美濃坊宛　同

一和歌一首軸　同

（光悅紙、雲母下繪、此里に旅ねしつゞし云々の和歌）

一光悅翁揮毫觀心本尊得意抄壹卷　同

一光悅翁書簡十月廿九日付觀能に關する文　光悅寺藏（小寺實氏寄附）

一光悅翁書寛永四年一月一日試筆佛法流布祈願の文　光悅寺藏

一同　書簡角倉與一に宛てたる四通一卷　同（益田孝氏寄附）

一同和歌色紙壹軸下繪わらび哥問人も云々　同（山中定次郎氏寄附）

一同　下繪すゝき、桔梗歌わすれては云々　同（今泉雄作氏寄附）

一法華本尊軸光悅翁父光二が本法寺日通師より受けたるもの　同

一光悅翁和歌短冊二枚　同（木田貉次郎氏寄附）

一小堀遠州書簡光悅翁逝去の際光瑞に宛てたる二月六日付弔狀　同

一光悅書和歌軸下繪雲母すゝき　土橋嘉兵衛氏藏

一光悅翁揮毫始開佛乘讃壹卷　京都　蓮寺藏

一鷹峰光悅町古地圖幅　光悅寺藏

以上光悅寺（第一展觀所）陳列

一光悅翁書和歌短冊木枯の音云々和歌一首軸　神阪譽佳氏藏

一光悅作香合　山田嘉三郎氏藏

一同　書簡極廿八日付五郎殿云々　杉浦丘園氏藏

一光悅翁書古今集序壹卷　同

一同　謠曲文軸　同

一同　謝公擇男分賜茶之詩　藤田彌助氏藏

一同和歌卷物一卷五色光悅紙下繪藤薄　神阪譽佳氏藏

一同　同　山田嘉三郎氏藏

一同　同五色光悅紙下繪廉あぢさい山に月蝶藤外に一草花　同

一同　同　京都　林新助氏藏

一同　和歌　土橋嘉兵衛氏藏

一光悅翁書墨梅畫和歌一首　同

一同　書簡五月廿六日付一軸　江州淺見又藏氏藏

一同　同五月九日付一軸　松野知次郎氏藏

一同　鹿香合　土橋嘉兵衛氏藏

一同　釜　銘鷹峰太虛庵　同

一同　書三十六歌仙短冊屏風半双　同

一小島宗眞書和歌卷物一　角倉玄遠氏藏

一角倉素庵書同一卷　名古屋村瀨玄中氏藏

一光悅翁書朗詠春之部一卷下繪竹梅　京都山中定次郎氏藏

一同　赤壁賦壹卷　同　岡本橘仙氏藏

一宗達下繪光悅翁書和歌卷物　大阪戸田彌七氏藏

一光悅翁詩歌卷物　七十四歳筆　京都杉浦丘園氏藏

一同　書立正安國論壹卷　同妙蓮寺藏

一同　香盒　墓家之圖　同内貴甚三郎氏藏

一同　書畫色紙　松之圖　京都岡本橘仙氏藏

一同　茶盌　銘紙屋　山田嘉三郎氏藏

一同　蒔繪　鹿文庫　同藤田彌助氏藏

一同　書朗詠卷物寛永六年六月日鷹峰山太虛庵歳七十二　同矢代仁兵衛氏藏

一光悅書和歌卷物　京都富岡鐵齋氏藏

一光悅金泥和歌色紙　尾張森川勘一郎氏藏

一光悅書簡九通壹卷　京都神阪譽佳氏藏

一同　手紙文（習字手本）　同清水半兵衛氏藏

一本阿彌行狀記一部三冊（寫本）　同富岡鐵齋氏藏

一賜草　灰屋紹益著（寫本）　同松野知次郎氏藏

一謠本三冊　京都祖田淺次郎氏藏

一光悅翁謠本十冊　板本　杉浦丘園氏藏

一光悅本（伊勢物語）　同

一同　（宵開抄）

右之外省略

當日光悅寺は騷人雅客を以て埋められ、鷹峯空前の景氣であつた。

氏は一の茶席を寄附したのに滿足せず、春海一樹庵、服部集翠庵兩氏等と共同して、茶伯高橋箒庵氏に設計を請ひ、又も一席本阿彌庵を建てゝ寄附した。鷹峰光悅寺は終に日本一の茶會の道場たるの觀を呈し來つた。

評者曰くかくして濫りに雲根を動かし、仙界に加俗するは淸高なる偉人を追慕するの道でないと又他の評者は言へらく光悅の偉奇は世人既に之を知る。光悅寺を汎く天下に紹介し保存の全きを圖るに何の憚る所があると。更にそれら議論の外に超越して唯光悅を追慕し淸高な樂を盡して歸る人もある。

氏が每年の光悅祭に集翠庵、一樹庵の兩氏と共同して在釜を引受けるには、少なからぬ費用を要することであらうが併しこれがために氏等の商業上の廣告的利益は少なからぬであらう。土橋氏曰く「光悅の東京に於ける評判は非常なもので書畫骨董界に於ては神の如く尊敬してゐる、隨つて光悅寺の評判も著しいから東京よりの來會者は年々に增加するでせうが、茶の湯を外にして參詣者の多きを望むことは出來まへん」と言つてゐる。每年の光悅祭が京都の年中行事の一として三都及名古屋の風流界に重んせらるゝに至り光悅寺が天下に知れ渡つたのは氏の努力與つて功ありと言はねばならぬ。

氏は書畫骨董界の奇才で一面に於て貨殖に妙を得るが他の一面に於て公共的事業に惜しげもなく出資する。氏が商略に妙を得るのは氏の素質か將た修養か、氏が時々竹田默雷禪師を連れて來遊するのは師が氏の商業上の顧客か、また處世の師匠か。氏の赤星の入札の時に於ける活動も三都の同業俊豪の中に馳驅して隨分素晴らしいものがあつたさうで數日間東京滯在の費用數千圓に及んださうだが西歸して京都驛に下車し氏の宅に歸るまでの電車區二區域(乘車賃均一になる迄の事)を一區域乘つて一區域徒步で歸る氣になると言つてゐた卽ち京都に歸ると僅かに金貳錢を儉約する氣に成ると語つたのである。

今年の光悅寺茶會は去十一月十二日十三日の兩日に開催された、東京の益田男爵が太虛庵大阪の八木氏が騎牛庵、同大阪の戸田彌七氏が本阿彌庵を各受持たれたがこれ皆殆んど土橋氏の畫策に成つた。氏は當日の來會者に對して光悅會に入會を勸誘し入會者すべて三十餘人入會金約壹千圓に達した。凄い腕である。余は十三日午後に參會し庫裡に陳列してある光悅流派の作品を縱覽した。

光悅書和歌卷物——武藤山治氏藏外數點であつたが中には東京の富豪某氏所藏の僞物も見えた。

折節京都帝國大學總長が參會して居られた。荒木總長は土橋氏の案內によつて寺內を逍遙したり茶席に入つたりして居られた。

〔土橋氏〕

荒木さんあの茶席(太虛庵)に居られる鬚さんは益田さんの代りに來てゐる人です、偉らさうにしてゐやはりませう、あなたは鳥渡も偉らさうにせられまへん荒木さんは誠に善う出來たお方や(側の人を顧みて更に曰く)荒木さんは大勢の人の中へ出て演說でも祝詞でも上手です、荒木さんには感心する。荒木さんこちらへ御出でやす……御歸りには自働車で送ります。

と言つた風にモーニングで身を包んでゐる荒木總長を衆人環睹の中にあちらこちらへ連れ廻して親切に說明の態度無邪氣にもあり失禮にもあり豪快でもあり滑稽でもあるがこれ土橋氏天眞の發露である傍らに法學部大學生三人(野間種一郎、尼野良一、津田善作)あり異口同音に曰く「土橋は總長を馬鹿にしてゐるね」

荒木總長はさすがに總長で終始莞爾として嬉しげな面持で土橋氏の引張り廻すに任せて天眞爛漫おのづからなる態度は道がに腹の太げなものであり、高尙なものであつて包容力の非凡な所が見へた。(八、一一、一七)

文學博士

三二、內藤湖南氏と後醍院廬山氏

(光悅はそんな狹ま苦しい了簡で無い)

文學博士內藤虎次郎氏は、秋田縣の產、同縣師範學校出身の秀才で、尋常ならば小學敎師の職に安んずべきであるのに、穎悟篤學の資は氏をして終に大學敎授たり博士たらしめた。現時我國に於ける東洋史の泰斗であつて、支那に關する學識の豐富なことは、白鳥博士や、服部博士と共に現代の三家と目せられてゐるが、單に東洋史、支那史に精通せらるゝのみでない。國學國史に通じ、儒佛及書畫に關する知識の造詣も深くて政治、文學、

宗教、美術工藝等諸問題に對して自家の意見を立て得るのである。

特に近時時々刻々に變轉しつゝある支那の國情については、過去に徴して現在を知悉し、尙將來を豫知せらるゝことが、大體に於て正鵠を失せないのは卽ち博士の博士たる所である。

博士を度々其居宅に訪問する者は、二六時中殆んど來客の絶間がないことを感知するであらう。大學の講座を擔當し、新聞雜誌に筆を揮ひ、學事甚だ怠忙であるのに、訪客が學者であれ、學生であれ、政治家であれ、新聞記者であれ、詩人であれ、美術家であれ、神官であれ、僧侶であれ、書畫鑑定の依頼者であれ、揮毫の懇請者であれ、苟も博士を訪ねる者は博士は、之を坐敷に通す。對談には渾然たる和氣を以て客人に接するが、應接振りは極めて穩當で言語に過不及がない。來客が何か議論的の事を提出して大きく叩けば大きく響き小さく叩けば小さく響く、徹頭徹尾低頭せない傲れるやうであるが傲慢でない。又些の街氣もない、うぶであるか、修養の功であるか兎に角體用を得たものである。からだは五呎足らずの小軀であるけれども人物は大きい、鬚髯を蓄へて居ないが、顏面光澤に滿ちて圓滿の相を現じ眼光爛として威嚴がある。近頃白髮多きを加へて約五分の一に達した。態度は其書風の如く匠氣なく拘束を離れて安泰典雅落ち着きはらつたものである。其書風を見、其態度を見ると稍遲鈍であるかのやうに思ふが、文章は上手で辯口もまはる、文章や辯舌には隨分皮肉もあり辛辣も交じる。其辯舌は坐談よりも講演に適する。傍聽者の少い時よりも多い時が爽かである。先づ以て非難の無い人である。強いて非難をしやうならば無頓着な點である。

九時會合と定めて置いても十時に見へない。十一時そこ〳〵に悠々として來られる。夜ふけ、訪客絶え、人しづまれる時、卽ちこれ博士が亂帙を收めて五行並び下だし疑義を釋くの時であるから興にふけりて夜を徹すること珍らしくないのである。定めの會合もおのづから後れもしやう。文章の執筆や書の揮毫を依頼しても、拒絶はせられないが、中々出來ない。博士の承諾を得て居ることが、一年二年にして成功しないのは珍事でもなからう博士は忘れたのではないせねばならぬと思つては居られるのだらうが、忙しくて出來つこはないのである。

定めの時間に遲れても、依頼を受けた期限に出來なくても、博士は毫も辯解をせない。忙しいのであるが忙しいとは言はない。或は忙しいと感じて居られないのかも知れぬ。辯解を要する時でも沈默裡に片付けてしまつて對者をして釋然たらしめる。催促がましく言ふと「ハイ……ハイ……」と切り出す約束の期日になると忘れて居たことを思ひ出して、さも言ひ譯け無ささうにもじ〳〵せられる。更にいつ迄と日限切つても出來つこはない對手をして幾度空脚を踏ませても平然たるものだ對手も亦博士の天眞を看て宥恕して咎めない。蜉蝣の短命を無限永劫の間に寓する者としては要諦を得たものである。

光悅會が成立した時、博士は非常に欣んで、朝日、每日の大新聞を假りて汎く世に紹介しくれんとの好意で、朝日の後醍醐院氏、每日の東野氏、櫻田通信社主幹並に川島文學士等を誘うて、光悅寺に遊びに來られ、博士の配慮より、其翌日兩新聞紙は夥敷紙面を割いて登載さるゝに至つた殊に後醍院氏の如きは「史劇の舞臺としての鷹峰」と題し連日光悅や光悅寺のことなど登載せられたので、光悅會も諸方に聞え渡つた。

大正八年七月二十五日內田銀藏博士の葬儀に余は後醍院氏に會つたから舊稿の寄贈を依頼して置いたら

〔後醍院氏書簡〕

過日は久々にて御面晤か得嬉しく存申候給仕に命じて舊稿寫し取らせ御送申上候往年の舊記何となくなつかし湖南君に君が行くならと唆かされて參りし事其地の意外にも神寂びて洛內外隨一の名蹟なるを發見して無限の歡喜を禁じ得ざりし事など想起して懷往の感深し何れ秋にでも參りて今一度茶味を味ひたく存居候匆々

大正八年七月廿九日　　廬山拜

史劇の舞臺としての鷹が峰

後醍院　廬山

冬らしい冬の寒さが鷹が峰光悅寺の奥座敷にヒタ〳〵と襲うてくる、一つ宛小さな火鉢を抱き合つて內藤湖南君や川島文學士や茶屋四郎次郎の末孫君其れに吾々同業の一團か輪を畫いて、高村光雲の手を籠めて刻むだ、光悅の木像を撫でたり摩つたりする間に晝になつた、晝になつても谷から吹揚げる風は相變らず寒い、そして相變らず胴震がして堪らない。

締め切つた障子に松葉の影が落ちて居る、開けた時の寒さを思はぬでもなかつたが庭を眺めて見たさに、風と障子を開くと意外

にも庭が無い、只ニューとした松の大木が三本突立つてその向ふに光琳式に紺青を盛つた松山が見ゆる、谷川の流れの末に置物じみた水車が小さく見ゆる、心持左手へ向くと松山と竹林の間に一帶の寒霞に包まれた京都の俯瞰圖が展べられてある、冬枯れの今は最も枯淡の風光ではあらうが、濃淡の布置宜しきを得た此の畫霊に對して、微塵も寂しいと云ふ感じが起らなかつた、無論寒くもなかつた。此處に美術の聖光悅が起き臥して遙かに〳〵時代を超越した思想に獨り自ら培つて、その靈ある手腕を思ひの儘に揮つたものであらう、熱烈な努力を傾注する傍には、咽ぶに似たる松籟に心耳を澄ましつゝ、山の端に近く据ゑた薄暈の洗手鉢に口を嗽いで一服の茶に、そゞろ熱し切つた頭腦を冷したこともあつたらう、その遺跡の地に靜かに佇んで、彼等の友となり彼等の師となつて美術の泉を養つてくれた山下の大景に對すれば心底に何か知ら温か味が脈々と通つて來る、パッと一道の光明でも映して來るやうにも思はれる。

都離れた鷹ヶ峰なんぞの僻地に居然たる一城廓を築いて、德川時代の藝術に爛熟たる精華を咲かした事實は、どう思つても一場の夢幼劇だ、劇中のヒーローは言ふまでもなく光悅で、光悅を中心としてその母の妙秀は本阿彌一門に高潔な魂を吹き込むの傳說を殘した、又光悅の譽を更に高くして更に大ならしむべく光琳を出し、乾山を出し、光甫を出した、その間に京都三長者の隨一たる茶屋四郎次郎が御朱印船で世界中から掻き集めた黃金の花を此處に咲かした、時代の寵兒であつた鷹ヶ峰の當時はどうであつたらう、京の方からやつて來ると鷹ヶ峰の村端れに土堤がある、土堤の裏手がドンと深い谷合になつて居て本阿彌一門の城廓を守るべき堅壘となつて居る、之を過れば卽ち通り町筋で左手の取付が

間口十五間の光甫屋敷を初として二十何戸大厦がヅラリと軒を並べて居た、北から數へて四軒目が德川政府の御用商として御朱印船の船元として一世の豪奢を極めた茶屋四郎次郎の屋敷、間口二十間には過ぎなんだが德川家御本丸西丸御納戸吳服師として江戸に三箇所、京には小川通出水茶屋町に歷とした邸を賜はつてある所から判じて無論此處が別莊の類であつたらう、わざと本阿彌一門の間に挾まつて居た處から判じて或は德川家のお目附であつたかも知れぬ、偖その向ひ合つた東側には光悅屋敷の間口六十間を筆頭として左右には光琳、光榮、光益の屋敷が立並んで居て、西の道筋もその通り、都大路を遙か霞の中に見下した別乾坤に美術と風流とを恣にした彼等の榮華と得意とはどんなものであつたらう然し其も此も悉く茶の煙の夢と覺めて政權の疾風は土堤を吹き崩して了つた、茶屋四郎次郎の屋敷跡からは百姓がセッセと芋を掘つて車に積込んで居ると云ふ始末、そして光悅は、寺の庭先に蒸せる苔を衣にして碑となつて眠つて居る、不滅なるべく思はれた彼等の一切の榮華は亡びて、その藝術に籠めた力のみが不死の生命となつて今代に殘つて〳〵まつた。正當に云へば無論墓場であるが、光悅寺を出て三本の松の大木の下を繞つて、下草を切り拂つた寒林の間を光悅の墓に詣づる時、どうしても之が墓であるとの感じが起らぬ、向ふに聳ゆる鷹が峰一帶の連山を仰いで、寒い響を傳ふる溪川の流れを見下す崖に差掛つて庭の東南隅に光悅の墓がある、側なる古い石塔は生前親交のあつた板倉伊賀守の供養塔であるとのこと、三間ばかりも隔てた處に光二、妙秀の墓がある、一同手向の香華を捧げ終つた後、昔し在りつる法華堂の斷礎の上に佇んで飽かず四邊の風光を眺めた、例の三本の松は茲から見て如何にも一種の偉觀を呈して居て、文展物なんぞ足元に

も道附けぬ、光悅手植の松と呼ばるゝが是れで、又別に鶴宿りの松とも呼ばれる、嘉永七年七月六日の御所炎上に御兎內の鶴は悉く四方に避難したその中に二羽が此の松の梢に二晩宿つて再び禁兎へ舞戻つたさうだ、湖南博士はスッカリ此の靜寂な景色に降つて了つて此處に別莊でも建てたいと言ひ出された、それにしても光悅はどうして湖南君と同じ樣な眼で斯んな別誂への鷹ヶ峰を發見したものだらう、光悅の聲譽は夙から權現樣の御目に留つて、勃興の時運に際會した江戸の裝飾を鮮やかにすべく屈光悅を召されたことがある、然し彼の志は決して名利の巷にはなかつた、「いつまでも王城に住居して御用向の節は出府仕るべく候江戸表へ引越しの儀はゆめ〳〵有るべからず、足利御代より禁裏樣の御劍を淸め總ての御用を勤め來りし事何程か難有事にて候、關東の御憐愍も厚く御恩は海山深しといへども權現樣當代にて漸く二代なりゆめゆめ禁裡の御用を粗末にすべからず、日本國中は神の御末にて皆々禁裡樣の物なり」と云ふ大義名分の下に晏如として道を樂んだ點にどこまでも立派な人格を忍ばせる、權現樣の眼で勿論此の高潔な人物を見逃す筈はないので「京に住み飽きたりと申さば近江、丹波などより京都への道に用心惡しく辻切り追剝をもする所あるべし左樣の所を廣々と取らせ候へ」と板倉伊賀守に仰せあつて偖こそ鷹が峰の麓南北六七町の原なりしを光悅一門に拜領仰付けられた。

更に鷹ヶ峰の落莫たる冬枯を飾る色彩として吾等は出所を異にせる二人の女性を少しばかり追想して見たい、一人は光二の配妙秀女で今一人は例の芳野太夫である、この二人に就いての考證は昔から好古家に依つて記述されてあるから今更ら詮議するまでもない事だが、兎に角鷹ヶ峰の荒廢した村落に此二人の墓碑の草に

も埋もれずに現存して居るのはなつかしい、妙秀は何處までも嚴正な性格の裡に女らしい溫柔の情趣を包んで居た、夫を慰むるにも子供等を敎育するにも如何にも情理兼れ備はつた女らしく思はれる、石川五右衞門が洛の內外を荒し廻つて人心惴々たる時であつた、光二の留守中に土藏を破られて歷々の大名から預つてある刀劍類を悉く盜まれてしまつた、光二は變を聞いて早速歸つて來たが餘りの事に胸潰れて途方にくれて居る、特に大名から預り置いた刀劍の紛失、腹掻き切つて陳謝するの外はないと大いに悄れ返るを妙秀聞いて何のお大名ともあらう方が、光二に預け置いた刀の二本三本盜難に罹つたからとて何と仰せられませう、と世間に吹聽さしたものだから大名は勿論お小言なしに默つてしまつた幼兒を敎訓するに決して人中でわめく樣な事はせなんだ、ソッと土藏の中に伴れて行つて斯うしてはならぬ斯うしなさいと理詰の敎訓をした、又光悅の弟宗智の友人に三人の子まである女房が疱瘡に罹つて容色が衰へたからとて離緣してしまつたものがある、世間でも隨分やかましくそれを非難したが宗智は友情として其男を棄るに忍びずチョイ〳〵出會つて居たので、妙秀聞きて世に隱れなき畜生と交はるは畜生なりとて七生までの勘當を着せた、光悅の姉が尾形家に緣付いた時媒介人に欺かれた、何でも相當の家產もあるとの吹聽だつたに嫁て見ると赤貧洗ふが如し、光二大きに見込があればこそ嫁つた、今更歎がせ給ふことかはと言ふと、總じて慈悲深い女で子孫から貢ぐ色々の時服を一つ殘さず他人に施してしまう、知合のものが家を持つと何から何まで家具を買つてやる、年九十にして死んだ、手廻りとしては唐物の單衣一枚、

かたびらの袷二枚、浴衣一枚、手拭、紙子の夜具、木綿の布團、布の枕があつただけ昔も今も女に變りのあるまいに此の如く世に珍らしい賢女の性格はやがて光悅其他一門の人々の性格にも現れて風流な弄んでは能く三昧に入り藝術にかけては能くその神髓に徹底し得た次第である。

（中略）

村にある遺品を遺りなく觀廻る間に日は鷹が峰に沈んでしまつた、今一つ禪林を見物しやうといふので玄澤通りの淋しい夕をたどつた、此は學堂のある所で、その裏手に遊女芳野の墓がある、さしも一世の美と才とを謳はれた女も骨となつては田吾作、日乾上人、皆同じ姿の平凡石碑に過ぎなかつた、只その碑面に黑枠めいた輪廓のあるのをハイカラに思つた、遊女、名からして賤しむべきではないか、然し考へて見ると之も一種の覺めたる女に違ひない、今の世の覺めた奴は覺めて放縱に陷るが、遊女の芳野は覺めて放縱を離脫した、共に出發點を異にして居る丈けで兎に角覺めるには覺めた奴等だ「茲にさへさそな芳野は花盛り」廓の春の夕紅燈の下、絃歌湧くが如き間にチヤンと覺めてしまつて斯んな句を詠んだ女は灰屋紹益に受出されて後益々只の女として世を過さうとしたらしい、光悅の口入れでいよ〳〵芳野の念願遂つて紹益の正妻に祭り上げられた時、サー大變灰屋の親類一同の細君達は容易ならぬ騷ぎを始めた、何でも日本一の美女とあるからは此方でも飾りに飾つて見劣りのせぬやう美人がつて見參せればならぬ〳〵着物はどう髮ほかうのと騷ぎぬいて灰屋方に押掛けて行つて見ると之はしたり芳野らしい女はドコにも居ない、曖すな〳〵と家の隅々まで探したが矢張り居ない、何ぞ圖らん芳野は「臺所の末に淸げなる女の委れた肌着藍染の木綿の袷を襲れ黑き帶を締め髮をばつくれ兵庫に曲て腰に白き晒を挾み器を押拭ひ」ながら坐つて居た、「先づ此方へ、紹益の內方さもあらん人が」など親類の山の神一同手を取つて引張つたが「イヤ〳〵賤しき道に迷ひ入つたものなれば平に〳〵」と拒んで座に着かなんだといふ、親族一同之が爲めに哀を催して後の交りを厚くしたとあるが、此處らが覺めた芳野の大いに得意がつた處であつたらう、かなと愚圖る間に日はトツプリ墓の前に暮れた靑く赤くぼかされた西の空に鷹が峰の連り〳〵と殘つてる鷹ケ峰の町家は靑闇の深くなる儘その黑き影の饌に次第にもぐり込んで行く、夕風は身にしむ

又光悅會に於て林羅山の鷹峰記を揮毫製卷して光悅寺の什寶にせむと議一決して博士に懇請した。大正四年二月揮毫成就し、博士は卷末に左の文章を附記せられた

〔林羅山上鷹峰記跋〕○內藤博士

羅山先生文集注云寛永七年作記中所謂源公者京尹板倉重宗也今茲先生偶自東武歸休於京洛數月其際被重宗誘引而有鷹峰之遊按先生時四十八歲而光悅七十三歲先生學問文章冠冕當時而自今日觀之未免藁草之譏蓋假武未久時屬草昧雖以敏悟博辯若先生於斯辭一道擇而未精尙風氣所致非獲已也近日有志胥謀爲葺光悅寺以彰其遺蹟屬余書此靈余既喜附姓名於前賢之作不辭而書之又以其前置餘子之遺篇不敢增損一字云爾大正四年二月十四日內藤虎書於平安僑居之寶馬龕

尙ほ會からは博士に光悅觀文章の寄稿をも請ふたところ、是亦「題二本阿彌光悅傳一」の題下に二首の詩を作り、各註解を加へて寄贈せられた。

光悅會は日夜多忙の博士に向つて期待するところ多くして、光悅寺內翹秀軒の選名、及其扁額文字の揮毫をも煩はし、尙且引つゞき目下翹秀軒記をも懇請中である。長尾雨山居士に「重建太虛庵茶室記」の選文を願つたのも、又富岡鐵齋翁に光悅寺光悅像の讃文を依賴したのも皆博士の紹介に依つて兩先生の快諾を得、兩氏の寄贈せられたもので、博士を煩はすことかくの如く大である。光悅も地下に於て感謝しつゝあることゝおもふ。博士の談中光悅に關するものを擧げると

○光悅が蒔繪に錫鉛の類を配したことは先人未爲のことであらうが、靑貝の類を併入したことは、それ以前すでに支那に於て試みられてゐる。光悅は獨特の天才で以て支那繪畵をも參酌してゐることは其作品で解し得られるが一たい純日本式の繪畵と純支那式の繪畵とは調和の出來得べきものでないのにそれをよく取り入れてゐて而して渾然日本化させてゐるのが光悅の光悅たる所である。

○光悅は書も我が平安朝時代の者を學んだことは言ふ迄もないが其當時支那から渡來した石摺りの法帖を廣く見てゐる外に、まだそれよりも古いものにも溯つて目を通してゐることは其筆蹟に徵して明らかである。

○光悅は藝術の天才で其意匠が西儔を見ないことは誰れも異論は無からう。光琳は稍窘窮の色がないでもない。勿論それは作品が多いからでもあらうが、光悅に至つては實に應變自在といふべきで而かも光琳等の追隨の出來ない言ひ知れぬ高い氣分が浮んでゐる。

○何？　光悅は茶道を學ぶに古田織部に行き、有樂に行き、千家に行つて、弟子道を守つてゐないつて？。　光悅たるものが藝術の修養にそんなせまくるしい了簡を持つて居るものか。

○本阿彌行狀記は立派な書物である。これも何とかして出版して人に頒つがよい。

○何？　僕が光悅の人物に最も敬服して居る所つて？　それは日允の書狀にある通り小袖屋某の茶入を手に入れた時、家康の感じた純潔な精神である。

博士は京都に於て大學教授仲間以外に於て、學問上交遊の親しき人は、富岡鐵齋、長尾雨山、富岡桃華、羅振玉（元北京農科大學長にして淸朝亡びて後日本に來り京都に在住した人）等の諸氏であつたが、桃華氏は昨年十二月物故し羅振玉氏は先月歸支したから、道がの博士も稍寂寥の感があらう。

孰鎔經史鑄鴻辭

の語は先年京都漢學研究會の主唱者奥繁三郎氏の催にかゝる漢學者懇親會席上、博士が合作聯句の

卷頭に揮灑吼哮せられた語である。

（八、八、一二）

三三、儒家　長尾雨山氏

（使光悅有意趨進則坐取富貴不難）

長尾氏名は甲、雨山と號す、漢學詩書畫に造詣深く、漢詩に於ては恐らく現時我國獨歩の人であらう。軀幹巨大、氣宇高濶の士である。氏は大正四年十一月廿四日光悅祭に内藤湖南、黑木欽堂、湯淺半月の諸氏と共に光悅寺に來遊せられた。長尾黑木兩氏先づ入來席上卽題各一詩を作して書畫帖に書かれた。其時黑木氏先づ詩稿を雨山氏に示して批評を求め、雨山氏評す、依て黑木氏は數字を訂正し「鴛鴦鷲尋玄妙、挾神仙以老太虛、」の十三字を書す。湖南博士、半月氏と共に稍後れて來り座に卽く、博士一讀之を評して曰く本日の作は敬服に堪へたり、と諸氏歸去後住職感嘆して曰く大家なるかな〳〵と蓋し住職は雨山氏の造詣に服し、内藤博士の炯眼に驚いたのである。

余が親しく氏を其僑居（京都室町出水上ル）に訪うたのは大正六年中湖南博士の紹介で光悅寺太虛庵茶室再建の記文を依頼に出かけた時である。其後度々依頼催促に出かけたが、行く毎に光悅寺の爲めに適切なる忠言を聞いたのである。

曰く

○光悅寺の老松を大切に保護せられよ、其根もとには土を高く盛つて置くが良い。

○境内自然の錆も亦之を保護せねばならぬ、くま笹の類を植ゑて赤土の露出せないやうに努められたい。

○建築物は、ねてして風致を害するものである、成るべく棟數の少いが宜しい。

○篤志者をして茶室などを建てさせる時には其保存金をも同時に寄附させることが肝要である。年うつり人去り代かはりて後は寺が厄介物を背負ふことに成つてはいけない。

と言つた風に親切なものである。大正七年四月「重建太虛庵茶室記」は成つて、氏の雄麗な筆跡と共に、今光悅寺の什物と成つた、其文中會心のケ所を摘記すると

然才能之士、不必難得、其懷氣概辨大義者爲難得、光悅戒子孫、勿去畿甸、以報效　皇家、德川家康屢辟、竟不能屈、乃賜地於洛北鷹峰、築太虛庵以居、徹侯鴻儒、如板倉侯林學士、亦每來過、冠蓋相望于塗、荒僻之墟闢成市邑、使其有意趣進、則坐取富貴不難、而遺世獨立、煮茶誦經、如不知聲利爲何物、專傾其才能於書畫陶漆、故其所製、世爭重之、蓋有才能氣概者、必有所自恃、與其屈己爲人役、寧絕聲利之攫、獨爲其所欲爲、以待千載之知、則如一時出處貴賤、固不足道焉已

雨山氏支那に遊學せられたこと一再ならず、民間の學者中の錚々たるものである。京都室町通には氏の外に富岡鐵齋、江上瓊山、山本竟山の如き書家があつて孰れも其技に於て自ら信ずる所が高いから、木堂犬養毅氏は室町通を稱して天狗横町と言つてゐる。

大正八年三月二十二日から五日間大阪高島屋呉服店の樓上に於て雨山氏の詩畫が展觀されたから見に行つて天璞集を求めた。そは氏の詩書畫（當日展觀の全部）の寫眞帖である。展觀物中最も余の意を得たものを擧げると

（額面）

○鵬摶（二大字横物）

○自得（同　　）

（附記）

禮記曰君子無入而不自得焉孟子曰君子深造之以道欲其自得之也夫人讀書行事徒因人而無自得則竟無益於身矣程子曰萬物靜觀皆自得苟志道者不可不如是

○吾亦愛吾廬

人之處世可進而進可退而退但宜有所守吾廬吾不愛之而誰能愛之乎

（一行物）

○花竹秀而野

○浮生適意卽爲樂

（詠楠公七絕）

帝從夢裏識眞忠　建武中興推首功

可惜南朝公去後　荒山風雨滿行宮

◎秋亭遠岫（畫）

◎竹溪清泉（畫）

（八、三、二八）

元京都市長

三四、内貴甚三郎氏

（光悅式の自然に見惚れて「ヤアー」）

（雄大な景色だ）

内貴甚三郎氏は京都土着の人であつて、嘗ては京都市長をも勤め、又市選出の代議士にも當選した人である。市の長老として濱岡光哲、田中源太郎、雨森菊太郎の諸氏等と共に最も有力な一人たるの名譽を失はない。市政上の事はいざ知らず、苟も京都市内で今尙産業上の事や慈善事業、卽ち

公共的の事業を興さうと思へば、どうでも内貴、雨森兩氏の力を借らなければならないといふことは光悅會創設當時或人から聞いた所であつた。

大正四年七月十日光悅寺で同會發起者の會合があつた時、氏ははじめて同寺に來られたのであつたが、腋杖ついて寺の玄關を昇り庫裡の方に來て所謂鷹峰の景勝一眸に映ずるや。

ヤアーこれはどうも……いかにも雄大な景色だ……ハ、ア此又、山の形が頗るよい、

と傍らに人無きが如しであつた。氏はいつ脚を怪我したか、片脚は自由を失ひ、それに代る腋杖の尖端は庫裡の椽端近く外れんとしたのである。崇高雄大な光悅式の自然に見惚れ、而して後悠揚として坐に着き、左右の人に挨拶をせられた所の擧動美は流石に平安第一流の人物として耻かしからぬ風格氣品を偲ばせた。それから新築落成の翹秀軒に通り、大村彦太郎、雨森菊太郎、神阪雪佳、湯淺半月、廣岡伊兵衞の諸氏等と光悅會諸事業の遂行について談議を凝らしたのであつたが、氏は發起人たるにも拘らず、前後發起人會又は役員會に出席せられた事は、唯當日一回のみであつたのに其協議相談の仕振りが頗る忠實で責任を重んずる風に見へた。（八、二、二三）

三五、劍道界の權威　内藤高治氏と湊部邦治氏

内藤高治氏は水戸の人でもと角力道の權威たりし横綱常陸山（今、出羽海）の伯父であると聞いてゐる。常陸山は一時立つ鳥をも落さんず勢で、天下一のおすもさんであつたが高治氏も亦、劍道界に於ける權威者で久しく日本一の名を擅いまゝにして居つて今は卽ち老大家である。武德會の範士で劍客としての地位名望同じく斯道の達人湊部邦治氏の上位にある。身長、大ならざるも、身周頗る太く、挽臼のやうだ。卽ち身長に於て湊部氏に劣るも太さに於て、はるかに勝り、體量亦部内に於て恐らく比儔を見ない、二十貫以上はあるだらう。

大頭廣顏、色白く鬚髯甚だ豐かなるに、眼光炬の如く、風姿堂々として威嚴申し分ない。余も亦若年の頃武德會本部に於て、しばし氏の指導を受けたが泰然として巨巖の如く、肅々としておのづから度あり。其敎授振りの立派さは其人格の輝きとも感ぜられるのみならず、禮節に正しきは其内心恭敬の發露と見へて敬服に堪へない。先生の尊稱は氏の如き士に適切である。

湊部邦治氏は北陸の人、幼より劍術を學び、其道に長じた、明治二十七年二十歳の時、京都に來て、同二十八年から武德會の劍道敎師となり、益々斯道に研鑽を積んだから、終に其蘊奧を極め、實力に於て殆んど天下無敵と稱せられ、關東の麒麟兒と言はるゝ東京の中山博道氏と共に、我國劍道界の双璧と賞揚せられた。長身魁軀、長顏隆鼻八字髯黑々として眼光亦威あり、氏が黑地の袴、紺地の襦袢に、黑胴を着し、覆面して對手と劍をつかへるところは、頗る堂々として實に偉觀である。余も明治三十五六年の頃しばし武德會本部に通ふて、氏から敎へられたことがあつたが、恰も大樹にぶつつかつてゐる樣な感がした。

態度鷹揚儼然たる中に飛鳥の如き輕業がある、かけ聲亦甚だ冴えて「オメーント」「オドート」といつた風に「ト」を附けて大叫した時は、卽ち勝鬨であつて、對手は必ず「頂戴」と言つて畏まり、龍搏虎擊の中に一段階の見ゆる場所である。

武德會本部、否京都の劍道界に於ける氏の人氣は格別で、學校も軍隊も警察も皆競つて氏を聘して其熟達せる武藝に接しやうとする。第十六師團の步騎砲工各隊、大阪地方幼年學校、及京都の警察署等に斯道の敎授を掌つたのみならず、大正六年には武術專門學校劍道敎授の主任となつて武術家の養成に努力せられたが、惜むべし大正八年四月十九日胃潰瘍のために京都岡崎町福の川の自邸斯於て亡き數の人となられた。享年僅かに四十五に界のために惜みても尙餘りあることである。

氏は大の酒豪で二升位の酒は平氣に呑み干したさうであるから、終にこの酒のために壽命を短くしたとも言ひ得やう。氏酒間にあつて醉興嵩じると丸肌脫ぎとなり、羽織を化粧廻しに代用して「今度此度……」と達磨角力の甚句を音吐朗々と唱ひ立てるさうである。横綱・太刀山の全盛時代、京都巡業の際、氏に對し「先生は擊劍の名人でも腕の地力はワッシの方が强がす」、と威張つて何氣なく握手すると、氏は矢庭にキューッと握り締める。道がの太刀山顏色かへて「ヤー先生の手は石コロだ」と恐れたさうである（八、四、二六）

三六、文學士 中村勝麿氏と 文學士 中村直勝氏

中村勝麿、中村直勝兩氏共に滋賀縣出身の史學家で、前者は東京帝國大學出身の文學士で、後者は京都帝國大學出身の文學士である。勝麿氏は彦根の人、直勝氏は大津の人、東京と京都が東西であり、彦根と大津が亦同じく琵琶湖を隔てゝ東西であつて、同國出身の史學者であるだけでも、奇しき因緣じみた感じがする上に、兩者共、勝を以て名としてゐる。東が勝つか西が勝つかと行司になつて見たいやうな心地がするけれども、兩者とも、中村で素より仲のよい事を意味されてゐるから、兩者とも勝に相違あるまい。尙且兩者共やがて博士の學位を授けらるゝであらう。蓋し勝麿學士が年長者だけで先きに博士になり、直勝學士が年少者だけで後に博士になつて、いづれも滋賀縣出身の文學博士として、同縣下に名譽を添へる日の到來することの遠きにあらざるを、余はこゝに豫言する。

中村勝麿氏は史料編纂官で東京帝國大學史料編纂掛にあつて、外交關係文書の編纂事業に携つて居て中村直勝氏は京都帝國大學文學部副手となつて古文書學の研鑽に餘念がなかつたが、近頃三高の講師に聘用せられた、遠からず教授に榮進せられることであらう。

余先年史料編纂掛に諸博士を訪ふた時、同官の勝麿學士に對してもちと見當違ひとは知りつゝも光悅觀文章の寄稿を請うた。

〔中村勝麿氏〕

光悅に關する感想に對しては余輩は門外漢だ、それは學者よりもむしろ光悅美術の賞翫者たる益田孝だの高橋義雄だのいふ人に求めらるべきであらう。

と氏はなか〳〵彈力のありげな言貌の人である。氏は道がに彦根藩出身として井伊直弼事蹟の研究について一頭地を拔いてゐる。舊主を表彰することに努めつゝあるは人情の上からでも恩誼の上からでも當然の事であるのみならず、我外交史上に不朽の名を垂れた政治家の事蹟を調査するのは、氏現今の公務でもある。

直勝氏の家は、大津長良神社の神官で、大正四年六月京大卒業の際、優等の成績を領して、恩賜の銀時計を拜領した名譽の士である。氏は史學、地理學同攻會の創立について非常なる盡力をせられたばかりでなく、同會の主幹粟野秀穗氏、及西田魚澄兩文學士等と相謀つて臨時國民教化講座を開設すること數回に及び現に頗る盛況である。同會が去五月十八日臨地講演を行ひ、東本願寺大谷光暢師外凡三十名の會員を引率して光悅寺に來られたから、余は氏及粟野主幹の依賴に應じ來會者に對して光悅の事蹟を說いた。

（八、六、一九）

三七、樂燒家元 樂吉左衛門氏

（非光悅を光悅とするはにがゝしい）

樂燒の元祖、樂常慶は朝鮮の歸化人宗慶（永正年間歸化）の孫である。宗慶の子が田中長祐（通稱長次郎）長祐の子が卽ち常慶で常慶の代に豐太閤から黃金の印章及樂の姓を賜つたので、爾來作品を樂燒といふ。常慶の子が道入であつたが、本阿彌光悅はこの常慶、道入と交際をして、樂家から土を取り寄せもし、自作茶碗の窯入を樂家に托しもしたのである。同家は道入から、一入、宗入左入長入、得入、了入、旦入、慶入、相續いで今の吉左衛門に至つたので、家督を相續すると、吉左衛門を名のり、隱居すると入の付く名に改めるのが代々の例である。余は光悅の史傳材料を探るために大正三年の頃京都市油小路中立賣上ル同家を訪うた。當主吉左衛門は人に應接することを厭ふとかで、長男の某氏が出て萬事接待せられたが家の事は何事も心得て居つた。同家系圖、家記、光悅書簡二三通を保存してゐる。同家暖簾の文字はもと光悅の書いた字だといひ傳へ掘り切の紙を代々大切に保存してゐるが、光悅の書ではない。光悅作茶碗、銘緋絨、雪片、靑苔など左入の模作がある。同家客間の火鉢、煙草盆の火入、菓子器茶碗など、燒物はいづれも自家製造の物を使つてゐる。

どこの家でも起伏盛衰は免れないものであるが樂家三百年に於ても種々の變遷があつて、豐公時代聚樂の第につとめた頃は、最も好運の時だつたらうが、本阿彌行狀記に光悅が樂家の事を述べて「當時は先代よりも不如意の樣子なり、すべて名人は貧成者ぞかし」といへりしが近時も不如意と噂せられたけれども、數年前來茶道の勃興に連れ

家道頗る盛んである樣に世間ではいひ傳へるが、所作は果して如何。

樂氏は「展覽會などに於て光悅の遺作ならざる物が光悅作として出品されることを非常に遺憾としてゐる」と語つて居つた。（八、四、一〇）

三八、村雲尼公日榮猊下

京都市堀川通今出川下ル西側の瑞龍寺を村雲御殿といふ。村雲尼公日榮猊下のまします所である若年の御頃は美しい御風姿であつたと常に母から聞いてゐたが、御年召されても矢張容子のよい尼公であらせられる。

大正七年十一月二十六日光悅祭當日に光悅寺に來遊あらせられた。當日午前中には何の御知らせもなかつたが、午後に突然「猊下が成らせられる木内知事も同伴して來られる」やうの前觸があつたので、俄かに庫裡に屏風を建て廻して御休息所を拵へる、精進料理を調へると言つた風に周章の體であつた。

午後二時頃二頭馬車で御來着、一人の侍尼を御同伴であつた。そこで余が猊下を御案内申したが尼公は稍かすり聲の男子のやうな音聲で、寺の沿革や光悅の事蹟など種々御尋ねに成つたから、光悅が德川氏から鷹峰の地を貰つたはじめから、光悅がこゝでなくなつた顚末を簡單に御答へ申した。

尼公はしばし御休憩後、本堂に渡らせられ、光悅の靈位に對して一しきり御經を讀誦あらせられた。讀經が終つてから本堂の片方に陳列せる寶物鷹峰光悅町古圖や光悅の殘した時小堀遠州が送つた悔狀や、光悅寛永四年元旦の試筆や、光悅の書畫色紙卷物などにつき說明を申し上げてゐると、そこへ木内知事が夫人と共に來られた。それから尼公は知事及同夫人と共に老松の下を通つて太虛庵茶席に渡らせられ、次に光悅の墓を展せられ尼公手づから墓前に水を手向けられたから、余は「光悅は存生中皇室の恩命を忝うしてゐましたから今日の御芳志を地下に感泣してゐることでございませう」と言つたら、一入御滿足の體であつた。木内知事は遙かに日蓮渴仰者の一人とて、光悅の信仰上の事を尋ねられ光悅の作品に信念がこもつてゐることなどをも了解せられたやうであつた。

次いで高橋箒庵氏受持の本阿彌庵に入つて箒庵氏の接待を受けさせられ、箒庵氏齋らしの光悅の茶碗や、床にかけた光琳畫の彈琴女は尼公の賞觀を得た。本阿彌庵南望の山水に猊下知事一同見とれられた姿は光悅式の自然と共に眞に一幅の畫圖であつた。次に翹秀軒で別誂への料理をすゝめ樣としたら知事は「役所が忙しいから」と耳打ちをしたまゝ席を立ち去つたから尼公も亦座を立たれ、折角に調へた料理も不用に歸したが猊下は終始御滿悅のやうに拜せられ、光悅寺も非常の光榮であつた。

猊下には今回瑞龍寺の後住を御取定めに成り、九條公御養女溫子姫が後嗣に上らせられ、姫今年御年二十三、本年八月梨本宮方子女王殿下が李王世子垠殿下に御納采の吉日と同日を以て薙髮式行はせられ、寂光淨品の道に志したまひ村雲日淨尼公と申上げる事と成つた。（七、一二、二三）

京都坊目誌著者

三九、糸屋の主人　碓井小三郎氏

京都の史蹟に最も明るく京都坊目誌を編纂した碓井小三郎氏は、たしかに京都の一奇人である。其性格風采の外面に表はるゝ所は敢て奇とすべきではないが、糸屋の主人でありながら、京都の歷史沿革については、專門史家も遠く及ばない程の精細なる研究を積み、一大著述に多年の精力を傾注せられたばかりでなく、嘗ては又、京都府會議員として侃諤の名を博したことである。

吳服問屋の西村喜一郎氏が京都史蹟會を組織して史蹟の保存や表彰に盡力せると同一對の趣好でかの同じく吳服商の杉浦丘園氏及旅館の亭主岡本橘仙氏が文學商人並に風流亭主として知られてゐるのと好取組の感がする。就中杉浦、西村兩氏は自家商業を手代番頭の輩に任せ置けば、風流韻事や公共事業に手を出す機會は少なからず得られることであり、岡本氏とても旅館の事務は女人若衆の手に委ね置く方が、却つて宿泊客の氣受けが善からうから、裏面に居つて風流を事とするに適するであらうが、碓井氏に於ては、左樣でなく、家業をつとめつゝせられるのであるから、篤志は敬服すべきである。

それであるから氏を訪問すると、表格子の一間に於て編纂に從事しつゝある時もあれば、火鉢の側で實業客に應接しつゝある時もある。又學區內

の事に奔走して不在の時もあれば、店先で絹糸（商品）を弄んで居られる時もある。

余は吉野會に於て鷹峰常照寺の吉野門を再建する時に神阪雪佳氏の紹介で氏の宅（京都新町夷川下ル町）を訪うたのが氏と交際のはじまりで、源光庵の卍山會にも余の依頼に依つて發起者と成つてくれられた。

氏を訪ねると留守勝ちだが在宅であると、表格子三疊の間で話し合ふ。坊目誌編纂の材料や著作物が、こんがらがつてゐる中で、長顔にして面色黑く、長き頭髪は亂れて蓬の如く、厚い紫色の唇を動かせて談せられる。話し振りは快爽ではないが話し好きの方である。道が政事家風の商人、又學者風の實業家だけあつて、談話が政治的であり、學者風である。否氏は商人ではあるが一面に於て政事家でもあり、學者でもある。

氏は近時又々木内重四郎氏が京都府知事として在任中併合した新市街に關する坊目誌を增補編纂中である、はじめ木内氏在任中之を氏に勸說した時、氏は之を十年計畫にて遂行せむと語られたところ木内氏は三年計畫にて遂行を促し、老を忘れて着手したと語つて居られたが、木内氏今既に辭して他にあり、木内氏の併合計畫は僅かに數箇月の努力によつて一段落を告げたけれども、碓井氏は老軀を提げて事業の前途近しといふべからずである。知らず、木内氏、並に現府知事、及び京都市長は此の偉大なる篤志家の不朽の事業を援助しつゝありや。氏のすでに京都坊目誌編纂に傾注したる歲月、辛勞は頗る大であつて、今後尙ほ勞の多とすべきものあるが、氏に依りて、はじめて完結を見るべきものであると同時に、氏はこの事業の遂行によつて永遠の人と成り得るのであるから自ら大に慰むる所があらう。氏の如きは現代に於て京都名物男の最たるばかりでなく、加茂川の流東山の翠と共に古今を通じて平安の一大名物であらう。

〔碓井小三郎氏書簡大正六年十月廿九日著者に贈られしもの〕

謹啓秋冷之候愈御多祥奉賀候陳者今般吉野會へ京都坊目誌壹部五帙呈上仕候右者寄附金之代りに差上け候間右を御寶却被下（定價拾七圓五拾錢）寄附金に御加へ被降度候幸に寶却不爲會に御備へ被下候ば丶尤も光榮とする所に御座候其邊は御都合次第に御取計可然存候甚失禮なる言詞申上何共恐縮仕候不悉御了知被下度此段得貴意度候草々敬具

四〇、教育家 海野敏行翁

明治初年鷹峰小學校創立以來同三十六年迄三十有餘年間一日の如く勤務し、鷹峰村民教育のために献身的の盡力をせられた海野敏行（號松西）先生ほど思想の堅實な、操行の謹嚴な人は余は未だ嘗て比儔を見ない。先生は眞宗僧家の出身で、京都市五辻千本東入勝滿寺々主であつたから、左手で寺の勤めをせられ、右手で學校を經營せられたのであつた。先生は學校に居られる間寸時も怠業の色なく責任觀念の堅固なことは、道がに宗教家として信仰的行爲に外ならぬを感せしめた。先生が放課後に低能兒の教育に一心不亂に成つて居られるのを見て、余は殆んど了解が出來なかつた。劣等兒に對し左程に熱心に教授せらるゝも世の大局の上に、どれだけの貢果があるかと直接先生に質したこともあつたが、先生の操守は少しも變らなかつた。それだから高等の學校に行つた兒童の成績は鷹峰校出身者がいつも第一位を占めて居つた。

先生は在職中成績顯著な廉によつて、京都府及文部省から選賞を受けられた事數回、教員免許狀の如きは、小學校教員として最高の資格ある上に文部大臣菊池大麓氏時代に同大臣から全國共通の普通免許狀をも授けられ、他の大きい學校から校長として招聘をしたこと幾回なるを知らなかつたが、先生は名利に趨らず、僅かに二學級の小鷹峰校に一貫終始せられた。嘗て鷹峰村の書記に赴任して、これも京都府管内に於て鷹峰役場に其人ありと知られた故和島氏が先生を賞揚して日本一だと言つたのは、褒め過ぎだらうが、操守の堅固にして人格高く、俗に所謂「腹がある」點に於て恐らく希世の人だらう。

大正二年門下生發起して先生の老を慰めるため松西會を設立して毎年一回先生を招待した。恩に感じてゐることは子弟皆同じで、毎年盛會であつたが、大正七年は先生大患のため開かなかつた。同年十二月二十七日六十六歲を以て永眠せられたが、其數日前余は見舞に行つたら、先生最後の覺悟見上げたもので、今更の如く其信念に服した。先生は衰弱極まれる病體を横たへて曰く、

別段生き延びたい見苦しい根性も持たぬが、こゝ數日間は死にたくもない。今死ぬと年末

だから一方ならず人々に迷惑をかける。成るべくシメがあいてから死にたいと思つてゐるけれども、壽命といふ者は測り知ることが出來ぬ。

といつて信仰心の必要なことを陳べ、信仰を得るには宗教に依らねばならぬと言つて辭色少しも平生と變らなかつた、枕頭にはすでに辭世が表裝して掛けられてあつた。

二十九日拂曉蓮華谷火葬場で火葬に附せられたが先生の未亡人、及令息令女皆亦立派な覺悟で、旅行の人を見送るが如く、少しも悲哀の色を表はさずして、心を盡し情を盡して居られた。

大正八年一月十七日先生の自宅勝滿寺で本葬式が行はれたので松西會に於て香資を募り、會員一同會葬した、會員中最年長の渡邊常太郎氏は會員を代表して左の弔詞を讀まれた。

吊　辭

噫悲しいかな恩師海野敏行先生は逝きましぬ。雨の降る日も風の吹く日も金石溶かす夏の暑きも肌つんざく冬の寒きも倦まず撓まず鷹峰に過りて余等子弟を教へ導きたまひし松西先生は逝きましぬ。鷹峰學びの場には長き年月あまた先生の出つ入りつ代り〴〵て余等子弟を教へたまひしかど、先生の如く獻身的に眞心こめて生等を教へたまひし良先生はあらざりき。恐らくはいづこにも亦先生の如く無私公平なりし良師はなかるべし

先生資性穎悟敏達溫良恭儉意なく必なく固なく我なし、容や威ありて猛からず言や眞にして時所に中す、訓誡を垂れたまふや簡易にして行ひ易く儉素にして服膺し易し、豪華ならざるも謹健、奇拔ならざるも堅實、服膺翫味するに從ひ彌々益々味の津々たるものありしは猶ほ米飯清水の滋味の言ひ易からざるものありて永く五體を養ひ得て終生飽くことを知らざるが如し。而かも其教諭戒飾は一として先生が躬行實踐の範圍の範圍の外にもれざりしに於ては、先生の謹正端嚴と操守の非凡なるに心服せざる能はず、是に於てか先生は無言の裡猶よく鞭撻指導の力を有せられしなり。小子同窓昔齊しく先生の人格に私淑して景仰措く能はず、教職を辭して當寺に歸臥せらるゝの後も弟子擧つて恩に感じ德を慕ふこと恰も水の低きに就くが如く期せずして相團集し先生の雅號に因みて松西會を設立し毎年一回總集會を開きて先生の杖駕を請ひ一は以て先生の高風に接し慈言を聽きて修養に資し他は以て會員相互舊交を溫めて師弟歡談和氣藹々として千秋萬歲この樂の洋々として盡きざらむことを希望して止まざりしに、圖らずも客歲七月以來先生は二豎のなかす所となり、醫療効なく、舊臘十二月二十七日溘焉として終に逝きましぬ。生者必滅會者定離は不易の天則人生の常事にして賢愚貴賤の別なく、倖しく身邊に到來するものなることも亦嘗て親しく先生より耳にしたることなれど、今突如として幽明境を隔てゝ溫容また拜するに由なく慈言永へに聽くこと能はざるを思へば今更に涙滂沱として哀悼轉たゝ禁ずること能はず、噫悲しい哉　生等子弟は今滄海に船を浮べて航路を選べるものにして、先生の遠逝は生等に於て宛ら同乘の操船顧問を失ひたるに似たり、周章自失前途不安の念おのづから湧起するも翻つて先生の

浪風の荒き船路もありけれど
六十六させまで着くぞ嬉しき
着く岸はやすき淨土ときゝければ
心靜かにたのしかりけり

の御辭世を拜せば忽焉として省察する所あらむとす。げに先生は大悟徹底よく人生の大事を了得せられ臨終に際して些の凝滯なく晏然愉々乎たりき。嗚呼この先生最後の悅びの色亦豈生等の前途を教誡したまふ意味深からずとせむや　されば生等子弟徒らに歎き悲しむべきにあらず庶幾くは遺誡を體し以て人の人たる道を踐むにいそしまむ。これ鴻恩の萬一に酬ゆるの道たるのみならず山成す香華に勝るべきを信ぜむと欲す。茲に本日葬儀を擧げらるゝに當り聊か追慕の情を披瀝して以て吊辭に代ふ

大正八年一月十七日

松西會員總代　渡邊常太郎

先生は精神の確かな人ではあつたが、身體は極めて蒲柳の質で體格は正に劣等級で、身長は五尺三四寸もあるのに體量は驚くばかり輕少で、いつも十貫以上十一貫以內であつた。存生中兩三回脚氣症の大患が起つて、死生の境に彷徨せられたことがあつたにも拘らず、六十六歲まで長命せられたのは、全く其精神的修養の効によることゝ思ふが、飲食物其他に於て攝生せられたことも亦敬服に堪へたものであつた。先生嗣子信行氏は京都帝國大學文學部哲學科出身の文學士で、寺務に活動せられ尙傍ら平安中學校の英語教師を兼ねて居られる。次男穎達氏は京都市今出川新町に分家して京都市竹間校訓導として教職に從事せられ、女さへ子姉は錦小路猪熊邊の同宗の佛寺に嫁して居られる。一族和合圓滿先生の後事亦間然する所がない。（八、二、九）

學界の奇人

四一、文學博士　內田銀藏氏

文學博士內田銀藏氏は京部帝國大學文學部教授として史學科に於て國史近世史の講座を擔任して居られた、氏は又經濟史に於て他の追隨をゆるさない研究を積まれたばかりでなく、文化史に對して特殊の見地があつたのである。

博士の生家は東京市外千住町の鰻問屋であるが商家の出に似合しからぬ律義謹厚の質で、一言一行規矩を失はず、叮嚀周到に過ぎるので、博士言行の美談が却つて世人の笑話となる事が多い、尤もこれ博士天眞の發露俗に所謂うぶなのであるか

ら、他人より滑稽視しても博士自身は恬として知らぬ顔である。

博士はかくの如く眞摯純潔の士であるから、學究的體度は實に愼重精確を極めたもので其學說所論はいつも世の信憑を博したものである。

光悅會が博士に光悅觀の寄稿を依賴する時余は同會の代表となつて博士を京都市吉田町上大路の邸に訪うた、邸は吉田山の麓にあり、南西の兩面高き石垣を繞らしたる一見城廓の如きものである折節博士は近所の湯屋に入浴中であつたから、余は眺め妙へなる階上の應接の間に通されて待つてゐたら、暫くあつて博士は歸つて來られた、身長五尺乃至五尺一寸許、丸刈の頭顱亦甚だ小さく、美顏無髯極めて質素なる和服を着し、而して挨拶應答頗る叮嚀懇切にして余は少からず恐縮した。其學識を挾まず、地位名望を挾まざる謙遜無私の風貌眞に敬服に堪へたものである。

博士は深く光悅を解せない樣であつたが、余の懇請を諒とし卽座に寄稿を快諾して「何日迄に寄稿せねばなりませぬか」と問はれるなど其の談話振りが誠實を極めたものであつた。光悅會から文章依賴者に對して度々寄稿催促の依賴狀を發送したが獨り同博士のみ、いつも叮嚀に其返事を寄越された。前後博士から贈られた手紙を列記すると左の通りである。

〔內田博士書簡〕

拜復四月二十八日付御來書正に拜讀濟て御約束申上候拙稿六月末日迄に差出し可申樣御申越之趣承知仕候不取敢右御受申上度如斯御座候　敬具

五月一日（大正三年）　內田銀藏

〔同〕

本日御差出之御書拜見御約束之件延引甚だ赧顏之至に御座候六月下旬以來臨時の用事引續き蜻蛉何分寸暇無之未だ差上兼候が當月末迄には拜呈可仕候間右不惡御承引可被下候

七月十三日（大正三年）　內田銀藏

〔同〕

拜啓陳者豫而御約束申上候本阿彌光悅に關する拙文一篇疾くに拜呈可仕筈に有之候處七月下旬近親不幸之爲め俄に上京一旦歸洛後當月上旬又々東上爾來旅行等之爲め段々延引に相成甚だ遺憾に奉存候旅行中兎に角短篇相認め候に付茲に乍延引拜呈仕候宜敷御取計らひ可被下候先は右得貴意度早々敬具

大正三年八月十七日

京都吉田町
內田銀藏
（千葉町滯在中）

〔同〕

拜啓陳者此程は『光悅』一部御贈り被下忝く拜受致候御深志之段感謝之至に御座候右御編纂は中々之御骨折と存候頗る綿密なる御考證にて永く學界之參考に相成可申と存候先は右御挨拶申上度候敬具

大正五年二月十六日　內田銀藏

光悅會御中

右書面はいつも端書でなく封書であつた。文學家薄田泣菫氏は該博の知識もて、大阪每日新聞紙上茶話欄に先年來凡隔日每に歷史上の事項や社會の出來事に關して滑稽的に面白く記述せられてゐるが、內田博士に關する記事も度々見受ける、いづれも博士が律義叮嚀の非凡者たるを語るのであるが本年二月十七日の紙上にも「內田博士と壹圓札」と題し左の記事を載せられた。

〔大阪每日新聞紙上、茶話〕

內田博士と一圓札

京都大學の博士內田銀藏氏が、禮儀作法の極めて鄭重なのは幾度か御話した通りだが、ある時またこんなことがあつた。

恰ど卷さきの梅もちらほら咲きかけやうといふ頃で、內田氏は自分の學生を十幾人か引連れて笠置邊の史蹟の踏査に出かけた途中であつた。かなり歩き草臥れたので、路ばたに茶店が一軒あつたのを仕合せに、皆はそこで一休みすることにした。

大學教官室で外套一つ掛るにも、折釘の數をちやんと數へてからでないと、安心しない內田氏は、茶店に入るなり、脫いだ帽子を手に持つて、あちこちと帽子掛をさがすらしかつたが、大學に牛小屋が無いと同じやうに、茶店にはどこにも帽子掛は見當らなかつた。內田博士はひどく當惑したやうな顏つきをしてもぢ〳〵してゐたが、學生達が無造作に帽子を脫いで、そこらにおつぽり出してゐるのを見ると、漸つと氣が付いたやうに、そつと床几の上に置いた。

皆は茶店の媼さんの手から、濃茶を受取つて咽喉を潤した。そしていゝ氣になつて長髓彥や、補正成の話をした。內田氏は長髓彥や、正成が自分の伯父さんでゞもあるやうな叮嚀な言葉遣ひで、いろんな古い談話を聞かせてくれた。

暫くして皆は立ち上つた。內田氏は脫いだ帽子が自分のに相違ないかといふことを、よく見きめた上でそれを被つた。そして懷中から壹圓紙幣を取り出すと叮嚀に皺をのばして媼さんの前に出した。

『色々御厄介に成りました、これは僅かでございますがお納めを願つて置きます』

媼さんは紙幣を受取つて胡散さうな眼つきをして夫を調べた。紙幣は別段贋造でも無いらしかつたので、媼さんは吃驚してまた博士の手に押し戻した。

『滅相もない、ちよつとお休みどしたのに、こないたんと戴いては濟みまへんどす』

『どう仕りまして』「日本近世史」上卷の著者は、記錄の一杯に詰つた頭を叮嚀に下げた。『甚だ輕少で却つて失禮ですが、どうかお納め下さいまして』。

『且那はんこれ壹圓札どつせ』茶店の媼さんは目脂の浮いた眼で博士の顏と紙幣とを等分に見くらべた。『こないたんと戴いては冥加に盡きまつせ』

『さう仰有つていたゞいては私こそ痛み入ります』と內田氏は

たつた今被つたばかりの帽子をまた脱いだ。『どうか其儘お納めを願いたいもんですれ』。
外に立つて居た學生連は、こんな挨拶を交してゐては、一世紀などは直ぐ經つてしまふだらうと氣遣ひ出した。で氣の利いた一人が媼さんに耳打をした。媼さんは頷いた。
『さうどつか、そない事ごしたら戴いときまつさ』
媼さんが受取つたのを見ると、内田氏は漸つと安心したやうに帽子をかぶつて外へ出た。（終）

右は稍大それた書き振りだらうが、兎に角博士の面目の大體があらはれてゐる。博士は慥かに奇人たるの名を失はない。天道是か非か、天はこの高奇なる人格者に年を假さず、大正八年七月十一日俄然胃潰瘍を病み、爾來療養を專一とせられしが、二十日夜永眠せられた。遺骸は藤浪醫學博士執刀の下に解剖に付し、醫學の參考に供せられ、二十五日京都寺町妙滿寺に於て葬儀が行はれたので、參會した。式の莊嚴さと、會葬者の誠意のあらはれに一層博士の高奇が偲ばれた。

（八、七、二六）

四二、乃木大將

明治四十三年七月余東京にあり、一日京都正親小學校長泉本氏より來書あり、文中乃木將軍に對し同校々訓の基礎たる「正親勇」三字の揮毫方依頼の執成を乞ひたるものなり。ある日の新聞紙は乃木學習院長赤十字社病院入院の事を記しく曰く

「乃木大將は學生を引率して相州片瀬に海水浴を爲したりしが、海水耳に入り、中耳炎を發するに至りしがためなり」と。爾後余は新聞を閲讀して大將に關する記事ある毎に、一層の注意を拂はざるを得ざりき。然るに又ある日の記事に「大將は病氣快方にして既に赤十字病院を退かれしも病後加養のため、夫人同伴伊豆修禪寺へ湯治に赴かれたり」とありしかば、正親校の懇望を將軍全治の耳邊に達せしむる日の近からざるを思ひて心もとなかりき。是に於て余は青山に竹馬の友佐々木君を訪ふ毎には、赤阪區新阪町に乃木邸を訪れて大將の近狀を問ひたりしが、其都度、袴を穿てる書生（兒童）もしくは三十歳前後の女中出でゝ應答したりき。

明治四十四年一月三十日休日なりければ、芝三田のユニテリオン黌に到りて萬朝社長黑岩涙香氏の講演を傍聽し、麻布より轉じて赤阪に入り、大將邸を伺ふ。もとより大將の既に湯治より歸りて家にありや否やを知らず。たとへ家にありとも大將の快く余を引見すべきや否やも知るべからず。

午後一時雨露に黑ずみたる「乃木」の門札の掲げられたる大將邸の門をくゞり、質素なる洋風建家屋の玄關に近づき、例の如くベルを鳴らせば、間もなく例の女中出で來れり。問ふに伯爵の修禪寺より歸られしや否やを以てす。應へて曰く「主人今日家にあり貴公の來るを告げん」と余は玄關前石段の中ほどに佇立して待つ、忽ち左後方に物あるが如し、下顧すれば人なり、軍服を着せり、而かも大禮服なり、長劍腰部に戛々たり、長靴を穿つ拍車動きて聲あり、頒白の鬚髯は老軍人なるに似たり。老軍人は俯して靴を玄關下の梭欄毛の靴拭にて拭へるなり。余段上より顧俯すると、軍服の人段下より右仰すると同時。忽ち知る、平生寫眞にて見覺えありし乃木大將にまがふ方なければ覺えず段より下りて低頭すれば、大將は擧手注目の答禮をなし、段を上り扉を排して内に入る。即ち知る女中の「内にあり」といひしは其誤認なりし事を大將今大禮服にて外より歸る、惟ふに本日は孝明天皇祭なれば宮中に御式にてもありしが故ならんかと、只獨り想ひめぐらすのみ。

しばらくして大將は先きに女中が持ち入りし余の名刺を手にし、大禮服の儘、靴をも脱がずして玄關に出で立ち來られ、「あなたが森田さんですか、どうかこちらへ……」とて導かる、即ち石段を上り扉内に入り左方の應接室に通りぬ、室内廣からず、中央に長方形の卓子あり椅子三四東西に配せらる此他壁に添うて紫檀造り青貝もて唐草を飾れる安樂椅子二脚あり一隅には甲冑も一揃備付けらる。大將は余を室内に請じて坐を命せらる、余は白面の書生なり、主人は大將伯爵なり、今は即ち來客なりといへども倨傲なる態度露あるべからずと戒心自重し先づ大將を椅子に靠らせて後われ亦倚らむと差し控へたるも、大將は倚靠を勸めて先づ倚るべくもあらず。依つて大將の心事を察して先づ腰を掛くれば、次いで大將亦椅子に懸かる。

袴を着したる兒童は圓形の木製火鉢を室内に抱き込み、茶を運び來る。大將は余の東京にある所

以を問ひかけ、次いで亦來意に及ぶ。是に於て余は、正親校の懇望を語り同校長よりの來書を出し正親同窓會の發行にかゝる雜誌中「正親勇」三德目の圖解を提示し說明懇請つとむる所ありき。大將は卷烟草を薰らしつゝ仔細に余の談話を聽取し、書狀と雜誌を展きて之を讀む。余は依賴し了つて大將の老僧夫然たる顏貌を熟視したるに、煙草の烟は大將の鼻目に沿うて立ち上る、大將けむたきものゝ如く、顏面筋肉頻りに動く。

拜啓時下盛暑之候に御座候處貴下御障り無御座御消光被成候哉
伺上候下而繫校職員一同無異勤務罷在候間乍憚御休心被下度候
陳者近頃甚だ願上兼候へ共讓而御承知之通り本校々訓之精神た
る「正親勇」の三字は朝夕兒童に服膺せしめ年來之れが實踐躬行を
奮勵致「居候處今般幸ひ屋內體操場新築落成致候を期し此處に於
て毎日朝禮」を執行し又大祭祝日等に儀式も此の處に於て擧行致
候事と相定め」候就而は場內正面に正親勇之三大字を書したる扁
額(橫一間程)を掲ゲ、ること丶致度相考へ候處右揮毫は現在教育
に關係を有せられ且志操高潔の士に御依賴致度希望有之職員等
へも相談致處現學習院長「乃木伯爵閣下に御懇請申上度事に一決
致し候に就ては幸ひ本校に關係淺カらざる貴下現に御在京の事
故本校の爲め何卒右目的を貫徹致し候樣」御盡力に預り度先は右
御依賴まで如此に御座候頓首

七月二十九日　長木栄三郎

吸ふ。忽ち見る煙草は朝日！積日の疑團は晴れたりけり。余嘗て鄉里に於て新聞紙によりて乃木大將平生吸用の卷煙草の朝日なることを知り、大將に對して不快の念を懷けること久し。

余常に思へらく凡そ人は身分相應の處作を爲すこそ善けれ、乃木氏は大將なり伯爵なり、酒を飲まむか宜しく美酒を飲むべし、煙草を吸はんか、宜しく良煙を吸ふべし、葉卷にして贅澤ならば富士、敷島いづれを選ぶも可なり、何ぞ殊更に最劣等の朝日を擇ぶを要せんや、これ大將の街氣の發露なり、名譽心の致す所に外ならずと誤解し爾來平生大將を敬するの念甚だ厚からざりしに、今日圖らずも親しくこゝに將軍に謁し眞摯質朴、些の街氣なき風姿に接し醇厚仁慈なる言語を聽き、而して器中の朝日を手に採るに及び疑團釋然として氷解し、頓に敬愛の情を深くす。

大將書狀を讀み了り徐ろに口を開いて曰く、「眞に結構なり良事なり、されど揮毫を望まるゝには、おのづから他に人あり余は尊託に添ふべき人物にあらざるのみならず書字極めて劣惡なり、折角の御依賴なるも宜敷御斷り申上たし」と。依てさま內扉を盡して種々の反覆懇請するにぞ、大將又曰く、「曾ては人の所望に應じて愚筆を弄したることなきにあらざりしも、近頃思ふことあり、一切揮毫を拒絕し居れり、爾來自ら誓ひ人にも聲明して人のために筆を執らざることゝなせり、されば我が鄉里の學校よりの所望さへ之を拒絕したることあり、唯、忠魂碑、戰死軍人の墓碑の如き類のものに限りて希望に應ずることゝなし居れり今足下の所望に應せむか、從來多くの人に聲言したる言を食むの譏なれば諒察せられ正親校長に對し宜敷傳言ありたし」と其態度語調叮嚀謙遜にして情理兼ね備れり、余はすでに强談成功の見込なきを知るといへども「尙特に御配神を煩はしたし」と押して一言依賴を呈し置きて、歸らむとしたるに、大將は余の頃日の身上を問ひかけらるゝなど、其言動慈愛親切にして恰かも師親が其弟子又は兒女に對して近狀を問ひ奮發勉强をすゝめむとするものに似たり、別るゝに際し、ふと思ひ出で大將の病狀を問ひしに大禮服を着用せる大將は直立不動の姿勢を取り「ハ、ハイハイ有り難う」と叮嚀に低頭せられたるには恐縮に堪へざりき。かくて余の玄關に出で石段を下り脫ぎ捨て置ける下駄を履き立ち去る迄大將は見送られぬ。其擧作態度天眞率直にして匠氣なく宛ども老農の如し。されば余は大將のあまりに平凡にして穩當なりしに呆れ果て、はじめ大將に會する迄は威風凛然として四邊を拂ひ談論風生才華煥發の人ならむと豫期せし反動にもや頗る調子拔けの體にて今日大將にあひし印象としては「年寄つた老爺が尤な事を言ひしのみ」との感を受くるに過ぎず、やがて下宿に歸りて同宿の友に會見の顚末を語りしに、皆齊しく「えらい人だねー」と驚三嘆す、是に於て余は「余は乃木將軍に會ひたるまゝを談じたるに君等は非常に讚嘆せり余自身は直接會ひながら毫も大將の偉點を見出す能はず」といひしに、友等は更に驚嘆して曰く「勳功偉業を忘れ、富貴顯榮を挾まず己れを傾けて人に接す、卽ち乃木の乃木たるところにして萬人の齊しく景仰する所以なり」と談じ合へり、余は其夜一書を認めて正親校長に其顚末を報じ且曰く「今一應校長より直接依賴狀を差出されたし余今一度大將に會はむ」と記し置きしかは、數日の後「乃木伯爵へ直接依賴狀を出せり尙一應盡力を望む」との意味の報に接したるを以て二月十九日又訪ふ。應接室に招せられて待つこと少時、大將は出で來られたり。カーキー色羅紗服

を着し軍帽冠せず劒佩かず履をも穿たずして草履をはき居られしが、應接室の入口に來りて、佇立したるまゝ余の顏を凝視し首傾け、さも不思議さうなる面持なり、其狀恰も幼童が頗る珍らしき物に見惚れたるが如し。余は大將が「よく見た人だいつぞや談じ合つた人だ、誰だつたかね……」と思ひ出せずして心中頗る苦しげなる狀を看破したれば「先日京都正親校の懇請に依りまして……」といはんとするや、大將は忽ち思ひ出したるものゝ如く應と答へたるまゝ忽然として內に消えぬ、須臾にして大將又入り來る、而して左手に一冊子を携へ右手に硯箱を持てり、率爾として余に問うて曰く

大將　え—京都の校長さんの御名は何と申しましたか

余　はい泉本宗三郎でございます

大將　は？いづ本とは？

余　いづみもとであります

大將　はゝセンボンですか？

とつつ立ち乍ら挨拶もあらばこそ、あはたゞしく硯の墨を磨りつゝ右の如く問はれければ、余はしたゝか奇襲に遭ひて逆擊を試むるに由なく唯問はるゝまゝに答へざるを得ざりしなり。硯にはあら薄墨がすれにけり。大將あり合せの筆を逸早く持ちて冊子表紙の上に

呈泉本先生　希典

の七字を書し了り言葉叮嚀に

揮毫の件は惡しからず御斷りを願ひますどうか

これを校長樣へ御贈り下さることを願ひます。

余はすでに牙營をくぢかれて陣容大に亂れ全軍を纒めて退却の止むなきに至り再擧亦畫すべくもあらず。

さて當日大將がはじめて應接室に來られし時の態度頗る奇にして恰も農夫が今まで鋤鍬執りて田畑耕耘に餘念なかりし所突如客人ありと告ぐるまゝに鋤鍬放り捨て取るものも取りあへず馳せ參じたるが如き風體にさも似たりしが今又冊子を余に託して又頗る忙はしげなり、長坐せずして去る。大將又叮嚀に見送らる。冊子は美濃紙五六十枚を綴れるものにして、三宅觀瀾の著述したりし中興鑑言全部を大將自ら書せる謄寫版摺りのものなり冊尾に「明治某年某月某日於學習院總察部源希典手寫」の文字ありき、某月某日は暑中休暇中の月日なりしこと記憶に存せり。思ふに大將暑中休暇中に右原稿を揮毫印刷せられたるものゝ如し。大將の精神、努力を觀るべき一材料たらずんばあらず冊子は直ちに泉本氏に送付したるに泉本氏は恐悅措く所を知らず、永く家寶として收藏すべき旨記して謝狀を寄越されき。同年四月予は京都女子師範學校に勤務する身となりて、東京より鄕里鷹ケ峰に歸る。

大正元年九月十三日明治天皇御大葬の式を行はせられ、翌十四日靈柩京都驛を御通過あらせらるゝを以て余は學校生徒に付添ひ、七條驛プラットホームに於て奉迎送をなすべく烏丸通を南下し烏丸七條下ル處に到り停車場に近づけば、群集雜沓の中鈴聲あはたゞしく新聞紙號外を配達するの聲す、良久して耳に入りしは乃木將軍殉死の報なり余嘸然としてしばし言ふ所を知らず、今更の如く大將の忠誠に感動したりき。

又其翌日、大阪每日新聞紙上谷本博士の大將の殉死に關する評論を讀みたりしに、博士は大將を街氣の人となし、名譽心ある人となし、且神經質の人と見たりしが如し。其評論もとより當を得ざりしを以て大將に對する同情者は博士の暴論に激昂したりき。余はいへり谷本博士はこれ恐らく故大將に接したる事なき人ならむと、余もいまだ大將に會はざりし時は其人格を誤解したることありたればなり。博士の會はれざりし觀察さもあらむと余はむしろ博士に同情を寄せたると同時に、同時代に於てさへ學者の人物論に誤りある位なれば後世よりして前代の人物を評論するが如きは大に愼重ならざるべからざることを感じぬ。

又大正四五年の頃三浦文學博士が洛北の隱者石川丈山に關する講演中に、乃木大將を以てひそかに丈山に凝するの點ありと論せられたることも亦新聞紙にて見たりければ、一日博士と京都大學の古文書室に相會したりし時、談話の末に、博士に乃木大將と會談せられしことありしやと問ひしに博士は一度も見えたることなしと言はれき。是に於て余は余の大將との會見談を開陳して博士の參考に供し置きぬ。

兵庫縣西須磨の人、村野山人氏は俠情の人なる

らし、乃木大將を崇敬するの念最も深く、官に請ひ、獨力以て乃木神社を伏見桃山御陵下（京都府紀伊郡堀内村字板倉周防）に創建す。大正四年十一月二十日創立許可せられ、五年九月十三日正遷宮祭擧行せられたり。爾來毎年九月十三日例祭執行せらる。（七、一二、七）

四三、文學博士 黑板勝美氏

文學博士黑板勝美氏は古文書學の泰斗として、又京都帝國大學文學部教授三浦周行博士と共に現時、國史學界の雙璧として世の推稱をほしいまゝにしてゐる。兩博士は新進氣鋭豐富なる學殖を以て斯界のあらゆる方面に研究を積み活動を試み、尙前途多望なる點に於て、東西の兩大關たるの觀がある。黑板博士は赭顏圓頂、肥滿にして活氣潑溂、三浦博士は長顏白哲細身にして謹愼莊重、體軀風采に於て相反すれども、頭腦の該博にして研鑽の偉大なるに於て相匹儔す。黑板博士は東京帝國大學文學部助教授にして史料編纂官を兼ね、史料編纂掛に於て古文書の編纂主任である。如何に讀み難き古文書も同博士の前には眼光一過忽ち讀破せられるといふ。博士は唯國史に造詣深きのみならず、西洋史に對しても研究の大なるものがある。余は嘗て博士の著述に成る歐米文明記（博士の西遊記）を精讀して、さすが其該博な頭腦に驚嘆したことがある。大正三年四月東上、光悅の史料を蒐集したりし時、博士を東京市外千駄ヶ谷字原宿の邸に訪ふた、折節博士は不在であつたが、其居宅玄關の紙障破綻し、庭には數多の木履散亂狼藉たりしを見て、博士の豪放磊落にして些事に拘々たらず、學究一途にして家事に淡如たる風格の一端を偲んだが、其翌日博士と史料編纂掛の階段中に會して光悅觀の寄稿を請うたら、博士大に光悅會の計畫を賛し、余の希望を快諾せられたけれども學事多忙にして終に寄稿せられなかつた。其平生片頰に笑壺の如き傷痕ある巨頭を下方斜に傾け屈托無げに活歩せる時博士何をか思ひつゝある、何をか案じつゝある、歩上をさへ尙史料攻究の場となしつゝあるによるか。

此程余は雜誌「史上の海國日本」に於て博士の「壇の浦海戰」を讀み、博士の研究の博大にして且深刻なるに感嘆した。

〔黑板博士壇の浦海戰記の一節〕

（前略）

此合戰の當日卽ち文治元年三月二十四日に於ける激戰の時刻及び其時の潮流の關係を見やう。

此當時の曆は宣明曆と稱する大陰曆で現今の曆法から見れば不完全の點を免れぬ。それで曆そのものに誤謬なきやを見たるに此月十五日には月蝕があつた事が玉葉に依て知らるゝが、折あしく此日は大變な雨であつたので果して月蝕があつたかどうかはもう一つ明確でないのである。それで正確なる西洋の太陽曆と比較して見たのであるが毫も誤差なき事を知り得たのであるされば宣明曆の三月二十四日に信を措き、次で潮流の時刻を見るに滿潮は午前五時十三四分、速度は一時間に八浬卽ち一秒に二間の割合で最も速力の緩漫なのは午前八時三十分と午後三時である仍て此海戰の最も激烈なりしは此の二刻の間にありと見るべきである。この調査は今こそ海洋研究家に知られて居るが源平の當時にあつては、此の地方に住んで居る老船頭でなければ、こんな特殊の現象を知るものがない。それに關門海峽の東口には中央水道、南水道、北水道の本流の外、渦流がある、湍瀨が出來て居る、その間に船を操縱するには餘程水路に熟して居らねばならぬ、今も外國船には必ず水先案内が附く。義經は此時三浦義澄を案内として澳津まで進んで來たが、義澄とても一度門司に行つた事があるばかりであつて、當時にありては周防あたりの船頭も、この附近の險惡な潮流をよく知つて居つたか否やは疑問である。

源平盛衰記には午前六時から正午まで戰うた樣に書いてあるがしかも戰の始め平氏は追潮で、源氏は逆潮であつたと記して居るのは潮流と時刻との關係を無視したものであつて、余は激戰の時刻を午前とせず、午後にあつたと主張したいのである。而して玉葉元曆二年（文治元年）四月四日の條に見ゆる義經が後白河院に言上した注進狀によると戰は正午に始つて晡時（午後四時）にまで及びし事を記して居る。それは潮流の關係とよく合致するのである。卽ち四時頃は潮流の最も速かな時で、この水勢に乘じて源軍は驀進平氏の壇浦を突いたのである。戰の當初は源氏には逆潮であつて敢へて進まなかつた事は盛衰記にも記して居る事である。

源九郎判官義經は此潮流を利用せんとしたのである。而してそれを何によつて利用せんとしたのであるか。足利尊氏が九州から攻め上るときにその御座船としたのは串崎船であつた事は梅松論に見ゆる所である。串崎と云ふのは、田ノ浦の對岸で、其地の船頭は名を得た屈强のものであつた、義經は密かにこの串崎船を十二艘徵發したらしいのである。そして潮流の研究をなさしめ自らこれに乘込んで此附近の潮流について老船頭の說明を聞いたのであらう。かくして彼は一世一代の會心の笑に、早くも明日の勝利を樂しんだ事であらう。それは合戰の前日卽三月廿三日の事であつた。かくて彼義經は此最も熟練したる船頭を利用し、彼等の勝手知つた壇ノ浦海上を、縱橫無盡に乘り廻し機一度熟せば、挺身自ら敵の本陣に斬り込まんとしたのであるしかし知盛とても亦此潮流を利用する事に注意を吝かなるのではなかつた。（下略）

四四、富豪 久原房之助氏

（此山は保安林にするがよい）

大阪の富豪久原氏が大正五年十月の頃茶伯高橋箒庵氏と共に光悦寺に來遊して、金力にて得難き寺内自然の大景に傾倒した事は箒庵氏著「東都茶會記光悦寺新席」の條に詳述されてゐるから、こゝには唯左の一言を補足するに止める。久原氏光悦寺風色に驚きの餘り前面の鷲ヶ峰を指し箒庵氏に向つて曰く

久原氏

この山の樹木は永久伐採せないやうにしたいものである保安林ともなすべく足下盡力せられては如何

箒庵氏默然たり、余心中さこそ望ましけれとすかさず賛成同意の辭を述べた。

箒庵氏

僕は時々遊びに來るばかりだから……

後鷲ヶ峰は遂に金閣寺の持山となつたから容易に伐木されないだらうが、久原氏の提言は流石に大きくて時所に中したものである。

其年の春であつた、新村出、和田維四郎兩博士が光悦本の展觀を京都袋町久原氏の別邸で開かれた時、余も參觀に行つたが、庭園の構造が山縣公無隣庵のそれに酷似して居つたから、久原氏の光悦寺來遊の節、其事を談じたるに、同氏は大に意を得たるものゝ如く、批評聞きたげなる面持ちであつたから、余は「無隣庵に比して水流のこれなきを異りとするのみ」といひかけたら、側にありし庭師小川治兵衛氏は「水の手もやがて出來ます」と言つて居つた。別業の水色今果して如何。

久原氏は此程嘗て大谷光瑞師が建てられた六甲山麓の二樂莊を讓り受け、其建物と其附近の廣大な地全部と若干の金員とを財産法人甲南學園に寄附して、今後七年計畫で大學組織に改め光瑞師の志を繼承して天下の英才を敎育せむとする計畫を發表した。聞くだに快い感じがする。大阪には近來此種の義俠家が續出するやうである。邦家のためよろこばしい事である。（八、九、一四）

四五、綿糸問屋　八木與三郎氏

大阪の綿糸問屋といへば何人も直ちに「八木」を念頭に浮べ「八木」といへば綿糸を連想するほどに八木與三郎氏の名が綿糸と共に世に知られてゐることは、恰かも久原といへば鑛業を思ひ、森下といへば仁丹を思ひ浮べると同一樣である。久原、森下、兩氏いづれも亦風流景勝を好まるゝにや、一兩度鷹峰に來遊せられたことがある。八木氏の風流に至つては遠く二氏に過ぎたるのみか、茶の湯の趣味の尋常ならざるものも亦これありて、光悦祭當日には缺かさず來鷹せられることは、たしかに氏の年中行事の一である。友を誘ふて來られるばかりでなくお駱駝も亦珍しからぬのである。

凡そ平素、商務活劇の裡、萬丈の紅塵に浴し、喧囂騷雜と應酬しつゝある人の、時々閑靜幽雅の山水に觸れて平生の神勞を醫し、疲膓を養ふに於ては喜愉快感の言ひ易からざるものあるは理の當然である。もしそれ同志相携へて光悦寺畔鷹鷲双峰の翠を捉へ、如意比叡の潺顏を眺め、船岡の嶺越しに遠く京都市の北半を望み、紙屋川の湍聲を耳にして茶室に端坐し、只管閑寂の境に入りて三百年前光悦の玩びたる一大風流を偲び榮辱喜憂世事係累皆相忘るゝに於ては爽快極まつて涕泣せんとするものがある。八木氏が尋常ならぬ風流家たるも亦這箇の消息を解せんとするものであらう。

氏の好尚は毎年光悦祭に來鷹して寺畔の秋色に憬がれ、光悦の遺風を慕ひ得ることが唯僅かに一回のみなるに物足らずと見へ、いでおのが趣味を滿たし果ては光悦會の企畫をも贊助しくれんと、昨秋私費を投じて光悦寺内翹秀軒の下數百坪の林地を購求しこゝに好みの騎牛庵を建てゝ土地諸共光悦寺に寄附せられたのである。此席太虛庵本阿彌庵と選を異にしてことさらに古材を用ひ、問取り、待合のしつらひさては窓前風致の取込みなどすべて客をして茶思を新たならしめんとするところ、流石に苦心の偲ばるゝものがある。

氏は今年の光悦祭には、こゝに得意の妙案を凝らして、光悦會員其他天下の雅客を呑吐するの計畫あるやに聞いて居つたのに、昨日の新聞紙は氏は這回華盛頓の勞働會議に我國資本家代表委員として出席すべき武藤氏に隨行して渡米せらるべきことを報じた。時を得顏の北米の山河、爛たる氏の眼眸に映ずる時、氏の茶趣果して如何、十一月中旬若くは下旬光悦祭當日、氏すでに遠く離れて彼地にあらむ思ひを遙かに鷹峰の天に馳する時、其感懷や亦如何。（八、九、二五）

四六、男爵 益田孝氏

（光悦崇拜は人後に落ちない）

鈍翁男爵益田孝氏は實業界の元老として其名もしるき人で、其今春男爵を授けられたのは斯界に於て邦家に盡された功勞に因るは言ふ迄もない、男が嘗て實業界の俊傑故中上川彦次郎氏と共に三井の兩雄と唱はれた一事は其才幹の凡ならずして將器あるを證すべきである。男は鹿兒島縣人に似合はぬ風流士で、大の茶人で名器を藏すること少なからず、美術の鑑賞眼も凡でない。藝術家以外に於て東京に於ける光悦宗三家の一人といふべき格で他の二人は卽ち男爵大倉鶴彦翁と茶伯高橋箒庵氏である。此三傑は孰れも我こそ光悦宗の管長でござると言はぬばかりの面持あるは奇特の美事といはねばならぬ。たゞ三家の異れるは鈍翁箒庵兩氏が光悦の如く大の茶人たるに反し鶴翁が茶を好まずして光悦流書道に頗る得意な點である。

鈍男が明治四十年三月二十二日品川御殿山の自邸に於て光悦遺作の展觀をせられたことや大正三年八月下旬光悦寺へ光悦自筆書簡卷物を寄進せられた事などは、何人も男が尋常ならぬ光悦崇拜者たるを首肯することであるが、尙ほ男が光悦筆扇面散しの屏風、光悦作山姥能面や、光悦作色紙帖などを所持するを以て大なる誇りとせられることも亦光悦傾倒の一證たらざるを得ない。大正三年八月上旬余光悦會の用務で東上した時大倉男や岸光景翁の勸めによつて光悦會に入會を請はんがため男を品川御殿山の邸に訪ふたところ、折節男は小田原の別莊に行かれたとて不在であつたから、再訪を期して邸門近くまで罷り歸ると洋服姿に腰巾着の鈍翁は獨りでせつせと歸つて來られた。良い鹽梅と邸内に引返さうと思つたら鈍男は之を拒絶せられるから已むなく捉まへて立ち乍ら談じ合つたら、入會の諾否は一度内貴甚三郎氏に會つた上のことにしやうと言つて確答を避けられ、曩きに洛南八幡の松花堂遺跡の修築殘務の處置に關し内貴氏に對して稍憤慨の口吻を洩らされたけれども、光悦を崇拜することに於ては敢て人後に落つる者にあらずと言つた風に赤裸々の告白もあつた其後男が光悦會に寄せられた光悦觀の末文に

余も譽れて鶴の神技に心醉し其製作と見れば產を傾くるの癖ありながら未だ一度も鷹峰の跡を訪れたることもなく頗る理悟たりしが本年（大正三年）五六月の交京都に赴き珍らしくも一日の閑を得たりしかば此機遇すべからずと光悦寺に到り鶴と空中鶴との墓に謁で多年の義務を果したるの感あり

と言つて居られる。男がかく迄に光悦に心醉しながら其筆蹟を見ると正しく松花堂流である。氏は松花堂をも亦殆んど光悦と同列にして其妙技に敬服しつゝあるやうである。日外岩原某氏に空中齋作水指銘園城寺の蓋を破られて、其辨償に松花堂筆長恨歌の卷物をかち得て鬼首取つたやうな氣分であるさうだが、男は又更に其大切な水指を本年本月十二十三兩日鷹ケ峰に運んで光悦寺太虛庵に雅莚を張られたのである。さて右兩日待合の翹秀軒に宗達下繪光悦和歌卷物を置いて來客の觀覽に供せられた。宗達の下繪は金泥にて群鹿を描いたものであるが、牝牡の鹿が數十頭群坐してゐる所もあれば同じく數十頭群立してゐる所もある。孤走してゐるところ獨坐してゐるところ、三々五々或は戲れ或はねむり千態萬狀妙技のあらむ限りを盡せるには、何人も宗達が妙技に敬服せざるを得なかつた。迫がの光悦も下繪の場所を出來得る限り避けて書いてゐる所を見ると光悦も其妙技に對し少なからず敬意をはらつたものと見える。

（八、一一、二四）

四七、文學博士 松本文三郎氏

もと京都帝國大學文科大學長であつた同大學文學部教授松本文三郎博士が高人格の士であることは豫て多くの人から聞いてゐたけれども、余はたゞ一回博士の演說を傍聽したばかりで親炙する機會を得無かつたが、大正七年春鷹峰源光庵開祖卍山道白禪師に對し、追慕の情を滿たすため、卍山會を組織する時、印度哲學の大家たる博士を發起人に依頼致さむとの輿望から、余は三浦周行博士の紹介で博士を訪うたのが、親しく博士に接した最初である。博士の棲所といつば平安の艮隅、如意の西麓、銀閣寺北方の山中にあり、「竹風掃楷塵不動」といつた風の俗塵を隔てた幽居であつて禽聲、水音の耳に入るあり、樹枝が柔く動いて日光と共に障子に映つる風情心氣おのづから雅化せんとしたのである。

博士の風采態度亦頗る超人的で、言葉寡い笑はない、表情のない虛心坦懷な所、古哲人はかくや

と思ふばかりであるにも拘らず一種言ふに言へぬ親しみの感せられていつ迄も博士の前に在りたげな思ひがした。

大正七年四月二十七日源光庵法類總代、檀徒總代等相集まり兩博士を源光庵に迎へて、卍山會の計畫事業につき指導を求めた、三浦博士は意見を述べられるけれども、松本博士は高止默々、時々事を尋ねられるのみで、卍山文書を一覽に供しても「禪師は中々筆まめだつたね」と咄さるゝに過ぎなかつた。會議が大體濟んでから光悅寺に往つて魁秀軒からの眺望が眼に入つても何も言はず、唯眺めて居られるばかり、立ち居ふるまひ一として三浦博士に從はれざるなく、當日の意見行動すべて三浦博士のそれに異議なしといつた風であつたそれで居て重みあり力あり、大に信賴し得たのである。人格の力といふものは不可思議なものゝやうだ。(八、六、二〇)

四八、東京美術學校長 正木直彦氏

(我が校の光悅謠本は……)

東京美術學校々長室に正木直彦氏を訪ひたるは大正三年四月光悅史傳材料蒐集の爲め東上中、岸光景氏より「嘗て正木美術學校長の依賴によりて光悅謠本を紹介し、數十冊の謠本、今美術學校の藏書と成り居れり」との談話を聞きたれば、そが閲覽を請はんがために登校したるなり。長身白皙の氏は廣き校長室青色の紋羅紗を被ひたる大卓子を前に、安樂椅子に倚りかゝり南面して執務せられしが、悠揚たる態度にて語るらく

東京に於て光悅光琳派の美術に對して鑑賞眼を有する第一人者は岸光景氏なれば、當校も同流派に關する藝術については、同氏の指導援助を受けつゝあり。當校所藏の謠本も岸氏の周旋によりて購求したるものなり。本校には光悅の作品は、唯この謠本あるのみ。帝室博物館には光悅の孫空中齋の揮灑にかゝる三幅對の繪畫ありと聞く、是非閲覽せらるべし。

とて、余を同校圖書室係某氏に紹介せられたり。依て圖書室に到りて光悅本を閲覽したり。今記臆に尋ぬるに數十冊の謠本(一冊に一番づゝを書す)は白木製の函に納められたり。謠文々字は光悅の書風に似ざること遠けれども表紙の短冊は光悅自書にして中には極彩色の施されたるあり、其上に揮灑せる表題(謠名)も亦光悅の肉書なり、しかのみならず表紙一面いづれも雲母摺にて諸種の草花を圖す、卽ち該謠本の美術としての價値は表紙に於てのみ之を見るべきものとす。而して此函中には一封の手簡を添へ納めらる。そは京都の神阪雪佳氏が岸光景氏に寄せたる書狀にして、「先日預け置きの謠本は貴地に於て望みの人に讓渡度故可然取計を請ふ」との意味を記したるものなりき。依て本書の傳來と其もと京都にありしものなることを知り得たり。

全部閲覽を了したれば、同校を去つて帝室博物館に至り、正木氏より聞知したりし空中齋光甫作三幅對繪畫の特別閲覽を願ひ出でたり。「名畫拾彙」に「本阿彌光甫、號空中齋、嘗嗜茶香、能製陶器、學祖翁之蹟、精丹青之道、然其畫、拂地不傳、唯藤、蓮、丹楓三幅、現在其家」とあり。「續本朝畫史下」にも同上の文の外に「厥後於寫山樓得見其模本、實足稱逸作、縮圖出于畫纂」とあり。而して博物館御所藏のものは、光甫の藤、蓮、丹楓の三幅の畫を模作したるものなることを明らかにせり。又「續本朝畫史」に所謂模本にてもあらざるものゝ如くなるも、尙これ空中齋の畫才を偲ぶに足るべき好資材たるを失はざるなり。(七、一二、二〇)

四九、鷹峰角屋主人 松野知次郎氏

松野知次郎氏は鷹峰角屋の主人である、家は醬油製造業であるが近頃漸く老齡となつて、業務を相續の人に委ね、所謂角屋で悠々として尙且理財貨殖の道にいそしまる、角屋は元來氏の家の宗家で嘗ては桂の鍋八(風間八左衞門)、勢田の磯五郎(丹波、牧磯五郎)等と共に、長者鑑に入つたばかりでなく、もと京都府會議員、同府會議長として又京都府選出最初の代議士として、愛宕、葛野、紀伊三郡の長として、最終には相樂郡長として令名嘖々たりし、故松野新九郎氏の家であつたが、新九郎氏が田舍に稀な才器を抱いて地方行政に又國事に奔走して自宅をそつちのけにして居つたのと正反對に知次郎氏は名聞を好まず、名譽を望まず、廣區に立つて世のため國のために、盡さうと

いふ樣な覇心もなくて、我が家のため子孫のために經營して止まないのであるから、本家の新九郎氏が年と共に貧しかつたに引かへ、分家の氏は年と共に富んで明治三十年新九郎氏死後角屋の家も終に住む人なきに至つたので知次郎氏が近年その後住となられたのである。本家を相續したといふ譯ではないけれども其家を所有とし其家に入られたから今は卽ち角屋の主人である。

氏は若年より膽を以て知られてゐる、氏の青年の時夜半に强盜數輩闖入し金錢を劫奪せんため白刃を閃めかして氏を脅迫した、氏は泰然として少しも動ずる色なく、却つて炬燵に腰を掛けてゐた賊輩が足先を震動させてゐたのに哀れ小なる敵膽を看破してこれに應酬し損害の極めて少きを得た事や、又舊周山街道開鑿の際、鷹峰村長の職に在つて工費の支出上に於て端なくも工夫の激昂を來し、多人數の襲擊を受けたこと一再ならず、いつも自若として其場所を動かなかつたが唯一度危機の頗るせまつた場合に其場を逃ぐるに當つて折節の俄か雨に片へに藏めある傘を取り出し、それをさして悠々と立ち退いて危きを免れた時などは敵も味方も其度胸に服したといふことである。又昨年は氏空前の厄年で京都に分家してゐる氏の次女が亡くなる、孫が三人も死なれる、姉さんも亡くなられる、尙剩へ氏自身が盲腸炎を病んで打ち臥したが、從容自若少しも取り亂さずして難事に應酬して居られた。學問があるといふでもなし、宗教の信仰があるといふでもないのに偉い所がある。

名を欲せず虛榮を嫌ふ氏は村長や郡會議員に選擧せられ、已むを得ずして就任することが度々あつたが、もとより辯の人でないから、派手な相撲の取り口は出來ないが實行家だから、いづこにも陰然として重きをなす、今は卽ち鷹峰の重鎭である。

尙ほ氏は光悅寺の檀家總代として光悅會の發起人となり又幹事となつて同會の事には始終盡しつつある。余が同會創設のために盡し得たのも鷹峰に氏あることが大に力となつたのである。

光悅の偉い事は今に始つたことでなく、二三者の盡力によつて其偉名が天下に知られた譯でない素より知らるべきであつたのであるから、光悅會の創設も光悅會事業の完成も或る直截な論法を以てすれば光悅自らがしたともいひ得る、否時節が

然らしめたとも言ひ得やうが、四五人の功特に力ありと言はねばならぬ、就中氏はいつも會を本位とするよりも寺を本位として考へることが多かつたのは氏の氏たる所である。

氏、宴樂を好まず出遊旅行を樂まず、美味食はず、美服纒はず、質素な古風な人柄であり家柄である。凡そ家道を維持し且榮えしむる人は多くは氏の如き把持の固い人である、かの新九郎氏が世の爲めに盡し開達をもとめて家道終に亡びたるとそれいづれぞ。こゝに國家柱石の賢臣の例を引てい論ずるは早計であらうが、楠氏は亡んでも社稷萬代に泰きを得、乃木氏後絕えて忠士爲めに歸向を知るに至つた。要は我が力量及事の輕重並に理と情を考へて處置行動すべきであらう。

（八、七、四）

五〇、江馬務氏

「名妓吉野」の著者

文學士江馬務氏は有名な詩人贈從五位江馬天江翁（夙に勤王の志あり書畫に達し醫術に長ず明治三十四年七十七歳にて歿す）の孫である。京都帝國大學史學科に於て風俗史を研究し、卒業後京都市立美術工藝學校敎員奉職の傍ら風俗研究會を設立して斯學に於て史界並に京都美術工藝界に多大の貢献をせられつゝある。加之、氏は更に染織研究會なるものを創設して是亦我が工業界特に染織界乃至美術界に貢献せらるゝことは少なくない。

古來美術工藝の中心たるばかりでなく、染織工業に於ても覇を振ひつゝある京都市に於ては、氏の如き研究は頗る適切で、氏の研究が直接間接に京都市を裨益すること少なくはなからう。京都人としての氏は眞によく其天職を撰んだのであり、よく一身を有効に使用しつゝあるのである。

大正五年冬十二月、余、吉野會設立について奔走しつゝある時、書肆芸艸堂で氏と會して談、名妓吉野に及んだところ、恰も其頃氏が遊女の風俗に關する研究を進めつゝあつたことゝて意氣相投合し、氏は余の勸請に應じて直ちに同會の發起人たることを快諾せられた。

氏は吉野會の懇請に應じて吉野傳の起稿を快諾せられ、爾來二年間、學事繁忙の中、特に時間を割いて「名妓吉野」の著作を完了せられ、大正八年八月二十五日の命日に相當するの日終に脫稿を見

るに至つた。其目次は「名妓吉野」目次

一、鷹峯
二、三筋町の花
三、才色双絶
四、法心堅固
五、根引の櫻
六、佐野の若松
七、無情の風
八、故山の遺芳
九、深山の花々
十、名花の譽

題目が題目とて硬苦の嫌ひなく、さりとて又軟柔にもあらず、該博な考證に流暢な文章もて吉野の容色、人格等すべてよく描寫せられ、幾度繰り返し讀んでも倦むことを知らぬ。嘸や吉野も地下に於て喜悅の禁ずる能はざるものがあらう。此著によりて灰屋紹益の妻としての吉野德子の法名が矢張、本融院妙供でなく、唱玄院妙達日性であつて寛永二十年に三十八歳で亡くなつて鷹峯常照寺にある墓が本墓であるといふ余の從來の所見が確實となつた。「名妓吉野」序文をば東京の高橋義雄（箒庵）氏に請ふことゝして土橋氏に交渉を任せたところ、箒庵氏快諾して寄稿せられた、遉がに大家の名文とて「名妓吉野」をかざる序として應はしい「名妓吉野」は京都寺町二條下ル書肆合名會社山田芸艸堂より出版發行してゐる。（九、一、一五）

五一、醫學博士 荒木寅三郎氏

京都帝國大學總長

京都帝國大學は明治三十年洛北愛宕郡吉田村（今の京都市上京區吉田町）の田畑を拓いて創立せられ、法學博士木下廣次氏が明治三十年六月から同四十年七月迄滿十ヶ年間總長の職に居られたが病のため辭任せられたので、其後任として同年十月岡田良平氏が赴任せられたが、僅々數ヶ月で罷免となり、理學博士男爵菊地大麓氏が來任、學内平穩に治つたが、同博士も東京に住居したい希望のために永續せず、明治四十五年五月辭して歸東せられたから、同大學理科大學教授理學博士久原躬弦氏が其後を襲がれたけれども、同博士は元來學者肌で學究家だから永く總長を勤める意志が無かつた。大正二年五月强いて辭されたから、又其後任には澤柳政太郎氏が東北帝國大學總長の職から轉任せられたが、氏は功名を急がれたがためか、理想の貫徹にあらせられたが故か學内の廓清を名として七博士に辭任を迫られたので、大正三年正月櫻島の爆發と共に同大學も爆發をして一大騷動が持ち上つたところ、決局澤柳氏が辭められぬと治まらぬことゝなり四月に解任となり、暫時缺員であつたが、同三年八月東京帝國大學總長山川健次郎氏の兼任となり、さなきだに忙しい山川博士は双肩の重荷で、東につとむれば西が疎になり、西に善ければ東に手落ちは免れぬ風で頗る無理な務であり、一身上の都合も善からぬので、四年六月京都の方をやめられたから、從來學内の輿望を負うて居られた醫學博士荒木寅三郎氏が、教授から總長に陞られることゝなり、京都大學は茲にはじめて圓滿融和、泰平の風が吹き渡ることゝなつた。荒木總長は世に所謂官僚的と全く趣を異にして、平民的で誠意あり、善く人を容れる雅量があるから期せずして學内の一致を見るに至つたのである。

同大學文學部教授三浦博士が、京都の日蓮宗各本山に史料調査をせられた時、余は三浦博士に義理盡しの廉があつて、其交渉委員となり、大正四年初夏梅天漸く雨繁からむとした際、奔走した結果各本山は五月雨時寶庫を嚴閉して濕氣を避くべき期節なるにも拘らず、皆快く寶庫を開いて博士をして調査せしめたので、豫想以上の成効を收め得た。依つて博士の計らひで同年七月十三日の大學卒業式に余は總長から案内狀を得たので、微賤無學の身の光榮と思ひ卒業式に陪席した。其式場に於て最もよく余の目についたのは、天皇陛下の御名代として、御臨場あらせられた閑院宮載仁親王殿下の堂々たる御風姿と、荒木總長の丸い大きな光つた頭顱とであつた。式のすんだ後には立食の饗應があつたが、其席で高壇に上り、簡單なる挨拶をせられた總長の口說は中々に愛くるしかつた。

骨董商界の奇人土橋嘉兵衛氏が、大學在學中の貧書生に對し學資を寄附提供しつゝあるのも荒木總長の這箇の善辨に口說かれたものと見えた。土橋氏が余の依賴によつて吉野會を發起し鷹峯常照寺の吉野門を建てられた後、吉野太夫の追善講演をも開かうと余と相談をした時、大學の先生にも懇請して其時代の史的考察をのべていたゞかうと

江馬文學士の提言もありして、あは善くば藤井乙男博士へ總長から頼んで貰はんものと思ひ、兎に角一應依頼せむと、余が總長の官舍へ出掛けたのであつた。余は其時大分見當違ひの頼み事と思つてゐたけれども、學究に屬する部分ならば、或は總長も承諾せられるかも知れないと思つてゐたが果して總長は斷はられた。其斷り方が實に旨かつた。總長は官舍の應接室内の身體が埋まる樣なふつくりとした安樂椅子にからだを沈めて、光つた頭をふり〳〵圓滿な面相に笑を浮べつゝ

それは善い事で趣旨も分つてゐるし、理屈も立つてゐる事ではあるが、いくら學問的の事だといつても、事遊女の追善に關する事だから、僕が總長として教官に對して一寸話はしかねるれそして大學の學生は皆青年男子であるから、それらの精神的教育に關して矛盾を生ずるかの誤解を、もしも世間より受ける樣な事があつてはいけないから、矢張それは、江馬君からでも藤井博士を動かす方がよからう、併し江馬君からいふたつて藤井博士が動くかどうかね

と辨解的謝絶巧妙なりけりだ、余は總長の慈顔と愛嬌ある口もとを見ながら、如上の事を聽き此人は流石に天下無敵だと思つた。

進められたる茶菓を喫しつゝ室内を見廻すと卓子上の卷煙草入は漆器で光琳風の蒔繪がしてあり桃山時代の作のやうな絢爛眼を奪ふ樣な屏風も立てまはしてあつた、落款が目に付かぬので誰の作かと尋ねて、都路華香氏の作と知れた。歸る時玄關まで送つて出られ叮嚀なる一揖をたまふた、其態度悠揚として愛くるしかつた。余は自轉車にての歸路ひとりほゝえみを禁じ得なかつた。最高學府の長たる人に這般の事を依頼に出かけるとは、たとへ吉野が絶代の賢婦人にあつたにしろ、放縱も亦極まれりいへばいひ得ぬでもない。でも總長の撃退が遒がに情味たつぷり。

大正七年十一月予は拙著「鷹峯餘韻」一部を京都帝國大學に寄附す。同三十日總長は鄭重なる謝詞を載せたる公文書を贈らる。(七、一二、一六)

京都商報會社長
京都農工銀行頭取

五二、雨森菊太郎氏

(光悦といへば立て物がよいから)

雨森菊太郎氏號を蝶夢といふ、岩垣龍溪の裔、故岩垣月洲先生の男で雨森家を續いだ人である。

蝶夢氏は遒がに名流の名を汚さず、手腕あり名望あり、嘗ては京都市會議長をつとめ、市選出の代議士とも成り、又京都市長に擬せられた事さへあつた。今から二十數年前京都に於ける氏の聲名といつたら、素晴らしいものがあつた。今年六十二歳年こそ取つたれ、尚よく壯者を凌ぐの概があつて京都商報會社(日出新聞社)の長として又京都自働車會社の長として尚且京都府農工銀行の頭取として實業界の重鎮たるばかりでなく、諸種公共事業に關與しつゝあるのは、氏の老健を證して餘りあるのに、尚近事奥繁三郎氏(元衆議院議長)の後を繼いで京都府教育會の副會長に推薦せられ、剩へ久原躬弦博士(元京都帝國大學總長)の後を襲いで、京都市教育會の副會長(京都府教育會長は府知事、京都市教育會長は市長が各其職に就くが會の慣例となつてゐる)にも推薦せられた一事に徴して、其德望のいよ〳〵益々佳境に入つた事を知るべきである。

氏の性格といつぱ頭腦明敏、意志堅固、感情に捉はれない、事務を見るに適し衆を統ぶるに當す兎に角京都人には珍らしい切れ手である。氏をして今少しく野心あらしめて、而して京都よりも尚廣き舞臺に立たしめたならば、必ずや大に名を成すべき人であらう。唯其辯に於て京都人士中に於ては一方の雄たるを得るも、懸河滔々たるを得ないのが稍遺憾とすべきである。

されど大なり小なり、苟も名家の流たるものに於ては、故岩倉具視公の如き精鋭活眼の士たらざる限り、又故近衞篤麿公の如き英邁達識の士たらざる限り着實穩健以て大過なきをつとめ、德性を養ひて、祖先の遺風を顯彰せむことを期するは、當に賢者の取るべき道である。此意味に於て余輩は蝶夢先生の穩賢に服せむとするものである。

大正二年夏余神阪雪佳氏を訪ひ、光悦會を計畫した時、雪佳氏曰く「我京都では此種の公共的事業については内貴雨森兩氏の賛諾を得ることを要する、少くともどちらか一人發起者として加入を請はねばならぬ。雨森氏は新聞社長でもあり好適と思ふから」とのことで、即ち雪佳氏の紹介で蝶夢氏を訪うた。八月十一日京都東三本木の昔は頼山陽が日夕見とれた東山の翠色を眺め、脚下加茂川の水清き蝶夢氏邸の極東に一脚の卓子を擁し相對して氏を口説いたが、ちやんと雪佳氏から概略話しをして賛成同意を求めてあつたので、余は唯其日迄の計畫經過を陳述したに過ぎなかつた。依

て蝶夢氏は「近日日を期し京都の有力者を帶同して光悅寺に出かけるから其席で光悅の偉いことを詳細に談せられたい」といはれたから、其日遲しと待つて居つたら、いよ〳〵九月十六日に會同するといふ通知が來たので前田住職、村尾村長其他村の重もなる人々、檀徒の目ぼしい人等と共に、それ〳〵準備して待つて居つた。九月十六日は來た、午前十時參會した人は、飯田新七、西村總左衞門、廣岡伊兵衞、清水半兵衞(代青木松次郎氏)三上幸三郎、本阿彌琳雅、雪佳、蝶夢の八氏であつた。

其時分の光悅寺といへば、あれにあれて、本堂庫裡に雨のもらぬを得るのが關の山、庫裡からの景色も樒林にさえぎられて遠方初秋の風色はおろか京都市內の一部さへ、通本橋上に走り出ない限り、目に入らない。鷲ケ峰がぶつくりと大きな圓翠を橫たへ、傳光悅手植の松の三幹がぬつゝと太さをほこつて天空を突いてゐる。光悅式の自然といへば頗る雅致ありげであるが、實を言ふと荒廢の色で、日が照るとぱつと障子に映るのは竹籔の枯れ葉で、風が吹くと、ざつと音するのは我慢げに景色をさへぎれる樒林なのである。せめてものほこりは前田住職が掃除好きで、本堂庫裡さては鐘堂のあたり、光悅光甫の墓前いづこを訪ねても塵、ほこりの影を止めない一事である。この氣色を前にして來會の人は光悅の當時を偲びつゝ村人なり、寺方なりの希望通りに談を進めて行く。切り出し、誘ひ出し、問ひつ答へつ老達な手腕で纏めて行くのは、いふ迄もなく其席の中間に坐を占めてゐる蝶夢氏で、雪佳氏は其少し上席にあつて下手な辯で時々思ひ出したやうに、ぽつり〳〵と光悅憧憬の情をもらす。當日東京から光悅の木像を持つて來た上座の琳雅氏は其木像を床の間に安置して其前に坐つたまゝ木像の如く默してゐる。といへば中々難產である樣だが、もとより難產たるべき筈はない。當日來會の諸氏は、すでに蝶雪の兩氏に聞いて豫め同意してゐるのだから不贊成のある筈がない。今日も亦形式の會合に過ぎない。第一回の寄合のことゝて、談少きは手持無沙汰の感がするからである。かくして光悅會は極めて安く呱々の聲を擧げたのである。遉がに光悅顯彰の會の事でもあり京都一流紳士紳商の集りだから、極めて上品に極めて無難に出來上つたのであつた。

蝶夢氏其後光悅會發起人の會合のある每には必ず出席せられ、いつも座長となつて、諸事業の計畫遂行に力を盡されたから、同會も益發展して、豫期以上の成功を見るに至つた。光悅傳脫稿の上にも會員總代として序文を作られた。

前略陳者光悅傳序文乍延引別紙差出し候是は小生一人之物にも非らず光悅會員代表之文章に付貴下之代作文として一應內藤湖南君に御見せ被下候ては如何と存候右申上度其內茶席拜見之爲に寺に可參候草々

九月三十日(大正四年)　雨森生

大正四年十一月下旬光悅祭終了後、村尾村長、前田住職、松野氏と余と四人氏を訪ねて挨拶を陳べると「光悅といふ立て物が良いから……」といつて毫も其功をほこらなかつた。氏は光悅會の外、友禪史會のためにも盡し、その會長である。

(八、七、一)

五三、法學博士 文學博士 有賀長雄氏

余嘗て東京帝國大學史料編纂掛に雇用せられし時、編纂官辻善之助博士の紹介によりて、有賀長雄博士と相知るの機會を得たり。これ余が本阿彌光悅と由緒深き鷹峰出身の者にして、且平生光悅研究に從事しつゝあれば、光悅の事蹟に關する調査のために大學を訪ひし有賀博士には、頗る好都合なりければなり。是に於て余は博士の問に應じてしばし談話を交換したりしが、博士は近日鷹峰に到りて光悅寺に詣でんと欲すとて洛北の地理につきても亦余に問ふ所ありき。

博士夙に歷史に造詣深く明治二十五年「帝國史略」を著はし版を改むること二十餘回、又明治四十年の頃三橋要也、大宮兵馬の兩氏と共に「大日本歷史」の大著をなして帝都の紙價を高からしめたり。博士又夙に國際法學の權威として令名あり近時袁世凱氏在世當時より、法律顧問として支那民國に聘せられて北京にあり。近著「支那正觀」は短篇なるも、志を支那學に寄する者、及學を世界の文明に貢ぎするものゝ一讀に値するものなり。其序文尙よく博士懷抱の一端を知るに足らむ。

(七、一二、七)

〔有賀博士編著 支那正觀自序〕

去明治十八年余文學叢書の第一卷を以て文學論を著し同第二卷を以て孔門哲學或問を世に公にしたり爾來茲に三十年未だ嘗て志を文の理想の研究より離したることなし常に以爲らく「支那

を中心とする文の理想は是れ東洋の天地を經緯する一大思想にして其重要なることは西洋の近世を支配する科學の思想に讓ることなし」と又常に信ずらく文の理想の今日に重要視せられざるは是れ唯だ一時の現象のみ將來必ず科學と並行して世界の二大思想たるの期あらむと

最近六年間余は民國の招聘に應じて北京に寓居し親しく彼地の制度文物を觀察し支那國民團結の基礎を爲せるものは實にこの文の理想に外ならざることを實地に就きて確むることを得たり因て試に余の年來文の理想に就き抱持する所を述べ題して支那正觀といひ以て彼地知友の鑑正を請ひたるに皆之を是とし教育部内に於ては此の思想を以て少年子弟の教科書に加へんと擬するものすらありき今又之を以て本邦の識者に質すため外交時報社に托して刊行し附するに其漢譯文を以てしたり而して余が三十年前に於ける二著は既に絶版に屬するを以て之を卷尾に附錄し以て余が思想の今昔一貫せることを證すと云爾

大正七年九月

五四、帝室技藝員　岸光景翁

（光悅の意匠には驚神駭魂の外は無い）

光悅會の創設せらるゝ當時、余は神阪雪佳氏を幾度となく訪問した、訪問する度毎、雪佳氏は「私の師匠が……、私の師匠が……」と二言目には必ず此の言を吐かるゝにぞ、師匠は誰かと聞いたら嵩崖、岸光景翁其人であつた。でいよ〳〵會の設立も決定したので雪佳氏から手紙で通知せられ、同會の發起人と成られたのであるが、發起者としては無かるべからざる人たるは言ふ迄もない。

大正三年四月余の東上の際、雪佳氏から前以て手紙を出され、其紹介によつて下谷池の端七軒町の邸ではじめて翁に會つた。翁時に七十五歳の高齡瘦軀鶴の如く稍脊柱の彎るを見るも面相圓滿にして眼采烱然、風骨氣品言ふばかりない。翁は仲春の草花池邊に叢生せる閑庭を前にして語つた。

凡そ光悅の如き偉人は美術工藝史上に於て余は比儔を知らぬ、其遺作の凡を拔いた氣品の高いのには景仰に堪ねぬ、其豪壯な筆力といひ、意匠に思ひ掛けなき妙想奇案が出てゐるのに驚神駭魂の外はない。けれども其作品が多からぬので人の目に付く機會が少いから、光悅の了解者も少く、其流れを汲む人が無いのであるが、私は夙くから光悅、宗達、光琳の藝術を解して就中光悅に對して最も大なる崇拜をはらつてゐます。神阪氏も珍らしく奇骨のある仁で、はじめは種々な繪を學んだが終には、光悅、光琳の非凡な所を了解したのである。

數日を隔てゝ再び訪うた。翁は余に見せるために平生秘士で目貼りせる土藏を開き、所藏の光悅遺作の數多を持ち出し、光悅書畫の屏風を引きまはした座敷で又種々談せられた。

〔岸光景翁光悅談〕

光悅は書は王羲之十七帖の如き筆法に我空海道風を始め上代名家の風を學んだものだらう、もと光悅所藏の道風の書を古筆家は本阿彌切と言つて賞翫してゐる。

光悅は畫は海北友松に學び、又狩野永德を師としたといふが、本朝古畫、古土佐を慕うたには相違あるまい。多くは金銀の泥畫で墨繪や着色畫は少いが、歌仙人物及草花の類に稀に着色したものがある。益田孝氏所藏の扇面散し屏風、大岡力氏舊藏の扇面散し屏風の二品並に岸所藏の草花屏風がいづれも着色の重もなもので、書畫卷物の畫は殆んど金銀の泥畫である、銀泥畫はいづれも變色して黑色を呈してゐる、益田氏の扇面散し屏風は酒井抱一の極めがある、小林文七氏所藏の扇面墨繪の山水は極めて珍らしいもので、それに使つてゐる落款も亦珍らしく長方形の印である。

光悅の蒔繪には、書棚、料紙箱、硯箱、謠書箱、經函、香合の類がある。光悅蒔繪には三種あつて全く自作と見るべき物は美麗の觀は少いが雅致の言ひ易からざるものがある。製陶も實に非凡で永樂保全の筆記を見ると樂燒を作るもの光悅に及ぶ人なしと明言してゐる。光悅彫刻の遺存するものにして私(岸)の知るは益田氏の山姥能面、岸所藏の人丸高光の歌仙額及印籠、其他香合置物などである。歌仙額は人物を凸彫にして文字を凹彫にしてゐる。印籠は人物や動物を彫刻してそれに蒔繪してゐる寒山の印籠、伯藏主の香盒、竹製花生なども私(岸)が持つてゐます。光悅は書畫、蒔繪、彫刻、製陶の外、建築、作庭、及音曲にも精通して居つた樣である。光悅の如き大器多藝の人は上代より以來比儔を見ない。實に古今獨歩である。

岸翁は嘗て京都府勸業課の招聘で京都に來て京都の圖案界、染織界に貢献された事が多い。京都滯在中夷川通古道具屋の店頭から翁に掘り出された光悅の遺作もあつた樣に聞いてゐる。光悅系統の作品鑑定には隨一の權威者で氏が一たび光悅といへば忽ち光悅となり、宗達といへば宗達となる。これ翁の鑑識力を偲ぶに足ると同時に氏が社會に於ける信用の多大なるを見るべき一事であらう、まことに翁は當世珍らしい高潔の士で、其光悅に對するあこがれは「有りがたさにぞ涙こぼるゝ」といはぬばかりの餘所の見る目も痛はしいほどである。翁が余に寄せらるゝ書簡は一として故翁の事を記さゞるはなく光悅寺が天下に紹介せられて光悅の偉名が普ねく知れわたつた事を非常に欣んで「もう何時死んでも憾みはない」と言つて居られるのである。翁は心中無私潔白、何事でも善意に解して欣ぶ人である。翁が寫眞を撮影せられたことは昨年頃門弟の島田神阪兩氏がやかましく翁を連れ出して三人一所に撮影せられたこと生來唯これ一回のみである。又故三井男爵(八郎次郎氏)と懇意な間柄であるからいつも互に往來して居られることかと思つて、余は特に岸翁を通じて依賴する

廉があつたら、翁は近來内身疼痛で臥褥して居られる極めて不自由な身なるにも拘らず、大正八年九月二十三日八十歳の老體病軀を腕車に載せて態々三井男爵を訪うてくれられたのである。然るに此時翁が三井邸を訪はれたことの嚆矢であることが書中に見えて、余は一方ならず恐縮して、翁が誠志に感動したが三井男は日ならずして薨去した。左の書簡は今夏翁が贈られたものである。

拜啓大暑之候に候處愈御康安大賀之至に存候平素御無音打過多罪御海恕可被下候扨兼々御盡力之光悅會も追々有志士も增加致し茶室も數多出來茶會の都度招待相受候へ共老體何分不任心底遺憾之至に御座候

明治廿一年頃初て光悅寺へ參詣致候節同寺に圓頓止觀之横額有之光悅大字に而見事に候へ共其後無之由に承り候其頃之御住持老僧に而談話中參詣者として更に無之候へとも折々鹿鳴を聽に參る人有之候と被申至極幽雅なる事に存候得共今日者絶而無之事に被存候右住主一度東上被致自宅へ被參光悅寺世間へ紹介之件被托候得共何分時期到來せず其後承り候へば住主は死去被致候との事に御座候彼の額は本法寺へ參り候哉之説も有之候得共御見當も無之哉惜しき事に御座候

明治廿一年は貴地聯合共進會有之老生は審査官として出張其際高橋道八翁先々代と懇意に相成り鷹ヶ峰も同翁同道の約束に候處實は同氏も方角里程も不案内の由に付老生旅館は聖護院蹠野社内森增に滯在中同家より道を知りたる人力車夫を雇ひ吳獨行致し本望を遂し申候其後明治廿六年本法寺に而法要相營み候節鷹ヶ峰へ參詣致し候處已に住職は相變り居候過般御送付被下候光悅別傳中老生は光悅崇拜者の一人者と茲御記載被下何等寸功も無之に眞に名譽にて汗顔の至り只今も病臥中舊事を思ひ出し老生壯年御一新前光琳は光悅の門人と云ふ事を承り居維新後明治五年勅封開綫御用山城大和社寺取調巡回被命御地にて鷹ヶ峰參詣を希望致候得共何分餘暇を得ず歸京致し前條之次第に御座候しかし光悅崇拜と申事五十年前よりの事に候間一應申述置候當地に而者古來光琳は光悅門人と唱へ之れは左も可有之事に御座候くたらぬ事を書つらね御一笑可被下候常に御無音申譯かた〳〵如此草々頓首

七月廿八日　岸　老生

二伸時下折角御加保所祈候老生も初夏より腸を病み長く病床に居候處近日少快を得候間今暫く存命可致候餘者次便に讓候也

翁の光悅憧憬の度も察せられるではないか翁の書中に所謂圓頓止觀の扁額は今尚光悅寺庫裡にかゝげられてある。無論光悅流の書ではあるが光悅の揮毫した文字ではない（八、一一、一二）

五五、木内重四郎氏

前京都府知事

男爵大森鍾一氏が多年京都府知事の職に在つて良二千石の名あり。明治天皇、昭憲皇太后の兩御大葬及　今上陛下御即位式終了後、皇后宮太夫の榮職に轉せられたので其後任として韓國統治及韓國併合につきて陰に陽に活躍を試みた木内重四郎氏（慶應元年十二月千葉縣山武郡千代田村に生る）が赴任せられた。木内氏は殖産工業に於て有識の士たることは、既に定評のあつた人であり、覇氣滿々として功名心の熾烈な人であるからには、十年鳴かず飛ばずの大森氏の後任には、京都府知事として適任であるといふことも、亦同氏が赴任する迄の取沙汰であつた。

果せる哉氏はあらゆる方面に獨特の怪手腕を伸ばして、破壞に建設に走馬燈を見るが如くに、京都民の眼を動轉せしめた。其努力、其勇氣は歎賞に値する。僅々二ヶ年の間に多大の事業を斷行した中にも、京都市接近の郡村を市に併合した事は確かに怪腕と言はねばならぬ。京童が氏を評して「悍馬」と言つたのも過言でない。

此怪知事が村雲尼公に隨伴して光悅寺に來遊した事は、氏の歴史地理に趣味を有し、史蹟保存を叫んだ手前もあらうが、皇室の御縁家に忠勤なると、風流韻事に心を寄する點に於て勞を多とすべきである。

大正七年十一月二十六日午後三時頃光悅寺庫裡の下より、太虚庵茶室まで僅かに二十歩の間に光悅の事蹟を説かむことを余に迫つたのも亦所謂木内式たらざるを得ない。當日同伴の氏の夫人は富豪岩崎男爵令孃であるが、氏の血氣横溢せる風采と打つて變つて極めてやさしげであつた。

村雲尼公猊下と共に、太虚庵、本阿彌庵の兩茶席に這入られて後、酒肴を進めむとした心盡しも水泡となつて役所が忙しいとて匆遑歸り去られたのは、其日午前同寺に俗膓を洗つた三浦梧樓子の電光石火的行動に彷彿たるものであつた。

嗚呼此の快男兒、動機も立派結果も可良なるに唯其手段を選ばなかつた事あるは、事功に急なるとはいへ惜むべきである。京都府女子師範學校移轉問題を解決するに當り私財を出して二三の府會議員を賣收して挂冠後罪跡暴露し、收監せられた時、氏の感慨果して如何。收監素より期する所であつたか、將た意外にして悔いたりしか。去るにても獄吏の命に露背かず、極めて柔順であつたのは、快男兒の面目を偲ぶに足りて之を聞くだに痛快である。（八、二、九）

老練教育家

五六、木下竹次氏

附　龍定　一氏

木内重四郎氏が京都府知事となり、潑溂たる才氣を以て多年沈滯せる府政界に一大刷新を企圖し政治に教育に其他あらゆる方面の事業に對し破壞につぐに建設を以てし、僅かに二ヶ年の短期間に多大の成績を擧げたが、府下の各中等學校に抱負あり、經驗ある良校長を羅致し來つて、府下教育の進歩改善を試みた事も特筆すべきことである。

木下竹次（號龍川）氏も亦即ち木内氏の鑑識に依つて鹿兒島縣女子師範學校長、兼鹿兒島縣立第二高等女學校長の職から、京都府女子師範學校長として、大正六年七月轉職來任した人である。木下氏は明治五年三月福井縣大野郡勝山町に生れ、明治三十一年東京高等師範學校文科卒業後、更に同校の研究科に入つて修身、教育の兩學科に研鑽を積み、奈良、富山兩縣師範學校教諭を經て、同三十七年鹿兒島縣師範學校教諭に轉じ、四十三年同校の女子部が同縣女子師範學校として分離後、其校長として職を奉ずること八年間に及んだのであるが、同校に於て多大の成績を擧げ、名聲の嘖々たるものがあつて、他府縣から參觀に行く者は其施設、及教育法の整頓完備せるに驚嘆したさうだが、京都府に赴任後に於ても着々校内の刷新をはかつて、二ヶ年未滿の間に非常な成績を收めた氏が京都府女子師範に來任當時は、恰も同校が洛北大宮村から伏見桃山に移轉されやうとした時であつたばかりでなく、大正七年四月からは府立桃山高等女學校も同校内に開校併置されるべく確定して居つたから、同校に於ては容易ならぬ變革の時期であつて、校長の手腕を要するは言ふまでもないが、氏は從容として事に當り、校舍移轉中混雜の場合に在つても一日も生徒教養上の注意を怠るなく、どの學科にも相當の知識と理解を以つて居ることゝて、各教師の教養振りを視察して干渉指導を斯てしたから、自然從來在職の職員と意見の衝突も生じ、他に轉職する人も續々出來たが、去る者は止めず逃ぐる者は追はずといつた風に、氏は之を承諾して更に他より新教員を迎へたのであるが、いづれも相當技倆のある人であつた。

大正六年十二月に校舍移轉工事も其大體を了したので七年一月から、伏見桃山に於て授業を開始し、引つゞき四月には高等女學生も入學して來て纒まりが付いたので、氏はいよ〳〵其老達せる手腕を試みた。余は明治四十四年以來同校の書道科教授を擔任し、一週間内僅かに二回出仕するのであるけれども、學校内部の實際、即ち學校長對各教員間、及教員對生徒間、乃至教育の功果をよく看取了解し得るが、從來は職員間に暗鬪の行はれたこともあり、全職員の共同一致が不完全なこともあつたが、氏の赴任以來各職員の事務が增大したにも拘らず、全職員一致協力し、教員室内は和氣藹々として生徒の教養に努力熱中し、生徒はよく教員の指導命令に服從して、校長と教員乃至生徒の間柄は、殆んど絶對となつて、校風は日に月に良好に赴いた。

氏は教員と相謀りて、圖書室及機械標本室、理化學實驗室等を開放し、生徒の自學自習、自主的修養を奬勵し、指導法に至つても、よく女性の長所と缺陷とを酌量し、微に入り細に渉り、適切周到を極め、教授訓練の功果を大ならしむるに努めた。のみならず步行練習、及薙刀體操を創めて心身の鍛練を促進した結果、やうやく生徒の品性、學力の進步發展を見るに至つたのみならず、從來毎年二三の傳染病患者の發生を免れなかつた同校は、爾來絶てこれなきを得て、かの世界を風靡した惡性感冒の襲來にも、他の府立學校は皆悉く一週間乃至二週間休校したにも拘らず、同校はこれなくして止んだのは、職員生徒一般體力の增進した結果たるは爭はれぬ事實である。又幸に同校が桃山御陵下にあることゝて、氏は毎月、三十日と十一日、即ち明治天皇、昭憲皇太后の御命日には全校御陵參拜をなし、訓育の修養に資した。

尙ほ氏に於て最も痛快を感ずるは、男子であり乍ら、裁縫の理論及技術についても、斯道の專門家も後へに瞠若たらんず、智識と熟練とを有し、世間從來の裁縫教授が技術にのみ偏し、理論を閑却せるを遺憾として「裁縫教授法」なる廣翰なる著述あるは、特稱殊讃すべきことである。

氏性質穩健着實、喜怒を色に表はさず、外面頗る柔和なるも胸中に堅城鐵壁を藏し、頭腦冷靜にして信念頗る固い、職員に對して、干渉がましき態度あるは教育熱心の餘りに外ならぬのであるらしく、交際深きに達するに隨ひ、いつとなく心と心とが接觸し意氣相投ずるが如き感がする。氏は

遁がに精神修養上に於ても、一かど經驗を有せるが如く斷食修養にさへ、經驗があるらしい。

余は親しく氏が學校長としての經營を目睹して心中竊かに驚き、氏の同校に奉職することの一日も永からむことを府下教育のために望みつゝあつたのに、在職僅かに一年六ヶ月にして、大正八年三月下旬、此天才的教育家を奈良女子高等師範學校に奪はれたのは、京都府女子師範學校職員の一人として、又京都府民の一人として、痛惜に堪えぬ所である。しかし氏は所謂教育の本山とも稱すべき高等師範教授の職に榮轉し、同附屬高等女學校主事を兼ねることであるから、活動の舞臺は一層廣大と成つて多年の蘊蓄を傾注するに適所を得た譯だから、氏のためにも又邦家のためにも敬すべきではある。

氏年齒いまだ五十に滿たないのに割合に白髮が多いやうだ。幸に自愛を祈る。木下氏がかつて鹿兒島縣に在職中其部下であつた

龍　定　一　氏

は鹿兒島の人であるが、大正七年中、京都府女子師範に國語漢文科教員異動の際赴任し現に在職中であるが、幾分が薩摩武士的氣風を帶びて稜々たる豪骨を有し來任以來、生徒教育のため奮勵しつゝある。

氏は今、伏見に住居して居るので、今ぞ誠に好機會と同地鷹匠町大黑寺内に永眠しつゝある薩摩義士故平田靱負翁事蹟の表彰を發起し岐阜縣人東京麻布學館長岩田德義氏（東京在住當年七十四歳にして平田翁崇拜の人）及紀伊郡長兒玉利節氏等と協力盡瘁し現京都府知事馬淵鋭太郎、京都市長安藤謙介氏等の贊助を得て大正八年四月十三日大黑寺に於て義士追悼祭典を執行し同日午後京都岡崎公會堂に於て義士表彰講演會を開催したのは、まことに敬すべき行爲である。被表彰者平田靱負翁は眞に義勇奉公の精神に富める國士の典型である其傳に曰く

今を去る壹百六十六年寶曆三年十二月德川將軍家重公、時の薩藩主島津重年公に命じて木曾川治水工事の任に當らしむ。蓋し慶長以來多年つゞいて河水氾濫の災害あり。沿岸の民窮乏其極に達して遂に幕府に獻議し只管之が救助の事を請願せるによるもの也。而して之を山河三百里遠く薩の藩主に命じたる所以のものは當時幕府の政策として財政上より强藩を抑壓せんとの意に外ならず。薩藩主これを知ると雖も恭順その命を奉じ家老平田靱負先生を以て工事總奉行とし直に工事に着手せしむ。時に薩藩は財政窮乏その資なきを以て大阪の商人につき國債を抵當として用金參拾萬兩を調達す。かくて先生は士卒役夫千餘人を薩摩及び江戸に得て翌四年二月下旬工を起し晝夜兼行只管その竣成を速にせん事をつとめたり。

然るに不幸偶々洪水氾濫し堤防決潰してその功容易に收むべからず。加ふるに費用既に盡きてまた如何ともすべからざるに至る。於是乎先生諸士と相議する所あり。曰く「今や資財既に盡きて工事未だ半ならず。今にして之が工を廢せむか。治水の業成り難く君命に背くの罪免れ難し。加ふるに沿岸百萬の生靈をして永く水害に泣かしめ遂に之を救ふに由なからむとす。若し努めて之が功を遂げんとせばまた費用空竭。一藩財政の許さゞるものあるを如何せん。されど思ふに事既に此に至る。宜しく更に資を求めて工費を辨じ。上は君命を果して奉公の誠を致し下は永く百萬の生靈を救ふの方途を講ずべきのみ。獨斷專行責を得たるの罪の如きは成功の後屠腹自決以て謝すべき也」と卽ち河水氾濫の故を以て工事を中止するもの三ヶ月、更に大阪に至りて用金數百萬兩を調へ九月下旬復び工に從ひ翌五年三月全く其成功を告げたり。而して其工事の堅牢前古比なく公儀深く之を嘉賞して檢分の事亦首尾よく終るときくや先生乃ち同志、五十の士と共に其假寓に自裁す。今の木曾川堤防卽ち之れにして沿岸の民稱して薩摩工事といひ爾來また往時の水害あるを聞かざる也。嗚呼五十の士、身を殺して仁を成し德澤千古に朽ちざるもの誰かその義烈に感激せざらむ。而かも其事蹟長く湮沒して人の知る所とならざるは誠に悲むべし。思ふに薩侯深くその忠勤を賞して特に藩の菩提寺伏見大黑寺に葬れりと雖も尙幕府に憚る所あり之を表することなくして今日に至れる也。然るに明治三十三年濃勢兩國の有志相謀りて義士の記念碑を濃州千本松に建設するやその事蹟始めて世に公にせられ次で對山岩田德靜氏熱心に之が表彰に盡力奔走し事遂に天聽に達して畏くも大正五年十二月贈位の恩典をさへ辱くするに至れり。義士地下の英靈必ずや聖恩の窮りなきに感泣すべく岩田氏亦積年の宿志を成して一代の光榮を施せりといふべし。

同會十三日の講演會には兒玉利節氏開會の辭をのべ、馬淵府知事、松下禎二博士、岩田德義の三氏の熱誠なる講演あり、講演終了後丸山巴水氏は岩井藍水氏作「堤の花」と題する薩摩琵琶を彈奏して壯烈なる故義士の面影を髣髴たらしめ來會者四百餘名に多大の感動を與へた。今日世界各國の思想が入り來つて國民思想の混亂時代を現出せむとする時に於て良好なる企といはねばならぬ。

（八、四、一六）

五七、義民木内宗吾末孫　木内島吉氏と
地理學の泰斗伊能忠敬末孫　伊能三郎右衛門氏

明治四十四年四月六日午後上野停車場に到り、常陸土浦迄の切符を求め、四時五分發の列車にて我孫子に下車し、手賀沼を見、夜土浦に着き、湖畔の旅宿に泊す。時恰も土浦町に祝典あり、電燈飾、紅燈飾、美輝を戰はし市況殷賑未曾有と號す。翌八日午前六時鹿島行の汽船に搭じて土浦を發し

霞ヶ浦を南北に縦斷し、北利根を過ぎ、更に北浦（湖）を横斷して正午頃船鹿島に着す、鹿島神宮に參拜し二人の道連れと共に高天原を見、進みて鹿島浦を訪ぬ。渺茫たる大洋、目視の及ぶ限り水天に接し、逆捲き寄する怒濤の響は、轟々としてさながら雷の如く、光景雄大壯烈、轉たゝ悽愴を覺ゆ、漁人櫓を押し舟を浪間に遣る、舟飜翻として樹葉の漂ふが如く、危ぶまれて膚粟を生せんとす四時大船津に歸る。

例日五時半發の佐原行の船は此日折しも出でざる由を聞きたれば、北浦を延方に渡り佐原に向つて徒歩す。八時過下總佐原に着し利根河畔の旅館川岸屋に投ず。

九日早朝香取神宮に詣でゝ後、朝食を了へ、佐原町の市街を散歩して、地理學の泰斗伊能忠敬先生末孫伊能三郎右衞門氏を同町協橋の南數十歩の家に訪ふ。商家なり。當主三郎右衞門氏時に年四十五歳、色黑の丈夫、製油を業となす。三郎右衞門氏余を店頭に招じ、余の請に應じて秘藏の地圖を出して曰く、祖先忠敬の遺作なりと。彩色を施されたる地圖は、甚だ密にして、忠敬先生丹誠の作なり近畿地方逸早く眼に入る、琵琶湖、淀川等の水流比叡愛宕の諸峯一目瞭然たり、平面圖に似ず山岳のへ形に描寫せられたるを見たり。三郎右衞門氏又曰く「祖先忠敬當時は造酒を業とせり諸書傳ふる所によれば忠敬は夜間屋上に登りて天文を考へたりとあるも、そは誤傳にして當時は當家に天文臺の設備ありき。今より五六十年前まで概形遺存したるも、今や全くなし、天文研究に關する器械は今尙遺存せり。向ふ側の家も親戚伊能家なりと」て指示せらる。堀川を隔て門構いかめしき家は同地の素封家と知られたり。謝して去る。

午前十時四十分佐原驛を發して西馳し、成田に下りて不動堂を拜し宗吾行の電車にて一代の義民木内宗吾を祭祀せる宗吾神社に詣ず、宗吾末孫の住家亦遠きにあらざることを聞きければ、更に之を訪うて公津村字臺方に到る。家に一人の老夫あり、余の來意を知るや、直ちに家を出で家主を呼ぶ、良久ありて三十歳前後の丈夫と共に歸り來る二人共に疊上に坐し余と對談す。二人風采言語質朴粗野にして、屋内の絶て修飾なきに應はしかりき。家屋よもや昔ながらの建物ならざるべきも、柱、天井みな圍爐裡の煤煙に黑ずみて昔を偲ぶに可なり。二人更る〳〵宗吾義擧當時の事蹟を談ず

是に於て余感慨悲壯の情おのづから湧く。茶を饗せらる。

老人の方、一鉢を側に取り出し之に容れたる白砂糖を小匙に掬ひて又余に進む、余勸めらるゝまゝに掌上に受く、茶菓子に擬したるものならむ。余遠路態々同家を訪ひしことなれば、何か他日の思ひ出にもと住所姓名を書して與へられんことを請ふ、卽主人白紙をのべ筆を執り

木内宗吾ヨリ當代十四代
木内宗吾前ハ木内源左衞門
當主十四代木内島吉
千葉縣印旛郡公津村臺方五百六十九番地

と鮮明に書して余に贈らる。當家は農を以て業とし、老人は父君にして名を國松といふと、余床上に上り、家の如く東面せる佛檀に近づきて宗吾の靈を拜す、昔ながらの位牌黝然として默す。大なるは卽ち宗吾の位牌にして、小なるは同じく遭難したりし宗吾家族の位牌なりき。余卽ち筆を執りて一を書寫す。

承應二己亥
德滿院凉風道閑居士靈位
八月四日

感慨いよ〳〵深し、菲薄の香華を供して歸路に就く。此日東京淺草下谷大火、吉原遊廓全部亦其災禍に罹る。

本稿を草して後、記憶記載の文稿を伊能氏に贈り誤謬なきやを照會したるに三郎右衞門氏の回答せられたる所左の如し。（八、八、一一）

〔伊能三郎右衞門氏書狀〕

拜復酷暑之候愈々御多祥奉賀候陳は先代忠敬之義御記載御照會に付相違之點は抹消致候、測量用器械類は全部、地圖、書籍、測量十八ヶ年間之日記等保存致居り候拙家墓所觀福寺に於て忠敬之繪はがき調製之者有之候間別封にて壹組呈上致候に付御受取被下度先は御答迄申上候草々敬具

八月三日（大正八年）　伊能

五八、前京都圖書館長 湯淺半月氏

（「光悅」がよろしい）

前京都圖書館長湯淺吉郎氏半月と號す。小がらで肥え太つた色黑の人で、性質は多血、粘液兩質を打つて一丸としたやうな極めて無頓着な質で、怜悧な所もあり、づるい所もあつて毀譽褒貶兎に角相半ばして居つた、一體京都人には氏の如き性格の人は氣受けの善くないもので有り勝ちだから氏は京都には不向きとも言ひ得る。

氏の茫洋として大きげな、頭の高い、神經質的ならざる所は光悅に似通つてゐるが、光悅は世の何人にも極めて氣受けが善かつた。此點が卽ち氏の光悅に私淑せねばならぬ所であつて、且氏の及ばぬ所であつたらうが、兎に角氏は光悅を崇拜して居られた。尤も美術工藝の中心地たる京都の圖書館長たりし以上は京都出身の大偉人、大藝術家の事蹟なり遺蹟を平素知悉する必要もあつたが故だらうが、度々光悅寺に來て、或は他の人を連れて來て、俳思を練つたり、光悅墓の寫眞を撮つたりして歸られることが多かつた。

光悅會で編纂した光悅の傳記を『光悅と名づけたことは氏が「光悅」がよろしい』といつて意見の一致を見たところであつたが、此の點に於て余は氏が光悅の了解者たることを感知したのである。

氏は、英文學に造詣が深いと聞いてゐる。氏は先年光悅寺に詣でゝ、同寺の書畫帖に「藝術之祖」と揮毫した市島謙吉氏の後を襲いで、早稻田の圖書館長に赴任せられた。其後、杳として消息を耳に爲ないが、其後同圖書館を辭されたと聞く。氏は又「書畫眞贋物語」とかいふ一書を著述して之を公けにせられたとも聞いた。（八、六、一五）

光悅にそつくりの

五九、三浦觀樹將軍

朝鮮が我國の保護國となり、終に又我國に併合さるゝに至つたのは、畏れ多くも我が天皇陛下の稜威と國民の努力に因つたのであるが幾多賢臣武人が犧牲的に盡したによつたのでもある。陸軍中將子爵三浦梧樓氏が韓半島に破天荒の飛躍を試みられた功績も亦、すでに吾人國民の知る所となつて居る。余輩は「ミウラゴロー」といふ語が耳に入ると、何だか雷の轟きを聞くが如き感じがして、所謂雷將軍を以て子爵を觀るのであるが、此人にして風流の嗜みあるとは意外であつた茶の湯に造詣の程度は知らぬが、大正六年十一月二十六日鷹峰の光悅寺に來て、光悅の墓に詣で、太虛庵、本阿彌庵、等の茶室に於て一服の茶をすゝり俗腸を洗はれたことは、雷將軍否梧樓將軍にとつて奇特な擧である。

其日將軍の扮作は全くの茶人で十德に頭巾であつたのみならず、豐頰魁軀が光悅に似たるが如く余をして光悅の再來かと思はしめた。否器局の雄大な所も亦光悅にそつくり肖てゐるではないか。將軍翹秀軒を出で、今しも本阿彌庵に入らうとせられる時、余は折節そこに行き合せたので、土橋老が將軍と余との間に立つて紹介をしたら將軍は大きな眼を瞠りつゝ頭巾を半分脫いだと思つたら又被つて茶室にもぐり込んだ。大阪朝日新聞記者は始終將軍に付きまとつてゐたと見え、其日の夕刊に、將軍が光悅寺に於ける狀況を書き立てたのは頗る機敏であつた。

將軍は自働車で光悅寺よりの歸途鷹峰の一民家に立寄り鷹峰の特產として見本に置いてあつた、長さ二間に餘る北山丸太四五本を買ひ求めて、それを人力車に積ませ、又自働車にて走り去つた。余は光悅寺に居つたから其實況を見なかつたが、其買ひ方が實に無造作で敏活を極めたもので、戰場に於ける用材の徵發はかくやと思ふばかりであつたと歸宅後人々から耳にした。

これ〳〵此の材木はいくらだ……よし〳〵……これ〳〵これを積め……さあ金を出すぞ……端錢はまけて置け……歸るぞ

と悠然として立ち去つた行動電光石火の如かりしとぞ。（七、一二、一三）

六〇、文學博士 三上參次氏

三上參次博士は現代我國に於ける史學界の老大家で、東京帝國大學文學部教授兼史料編纂官であつたが、此程願に依つて兼官を解かれた。大日本史料の編纂を行つてゐる東京帝國大學史料編纂掛が殆んど獨立の機關として、其事業益發展して、史學界の一大權威として斯界に貢獻しつゝあるのは、同博士の力に依ること多大である。

史料編纂掛の前身は、もと內閣の修史局であつ

て、故重野安繹、久米邦武、荻野由之の諸博士など功勞尠なからざる人であるが、大學に移されてからは三上博士の經營畫策の功最とすべきであらう。

明治四十二年十一月二十八日國學院大學に國史學會の發會式が擧げられ、同時に講演會が催された時、東京滯在中の余は傍聽に出かけたが、其際三上博士が同會長に擬せられて開會の辭を陳べられたのであつたが、其演說振りが頗る立派で、態度といひ、語調といひ、話序といひ、短かい挨拶ではあつたが實に完璧とすべきものであつたのに余は少なからず敬意を表したのである。

其後余は史料編纂官補藤田安藏氏の紹介で史料編纂掛に勤務し同博士統率下の一人となり、古文書の影寫を擔當して終日古英雄及先哲の筆蹟と交はる身となつて快感禁ずる能はざるものがあつた其當時編纂掛はまだ文科大學校舍の一部を充當されてゐた頃であつて、博士は事務主任として廣大なる室內の最北部に南面して事務を總攬して居られたが、其坐席の側には常に國史上の賢哲の肖像が掲げられてあつて余をして一入博士の人格の床しさを偲ばせた。

ある日余勤務終了後大學の裏門を出て淺草の寓居に歸る途中、博士と道づれとなつた。博士は上野の學士院へ行かれる途中であつたから、談話しつゝ行つたが、博士は長官余は微々たる雇員、加ふるに勤務日尙淺かつたから、余は敬意を表して雁行して歩むことにつとめたら、博士も亦殊更に、か叮嚀な言葉を用ひわざと遲歩して並進せむことをつとめられたので余は一層歩行を遲々たらしめた。依て博士は轉じて道路の緣邊を疾歩せらるゝことゝなつた。此一事に於て余は博士の活機老巧を知つた。

現に博士は學界に於て名聲嘖々たるものがあるが、曾に學究家として貴ぶべきのみならず、政治家肌のきび〳〵した才幹を藏して居られる。或人は白石風の學者と評してもゐる。

先年桂內閣時代に大阪府選出の代議士藤澤某氏が議會に於て南北朝正閏問題を提出してはしなくも囂々たる世論を惹起したが、恰も其時余は史料編纂掛に勤務中であつたから、そしり走り學內の樣子を窺つてゐると、其當時實際の主權が多く北朝に歸してゐたとかで同掛諸大家の多くは兩朝併立論者であるかの樣に解せられたが、公然何等の意見を發表せられなかつたのみならず、それを避けられた樣であつた。

我國、古來の國士に對して贈位の恩命あることに就いて、其調査詮議に於ては、博士は有力な一人と洩れ承つてもゐる。隨分責任の輕からぬことである。先年御大典の際、其筋から贈位の恩典に浴せしむべき資格者あらば上申せよとの內命があつたとかで、我鷹ヶ峰村よりは光悅の事蹟を書き出して上申したさうだ。けれども恩命は無かつた。それは遺が、いかに勤王の至誠を藏して居つたにしても、高の知れた刀劍鑑定家たる光悅を、美術工藝に於ては三百年後の今日國富を增進せる間接的功勞があらはれてこそ居れ、直接皇室邦家に對して功績の取立てゝ言ふべきものが無かつたばかりでなく、ひよつとすると光悅は一個のすね物のやうに誤解をもせられるから恩典に浴する資格に乏しいでもあらうが、光悅の如き超俗的偉人には却てさうした恩命の下らぬ方が良いかも知れぬ。それは扨置き、せめては光悅が今日世界的の大藝術家とも稱せられて、其作品によつて我國藝術の精華を外つ國にほこるに足ることや、其在世の時皇恩の渥きに感激してゐた拔群の事共を天聽に達せしめたく思ふ。（八、八、一八）

六一、文學博士三浦周行氏

（光悅は世界的の藝術家である）

文學博士三浦周行氏は出雲の人、頭腦明晰、加ふるに篤學の資は遂に氏を博士たらしめ國史學界に於ける泰山北斗の如く其名聲は黑板勝美博士と共に現代斯界の双璧とさへ推賞されて居られる。光悅觀文章の寄稿や光悅傳の校閲依賴のために余はしば〳〵博士を訪うて其快諾を得、校閲の如きは毎週金曜日に京都大學の古文書室に出頭して二時間づゝ數箇月に涉りて博士の校閲をもとめたのであつたが、博士の添削は嚴正鋭利を極めて余が數日思索を凝らし文稿を練つたケ所も博士の萬年筆尖端の閃きにあはれ瞬間に勦滅に歸したこともあれば「文華を排して實學を重んじ、政治經濟についても、識見時流に超越するが如き、翁光悅の學問人格の非凡にして尋常一樣の藝術家の比に非ざりしことを證す」。の文字が博士の數秒間ペン先の活動によりて、光悅の人物性行に一段の光彩を

加へたこともあり。重複を避け、冗長を排し簡潔を旨とせられた。頭腦のよい、記憶の強い博士の高能に接した余は明かに低能を自覺するに至つた。

一閲了して後、更に再閲を成さむとて、博士は學事繁忙を極め東奔西走の中に之れをも了せられた博士の言はるゝ事、約せられた事の的確にして矛盾なきことは敬服に堪へたもので、毎週余が古文書室に往つたのも、午前十時より十二時迄の二時間を充てゝ少しも變違がない、十時迄講義があつて十時から校訂を請ふたのであつたが、十二時が來るとさつさと仕舞はれる。かくして數箇月の間變らない。唯一度差支のあつた時には「明日一回御休被下」との飛書に接した。再閲をせられた時は鳥取へ行かれ引返して直ちに其汽車で東京へ行き東京の用事をすまして朝鮮へ渡られる段取りの際に、いづれも日限の迫れることゝて、博士は大部な「光悦」の原稿を汽車に持ち込み、京都鳥取間の往復乘車中再閲を了し、歸還の列車、夜京都驛に着くや其時刻を合圖に自宅より呼び寄せ置かれた長男の達氏に原稿を渡して

此三綴二十七日ニ來ラルベキ森田清之助氏ニ渡サルベシ　　廿六日夕　京都驛にて

と添書して達氏を家に返し、其列車で直ちに東上せられたのであつた。其翌日余は東丸太町の博士の宅へ原稿を受取りに行つて博士夫人から如上の事を聽いて、博士忙中約言の動かざることゝ、多端の中、極めてきはどい藝當をして迄も再閲を了せられた其責任觀念の旺盛なのに余は心中竊かに博士の士魂に服した。博士は最初から此調子であつたから博士の日蓮宗京都十六本山に史料を調査せられた時、余いかでか奔走の勞を惜むべき、光悦史傳材料搜索の一方便でもあることゝて博士に代つて十六本山に交渉し博士は無事調査を了へて好結果を收められたのである。

右日蓮宗本山史料調査に關し博士はじめの隨行者は西田(直次郎氏)文學士であつたが、西田氏は一二回にして偶々病起りて行を辭し、入り代つて魚澄學士(總五郎氏)隨行せられしも日ならずして疲勞困憊し、又更に中村學士(直勝氏)さし代つて來られしが氏も頗る苦闘の色が見えた。然るに博士は六、七月の暑熱を物ともせず十六本山が各一山の僧徒總掛りで寶庫を開いて博士の見參に入るゝ山成すものを、博士は書物、卷物、軸物、器物の別なく之を看破見了調査し盡して毫も倦怠疲勞の色がない。暑强き日中に羽織を脱がず、袴をも脱がずして端坐したまゝ汗だに流さず、毎日々々定めの時間を違へずして出張調査せられた、其元氣の旺盛なこと、精力の非凡なこと、根氣の絶倫なことは、驚嘆に堪へたもので、正午過ぎても飯を食はうともせず、暑くても暑さを訴へず、平然自若として終始一徹であつた其武者振りには、負け嫌ひの流石の余も閉口の體であつた。其後隨行の學士君に會ふ毎に一の話題となる「あの時は弱つたね——先生の元氣と言つたら……はは……」といふのが常である。調査終了後博士は左の如き謝狀を余に送られた。

益御清健奉賀候陳者過般來日蓮宗各本山史料調査に付ては御多用中殊に炎暑之砌連日熱心なる御斡旋に預り御蔭を以て到處意想外の大成功の裡に所期の目的を遂し候段深謝之至に候　光悦及日允宗眞の遺墨等も多少相顯れ候はゝ御互不勝欣慰候　妙蓮寺の光悦筆蹟は本日大學に借り入候間其中御覽可被下候　尙小生は來る九日迄は毎日大學へ出勤可仕廿一日か一日かに擧家城崎へ參り同地金毘羅教會所に滯在八月廿一日には歸宅可仕候其後は九月中一寸出京十月には往復一ヶ月の豫定にて朝鮮へ出張之筈に候間此段申添候乍憚光悦寺住職に御面會之節は宜しく御鶴聲新上候先は右御禮まで如此候匆々不一

大正四年七月廿七日　　三浦　周行

「光悦は世界的の藝術家である」とのほこりは日蓮宗本隆寺に於て博士が同山の僧衆に語られた光悦談中の一であつた。

又昨年源光庵の卍山會に發起人として博士の參加を請ひ昨秋同會發會式及第一回卍山忌に博士は祭詞を寄せて會忌をかざることを得せしめられた。

〔三浦博士卍山忌祭詞〕

時維れ大正七年九月二十七日文學博士三浦周行卍山會發起人を代表して謹みて源光庵開山卍山道白禪師の靈前に白す惟ふに禪師は元祿の昔一宗法脈の紛亂を慨し梅峰師と共に身を挺して回瀾の大業を完うせられ道譽一世に高く宗門今に至るも尙其惠を受く誰れか景仰せざらんや抑宗統の復古は禪師の夙に其意を決せられし所、これを血氣壯んなるの時に行はずして老齡耳順の後に於てせらる、これ凡俗の企て及ぶべきところにあらざるなり禪師の江戸にあるの日、白龍師に寄せられし手書數十通現に源光庵に珍藏せらる、これを讀むに當初三ヶ寺は沿襲の革め難きを辭として革弊の議を斥け幕府も亦依違決せず加ふるに三ヶ寺は其同意を經ずして上申せられしを責め禪師をして其居を移すの已むなきに至らしむ然れども禪師は庵を出づるの日深く心に決せらゝところあり遺書を草して後事を白龍師に託し幾多の艱難前に横はるも悠揚迫らず正法を提げて反覆有司に訴へ傍ら名侯貴僧に力說し日夕貧素に甘んじて隱忍持久徐ろに機緣の熟するを待ち淹留四年の後漸く夙志を遂ぜらる其堅忍不拔祖道を宣揚し宗風を振起するの功偉なりと謂つべし禪師と略々時を同じくして赤穗四十七士の義擧あり僧俗其選を異にすと雖も身を

捨て、法を護り家を捨て、義に殉ず其意は則ち一なり禪師平生自ら奉ずること薄きも舊師に厚く外護を敬ひ門弟を愛す禪師の偉功は亦玲瓏玉の如き人格の賜ならずとせず方今世道頽廢人心浮薄邦家の前途最も憂ふべきの秋に際し本會が禪師の高德を思慕して其功業遺蹟を江湖に表彰せんとするもの豈名聞の爲めならんや禪師の英靈希はくは照鑒を垂れ給へ

博士は國史に於て造詣頗る博く且深いが、特に法制史については、內田博士の經濟史と匹儔して何人も追隨することの出來ない研究を積んで居られる。最近刊行された「法制史之研究」は博士が京都大學法學部の授業をも擔當せられ、講義せられたものを纒められたもので學界近來の一大名著である。博士はいふ迄もなく純然たる學者肌であるにも拘らず、頗る常識に富んで居られるから、官立學校の學者や校長に有り勝ちの、世に所謂、官的氣分は博士には少しも無い。（八、九、一三）

六二、男爵　三井八郎次郎氏

（光悅茶盌銘彌生の來鷹）

故松籟三井八郎次郎男、本邸は京都油小路押小路で東京麹町富士見町は別邸であるが、男は諸事業の關係上東都に居られることが多かつた。三歲の稚兒も知る如く帝國第一流の富豪として同一家は經濟界に產業界に多大の勢力を占めつゝあり、公共事業にも關與せられること頗る多い。大正二年光悅會創設當時には大村彥太郎氏の斡旋で同會の發起人となり爾來同會のために盡力せられ、後輿望によつて光悅會長として同會主宰の勞を取つて居られた。

男は一かどの風流人で茶道に造詣が深い。自ら香合を彫作せられ、花生を作られるなど其好尙には凡を拔いたものがある。時々光悅寺に來遊せられたが、「從者をも連れず唯一騎」と言つた風である。

昨年の光悅忌の茶會には太虛庵を一席受持たれ男爵秘藏の珍器を、態々東京から鷹ケ峰に運ばれ二日間光悅會員や、天下の茶人を招待せられたのであつた。折節男は流行性感冒の氣味であつたため折角御樂しみの催しに來鷹が叶はなかつたから代理に宗匠籔內節庵氏が來られ、尙ほ待合に陳列の什器目付役として森脇執事が出張せられた。これについて思ひ出すのは、森脇氏の責任觀念の堅い態度で、十一月二十二、三兩日日の短い時とはいへ、二日間の茶會に朝九時から夕四時迄、來客の引きも切らず詰めかける其間、氏は少時も受持の場所を離れず、詰め切つて見張りせられたことである。羽織袴を着して端坐し來客が器物を拜見に及ぶと、嚴密な注意を拂つて監視せられる。來客が水戶德川家出品の光悅白茶碗銘彌生（昔細川家中興の名君重賢が時の水戶中納言に贈られしもの）を荒手に取つて不用意に見もして居やうものなら、直ちに馳せ寄つて「どうか御靜かに……」といつた調子、それは其筈で松籟男の代理で、稀代の珍品、德川家の寶物預り中を監視の大役であるからである。若しも來客中に疎忽者があつて損じでもさせやうものなら、それは主人男爵の失態となるのだから、何條言つて相濟まう。責任の重い仕事である、深く思へば心配なものである。

世には「茶碗一個が五萬圓の價格があらうとも拾萬圓の價値があらうとも、それは數奇者仲間の事で、茶碗一個の增減は素より世の大局に何等の影響を持たない」と高言する人がある。一理あるに似てゐるが、左樣の暴言は古今の名匠を侮辱し天下の名器を瓦礫視するの徒である。かくの如くにして如何ぞ名工巨匠の逸作を保護し、先進の名譽を確保し、後進を奬勵誘掖して世の文化を促進することが出來やうか。凡そ光悅の如き巨家の逸物を金錢を以て其價値を評することさへ無禮である。世の盛衰荒廢の如何に拘はらず、先人巨家の命をかけて製作したる名作は（光悅は命がけで作つたものは無い）之を尊重保護し、且之を顯彰することは後人の責務でなくてはならぬ。此意味に於て森脇執事は啻に主家の命を遵奉し得たるのみならず、世に對して一時の責任を全うせられた譯である。

森脇氏ははじめての來鷹とて光悅寺境內すら少しも知られないので、余は光悅の墓所や光悅遺愛薄墨の手洗鉢などを案內しようと勸めたけれども氏は時間中之を拒絕して他の何事にも心を向けられなかつた。そして會が終ると其夜の汽車で勿徨歸東せられた。余は其時、嘗て乃木將軍が　明治天皇の大命を拜し日本陸軍々人を代表して英國皇帝の戴冠式に參列すべく渡歐せられた時、將軍は物見遊山の氣配露ばかりだになく、式が濟むと勿々歸朝せられた事など思ひ合せて、事に輕重こそあれ、忠臣の心事の同一軌なるに感動した。

京都の茶器骨董商服部七兵衞氏が男の器物一切

の輸送係を仰付かつたのであつたが、心を用ふる事が意想の外で、はじめ東京から預かつて來た器物はすぐに三井男京都邸内の倉庫に納め二十二日朝鷹ヶ峰に運び其日終るや又直ちに取片付けて三井邸内の倉庫内に戻し二十三日朝更に之を取出して持參するといつた風で氏も中々に氣を揉んで居つた。

今は昔光悅が京都から鷹ヶ峰に移住する時にかねて珍藏の什器佳品を、皆人々に分ち與へたといふ。或人が「なぜ其樣な無鐵砲な事をするか」と尋ねたら「落すな破るなと心遣ひすることは罪なことである、麁末な物を持てば罪がない」といつた。もとよりこれは光悅の一頓悟であつたに相違なからうが、這箇の氣狂ひじみた無慾なとぼけた樣な心であつたなればこそ、光悅は鷹ヶ峰で、後世の人が金銀よりも珍重する大作を拵へ得たのでもあらうが、しかし這箇の逸話があるにも拘らず光悅はおのが好尙に適ふものを見れば恍として我を忘れ出資して茶器を購入したことさへあつた。三井男去年は風邪で來鷹が出來なかつたので、今年益田男が光悅寺に在釜せられると略定まつたから今年こそはと兩男同車にて來鷹せらるべき豫定だつたのに、無常の風は時を嫌はず、男は去七月頃より腎臟炎に打臥して百方の醫療効なく終に九月三十日夜薨去せられた。世のため國のため惜むべきことである。（八、一〇、一〇）

元東宮侍講

六三、文學博士　三島中洲翁

今上至尊の未だ東宮にましまし〻時、文學博士中洲三島毅氏は、永く侍講の榮職を拜命し、蘊蓄を傾けて蹇々の誠を盡されしは、國民の齊しく知る所なり。博士は四國の產人、故に本州、九州に對し自ら號して中洲といふ、近代の碩儒、又陽明學派の駿髦にして人格高邁、氣節堅勁、文章亦一代の軌範たるを失はず。夙に東京麴町區一番町の自邸に隣りて二松學舍を創設經營し、力を育英に輸す、學舍は帝都隨一の漢學塾として其名天下に聞す。博士晩年、年九十中風症にかゝりて言語の自由を缺きたりしも尙よく道を體し詩文に親むを以て樂みとなす。侍講を辭して後、宮中顧問官の榮職を拜命し、尙且宮中杖を許されしには、博士亦天恩の渥きに泣きたるべし。

余はじめて博士の風貌を見、警咳に接したるは明治四十二年十二月十二日、芝三田小山町の陽明學會に於て、博士の「理は氣より生ずるの說」の講話を聽きし時にあり、白髯垂れて瀧の如く、音吐低くして聽者に透徹せず、說話亦巧なりと言ひ難かりしも、言外に發露したる風骨氣韻楚々として聽者をして襟を正さしむるものありき。

其後余二松學舍に入りて研習力むる所あり、明治四十四年三月同校を卒業したりしが、博士すでに老ひ、舍生に接すること極めて希なりしも、息男復氏重厚にして既に帝大文科大學の業を卒へて箕裘の業を襲ぎ、高足細田謙薩氏（今、奈良女子高等師範學校敎授）舍生の重望を負ひて敎育に力を注ぎつゝありしは、儒道漢學のために人意を强くするものなりき。

今茲に余が東京出遊中思出多き事項を摘錄せんに

明治四十二年九月十三日

東京に遊ばんと欲して鷹ヶ峰を出づ、

九月十四日

濱松に宿し城趾を訪ひて家康の膽勇を想ひ、翌十五日鎌倉に入り、鎌倉宮に參詣し長れ多くも大塔宮の入れられましませし土窟を一目打覗き、源頼朝の墓を展し、當時諸將の邸址を偲び、其夜八幡宮祭禮の賑に地の人情風俗を察し、あくる日滑川を過りて靑砥藤綱の人となりに服し、由井ヶ濱に出で靜御前の悲哀をしのび、次で大佛を見、其日東京に入る。

十一月四日

海軍省前に於て伊藤博文公の國葬を拜したるが、日比谷の式場迄は靈柩は白木の輿なりも、日比谷より大森迄は黑塗の輦臺馬車なりき。午後降りしきる雨に路傍臨時の傘賣は其ふところを肥したりき。

十一月十日

時事新報文藝週報は內外百書選定採點、卽ち東京市內名流の愛讀書の統計を發表したるに

第一位　論語　二百二十一點

第二位　福翁百話　百十點

十一月十九日

本郷區向ヶ岡淺野侯爵家に於て家扶を勸められつゝある大石洋造氏は大石良雄八代孫云々國民新聞に記載ありき。

十一月二十八日

午後二時國學院大學に於て、國史學會發會式あり、石黑忠悳男の「歷史家に對する希望」なる題下に左の講演を聽きたり。

石黑男講演の要旨

國史に記載せられたる事項を抹殺せし史家は、すでにこれあり。隱れたる美事を索め出すも亦歷史家のつとめなるべし。

余はこの逸事を探究せむことを希望す、嘗て江戸芝の小西酒店の番頭足立幸吉が、長州勤王家の獄中に綿入着物十三枚を惠投したる事などもかくれたる美俠的美談なるべし。余自ら勤王を唱へしは十三歲桂太郎氏は十七歲にて中隊長となり、

鳥尾小彌太氏は十八歳にて小倉を占領したり。と

十二月十四日

芝高輪中學校義士祭に井上哲次郎博士の赤穂義士談を聽く。井上博士曰く

義士の討入は淺野工匠頭殿中に於て吉良上野介を切り付けて果さなかつた、其無念を酌み亡君の意志行爲を延長したものと見るべきで、復讐とか、敵討とかいふべきでなからう。

十二月二十一日

青山方面散歩、青山善光寺に詣でゝ、同境内に人力車發明記念碑を見たりしが碑面に左の如く記しあり。

人力車は明治二三年の交、和泉要助、鈴木徳次郎、高山幸助三氏の發明する所にして世用をなすこと頗大なり、同三十三年發明の功を賞し賞勵局より各金貳百圓を賜はる、有志者相謀り碑を建てゝ之を不朽に傳ふ。

明治四十三年一月十七日

上野公園竹の臺にて維新志士遺墨展覽會縱覽、藤田東湖正氣歌東湖自筆の奥書に左の文字あり。

弘化乙巳仲冬書=于北總葛飾郡小梅村謫居=常陸藤彪

藤田小四郎の自畫讃の讃語

斷髮蓬頭如=夜叉一

不レ言可レ識是藤田

西郷南洲の書に

道を同し義協ふを以て暗に聚合せり、故に此理を研窮し道義に於ては一身を不顧必踏行べき事

王をたつとび民をあわれむは學問の本旨然らば此天理を極め人民の義務にのぞみては一向難にあたり一向の義を可立事

明治丙午五月日　（私學校綱領）

蓋學校者、所=以育=善士一也、不=只一鄕一國之善士、必欲レ爲=天下之善士一矣、

夫戊辰之役、正名踏レ義、血戰奮鬪而斃者、乃天下之善士也、故墓=其義一、感=其忠一、祭=之于茲一、以誠=舞於一鄕之子弟一、亦所=以盡=學校之職一也

西郷隆盛謹誌

二月二十日

三河島より日暮里方面に散歩、日暮里村字日暮里谷中總鎭守諏訪神社より遙に筑波山を望む、同神社境内に力持の石種々あり就中左の刻字ありしに驚けり。

力石七十貫　八十八才者持之

力石五十貫　十七才者持之

二月二十五日

藤田安藏氏の紹介にて、史料編纂掛にはじめて出仕

四月二十七日

下谷區谷中町臨江寺に蒲生君平の墓を拜す。

五月七日

英國皇帝崩御の新聞號外を見る。

五月二十九日

神田須田町に建設せる廣瀨中佐銅像除幕式あり。

八月四日

神田錦輝館に於て、南極探檢後援演說を傍聽す、河野磐洲氏努めたり矣、

八月十一日

連日の降雨に隅田川溢れ、淺草橋場町の余の寓居にも洪水到來す。正午頃より浸水、午後十一時床上約二尺、徹夜、交通絶ゑ島流され人の如し。

八月十六日

市内浸水未だ甚敷所あり、淺草傳法院内、三井家焚出の景況輜重隊の運搬目覺しかりき。

八月二十九日

韓國併合條約發布せらる、報知新聞主催の提灯行列を二重橋のほとり迄見に行く、盛況なりき。

宮中に於ても人民の赤誠を汲ませられしものゝ如く、市民が萬歲〳〵とどよめく聲のする毎に宮城より五ツ六ツの提灯を上げたり、下げたり、廻したりせられしは、宮内官なりしか將た女官なりしか。

九月二十四日

神田美土代町青年會館に於て政敎社の催にかゝる西郷南洲翁三十三年祭に參會す。海軍中將肝付兼行、文學博士三宅雪嶺兩氏等の演說を聽けり。此日伯爵板垣退助翁も參會せられけり。

肝付中將曰く

南洲翁は琉球の疊表に比すべし。いくら叩いても、ごみが出ない。

雪嶺博士曰く

南洲時代の薩摩人は偉らかつた、今の薩摩人の中には蓄財を心掛ける人もある

十月二十三日

世田ヶ谷松陰神社に參拜す。市外荏原郡澁谷より玉川電車に乘じ、三軒茶屋停留場に下車し、建石のしるべに隨ひて進み進す神靈在す所四顧寂寥、社前花崗石の燈籠約三十基、毛利公をはじめ伊藤、山縣、桂等山口縣出身者の献建にかゝりしもの也、社の後ろに松陰先生の墓あり、賴三樹三郎、林民部、來島良藏等の志士、先生と石棚を一にして英魂永へに眠る、颯々たる松風樂を奏して宛ら英靈を吊慰するものに似たり。歸途更に轉じて玉川に遊ぶ

十月二十四日

神田美土代町青年會館に於て、黑岩周六氏の兒島高德存在論（演說）傍聽。

十月二十九日

平間寺れき子刀自と共に日光に遊ぶ、三十日夜歸寓。

十一月五日

午後七時出發東京灣内汽船旅行を企つ、往途日本橋水天宮に參拜す、本日は戊ノ年戊ノ月戊ノ日なれば、水天宮參拜者多くして、朝來大雜踏の痕跡顯然、百數十萬の守札は既に賣り切れたりといふ。社殿屋根上に積れる寒錢を取攫めつゝある人數名を見受けたり。警官の警戒尙未だ嚴なりき。東京灣内汽船會社に到る、十時過ぐる頃第七福澤丸は汽笛一聲晴を切つて出づ、翌六日館山北條に遊び、横須賀に廻航し、浦賀に進し、久里濱のペルリ上陸の跡を訪れたり。

十一月十三日

瀧の川の紅葉を觀る、東京の紅葉は蛇目也、瀧の川公園内に近藤重藏の墓あり、荒廢に傾く。

十一月二十六日

法科三十二番敎室にて東洋倫理學會講演傍聽　文學博士遠藤隆

吉氏の演說の要に曰く
孔子は治國平天下を以て主義としたり、治國平天下はいかなる時、いかなる所にも適用し得て、世及人心を新たならしめ向上せしめ得べし

十一月二十七日
品川行の電車に乘じ芝園橋に下車し、ロセツタ沖に碇泊せる南極探險船開南丸を觀る食糧其他の船積、ハシケの往復忙はし。探險隊出張所には二十五四ばかりの犬あり、大工は尙ほ橇を作るに忙はしく、白瀨中尉は玄關に出でゝ指揮し居たり。荷物種々雜多の中仙臺味噌六十七樽は詳かに算へたり。
去つて三田豐岡町長松寺內に物徂徠の墓を見る

十二月四日
池上本門寺に遊び光悅の史料を探る。此寺西鄕隆盛盛臺軍を江戸に進めし時の由緖あり。

明治四十四年一月四日
東北の奇人羽柴古香氏宅に遊び、顏眞卿書多寶塔碑文と岳飛文天祥書と交換することを約し同氏所有の顏眞卿を持ち歸る。

一月十九日
不俱戴天の國賊は死刑と定れり

一月二十二日
本鄕森川町喜福寺に於て釋宗演禪師の碧眼錄提唱を聽く

一月三十日
乃木大將を訪ふ

三月二十二日
九段坂畔谷村圭介の碑銘を刷り取る。海野頴逢氏の助力を得たり。

三月二十三日　二松學舍卒業式

四月三日　斯華會大會

四月五日　史料編纂掛を去る

四月七日　常陸兩總地方旅行

四月九日　淺草下谷大火

四月十一日
午前十時十九分の列車にて西向鷹ヶ峰に歸る

東京語	京都語
やめる	よす
落ちる	おつこちる
負ふ	おんぶ
奧さん	おかみさん
でつち	小僧
車ひき	車力
おあし	御鳥目
下駄	あしだ
おちようづ	はばかり

正月雜煮も東京は切餅、京都は小餅、白米の賣買も京都は一升の價幾何、東京は金壹圓に付何程と異り、東京市內には頗る進步したる學校もあれど、町はづれには、不就學兒童も少なからざるものゝ如く余の寓居したりし淺草橋場町二百二十五番地の平間寺家は正しく舊幕時代の寺子屋なりき新式自動車の輛數日々に增加せるかと思へば、余が飛行機を見に行かんとして龜井戸まで乘合ひたる深川の人力車は鐵輪の最舊式の物にてありき。京橋日本橋目貫の街路大厦高樓に目を驚かすことあるも本所や下谷の陋巷に足を踏み込めば人生の慘苦も目睹し得べく、淺草公園附近及び芝公園大神宮附近の所謂銘酒店に白晝淫を鬻げる狀は、宛から無警察の狀態なりき。要するに東京市內には文明あり野蠻あり、極樂多く地獄多く、或時は太平或時は騷擾、刻苦勵精の人も多ければ悠遊懶惰の食ひ潰しも少なからず。極端と極端とを雜然として兼ね備へり。大都市なるが故に市政の行屆かざるか、大都市なるが故に取締の寬なるか、近時都市計畫の聲將さに高からむとして接續町村を都市に併合せむとする計畫多きやに聞くも、市政取締が余の居りし時代の東京市の如きに陷らば之を行はざるに若かざるを覺ゆ、淺草公園附近の無警察狀態、衞生を口にして病毒を恐れざる燈臺下暗しも亦始末に困るものならずんばあらず。嗚呼余が東京滯留中の思出も亦雜多なるかな、それかくの如く思出多き中にも、最も印象を深くするものは二松學舍に在學中、細田謙藏氏より講義を聞きし事にして、殊に柳宗元八記の講義の如きは强く腦裡に印して忘れざる所、細田氏人格高く學殖深く稍かすり聲にて柳子厚の美文を朗讀し、次で講釋せらるゝ所態度莊重神色怡々、聲に抑揚ありて聽くに甚だ快く、講義は流暢簡潔にして學ぶに易なり。「始得西山宴游記」中の

悠悠乎與灝氣俱而莫得其涯、洋洋乎與造物者游、而不知其所窮、引觴滿酌、頹然就醉、不知日之入、蒼然暮色、自遠而至、至無所見、而猶不欲歸、心凝形釋、與萬化冥合

「鈷鉧潭西小邱記」中の

由其中以望則山之高、雲之浮、溪之流、鳥獸魚之遨遊、皐陸熙然迴巧、獻技、以效茲邱之下、枕席而臥、則淸冷之狀、與目謀、瀯々之聲、與耳謀、悠然而虛者、與神謀、澹然靜者與心謀、不匝旬而得異地者二、雖古好事之士、或未能至焉、

「石澗記」中の

上由橫西北、下土山之陰、民又橋焉、其水之大、倍石渠三之、亘石爲底、達于兩涯、若床、若堂、若陳筵席、若隈闥奧、水平布其上、流若織文、響若操琴、揭跳而往、折竹撘陳葉、排腐木、可羅胡床十八九居之、交絡之流、觸激之音、皆在床下、翠羽之木、龍鱗之石、均蔭其上、古之人其有樂乎此耶、後之來者、有能追余之踐履耶、

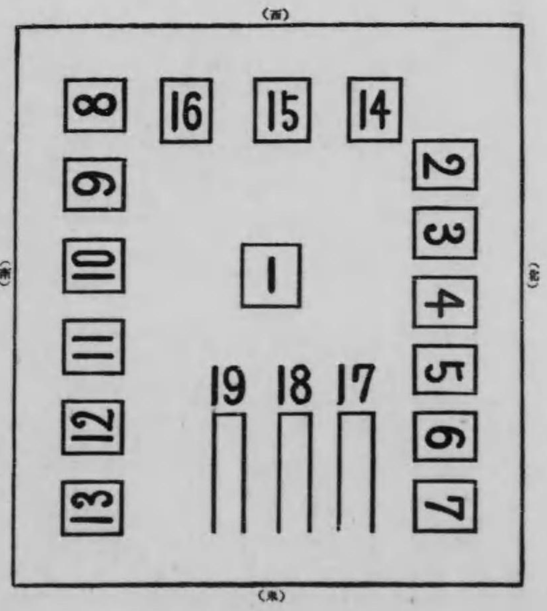
の箇所など、氏が最も得意氣に解かれし所なるが講義の巧妙に、弟子おのづから難を解し、興味津々、師弟共に手の舞ひ足の踏む所を知らざるが如

かりき。

閑話休題、客歳以來の流行性感冒は、人命を損すること夥しく三島博士亦この病魔のおかす所となりて、本年五月七日病床に臥し、肺炎を併發して藥石効なく、十二日午前十一時遂に逝去せらる著す所詩書輯説、中洲文稿あり。（八、七、二）

儒家三宅亡羊末裔
六四、三宅清次郎氏

亡羊といふ號の學者は余の知る所に於て二人ある、一は本草學者の山本亡羊、他は儒者の三宅亡羊である。山本亡羊先生の墳墓は深草の寶塔寺にあるが、三宅亡羊先生の墳墓は鷹ケ峰にある、鷹ケ峰の圓成寺境内岩戸妙見宮本堂の西北方三十歩の松林中にある、村役場に於て地籍を調査すると「鷹ケ峰村字北鷹ケ峰第二十五番地墓地反別十六歩」とあつて免租地である。（其東隣同じく圓成寺の境内にある合田家の墓域は免租地でない）。以上卽ち十六坪が三宅家代々の墓域であつて左の通に墓碑が立ち列んでゐる。



1 處士亡羊子之墓（中央東面）
2 三宅子燕之墓（北方南面）
3 三宅子燕妻三木氏墓（同）
4 三宅伯省之墓（同）
5 三宅伯省妻横井氏之墓（同）
6 三宅伯省女曾免娘之墓（同）
7 三宅誠藏之墓（同）
8 三宅子文之墓（南方北面）
9 三宅子居之墓（南方北面）
10 三宅子居妻北河原氏之墓（同）
11 合田伸衛女媛娘之墓（同）
12 三宅氏子貞之墓（同）
13 三宅中藏之墓（同）
14 三宅元猷之墓（西方東面）
15 三宅元猷妻宇佐美氏之墓（同）
16 三宅貞卿之墓（同）
17 三宅君洞之墓（東方合葬）木標
18 三宅宗太郎之墓
三宅清童子之墓（同）同
19 三宅行清之墓
三宅清女之墓（同）同

就中三宅子燕の墓碑が最も大きくて且墓碑銘も刻まれてゐる。三宅亡羊、子燕共に先哲叢談後編や近世叢語などに傳記が載つてある。

〔先哲叢談後編卷一〕

三宅寄齋

名鳥、字亡羊、號江南野水翁、通稱寄齋、又以爲號、一説玄和泉人、

寄齋字多源氏、佐々木秀義第三子、三郎盛綱之裔也、盛綱第二子加地左兵衛尉信實、食邑備後見島、因以地爲氏、五世孫見島高德、稱備後三郎、殊以武功顯於元弘建武間、後陞于大和州多武峰、入道號義清法師、或曰其子孫皆給仕于足利將軍、寄齋高德七世之孫也、父某仕于豐太閤、爲泉州堺五奉行之一人、云。

寄齋歳十一喪父不復仕官、十九遊于伏見、又遊于京、寓紫野大德寺、讀書力學有年於此、遂以醇儒聞、其學無常師、自以漢唐注疏、教授子弟、間々講程朱之書、從學者頗衆矣、寄齋、自少壯、性行不苟、遊伏見時、隣有富翁一女、容色甚都、嘗將招寄齋、宗宿于家、辭而不行、他日或問之、曰瓜田不把屨。

石田三成、在近江佐和山、崇重文學士、屢招藤惺窩、惺窩欲行未果、又聞寄齋之名、使其臣戸田某、卑禮厚幣而通慇懃、約以時々講説經史、訓導治道也、恩遇頗優、三成意甚欲以入幕之賓、謀謨密、論定得失也。于時秀吉既薨、群僚不和、朋黨相構、人蓄異志、三成固結秀頼、勢傾朝野、附之者衆、寄齋與之往來、僅三回而稱有疾不再交、既知三成誣刻善良、包藏不軌、欲擅柄權之事、至其翌年、果有關原之役、云。

三成之臣柏原某、與寄齋友善、當其完聚時、以黄金十五兩、吐露緣故、固請左袒三成、屢于麾下、寄齋以肯之。

寄齋、資性謙慮、退讓自將、不敢欲名高、雖然聞其操行、慕附者衆矣。特與藤惺窩、交情最密、惺窩長寄齋十九才、而能愛敬之、稱以爲謙厚君子。

寄齋、識鑒不惑、信其學術者、不爲不少、如近衛應山公從一位左大臣信尋公、津侯高虎從四位少將藤堂和泉守、福岡侯長政從四位侍從黑田筑前守、宇和島侯秀宗從四位侍從伊達遠江守、弘前侯信義津輕越中守、關宿侯重宗從四位少將板倉周防守、時爲京所司代、皆以賓師之禮、遇之、饋贈不斷矣。故以祿四五百石、雖有聘之者、辭而不應。

寄齋、以久々數授聲轂下、唱道於縉紳之間、學博行修領袖手

後進ニ聲高ニ于一時ニ、竟達ニ叡聞ニ、後陽成上皇、後水尾天皇、皆有ニ内旨ニ、講ニ經於便殿ニ、屢備ニ顧問ニ、寵遇優渥、得レ以ニ布衣ニ升與ニ公卿ニ列ニ于禁闕ニ、又有ニ器財名香之賜ニ、人皆榮レ之。

寄齋以ニ天正八年庚辰正月元日ニ生ニ于泉州堺ニ、以ニ慶安二年十二日ニ或云 一說云 己丑六月十八日、歿ニ于平安油小路家ニ、得レ壽七十二 或作七十 非也 葬ニ于洛北鷹峰ニ、其墓石、正面題ニ處士亡羊子之墓七字ニ、耳、蓋此地慶長中、後陽成帝所賜ニ寄齋ニ、所謂鷹峰四十間四方孫者也。寄齋義子、名道乙、字子燕、號ニ鑒革齋ニ、一說云通稱忠長衛平安人、本姓合田氏學ニ于寄齋ニ、以ニ其篤ニ信於師說ニ、養レ之爲レ嗣、以ニ女娶レ之、令レ冒ニ三宅氏ニ云。道乙精ニ于史學ニ、嘗施ニ國訓於朱子通鑑綱目ニ、刊ニ行于世ニ、今坊間稱ニ之道乙點ニ、後進便レ之、其裔分爲ニ四家ニ、一曰ニ三宅氏ニ、仕ニ于津侯ニ、二曰ニ合田氏ニ、仕ニ于阿波侯ニ、三又曰ニ三宅氏ニ、仕ニ于備前侯ニ、四曰ニ星合氏ニ、仕ニ中津侯ニ、皆能繼ニ箕裘ニ、不レ墜ニ家聲ニ、至ニ於今日ニ、就中近時備前三宅徵、字元猷、號ニ牧羊ニ、津三宅昌綏、字君靜、號ニ錦川ニ、皆以ニ經義ニ名ニ于世ニ、蓋寄齋德澤之所レ及也云。

寄齋之曾祖、名宗徹、字通菊、號ニ萃牧齋ニ、永正中嘗奉ニ于使ニ入ニ于明ニ、見ニ詹沖和名僖以字行錢請レ書ニ萃牧齋額字ニ、得レ之而還、其眞蹟三字行書及跋文一幅、今猶傳ニ于家ニ、以爲ニ珍寶ニ。

亡羊、子燕共に鴻儒であつたのみならず、子孫分家皆ことゞく諸侯に抱へられたのを見て、其一門道統の盛んであつたことが偲ばれる。殊に亡羊(寄齋)の如きは殆んど獨學で成業し、盛名終に天聽に達して侍講を仰付けらるゝの榮譽を得たのである。余はすでに小田垣師の條に於て、光悅、仙溪、卍山等の鷹ヶ峰隱栖の名家が皆同じく八十歳の長壽を保つたことに奇合の感を陳べたが、今又本條を草するに當つて鷹ヶ峰に關係ある賢哲のいづれもが、皆皇室の恩命に浴したことに感を深くするのである。光悅は皇室の御劍清めの光榮を拜し、仙溪は靈元帝より靈輝惠明禪師の榮號を敕諡せられ、卍山も亦靈元法皇の恩命を忝うし、亡羊も亦卍山、仙溪に先だつて天恩の渥きに泣いてゐる。鷹ヶ峰は實に祥地である。尙ほ右先哲叢談の記事によれば、亡羊は光悅に鷹ヶ峰を賜りしより以前の慶長中に於て後陽成帝の敕によつて鷹ヶ峰に方四十間の地を賜つたと記せるは聊か怪訝を感ずる所であつて、光悅に賜つた時は東西二百間南北七町の地より右四十間四方を除外して賜つたものであるか、之については何等徵證する史料がないのみならず、鷹ヶ峰光悅町古地圖面にも其地點が皆光悅一族の配分に歸してゐる。けれども其後合田氏が鷹ヶ峰に居住した事實と三宅合田兩家の塋域の地が合田の座敷に接續してゐることを見ると此所いさゝか攻究の餘地がある。

さるにても昔は聖恩に感泣したるこれらの名家は今は皆衰頽又は斷絶して、家道の特に勝れたものを見ない。亡羊先生の末孫三宅清次郎氏は、今大阪市空心町二町目九十四番地に居住して毎年一回來鷹展墓せられるに過ぎない。一たび其塋域に踏み込んで舊碑と新碑を對照一瞥する時は少なからず感慨を催すことであらう。されどこの三宅氏の家が繼續してゐるのは喜ばしい事である。終りに三宅家塋域に隣つてゐる合田貞謙先生の墓碑銘を左に紹介しやう。

〔合田貞謙先生墓碑銘〕

先生姓越智、氏合田、諱溫、字如玉、世爲ニ阿波藩儒臣ニ、而家ニ于京師ニ、祖諱昌澄、祖妣長田氏、先生實爲ニ昌孝庶子ニ、昌孝早卒、先生因承ニ重於祖ニ、而時寶曆丙子、至ニ安永癸巳ニ、蒙ニ藩召ニ赴ニ江戸邸ニ、赴レ藩者皆四、皆留數年、以勤職、安永十年辛丑二月二日疾卒、年五十七□□之京北鷹峰祖塋之側ニ、私謚曰ニ貞謙ニ、配皆川氏、生ニ□□七人ニ、長立誠、次武明、次直信、次珪、次鏘、次譏□□□先夭、女四人、長適ニ複前隆豐ニ、適ニ從三位賀□□□業久、次爲ニ稻荷祠官尾崎潔孝養女ニ、次爲ニ龜□□□阪部定美養女ニ、銘曰、

勢職惟勤、秉心惟恭、如其德質、名乃是容、
先生所爲、皆有厥庸、既啓既猶、安此窆封、
安永十年辛丑三月

皆川愿撰　源孟彪縁　孝子立誠謹建

右碑銘にもある如く、貞謙先生の妻は皆川氏であつて、貞謙先生の墓と相並んで墓碑があり、表に「合田貞謙先生妻皆川氏墓」裏に「寛政二年庚戌十一月十六日卒」と刻記されてゐる。碑銘の選者が皆川棋園である所から考へると、貞謙と棋園は親戚關係があつたらしい。(八、九、二四)

六五、文學博士　島文次郎氏

(光悅のためならば誰でも力を注ぐだらう)

前京都帝國大學附屬圖書館長島文次郎(號華水)氏は、今は第三高等學校教授兼京都帝國大學教授として英語を擔任して居られる。今春英語教授法視察研究のため、歐米に渡航せられ不在中文學博士の學位を授けられた。余がはじめて氏を洛東銀閣寺の南方山中の綠蔭に訪ふたのは、大正二年の盛夏、光悅會創立の少し以前のことで、谷本文學博士の紹介で、光悅木像彫製に關して氏の指導を求めに行つた時にある。

當時の氏の宅は石川丈山の詩仙堂に倣つて建築されたもので、坐敷、庭作り、市中のながめ等、すべてが能く似て居た。炎熱の日中に氏を訪ふた